

## 一 墓 館 遺 跡

ものといえそうである。また、県内においては、同心円状文、連弧文（下向き）交互刺突文等常盤式といわれるもの・中に類似点を多く認めることが出来るが弧文と竹箸による刺突を有するものについては認められない。その他、①～⑥と類似した要素をもった土器を出土しているものに前述の力石Ⅱ遺跡がある。

以上のような結果を総合するとこれらの土器群は天王山式系統の流れを有するもので常盤式と併行するものとみられるものもあるが、よりその後継型式に類似した要素を多く有しているものであり弥生時代後期から後期末にかけての時期に属するものとみてよさそうである。

〔注1〕「青森県大畠町二枚橋遺跡出土の土器、石器について」須藤 隆 考古学雑誌56-2 昭45

〔注2〕岩手県理文センターにおいて教示をうける。

〔注3〕主要地方道一関北上線 関連遺跡発掘調査報告書、埋蔵文化財調査報告書 第8集 岩手県理文文化財センター 昭54

〔注4〕「東北南部の弥生式土器編年」 中村五郎 東北考古学の諸問題 昭51

〔注5〕〔注4〕と同じ

〔注6〕「宮城県大穴遺跡の弥生土器」 狩野義一 北奥古代文化第10号 昭53

〔注7〕水沢市史 水沢市教育委員会 昭49

## 4. 歴史時代の遺構と遺物

### (1) 平安時代の遺構と遺物

#### 第1号住居跡（第37図、図版17）

〔遺構の確認〕 調査区の北西端（D区）の平坦面が緩傾斜にかわる変換点近くで、第1層の表土を約20cm除去した段階で煙道として使用された石組を確認したものである。

〔重復、増改築〕 重複、増改築は認められない。

〔平面形、方向〕 西側約半は調査区外なため正確な平面形は不明であるが検出された部分から類推すると、ほぼ隅丸方形に近い形状を呈しているものとみられる。方向（カマドの方向を基準）は、新しいものは南東一北西、旧いものは北東一南西であり住居跡の東壁と南壁、それに、北壁、西壁の一部が確認された。規模は、南壁で約3.2m、東壁で約3.2mである。北壁、西壁は不明である。

〔堆積土〕 住居内に堆積している層は基本的には、2層に大別される。

第1層（黒褐色土層） 黒褐色の腐植土質のシルトで僅かに粘性があり住居址のほぼ全面に亘り分布する。

第2層（褐色土層） 褐色のシルト質土で僅かに粘性がある。地山の黄褐色土が混じり炭化

物を微量に含む。土師器片が含まれている。中央部に近いほど堆積が薄くなり住居が埋まりはじめた時の最も初期的な堆積層とみられる。

〔床盤〕 黄褐色粘土質シルトの地山が床面であり、多少の凹凸はあるが平坦で固くしまっている。特に、つき固めた様子はみられない。壁は床面から急角度で立ち上っており確認された東壁、南壁等いずれも保存状態が良好で30~35cm、25~30cmの高さで残っている。

〔柱穴〕 ピットは全部で7基検出されたが柱穴とみられるピットはない。

〔カマド〕 東壁中央部頃、と南壁や、東寄り側に付設されている。いずれも本体は天井部が既になく袖部が残存している。旧カマドは袖部が粘土質のシルトで構築され比較的保存が良好である。燃焼部は皿状に堀りくぼめられており焚口部前に焼土の堆積が認められたが燃焼部の床はあまり熱を受けた様子がみられない。煙道部は燃焼部よりわずかに高くなり壁をくりぬき外へ約1mのびており、側壁には凝灰岩質の山石を立て、いる。側壁は部分的に熱を受けた面が残存しているが全般的にあまり焼けていない。

新カマドも保存状態が良好で燃焼部から煙道にかけて凝灰岩質の角ばった山石や川原石を立て、構築している。いずれも基部を一旦堀りくぼめその後長方形に近い板状の石を袖部、煙道部の側壁に立てている。焚口部などは石を二段に積み重ね更に長さ80cm前後の楕円形の大きな川原石等を用いて構築している。燃焼部の幅は約50cm奥行70cmでそれに約90cmの煙道が付属する。燃焼部は浅く堀りくぼめられ内部には固い焼土が堆積し、中央には川原石の支脚石が置かれていた。また、甕、壺等の破片が多量に存在した。

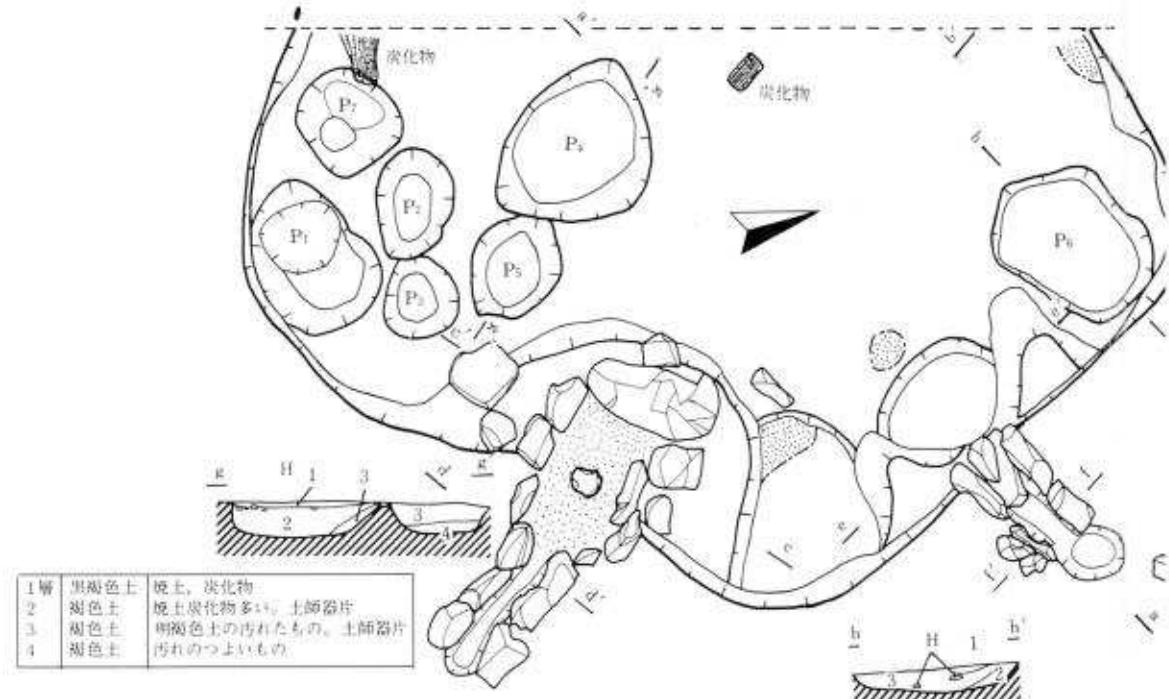
〔貯蔵穴、その他のピット〕 床面から検出されたピットは7基である。そのうち旧カマド西側のNo.6ピットは径80cm×60cm、深さ15cmのピットで埋土は炭化物、焼土の混じった黒褐色土で底部より土師器の壺、甕等の破片が出土している。また、東側にも皿状にもくぼみがあり、壁際を中心にして壺、甕の破片が出土している。その他のNo.1~5・7ピットは新しいカマドの南側に集中して検出され縦が約80cm~40cm、高さが約20cm~30cmの半月状、舟底状の断面をもつものである。埋土は、焼土、炭化物を含む黒褐色で側面や底部から比較的多くの壺、甕等の破片が出土している。ピットの新旧関係は不明である。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用時の年代を決定するための資料は床面、No.1~No.7ピット、カマド燃焼部等から出土した壺1点、甕10点、手づくね土器1点等がある。

#### 出土遺物（第38、39図、図版21・22-1-6）

完形品はなく復元できた土器は壺類5点、甕1点、手づくね土器1点である。その他に砾石1点が出土している。

壺類は、実測図示可能なものは全てあげているが、(II)は唯一の内面ヘラミガキ、内黒処理を施した回転糸切り無調整の壺の底部であり、他は酸化炎焼成で器面調整をもたない壺（B類）

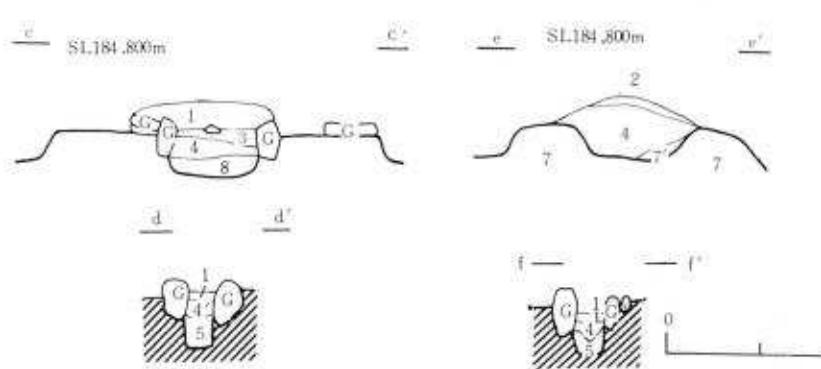


SL184.800m

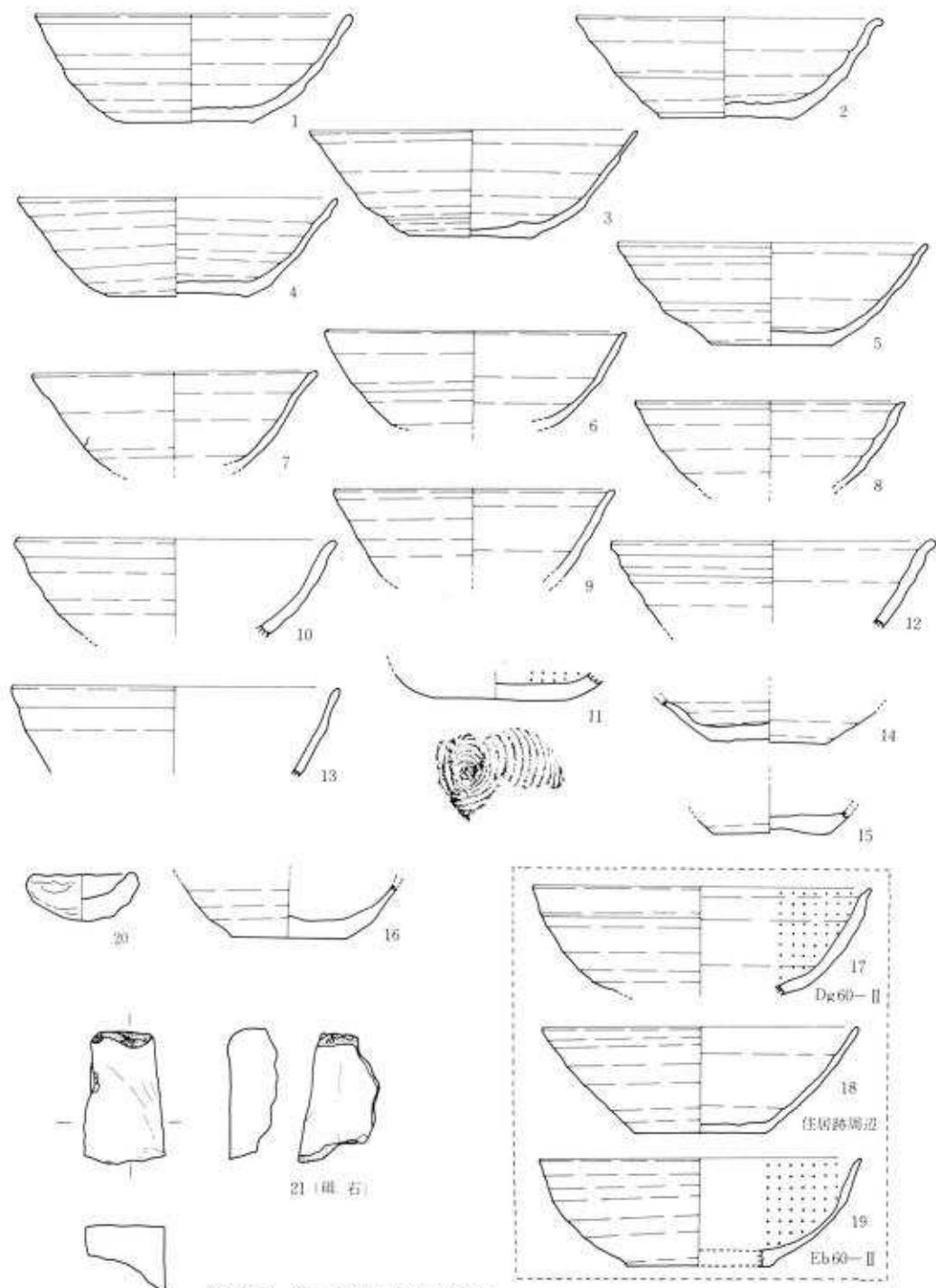
SL184.800m

SL184.800m

1層	7.5YR3/1 黒褐色土	常植土質, 小木根 多い
2	7.5YR4/4 褐色土	黄褐色土が混じる, 炭化物微量。上師 器片含む
3	7.5YR3/2 黒褐色土	黄褐色土が少し混 じる。燒土少し混 じる
4	5YR6/8 褐色土	燒土, 固くカリバ りしている。炭化 物土師器片含む
4'	5YR5/4 に赤い赤褐色土	燒土に黒褐色が混 じってやわらかい 上師器片含む
5	5YR4/3 に赤い赤褐色土	燒土に黄褐色土が 混じっている
6	7.5YR4/4 褐色土	燒土, 炭化物を微 量に含む
7	7.5YR6/8 褐色土	黄褐色土に燒土が プロック状になっ て混じる
7'	7.5YR6/8 褐色土	7層より下しまで 混じる
8	2.5YR4/8 赤褐色土	燒土

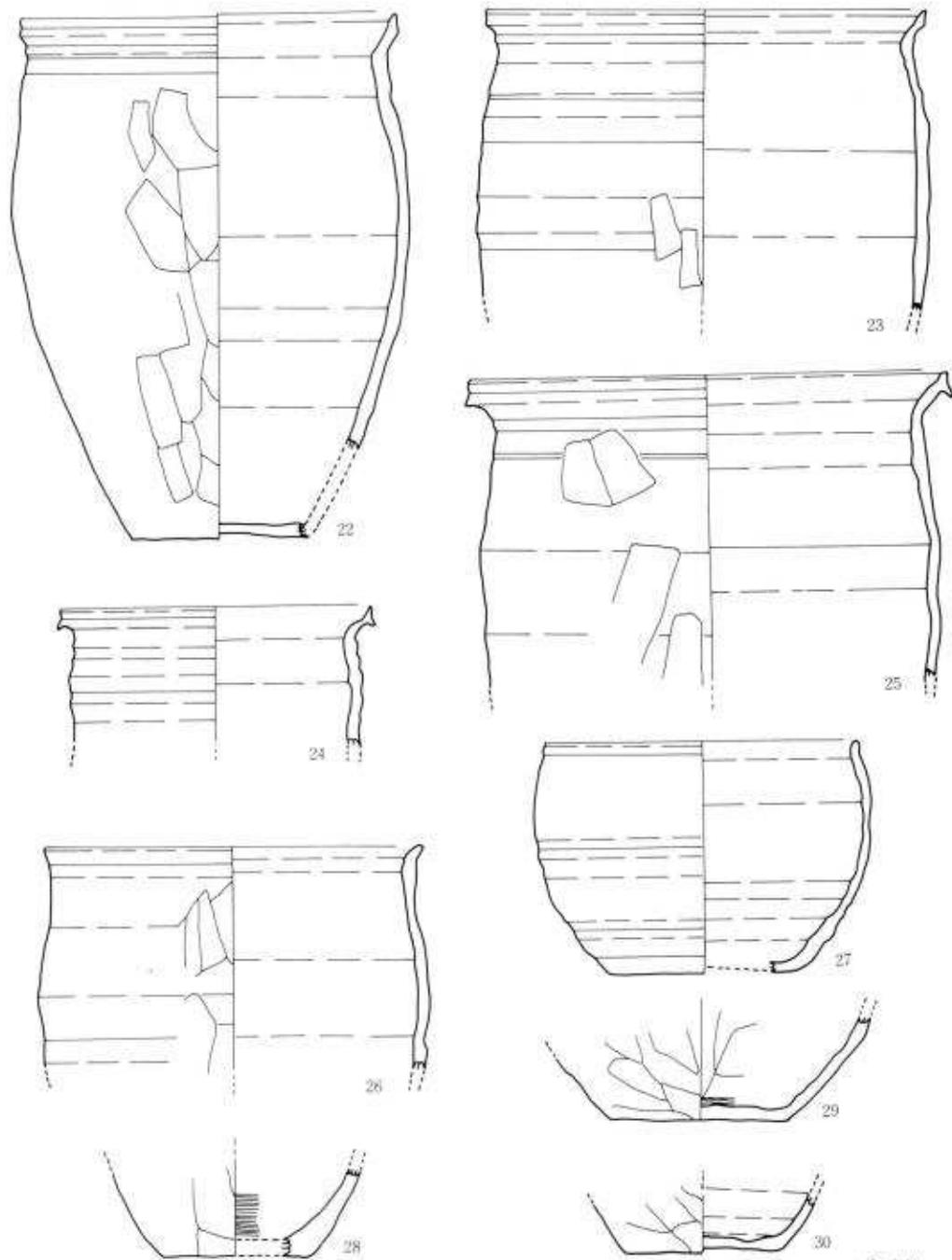


第37図 第1号住居跡実測図



第38図 第1号住居跡出土遺物

S=1/3



第39図 第1号住居跡出土土器

$S=1/4$

(注1) である。いずれも口縁部が外傾し、体部下半がわずかにふくらみをもち底部がしまる器形である。色調は(1)(2)(5)は浅黄橙色で一般に焼成は軟質であり、(3)は灰黄褐色、(4)は明黄褐色で前者より硬質である。(3)は内面にスヌ状のものが付着している。その他の环類も口縁が外傾するものがほとんどで色調は浅黄橙色を呈し、焼成は硬質なものが多い。(2)は橙色を呈する小形の手捏成形の土器である。

(17)～(19)は1号住居跡周辺よりの出土で、(17)、(19)は体部下半がわずかにふくらみをもち口縁は内湾気味に立ち上っている内面ヘラミガキ、内黒処理を施している环(C類)で、(17)は口縁が外傾する底径の比較的小さいもので、いずれも回転糸切り無調整のものである。

甕類は环に比べて出土量が少ない。実測図示可能なもの9点をあげた。(22)は唯一の復元完形品である。器高29.6cm、口径21.21cm、底径10.05cm、最大胴径22.50cmである。最大胴径が中央部にあり頭部にわずかに段を有し、口縁部が外反直口するものである。頭部より体部下半にかけてヘラケズリ調整を行っているので体部外面にはスヌが付着している。色調は大部分浅黄橙色を呈し焼成はや、軟質である。底部周縁にわずかに調整痕がみられる他は磨滅のため切りはなし技法は不明である。(23)も器形的には(22)とほとんど同じで体部にもわずかにヘラケズリ調整が認められる。

(24)(25)は、口縁が短く外反し口唇部断面形は三角形状を呈しているものである。(24)は、調整痕が認められず(25)は、部分的に粗いヘラケズリ調整がみられる。(26)は口縁部がわずかに外反し体部に部分的なヘラケズリ調整がみられるものであり、(6)は同じく口縁が短く直口し内湾気味の最大胴径が中央部にあり器高(13.0cm)に比して胴径(19.0cm)の大きいロクロ無調整の甕である。表面は全体的に二次焼成を受け赤褐色を呈しており体部下半から底部にかけて著しい。(28)～(30)は体部下半にヘラケズリの認められるロクロ成形の甕の底部である。

砥石(21)は、石材が淡緑色凝灰岩で残っている二面(5.5×3.5、5.5×2.8cm)の平面は滑かであるが弧状に使用されている。

(注1) A類一くすべ色を呈する典型的な須恵器。

B類一赤褐色あるいは、黄橙色を呈し、一見して酸化炎焼成によると解され胎土は全般的に粗であり、A類より軟質のもの、内外面に器面調整を施さず成形技法、焼成、色調等の観点でみるとかぎりでは、所謂須恵糸土器、赤褐色土器、土師質土器等と呼称される环群に比定され得る一群。

C類一酸化炎焼成によるロクロ成形土器環。内面に範墨き、黒色処理等の調整をもつ。

東北報費自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ(下羽場遺跡)所収

## 第2号住居跡(第40図、図版18・19-1～2)

〔遺構の確認〕 第1号住居跡のすぐ南側に位置し、黒褐色土(表土)の下の褐色土層の上面よりや、下で確認されたものである。

## 一 墓 館 遺 跡 一

〔重複 増改築〕 北西隅の壁の様子から西側に増改築等何等かの手が加えられたことが予想されるが検出部分については認められない。

〔平面形、方向〕 北西隅にあたる部分が調査区域外なため正確な平面形は分らないが検出部分から推定すると南北にや・長い隅丸方形を呈している。方向は新しいカマドは北西—南東であり、旧いカマド（煙道）は逆に南東—北西である。規模は南壁で約3.5m、東壁で約4.2mである。北壁、西壁は不明である。

〔堆積土〕 住居内に堆積している層は基本的には5層に大別される。

第1層（黒褐色土層） 黒褐色の腐植土質のシルトで僅かに粘性があり住居址のほぼ全面に皿状に分布し中央部ほど厚く堆積している。

第2層（褐色土層） 褐色のシルト質土で僅かに粘性がある。周辺より流れ込んで堆積した様相を呈し中央部には、ほとんど堆積していない。炭化物微量

第3層（暗褐色土層） 暗褐色のシルト質土で粘性が若干ある。砂が少し混じり、壁際に堆積している。

第4層（黒褐色土層） 黒褐色のシルト質土で第3層に比べて粘性がある。焼土、炭化物を若干含む。床面近くより鉄滓が出土している。

第5層（褐色土層） 褐色のシルト質土で地山の黄褐色土が混じり壁近くに堆積しており、初期的堆積を示すものである。

〔床 壁〕 黄褐色粘土質シルトの地山をそのまま利用し、東から西にわずかに傾斜し凹凸が目立つ。また、炭化物が中央付近に、焼土が西側のカマド付近に、砂が南側の旧いカマドの前付近に散在しており床面の汚れが著しい。床面中央には直径約50cm×40cmの上がや、扁平な川原石が床面を壠って据えられ、西側カマド際には長さ50cm、径25cm前後の川原石が5、6個不規則に積み重ねられていた。現存する壁はほぼ直角に立ち上っており東壁は約50cm～60cm、南壁、北壁の一部は約45cm～50cmである。

〔柱 穴〕 ピットは10基検出されたが柱穴とみられるものはない。

〔カマド〕 南壁東寄り103、北壁東寄り104に付設されている。旧カマドは袖部、燃焼部等が残存せず煙道のみで、燃焼部とみられる床面にわずかに焼土が散在している。煙道は幅約30cm、長さ約1.2mの規模をもち、カマド奥壁より住居外にのび先端がや・ふくらみをもつ。煙出部は煙道より約10cm位掘り込まれている。一方、やはり袖部が残存していない新カマドは燃焼部が皿状にくぼみ（幅約35cm、長さ約80cm）楕円状を呈しており、熱をうけて固く焼けている。煙道は燃焼部よりや・のぼりカマド奥壁よりや・下りながらトンネル状に住居外にのび、煙出部はわずかにくぼみ急な角度で地表に出ている。規模は幅約25cm、長さ約9.5cmであり煙道内が特に焼けているのが目につく。燃焼部、煙出し部分より土師器の壊片が出土している。

〔貯蔵穴、その他のピット〕 ピットは大小10基床面より検出されたが、深さはいずれも約15cm～25cmで、平面形は、円、楕円形に近い皿状のものが多い。埋土は、いずれも褐色、暗褐色の焼土、炭化物等の混じった汚れたものである。No.2・6・7ピットからは直径約6cm、長さ約5～12cmの羽口が出土している。また、No.5ピットは直径約50cm、深さ約12cmの中央部分がやや高くなつたスリ鉢状のピットであるが床面はノロカスが張りつき凹凸のあるアバタ状を呈し、乳白色化して固くなり、その下の地山は焼けて赤褐色化している。No.3ピットよりは鉄製品が出土している。

〔その他の施設〕 床面中央にある川原石は床面を掘りくぼめて据えてあるもので扁平な上面には鉄サビが薄く残っている。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用時の年代を決定するための資料は床面、No.4・5ピット等より出土した壺6点、甕3点等である。その他、羽口（10点）鉄製品、多くの鉄滓がある。

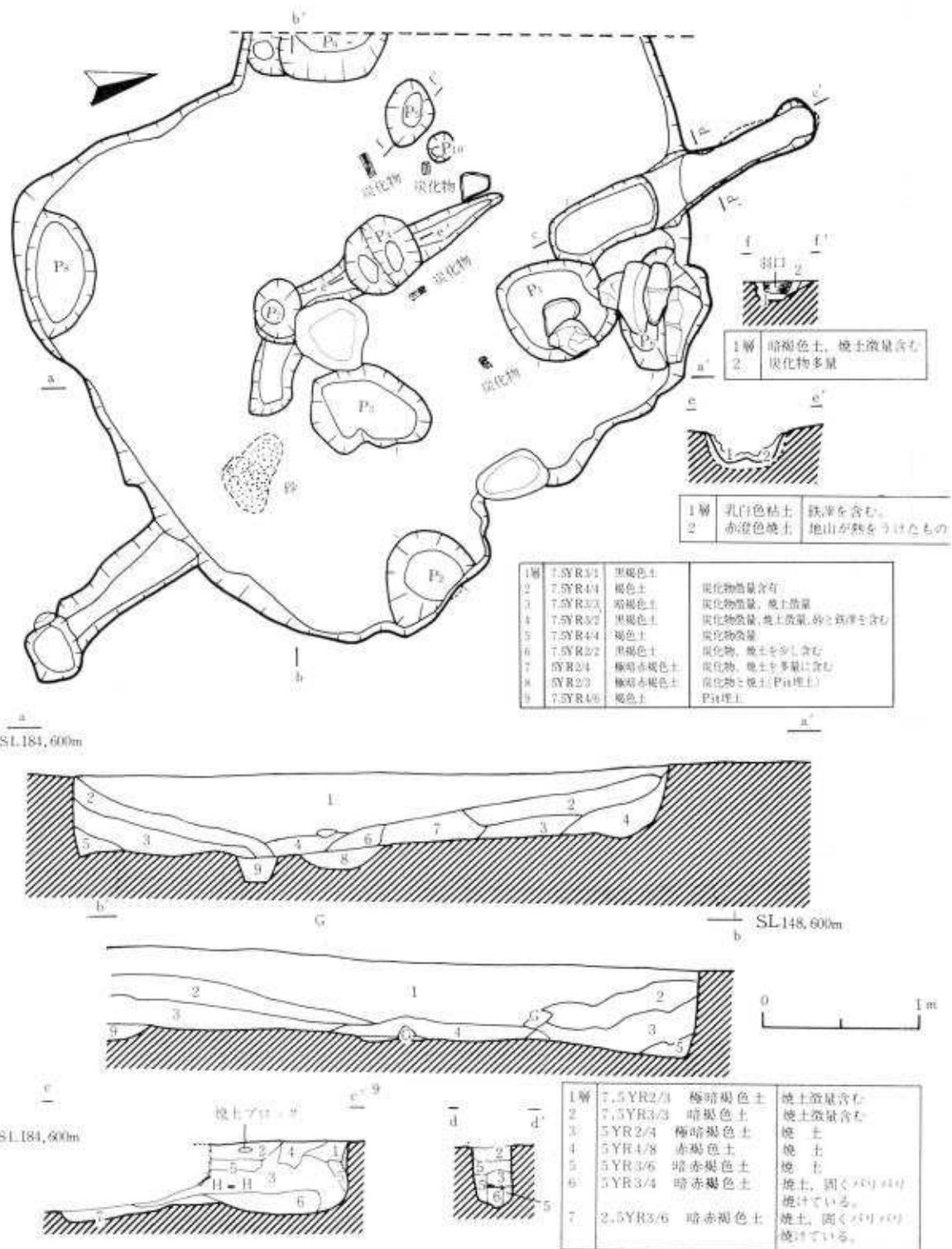
出土遺物（第41、42図1～5、図版22-7～12、23、24～1）

完形品ではなく復元出来たものは壺類5点で甕類は破片である。その他にはほぼ完形に近い羽口2点と破片、鉄製品1点、多くの鉄滓が出土している。

壺類は実測図示可能なものを底部も含めて12点あげているが、いずれも酸化炎焼成で器面調整をしないB類に含まれる壺である。(1)は器高に対して底径が比較的大きい口縁が外傾している浅黄橙色を呈している軟質の壺である。(2)は口縁がやや直口気味で器高が他に比べて高い、にぶい橙色を呈するやや硬い焼成で内外面にカーボンの付着しているものである。(3)(4)は口縁が外傾し底部がしまっているもので前者は橙色でやや硬質、後者は口縁部のみ橙色で他は灰色を呈する軟質の壺である。(5)は口縁がやや直口気味で体部下半にふくらみをもつ浅黄橙色の軟質の壺で内面にカーボンが付着している。その他のものは破片であるが口縁の外傾するものがほとんどで軟質なものが多い。また、No.1ピットより壺の体部に「廣」とみられる墨書のある土器が出土し同じようなものがDe54グリットの2層中より出土している。

甕類は6点あげているがいずれも反転実測したものである。(17・18)は口縁部にくぼみをもち断面形が三角状を呈するロクロ成形のもので推定口径は約21、19cmである。(16、19、20)は口縁部が短かく外反するものでロクロ成形の後一部ヘラケズリが認められるものもある。推定口径は約13、22、26cmである。焼成はにぶい黄橙色、橙色でやや硬質なものが多い。(15)は須恵器の甕の口縁部である。

羽口はほぼ完形、破片を含めて10点出土している。（第42図1～5）は、長さ20.5cmで先端部外径7.2cm、内径3.3cm、厚さ2cmで、中央部外径7.9cm、内径2.7cm、厚さ2.5～2.7cmである。(2)は長さ15cm、先端部外径6.5cm、内径2.6cm、厚さ2cm、中央部外径6cm、内径2cm、厚さ2.5～2.7cmである。いずれも先端が焼けて灰褐色、赤褐色等に変色し、その上にガラス状の固形物



第40図

が付着している。これらは、粘土を棒状のものに巻きつけ表面をヘラ状のものでたんねんになでつけて成形したものである。他の破片もガラス状の固体物が付着したものや淡橙色に変色したもので(1)よりは小さいもの、破片と思われるものである。

鉄製品は長さ約15cm、幅0.7cmの薄い鉄片であるが性格は不明である。(第41図21)

鉄滓はNo.2、3、6ピットや床面の南東隅付近を中心にして大小(10~150g)約2.5kg出土した。これらは赤褐色の鉄塊や碗状のもの、他表面にボツボツと小孔がみられ熱で分解された鉱石部が付着しているもの、ガラス状になっているもの等がある。その他、ほとんど鉄分を含まない軽いコクス状のものも多量に出土している。

**土製品** 推定直径4.4cmの円筒状の土製品(現存の長さ約3cm)の一部で表面は全面をなでつけ成形してあるもので割れ口を観察すると竹状のもので表面から突き刺して欠いた形跡がある。これは羽口の穴をあけない前の未完成品の状態に似ているものである。これと類似したものが、<sup>(注1)</sup>石鳥谷町大瀬川C遺跡からも出土している。いずれにしても性格は不明である。

**石皿** 煙石安山岩製の石皿の破片で床面より出土したものである。表面に数条の細い溝が走っており、細い堅いものを砥いたような形跡がある。縄文時代の遺物がまぎれこんだものかもしれないが、転用した可能性もあるものである。(第41図23)

(注1) 東北自動車道関連遺跡 製鉄址である。(未発表)

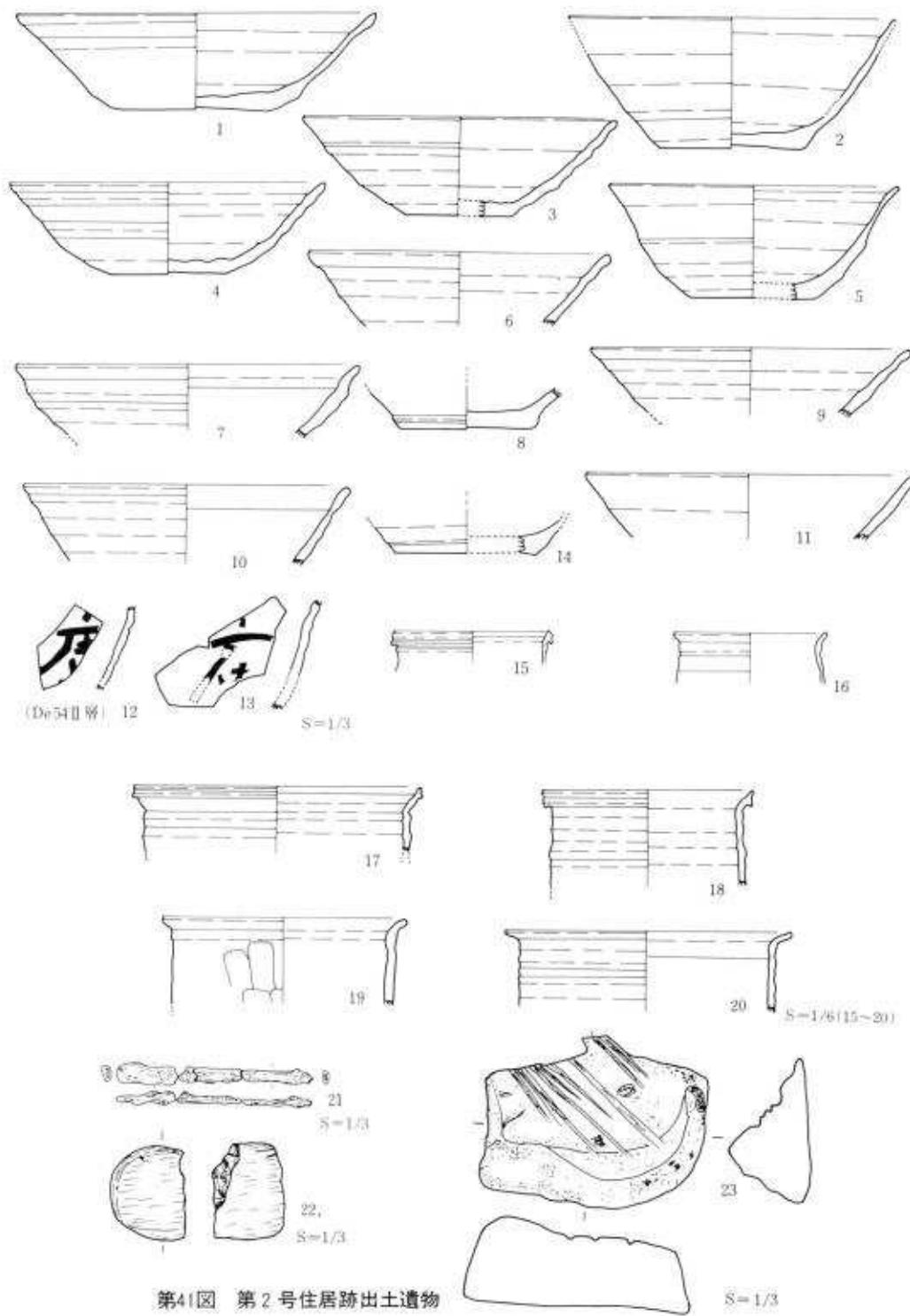
以上が住居跡関連の出土遺物であるが他に、墳墓の封土、周溝、土塁、住居跡周辺の第Ⅱ層等からも多量の土師器片、少量の須恵器の破片が出土している。土師器は内外ともにヘラミガキ黒色処理された壺の破片1片を除けばそのほとんどがロクロ成形、無調整の壺、甕の破片であり、内黒処理のなされた破片の少ないのが特色であり、いずれも小破片で復元出来るものは一点もない。(第42図6~12、図版24-2)は出土した須恵器の破片である。

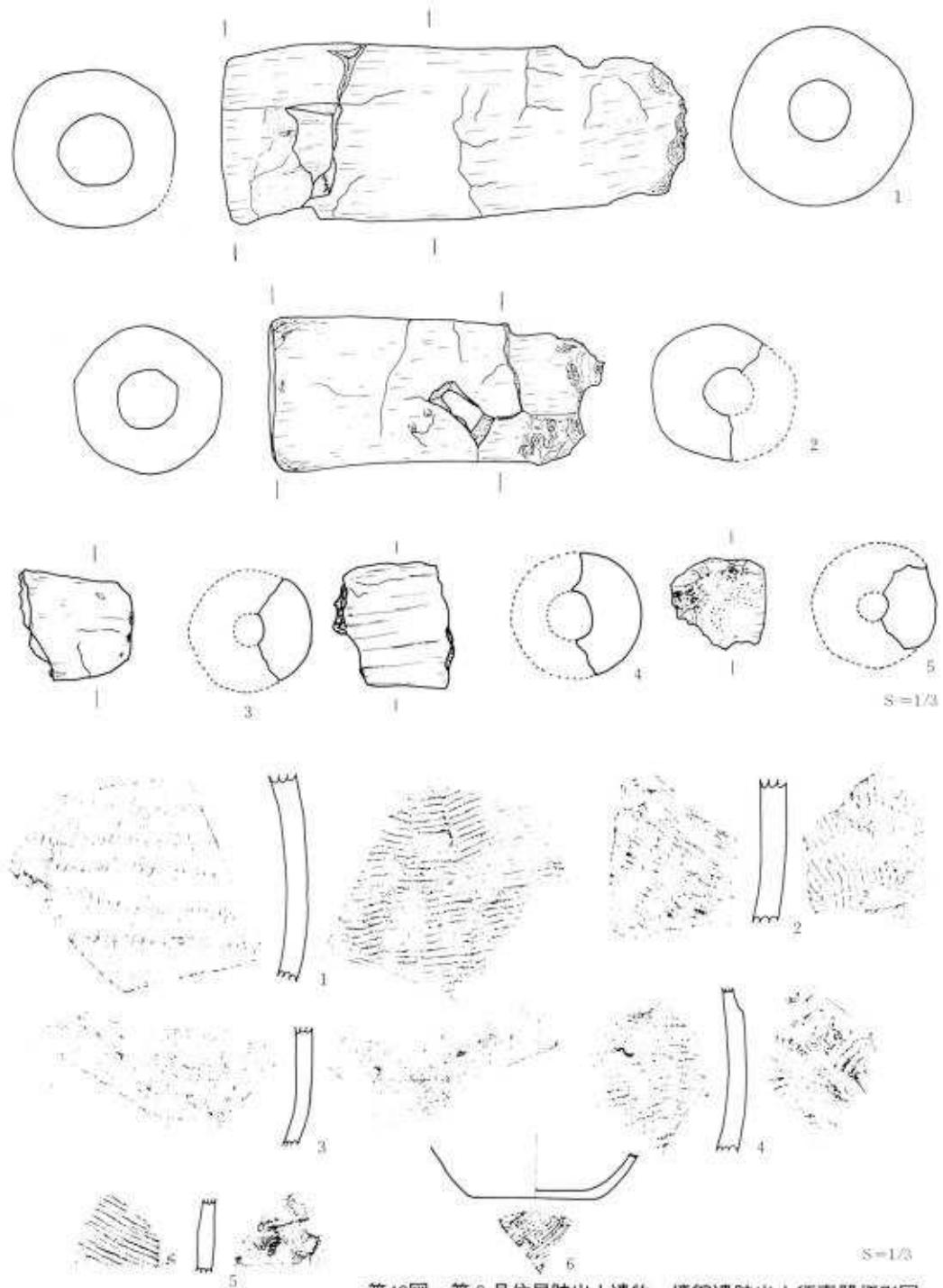
#### (考 察)

本調査で検出された住居跡は2棟のみであるが、その周辺や、墳墓、土塁中等より多量の土師器片が出土していることなどからみて墳墓や土塁構築の際に破壊されたものもあることは充分考え得ることである。しかし、集落的にみた場合には、その立地条件等からみて調査区域外にあたる西側の平坦部分に広がっておることも想定することができる。

次に、これらの時期的なものについてみると、須恵器や内黒処理を施した壺がほとんどみられず、ロクロ成形、無調整の壺、甕、及び一部ケズリのみられる甕だけであることなどから類推して10世紀後半~11世紀にかけての時期に属するものとみてよいものであろう。

次に、第2号住居跡からは既述の如く土師器と共に鉄製品、羽口、多量の鉄滓等が床面やピット中から出土しており、南東側床面には砂が散在していること等が認められ更には、中央に粘土が熱を受けて乳白色に変色した凹凸のある床面を有するピットが、そしてその際に上面が





第42図 第2号住居跡出土遺物、墳館遺跡出土須恵器拓影図

## — 墳 館 遺 跡 —

扁平な鉄錆の付着した大きな石が据えられていたこと等、一般の住居跡とは異なるいくつかの特徴が認められた。

また、床面、ピット、及び床面直上の埋土中より多量に出土した鉄滓について、表面積の割に比較的重いもの(A)、軽いもの(B)の2点について岩手県工業試験場に依頼して分析を行った結果は別表の如くである。これらから、製練滓であるか鍛治滓であるかについて大沢正己氏作成の表や他遺跡における分析の結果等を基に類推すると「Wuestite, Fayalite」が検出され、製練滓に多いといわれる「Magnetite」が検出されていないこと、全鉄量(T, Fe)については多いもの、少ないものとの差があるが、 $TiO_2$ は、0.31, 0.28%、 $MnO$ についても0.07, 0.01%と非常に低い値を示している。これらの分析結果及びその形態等から当遺跡出土のこれらの鉄滓は「鍛治滓」であるといえるであろう。

次に、乳白色に変色していたピットについては地山か赤褐色に焼けていること、底面の形状等から、何等かの高温の溶解物を流し込んだ跡のように考えられるし、中央における石は「金床」的役割をもったもののように思われるものである。

最後に出土した羽口について新沼鉄夫氏が実験データより推察しておられるフイゴの規模にそのまま短絡的に寸法をあてはめると(DE)型の製練、鍛治用の火床に使用された「フイゴ」のものと類似しているものといえる。

以上のような結果を総合すると、この住居跡は鉄器生産の工房址の性格をもった住居址であるといえる。

県内において羽口、鉄滓等の発見された遺跡は、かなりの数にのぼるが羽口が住居跡から発見されている主な遺跡としては矢巾町湯沢、一本松遺跡、花巻市胡四王山遺跡、北上市西野、成沢遺跡、江刺市宮地、鴻巣館、力石Ⅱ遺跡等がある。

鉄 洋 分 析 表

資 料	形 状	X 線 回 折					
		Wuestite	Maghemite	Goethite	Fayalite	Magnetite	
A (110g)	塊	○			○		
B (60g)	塊				○		
資 料	形 状	化 学 分 析					蛍光X線分析による検出元素
		T - Fe (%)	MnO	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	C	
A (110g)	塊	62.40	0.10	10.35	0.28	0.10	Ca, K, Al, Cr, Zr
B (60g)	塊	20.06	0.09	48.97	0.31	0.19	Cr, Sr, Ca, K, Al

(岩手県工業試験場)

- (注1) 大沢正己氏「福岡平野を中心に出土した鉢洋の分析」より引用  
 (注2) 考古学ジャーナル124、鉄の考古学、(雄山閣) 大山(埼玉県教委) 地  
 (注3) 「岩手の製鉄の歴史」新沼鉄夫 岩手史学研究、第62号 昭52  
 (注4) 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ岩手県教育委員会、日本道路公团 昭54  
 (注5) 「館址」東洋文化研究所  
 (注6) 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ岩手県教育委員会日本国有鉄道盛岡工事局 昭54  
 (注7) 現地説明会資料 岩手県教育委員会 昭47  
 (注8) 東北新幹線関係埋蔵文化財調査概要 岩手県教育委員会 昭52  
 (注9) 主要地方道一閣、北上線 遺跡調査報告書第8集、岩手県埋蔵文化財センター 昭54

### (2) 小ビット群 (Be54) その他

本遺跡の北西端の一段小高いところに約50mの東に張り出した平坦な地域がある。この部分の地山上より径25~35cm、深さ40~50cmの柱穴状のビットが14基検出された。埋土は、褐色土一層のみである。(第43図)

それらのビット群は一見 a、d、f、l は  $3 \times 3.5$ m の方形に、n、e、f、g、k、l では東西3.25m、南北2.5m、2.1m の方形に並びそれぞれ、1間×1間、1間×2間の建物跡になる可能性もあるが間尺との関係等からみると難しい点が多く決め手にかける。

また、このビット群の南から西にかけて L 字状に幅約25cm、深さ5~8cmの細い溝がまわっている。また、溝状の土壤は所謂溝状土壤とは異なる浅いものであり、いずれも性格は不明である。

その他8・9号墓の西側部分は封土が削平され平場的様相を呈していた。また、8・9号墓の東側の一段低い張り出し部分の緩傾斜地は他に比べて、表土が10~20cmと極端に薄く何等かの人意的削平を受けた場所ともみられるものであるが特に遺構はなく性格的には不明である。

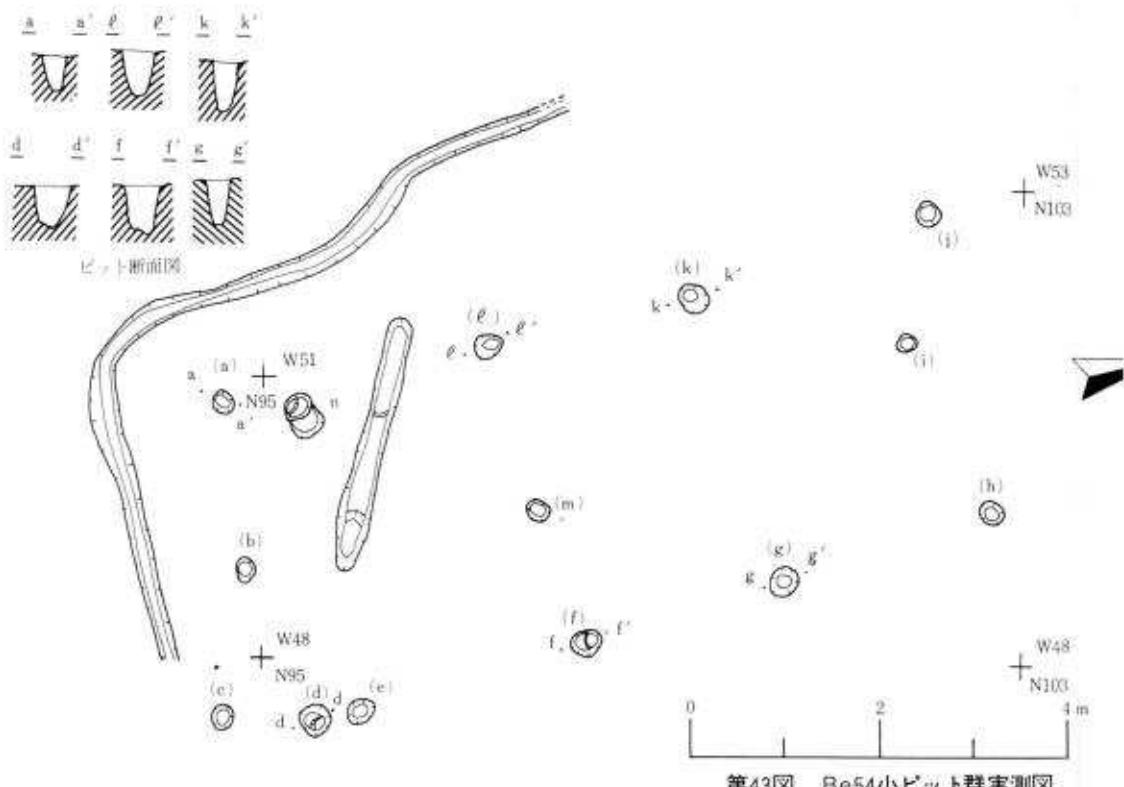
尚、墳館遺跡において直接遺構と関連がないと思われる遺物としては、第1号墳墓の表土出土の銅製のキセル。北側A区の表土より出土の寛永通宝(2枚) 不明銭(1枚) 第6号墓周溝の埋土中より出土した鉄釘(1本) 等がある。(第16図)

### (3) 土 墓

本遺跡の丘陵の縁辺部には、部分的には平坦なところもあるが南西の端から東、北西の端迄わずかに小高くなった土壠がとりまいている。これらは地点によって差があるけれども何等かの形で人為的に盛り土をして土壠を形成しているところと、北東部のように墳墓の一部が削平されて土壠を形成しているところがある。

これ等の土壠の位置は、原則的には東に緩傾斜している自然地形が急傾斜に変わる変換点近くに盛り土をしているところが多く、内側(西)からみた場合はあまり高まりのみられないところが多いのが特徴である。

一 墳 館 遺 跡 一



第43図 Be54小ピット群実測図

次に地区ごとにその土壙の構築状況について見ることにする。

① S60地点 (第1号墓の東側) (第44図)

現存する土壙の基底幅は盛り土した部分を基準にして測ると約3.8mで、盛り土部分は最高で約0.5mである。地山面からみると約0.8mになる。黒褐色土の上に主に褐色土を積んだものである。この褐色土を積み上げている部分はS17.40地点、第3号墓の東側にあたる区域近くまでである。

② S4地点 (第4号墓の東西セクション延長部分) (第7図)

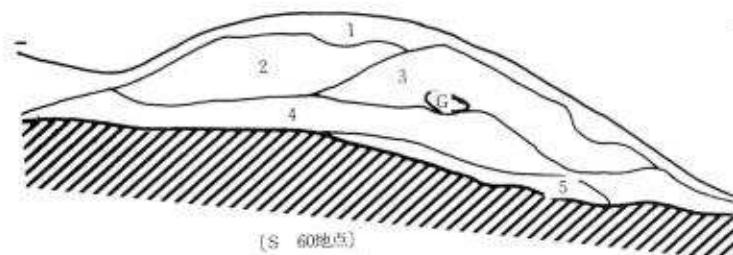
現存する土壙の基底幅は、盛り土をして整えたとみられる上面部分で測ると約3.5mで高さは約0.8mである。黒褐色土の上に明褐色土、褐色土を不整合に積み上げているものである。

③ N32地点 (第6号墓東西セクション延長部分) (第9図)

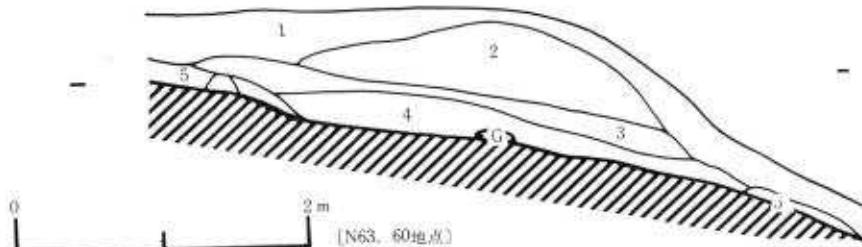
現存する土壙の基底幅は約3.8mで高さは約0.5mである。この部分は黒褐色土の上に褐色土、明褐色土を盛り上げているものである。

④ N63, 60地点 (第6号基と第8号基のほぼ中間) (第44図)

現存する土壙の基底幅は約3.5m、高さ約0.5mでこの部分は黒褐色土の上に明褐色土を積み上



1層	7.5YR3/4	暗褐色土	表土
2層	7.5YR4/4	褐色土	明褐色土が混じる
3層	7.5YR4/3	褐色土	明褐色土が2層に比べて少ない
4層	7.5YR3/4	暗褐色土	縄文土器片を含む
5層	7.5YR4/0	褐色土	地山のうけたもの



1層	7.5YR3/4	暗褐色土	表土
2層	7.5YR5/6	明褐色土	部分的に少し褐色土が混じる
3層	7.5YR2/1	黒褐色土	縄文土器片を含む
4層	7.5YR3/2	黒褐色土	明褐色土が少し混じる
5層	7.5YR5/6	明褐色土	

第44図 土壘断面図

げているものであり、表土が厚く、ほぼ平坦にみえる部分である。

##### ⑤ N122地点（第9号墓東西セクション部分）(第14図)

墳墓としての墳丘（封土）をそのまま、土壘として利用したとみられるものである。西側は削平されてしまふ地山だけになっている。

以上、土壘の構築状況についてまとめると次の様なことがいえる。

- (イ) 褐色土を積み上げている。 (ロ) 褐色土及び明褐色土を積み上げている。
- (ハ) 明褐色土を積み上げている。 (ニ) 墳墓の墳丘を利用している。

#### 土壘の性格と遺跡

まず、土壘の性格を考える上で墳墓と土壘についてみてみる。4号墓の延長上における土壘の盛り土はL字状に削っている4号墓の基底部を埋めて不整合に盛り土がなされている。また、6号墓については、東側の周溝部分を埋めている。9号墓（8号墓も含めて）においては西側が削平されて、地山直上まで平坦になっていること、即ち、墳丘が土壘状になっていること等の

## — 墳 館 遺 跡 —

事例が認められる。これらから推定すると墳墓と土壙の前後関係は、土壙が後に構築されたものと想定して大過ないものであろう。従って、土壙は、墳墓に関連するというより別の機能をもっているものであろう。すると、短絡的ではあるが「館」と関連のある土壙というものが考えられる。「館」としての墳館遺跡をみた場合、「立地、形態、その他の施設」というものが総合して考えられなければならないものであろうが、今回の調査においては北西隅における建物跡らしい小ピット群の他、土壙の内側及び外側の平場的な様相を呈している部分はあるが土壙を除けば遺構らしいものは発見されていない。立地の面からみた場合東側裾部を南から北へ安倍道といわれる古道が走り、南北は小沢にはさまれ急斜面をなし、眺望のきく東面する丘陵地に立地し、しかも、平坦面が奥(西)へ延びている。また、北側の沢は途中から西へまわって、調査区及び区外の西部平坦面が1つの単位をなしているような地形に見える。従って、土壙、沢によって1つの単位を形成しているとみることも可能である。このようにしてみると「館」としてのいくつかの要素は備えているものとみるべきだろう。

次に、文献上からは、「館」としての墳館は見当らないが「古館林」「古館古墳」「墳館古墳」等、何等かの形で古くから「館」としての名称が与えられていた地域であることも、また、事実である。以上のような点を総合すると「館」としての性格を有する遺跡であるということもいい得るものである。しかし、詳細については西側地域を含めて今後とも究明しなければならないものである。

(注1) 空からみた歴史景観 山田安彦 大明堂77.7

(注2) 古館林御立林山守漆立長三郎、地付高ノ目山岸金二郎 (凶處異変資料年代記、寛文24~明6年)

(注3) 史跡名勝天然記念物調査報告、大正12年度調査 岩手県史跡名勝天然記念物調査会 27

古館古墳 小笠原謙吉、調査

(注4) 東北文化研究1~4 (昭37) 「奥州古墳記事に就いて笠井氏に謝す」の記事中

「……志和村の墳館……云々……」がある。

## 5 ま と め

今回の調査によって縄文時代、弥生時代、平安時代の遺物が多量に発見されると共にそれらに関連する遺構も程度の差はあったが確認された。また、中世に関連するとみられる火葬墳墓群及び、土壙等が存在すること等が判明した。その結果、墳館遺跡が非常に長期間にわたって形成された遺跡であることが明かとなった。

### (1) 縄文時代

縄文時代中期、後期初頭、晩期に属する遺物及び、遺構の一部が検出された。その大半は、後期初頭に属するものとみられるが、大部分は上部が削手され、完全なものは存在しなかった。遺物は墳墓、土壙中より多量に出土した。以上のことから、これらの遺構は墳墓、土壙等の構

築の際に壊わされたことは確かであるが、それ以前に（弥生、平安期）に壊されていた可能性もあり得る。しかし、當時ここが生活の場であったことは否定出来ない。

#### (2) 弥生時代

弥生時代の古い時期とみられるものもあるが、主として後期～後期末にかけての土器や、1点ではあるが、アメリカ式石鎌等も出土した。明確な遺構は検出されなかったが、それに属するだろうとみられる住居跡状の遺構が存在した。これ等の土器は、包含層的出土状況を示すと共に土塁中や一部墳墓の封土中からも出土していることは、それらの構築の際、破壊されたことも充分に想定される。

この時期における当地方の高地性集落を究明し、弥生文化の一端を知る上での貴重な資料を得ることが出来た。

#### (3) 平安時代

平安時代に属する住居跡が2棟検出されそれに共伴する土師器等が発見された。その中には、鉄器生産に関連する施設とみられるものを有する工房址的性格をもった住居跡が存在した。この時期の遺構についても、墳墓、土塁等の構築の際破壊されているものがあることが推測できる。

#### (4) 墳 墓

主として、火葬骨を埋葬した火葬墳墓が少くとも9基は存在した。これらは、追葬を行った火葬集団墓である。また、その中には、後世・土葬墓として使用されたものも何基かは存在した。副葬品としては少ないが、北宋錢、明錢が出土した。充て、古墳とみなされていた墳墓群が火葬集団墓であることが判明した。

#### (5) 土塁、その他の遺構

縁辺に土塁がまわり、小ピット群等も検出され「館」としての機能を備えた遺跡であることもいい得るが、調査が部分的なためその全貌については不明である。

以上、墳館遺跡は、縄文時代～中世にかけての多様な遺構構成を示す遺跡であり、周辺には縄文時代～平安時代にかけての集落の存在が予想され、また、「館」としての機能を究明する上でも貴重な遺跡である。今後、西側部分に対する保存の手が加えられなければならない。

#### 参考文献

- ・墳墓（日本史小百科） 竹藤 忠著 近藤出版社 昭53
- ・尾塚一熊本県下益城郡城南町尾塚中世墳墓の調査一熊本県教育委員会 昭48
- ・駿河千代遺跡 静岡県教育委員会 昭51
- ・「松前町字上川墳墓遺跡の調査」久保 泰 松前藩と松前13号 昭54
- ・「室町時代の円墳式火葬墓一埼玉県入間越生町上野一」大護八郎 考古学雑誌45-2 昭49

— 墳 館 遺 跡 —

- ・「宮城県小山田の火葬墓」伊藤玄三 考古雑誌45-4 昭29
- ・火葬墳墓の流布 新版考古学講座 雄山閣 昭45
- ・天神カ丘遺跡 大迫町教育委員会 昭49
- ・巻堀遺跡 宮城県一迫町教育委員会 昭52
- ・上ノ原A遺跡 宮城県一迫町教育委員会 弥生時代研究会 昭53
- ・考古風土記第3号 昭53
- ・「東北の弥生文化」伊東信雄 東北学院大学東北文化研究所紀要第10号 昭54
- ・「福島県天王山遺跡の弥生式土器－東日本弥生式文化の性格－」坪井清足 史林36-1
- ・「天王山式土器の編年的位置に就いて」磯崎正彦 上代文化第26輯
- ・一ノ関市史 一ノ関市教育委員会 昭53
- ・黒石市牡丹平南遺跡、浅瀬石遺跡発掘調査報告書 青森県教育委員会 昭50
- ・東北自動車道関係遺跡発掘調査概報(白石市、紫田郡村田町地区) 宮城県教育委員会 昭47
- ・  
・  
(刈田郡藏王町地区)  
・  
昭46
- ・鉄 立川昭二 学生社 昭41
- ・たたら 黒岩俊郎 玉川選書 昭51
- ・岩木山一岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書 岩木山刊行会 昭43

## 後在所 A・B・C・D遺跡

### I 位置と立地

後在所A・B・C・D遺跡は、紫波町片寄字後在所から堤下にまたがる地域であり、東北本線日詰駅の南西約5.6km、紫波町の南西、石鳥谷町との境近くに位置する。

本遺跡は、西部山地に連なる支脈丘陵裾部の東緩斜面に立地している。周辺は山林、原野の他、果樹園、畠地として利用されているところが多い。

遺物の散布状況及び地形等を考慮に入れ、A・B・C・Dの四地区に分けて調査を行ったものである。(第1・2図) なおすぐ北には墳館遺跡、大明神遺跡等がある。

### II 遺跡の基本層位

D遺跡における基本層位は下記の通りであるがA・B・C遺跡においてはI、II層が比較的薄いところが多い。

I層 (7.5YR 7/4) 黒褐色土……腐植土で表面より約20cm前後は木根、箆根等が網目状に入り込んでいる。最も厚いところで約35cmである。

II層 (7.5YR 7/4) 暗褐色土……シルト質の土で小礫をわずかに含む。厚さは15~35cmである。

III層 (7.5YR 7/4) 褐色土……シルト質粘土である。下位になるにつれて、角ばった礫が多くなる。(地山)

### III 検出された遺構と遺物

調査の結果、A・B遺跡においては遺構・遺物の存在は認められず、C遺跡においては少量化した土器片が出土したのみである。(第4図)

D遺跡においては、墳墓3基とそれに伴う副葬品及び釘、人骨の細片等が出土した。墳墓の周辺、その他からは、他の遺構・遺物は発見されなかった。(第3図)

— 後在所 A・B・C・D 遺跡 —

第1号墓（第5図 図版2・3）

調査した中で最も大きな墳墓で、現状の大きさは、底部の直径が約8m、高さ約1mである。内部土壌の最深部から計測すれば1.8mである。

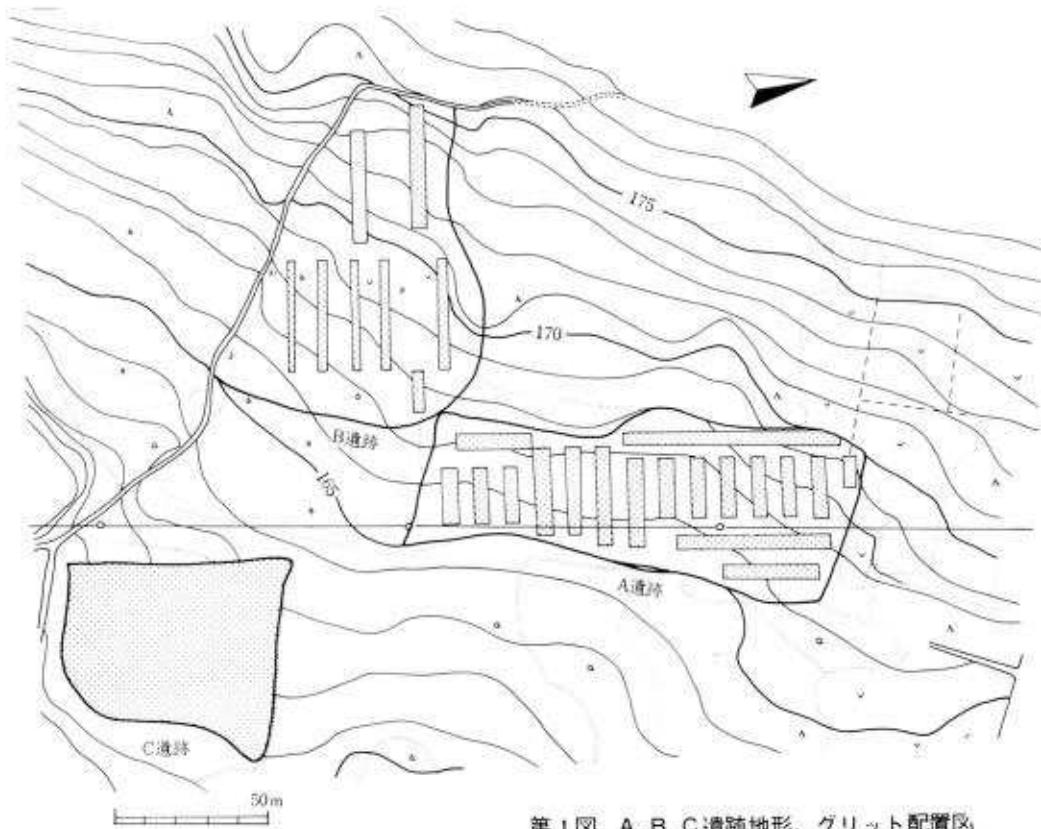
塚頂はや・平坦で塚全体の形は円錐形の頭を切った形、いわゆる截頭円錐形である。封土の周囲には、周構のような施設はみられない。

土壌は塚の中央部にあり、約1.85×1.5mの長方形であり、長軸の方向は、N-14°-Eであり、その深さは約0.8mである。

封土は、土壌を掘った土を埋め戻した後、周辺より土をあつめて積み上げたものとみられ、大小の褐色土（地山）のブロック、小礫等が混入している。これらは、特に、つき固められた様子はみられない。

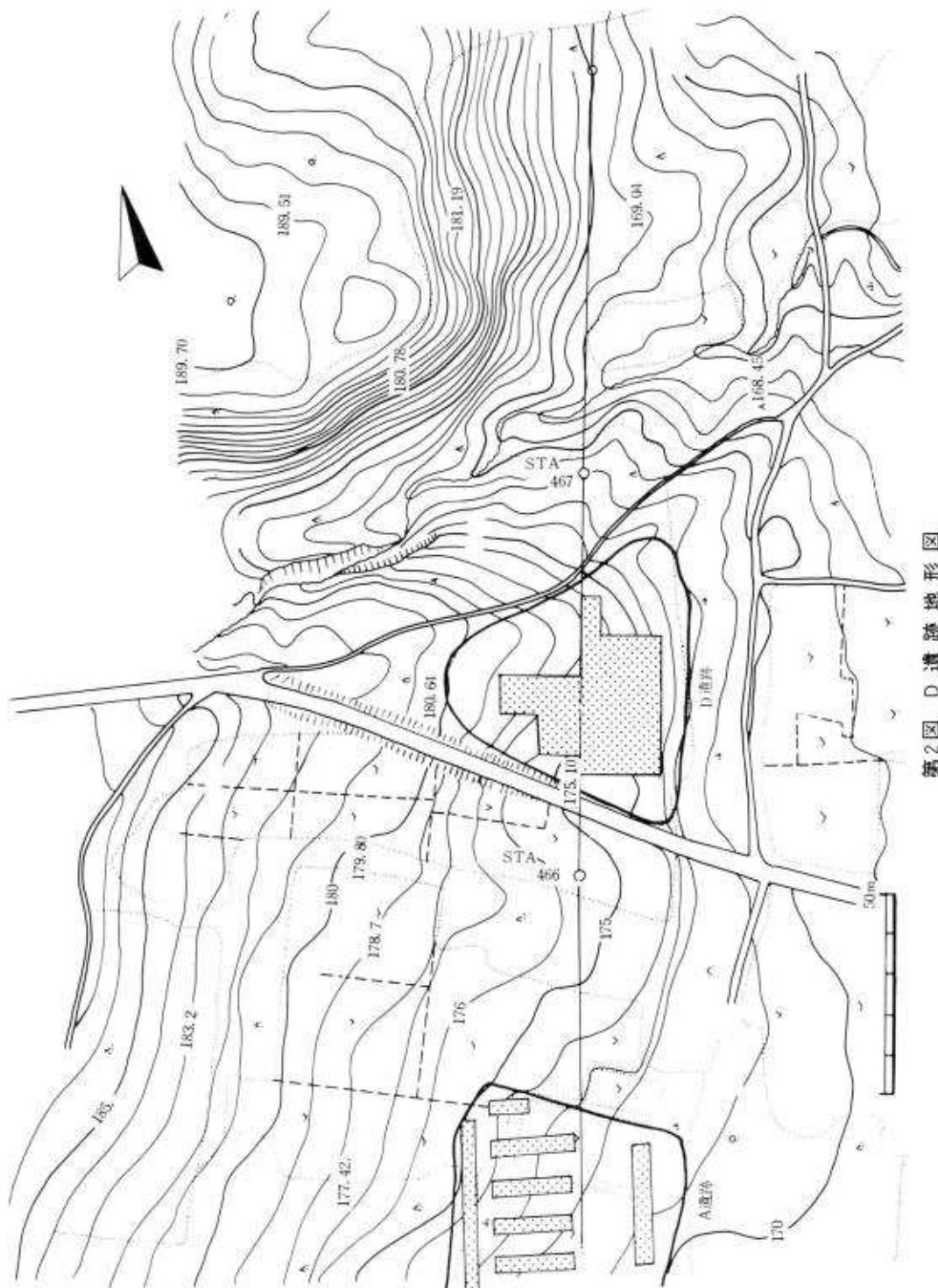
次に、土壌内の様子をみると、棺は腐植して原形をとどめておらず底部より棺に使用したと思われる釘約33本が出土した。ただ、釘に残っていた板材の様子から厚さ約2cmの板を使用したらしいことが伺われる。

中央部や、東より少量の人骨が出土し、これの下よりガラス製の珠数玉35個、土壌の北東隅



第1図 A,B,C遺跡地形、グリット配置図

— 後在所 A・B・C・D 遺跡 —



第2図 D 遺跡地形図

## — 現在所 A・B・C・D 遺跡 —

より漆で補修した跡のある半筒形の猪口、北西隅より椀形の茶碗が各 1 個出土した。

### 第 2 号墓（第 6 図 図版 4）

第 1 号墓の西約 6 m のところに位置する墳墓である。現状は塚頂部の北半分が深さ 0.5~0.6 m にわたって削りとられ、その中に数個の人頭大の石が露出していたものである。規模は底径が約 4 m、高さ約 1 m であり、内部土壇の最深部から計測すれば約 1.9 m である。封土の形状は頂部の比較的丸い土饅頭形を呈していたものとみられる。封土の周囲には、周溝のような施設はみられない。

土壇は塚の中央部にあり、約 1.7 × 1.3 m のほぼ長方形で、西側には上部に向って、煙道状の穴が付いていたものである。長軸方向は N-33°-E であり、その深さは約 0.9 m である。

封土は、被葬者を埋葬し、わずかに土を覆った後か或いはそのままの状態で径が 0.2~0.4 m の円礫や角礫を不規則であるが、ほぼ土壇と同じ形に地上まで積み上げ集石し、それから封土を盛り上げて塚を形成したものであろう。石の様子からは、特に、石室を造ったようにはみられない。

土壇内の様子は、底部より少量の人骨片と人歯牙、珠数玉（3 個）、古銭（6 枚）キセルが出土している。古銭は 6 枚きちんと麻紐でゆわえた状態で土壇の北側部分より出土したものである。その他、鉄釘が 3 本だけ出土している。

### 第 3 号墓（第 7 図 図版 6）

第 1 号墓の北西約 5 m、第 2 号墓との間に位置するものである。現状は底部長径約 2 m、短径約 1.5 m で東西に少し長い楕円形を呈し、高さは約 0.4 m と非常に低い土饅頭形の墳墓である。封土の周囲に周溝等の施設はみられない。

土壇は、塚の中央部にあり、長径約 2 m、短径約 1.7 m の隅丸長方形を呈し、断面は台形状である。深さは約 0.6 m である。長軸は N-18°-E である。

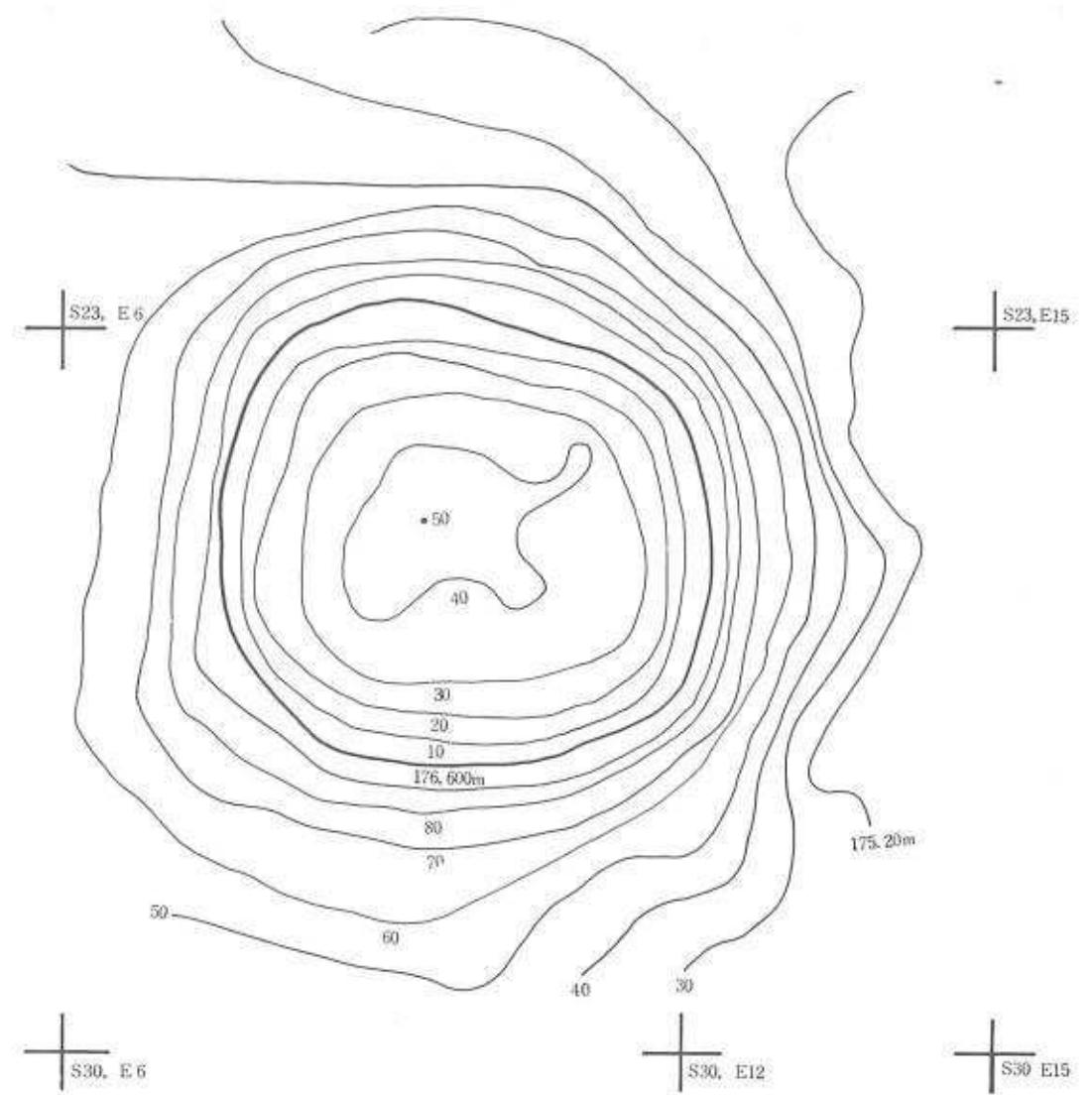
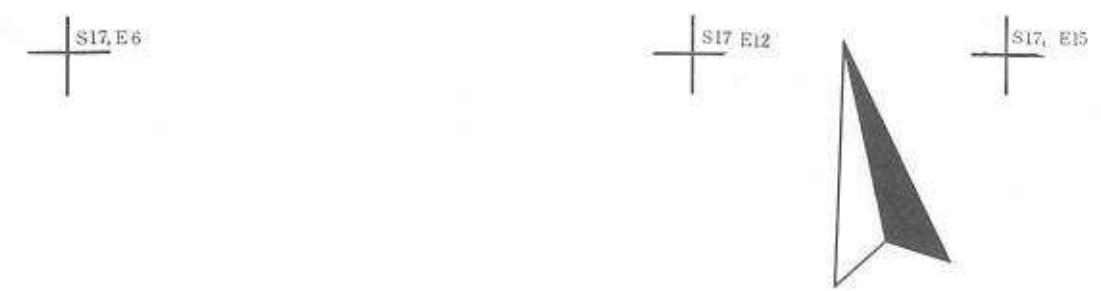
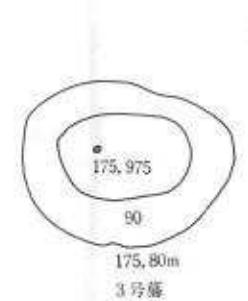
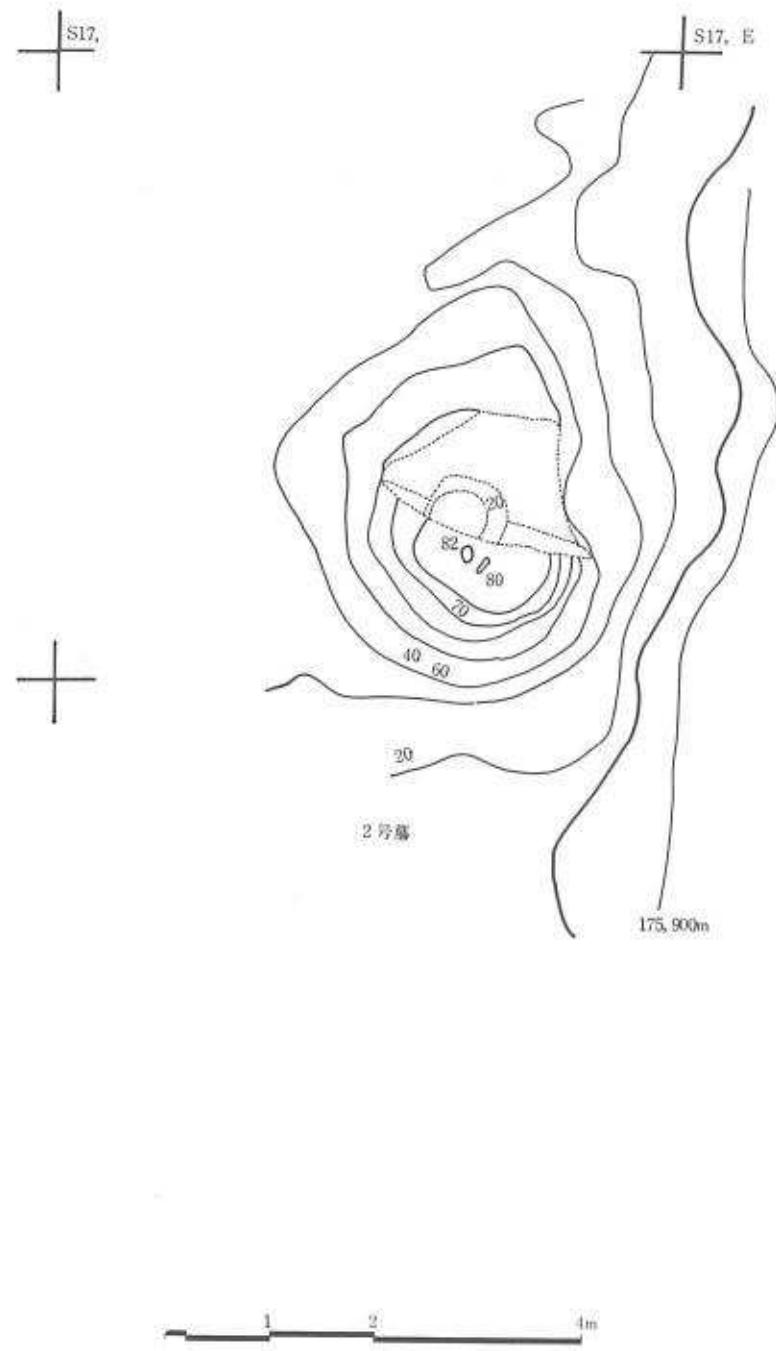
封土は、被葬者を埋葬した後、周辺の土を寄せ積めて小さな塚をつくったものである。土壇の様子は、底部より人歯牙（13 本）古銭（12 枚）珠数玉（12 個）が検出され、底部より約 0.4 m 上部の黒色土中よりキセルが出土した。ほかに、鉄釘が 21 本出土している。

### 副葬品、その他の遺物（第 7~9 図 図版 1~5・7）

#### a. 珠数玉

第 1 号墓出土のものは個数が 35 個で、材質は透明なガラス製である。直径が最大 1.5 mm のものからほぼ 1 mm ずつ径が小さくなり 0.6 cm のものまで 6 種類に分れ、その形状はソロバン玉状のものが主で、ナスピ形をしたものが 2 個ある。

第 2 号墓出土のものは個数が 3 個で、いずれも材質は、練物風のものである。直径が 0.6 cm のもので地がコバルト色を呈し、白い縞模様の入ったものと乳白色を呈しているもので、形状



第3図 墳墓位置図

はビーズ玉様のものである。1個は欠損している。

第3号墓出土のものは個数が12個で、材質は灰白色の練物風のものである。直径が最大1.1cmから最低0.5cmものまで5種類あり、形状は、円形・ナビス形・ビーズ玉様等のものがある。4個は磨滅欠損している。

#### b キセル

材質は、いずれも銅製である。第2号墓出土のものは、雁首の長さ7.4cm、火皿の直径1.7cm、吸い口の長さは5.1cmである。また、第3号墓出土のものは、雁首の長さ7.4cm、火皿の直径2.1cm、吸い口の長さ6.3cmで、前者に比べて少し大型のキセルである。いずれも、竹製の羅宇の残痕が付いていたものである。

#### c 古銭

第2号墓より6枚、第3号墓より12枚、合計18枚出土している。いずれも、寛文8年(1668年)以降に鋳造された「新寛永」といわれる寛永通宝で、3号墓出土品の中に「文」の背文があるものが1枚ある。いずれも1文銭である。

#### d 磁器

第1号墓より2個出土している。1つは楕形(口径11.8cm、底径4.2cm、器高6.1cm)の茶碗で、他は半筒形(口径8.9cm、底径8cm、器高7.3cm)の猪口で、いずれも染付である。

前者は山水(山・松・波)の図柄が、後者は松竹梅に綱目文が描かれているものである。

#### e 鉄釘

下表の如く、各墳墓より鉄釘が出土している。これらのうち折れている釘の断面を観察すると、いずれも空洞になっている。これらは、いわゆる和釘といわれるもので断面形は、長方形のものと、方形のものがある。釘頭は、頭を平たく叩き延して長方形状を呈し、鉤型をなすものと、釘頭を平たく延して方形にしているものが主で、中にササギ型の頭をしているものが1本含まれている。(第1号墓)

第I表 鉄出土地況

長さ(cm)	4.0	4.5	5.0	5.5	6.8	7.5	不明	計
第1号墓	0	2	4	4	2	1	20	33
第2号墓	0	0	0	0	0	1	2	3
第3号墓	7	0	0	0	0	0	13	21

#### f 人骨及び歯牙

第1号墓より人骨の一部と、歯牙(6本)、第2号墓より人骨片少量と、歯牙(13本)、第3号墓より歯牙(13本)が、いずれも土壌底部及び直上の黒色土中より出土した。歯牙については、岩手医科大学教授、桂秀策氏に鑑定を依頼し、次のような結果を得る事が出来た。即ち第

### — 後在所 A・B・C・D 遺跡 —

1号墓のものは小臼歯、大臼歯、犬歯で推定年令50才位。第2号墓のものは、小臼歯、大臼歯、で推定年令50才位。第3号墓は小臼歯、大臼歯で年令50~60才位と推定されるものである。尚性別はいずれも不明である。墳墓及び副葬品等についての概要は、以上の通りである。次に若干の考察とまとめを述べる事とする。

## IV 考察とまとめ

今回調査された墳墓は、人骨、歯牙の残存状態、鉄釘及びそれに木片が付着して残っているものもある事等より本棺土葬墓であると考えられる。

土壤は既述したような規模であり、これらは、おそらく棺の大きさに合せて掘られたものである事は予想されるところであり、ある程度棺の大きさを推定する要素は持っているものだが正確には不明である。ただ1号墓の釘の残痕より約2cmの厚さの板を使用した棺である事は推定できる。

埋葬法は、棺を土壤に納めた後、堀り上げた土と周辺の土とで、封土を盛り上げているものであるが、2号墓の場合、被葬者の棺の上に多量の石を地上迄積み上げ、その上から封土を形成しているのは、西側の煙道状の穴と共に特徴のある埋葬法である。

埋葬の方向は、北東にや・傾くが、ほぼ北頭位で埋葬したものとみて良いものであろう。

墳墓の規模は大・中・小とそれぞれ異り、また、副葬品についても若干の違いが認められるが、これ等は身分的なもの或は時期的なものの差なのか不明である。

おわりに時期及び性格についてみると、これ等は葬法や副葬品を通してある程度の時期を推定することは出来るであろう。

まず、葬法の上からみた場合、土の中に遺骸を埋めて土を覆う方法は、その上における諸施設には異なるものがあるとしても、縄文時代から中世、近世を通じて近代迄続いている普遍的な方法といってよいものである。特に、近世においては、火葬も広く行われたが、土葬による埋葬も多く、特に、江戸時代に入って、儒教の影響が強くなると共に多くなり、なおかつ、その影響のみに限らず、一般各階層の間にその風習が、広く行われるようになったものである。しかも、土葬は伝染病予防の見地から明治30年に火葬に関する法律が公布されたにもかかわらず、近年迄存続していたのである。棺は、座棺の場合は一種の木桶を用いたが、最も普通に行われた方法は、木棺に遺骸を安置し土壤に納め土を覆う方法である。<sup>(註1)</sup>

次に、副葬品の中で時期を決めるための資料として「六道錢」として納められていた「新寛永」といわれる寛永通宝がある。これは寛文18年(1668年)以降に寛永通宝が再鑄され明治初

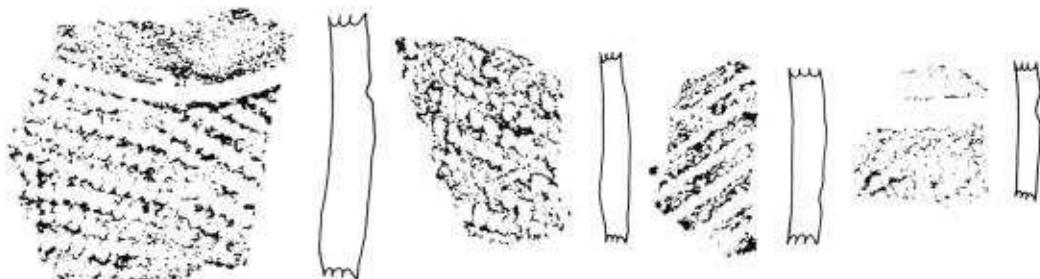
期まで約200年にわたって鋳造されたものである。これらは、明治30年（1897年）に新貨幣法が公布され寛永通宝（鉄錢）通用禁止になる迄、少くとも流通していたものである。従って、一応それらの流通している時期と同時期のものと考えることは妥当であろう。また、1号墓より出土した陶器、ガラス製、ねりもの風珠数玉、古銭をゆわえている紐の残存状態等も、時代を決める1つの手がかりになるものであろう。

以上、埋葬法及び副葬品等の結果からこれ等の墳墓の構築年代は、江戸時代中頃より明治中頃にかけてのものであろうと推定される。しかも、その中でも比較的新しい時期に属するものではなかろうか。

最後に、この墳墓のあった場所には御堂が建てられてあったと云う事はあるが、直接墳墓についての手がかりがなく、また副葬品も少く、地域における口碑伝承等性格を決める手がかり等もないため、近在の庶民の墓であつただろうと推定するのみである。

注1. 日本史小百科。墳墓 昭和53年 斎藤一忠 近藤出版社

注2. 秋田貨幣史 佐藤清一郎 昭和47年 みしま書房



第4図 C遺跡表探遺物

#### 参考文献

北上市史 第2巻 北上市教育委員会

「墳墓」 仏教考古学講座 第7巻 雄山閣 昭50

和賀町史 和賀町教育委員会 昭52

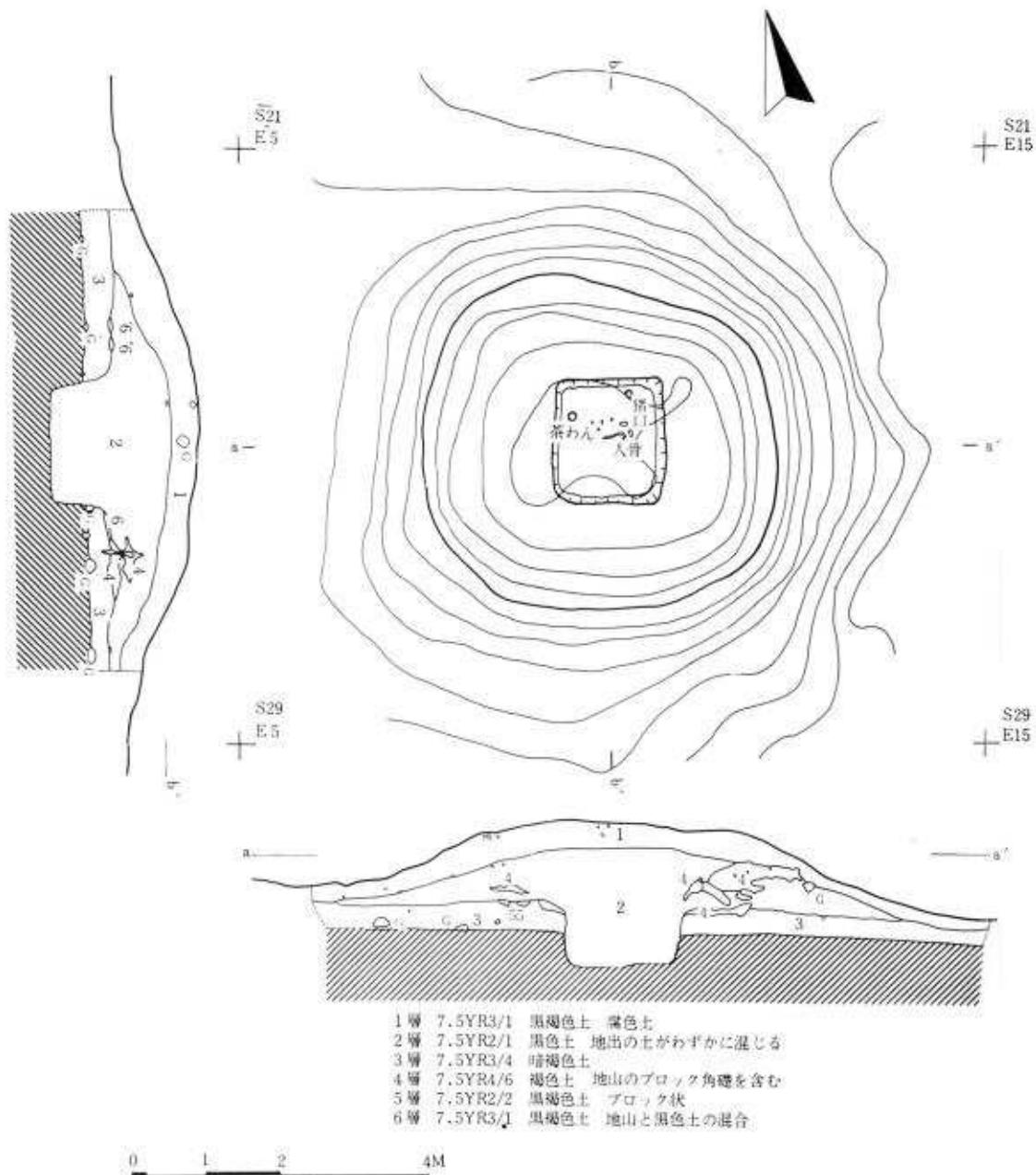
松前町字上川墳墓の遺跡調査 久保泰 昭54

奥島館遺跡調査報告書Ⅰ 北上市教育委員会 昭50

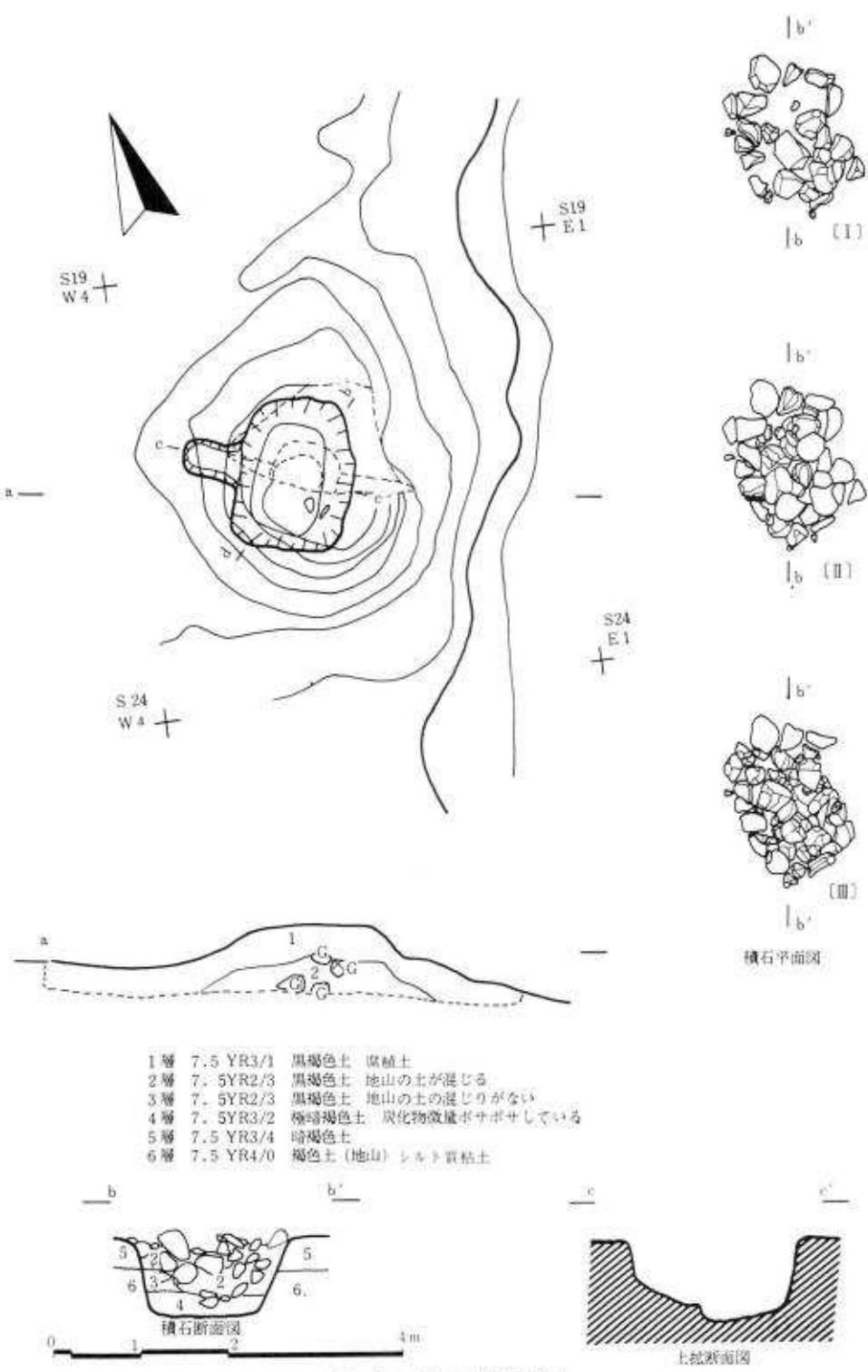
古銭と貨幣 矢部倉吉 金園社 昭48

先祖供養産業79 一地場産業大系—II 増刊新書 昭54

—後在所A・B・C・D遺跡—

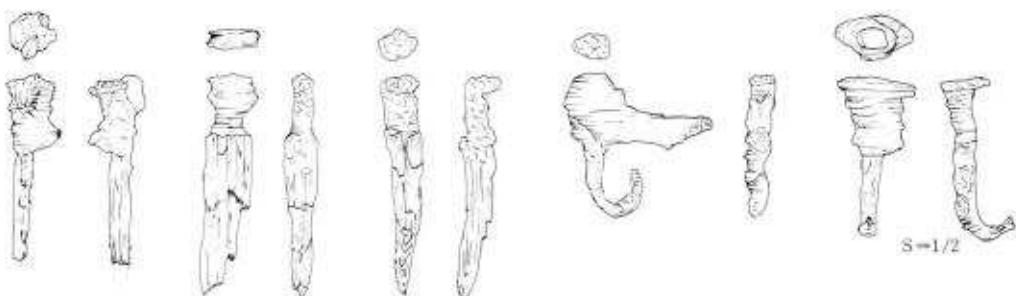
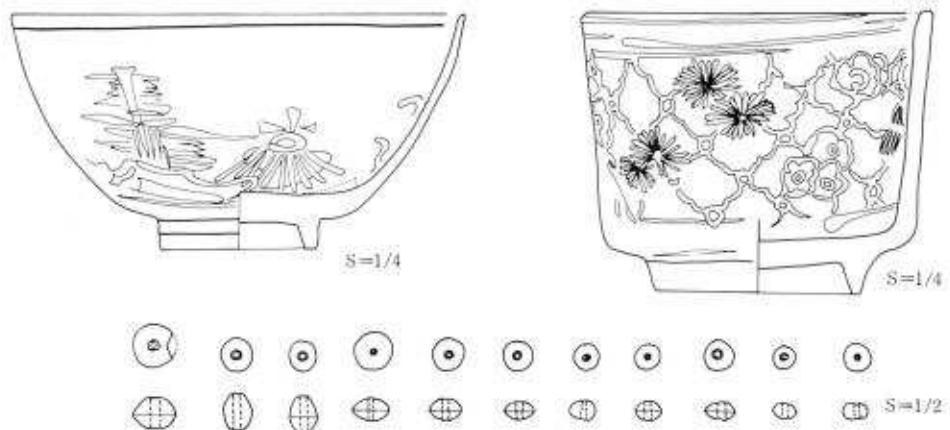
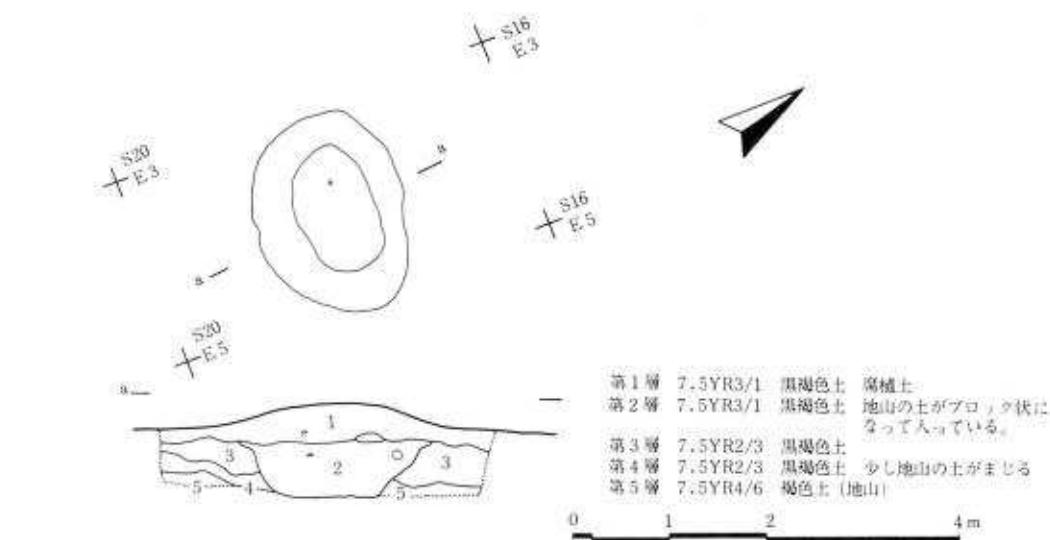


第5図 第1号墓実測図



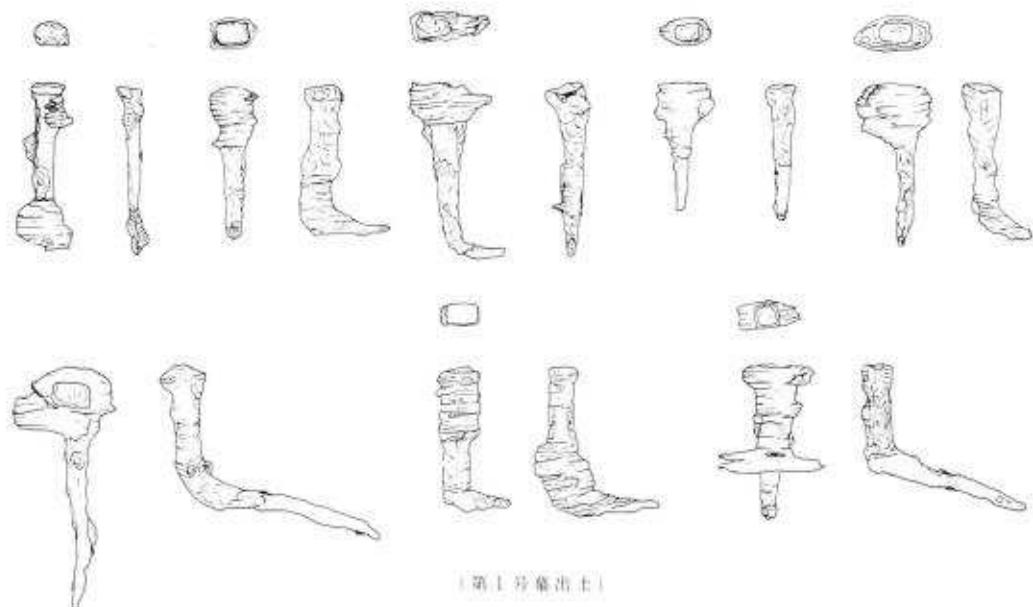
第6図 第2号墓実測図

—後在所A・B・C・D道路—

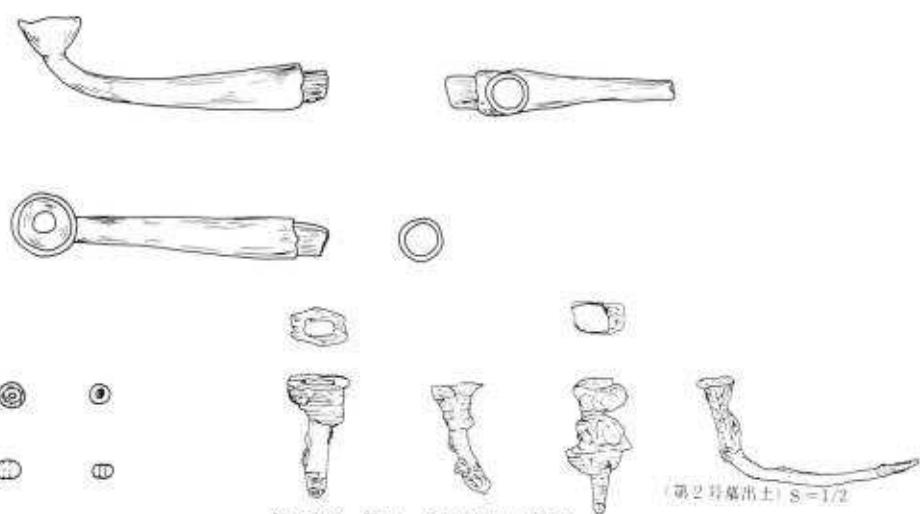
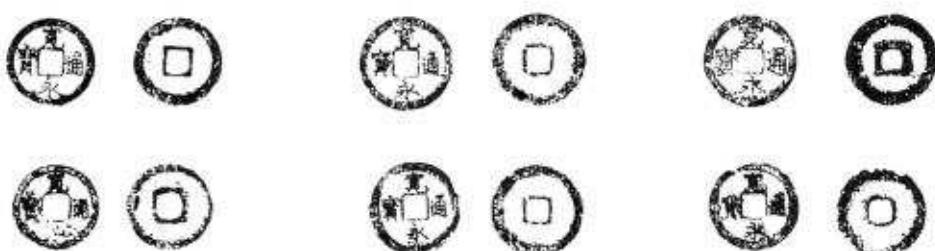


第7図 第3号墓実測図、第1号墓出土遺物

— 横在所 A・B・C・D 遺跡 —



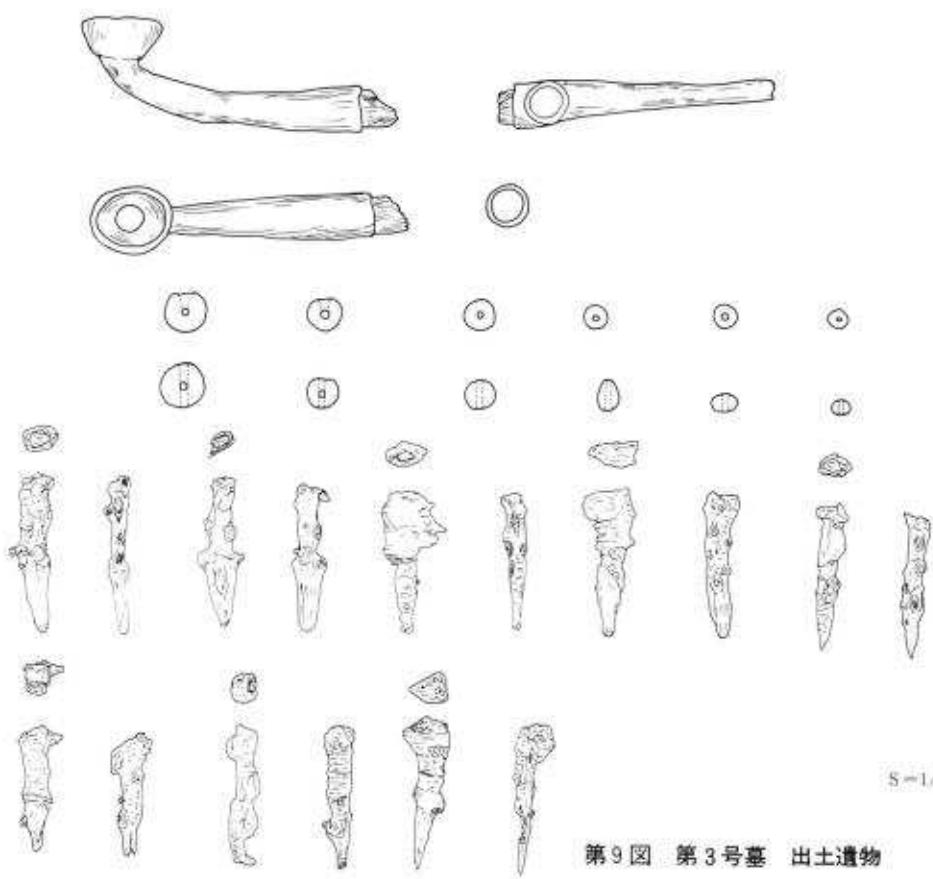
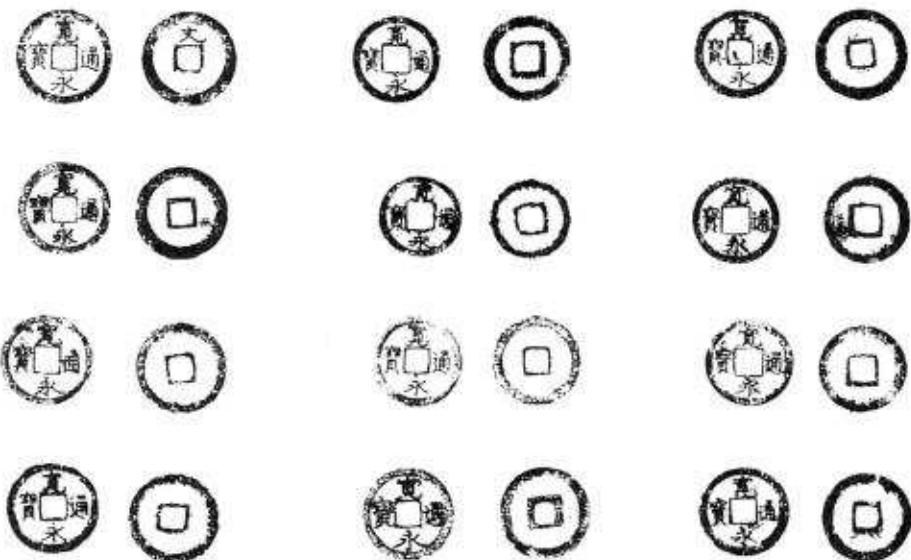
(第1号墓出土)



第8図 第1・2号墓出土遺物

(第2号墓出土) S=1/2

—後在所A・B・C・D遺跡—



第9図 第3号墓 出土遺物

S=1/2

# だい みょう じん 大 明 神 遺 跡

## I 遺跡の位置と立地

本遺跡は、東北本線「日詰」駅から南西約5.5kmの地点にあり、紫波町西部山麓沿いに位置している。

紫波町西部に南北に連なる山地があり、東麓には北より南に断層線崖がつづいており、滝名川、葛丸川、その他の小河川、沢などがほぼ東西に走り半ば独立した丘陵を形成している。これらの丘陵は、いわゆる石鳥谷段丘に比定される。

本遺跡は西部の後背山地中の大明神山(304m)の東麓に、沢によって形成された緩傾斜地の南面にI区とした調査区があり、標高約162m、その北に頂部に平坦地をもつ半ば独立した丘陵がある。この丘陵の東側傾斜面にII区とした調査区があり、標高約176mとなる。

I区とII区を画するのは、I区北に続く急斜面で、その比高差は約7mある。I・II区とも東に向って傾斜する斜面は連続する等高線を示し緩傾斜となって調査区に続く大明神遺跡の範囲に包含されるものと考えてよい。また、II区の西に平坦部が認められ遺構の存在する可能性が非常に強いものと考えられる。

調査区の現況は、I区西側で畠地、東側で果樹園、II区は雑木林であった。本遺跡の所在する後背山地の東麓には、北に柳田館・浦田A・B・南に墳館・後在所A・B・C・D遺跡等が近接して所在する。

## II 基本層序

調査区の土層序について、I区では深掘りによる観察をしなかったので問題を残すが、I-9号(Bd86)住居跡の埋土(第11図)観察では、I層に黒褐色腐植土の表土があり、II層として小豆大から頭大の礫や、焼土、炭化物、遺物などを含む黒褐色土を主体とする層が認められ、その下に遺構検出面である砂質黃褐色土に礫を伴う面がありIII層となる。

一方、I区遺物包含層(第2図A地点)の観察では、I層黒褐色腐植土、II層の遺物を含し、下位に礫をもつ黑色土がある(第33図、図版17)、III層が褐色砂礫層となる。

これらのことから、I区におけるII層は再堆積層で遺物を含んでいる。しかし、II層が調査

## — 大明神遺跡 —

区全域におよぶものではなく、EW、O基線の東側沿いではⅠ層下にⅢ層、もしくはⅡ層は非常に薄い。なお、9号住居跡地点とI区包含層（A地点）のⅡ層は土性において同一ではないが遺物を包含する再堆積層とする観点から、ここでは同一記号を用いたもので、9号住居跡地点と似るⅡ層は調査区南東の遺構が密な区域にみられる。

II区での遺物包含層（第2図B地点）の観察では、表土下（表土は重機による抜根、除去のため観察不能）のⅠ層が再堆積の暗褐色土の遺物包含層で、Ⅱ層に黒褐色土、Ⅲ層にぶい黄褐色粘質土となる（第33図）、I区の再堆積包含層にくらべ粘性があり礫を含まない、この再堆積層は、EW、Oより西寄りでは認められず、Ⅲ層面が遺構の検出面となる。

## III 検出遺構と出土遺物

当初、分布調査において登録された範囲は第1図に示したⅢ区とする区域であり、本報告書で述べるI区は後日の巡査で、II区は工事の抜根と表土削平後に確認されたものである。

調査は、I区のA・Bブロック59以西は人力による表土除去をおこない、他はすべて重機による表土除去をおこなった。その結果、Ⅲ区とした区域では遺構・遺物とも検出されず、I・II区において遺構と遺物包含層を認めた。なお、I・II区におけるグリット設定の基準線は異なっている。

### (1) 積穴住居跡

#### I-1号(Ae03)住居跡（第3図図版1）

〔規模・平面形〕 径3.95m×4.2mの円形と推察される。

〔埋土〕 クロボクに砂混りの黒褐色土に礫を含むほぼ1層の埋土である。

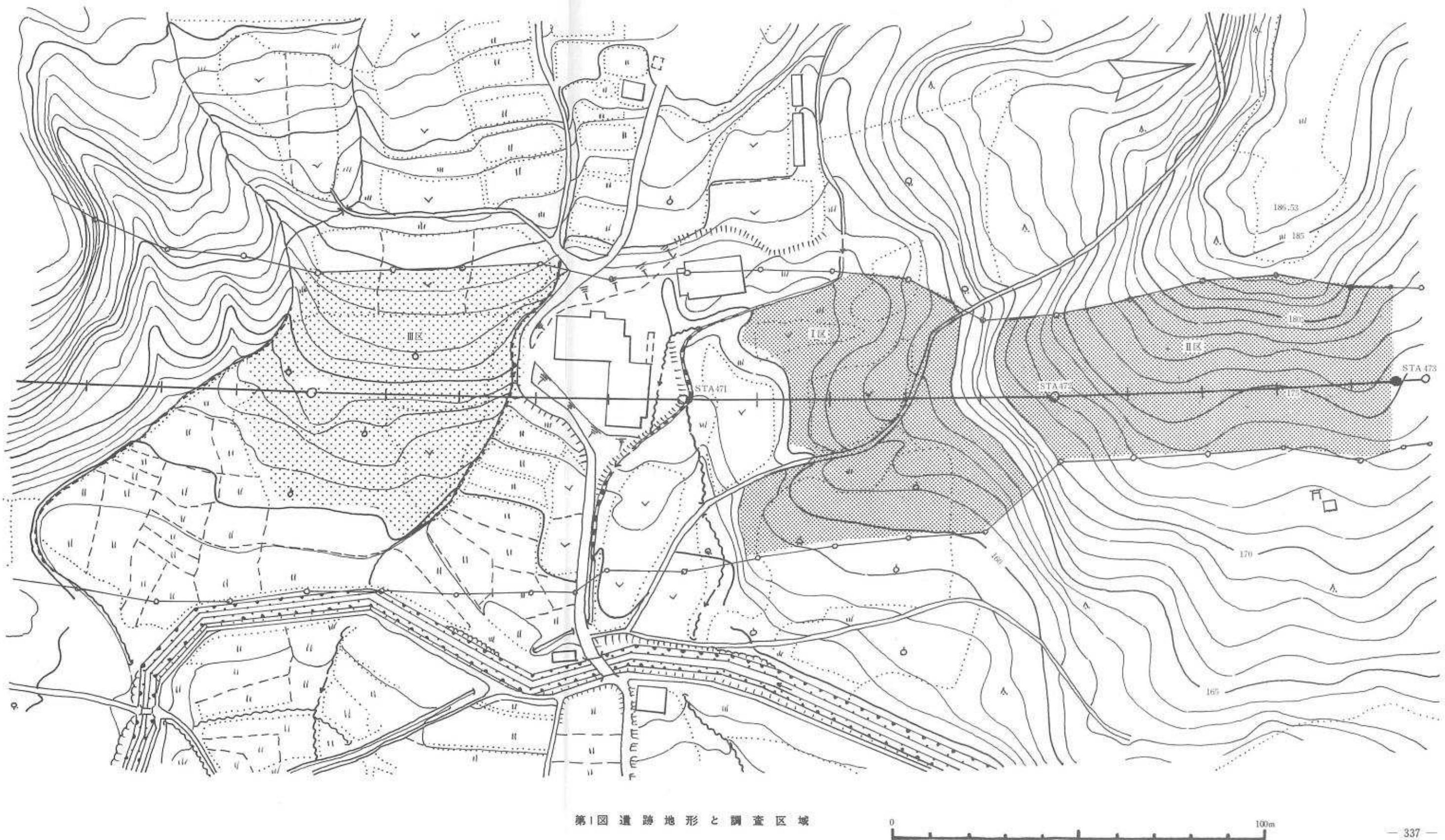
〔床・壁〕 床面は砂質で、しまりがなく凹凸がある。壁の遺存状況は不良で、北側で35cmの壁高を計るが、他は輪郭をとどめる程度である。

〔炉〕 床面中央近くに37cm×40cmの円形を呈する地床炉がある。

〔柱穴〕 壁沿いのP<sub>6</sub>・P<sub>9</sub>およびP<sub>4</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>10</sub>・P<sub>8</sub>などが配列から柱穴かとも考えられるが明確ではない。

ピット計測値(cm)

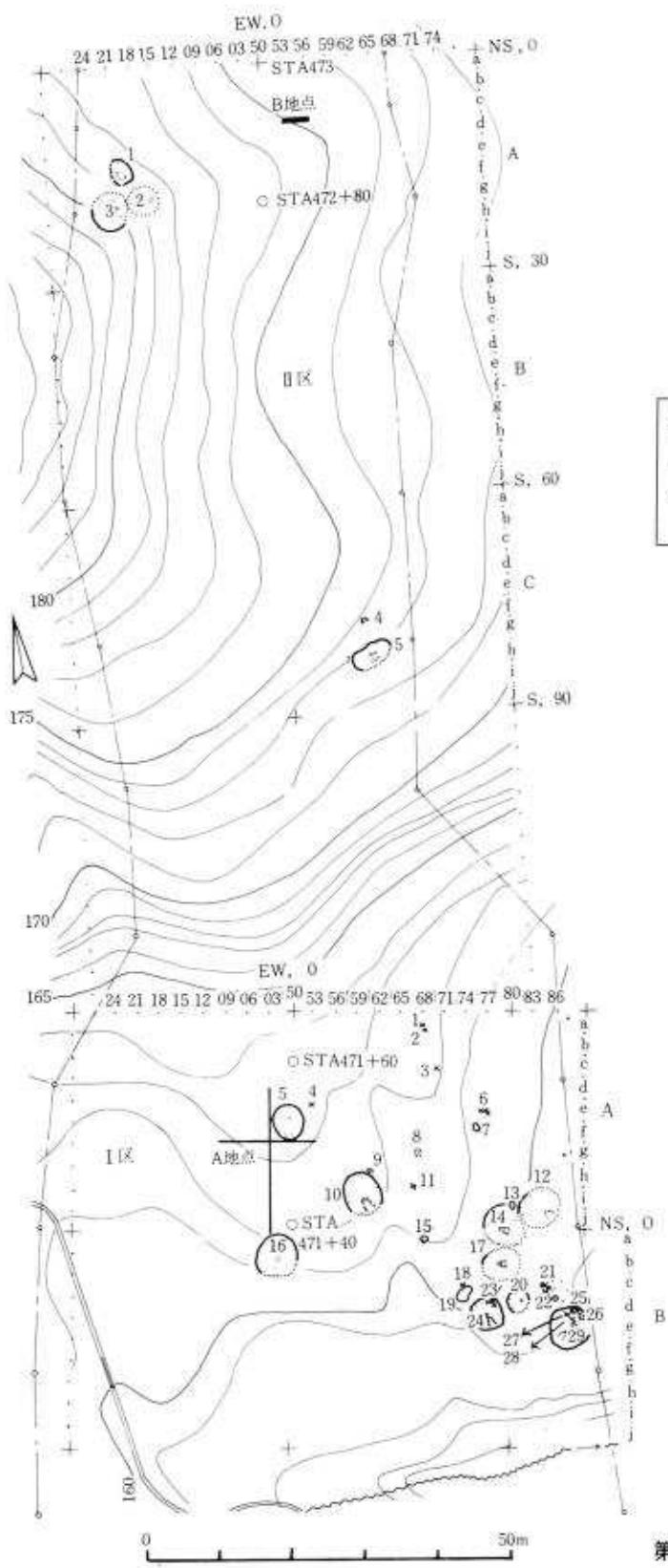
	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>
長径	37	28	41	63	98	26	80	53	40	40	20
深さ	17	23	17	20	38	64	30	21	18	22	10



第1図 遺跡地形と調査区域

0 100m

# — 大明神遺跡 —

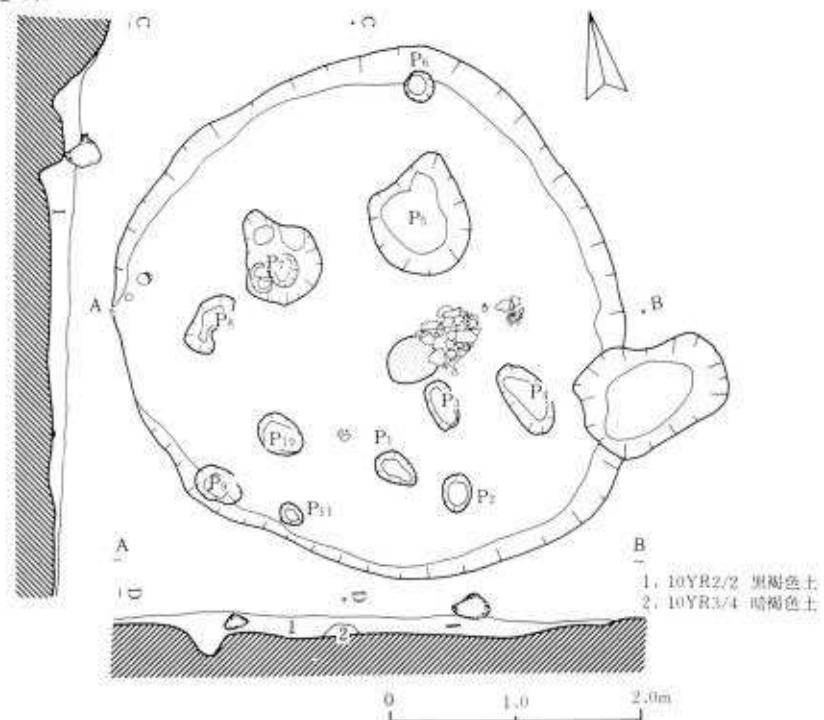


凡例  
 • コンターは現地表面で  
 • I区 基準線 STA471+40—STA471+60  
 • II区 基準線 STA473—STA472+80

- I区
- 1 I-1号埋設土器
  - 2 I-2号埋設土器
  - 3 I-3号埋設土器
  - 4 I-4号埋設土器
  - 5 I-1号住
  - 6 I-5号1~3号埋設土器
  - 7 I-1号土壤
  - 8 I-1号炉
  - 9 I-2号炉
  - 10 I-2号住
  - 11 I-6号埋設土器
  - 12 I-3号住
  - 13 I-2号土壤
  - 14 I-4号住
  - 15 I-3号土壤
  - 16 I-5号住
  - 17 I-6号住
  - 18 I-7号埋設土器
  - 19 I-4号土壤
  - 20 I-7号住
  - 21 I-8号1~5号埋設土器
  - 22 I-5号土壤
  - 23 I-9号1~3号埋設土器
  - 24 I-8号住
  - 25 I-10号埋設土器
  - 26 I-3号炉
  - 27 I-11号埋設土器
  - 28 I-12号1~2号埋設土器
  - 29 I-9号住
- A地点 包含層上層觀察

第2図 遺構配置図

— 大明神遺跡 —



第3図 I-1号 (Ae03) 住居跡

出土遺物 (第21・31図 図版18・31)

深鉢 (III群3類)・鉢 (III-4-b・III-3)・注口土器 (III-2-c)・盃形土器2個体 (III-4-a)・小形鉢 (III-2-c) の完形、復元土器と III群の破片が出土土器である。

石器には、石匙・不定形石器・石槍・石錘がある。なお ( ) 内は分類型式で以下同様に扱う。

I-2号 (Ah56) 住居跡 (第4図 図版2)

【規模・平面形】 径5.6m×6.4mの楕円状を呈する。

【埋土】 1層の黒褐色土は径1~5cmの礫と炭化物を含み埋土の大半である。東壁沿いに2層の黒褐色土が認められるが、1層より若干黒味が強い程度で土性と含有物には大差がない。

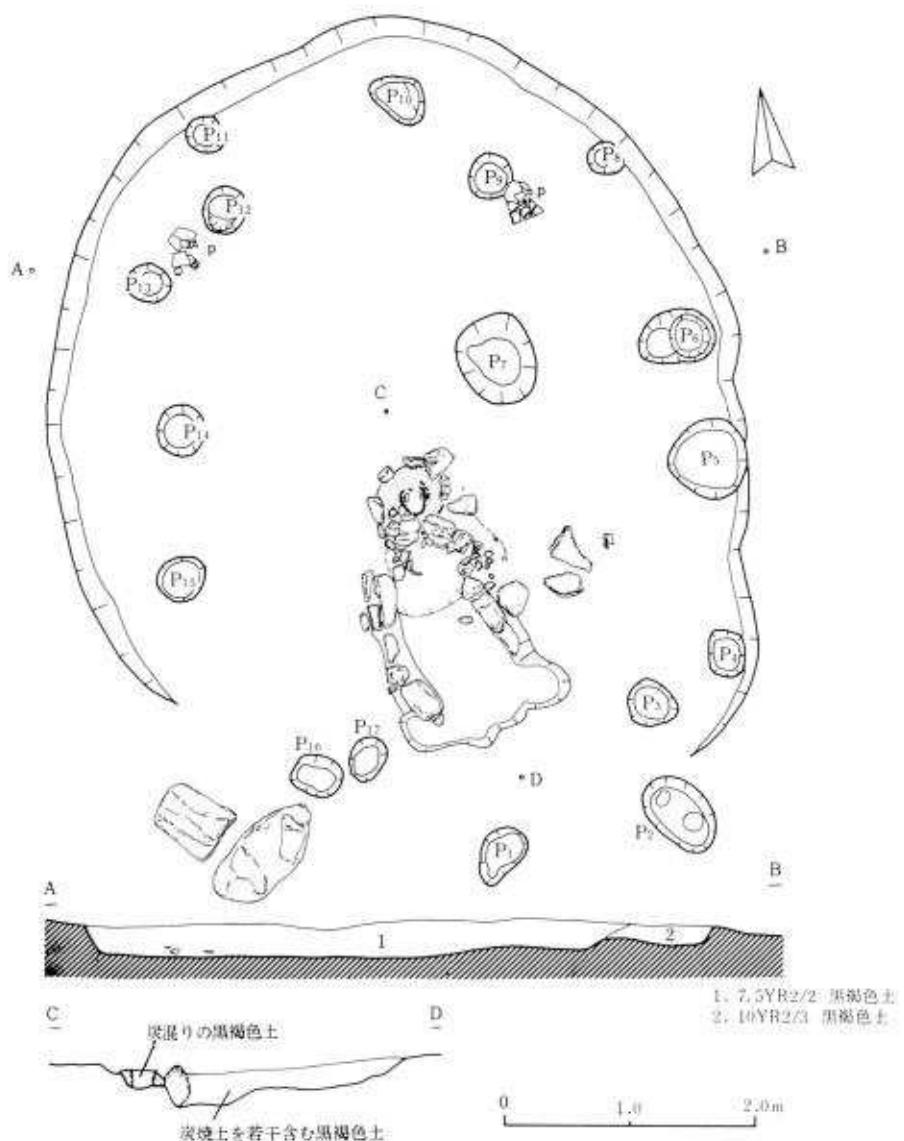
【床・壁】 床面は比較的堅くしまっており、東側にやや高くなる様相をもつが、全体的に平坦である。壁の遺存は南側を除き良く、やや外傾する立ち上がりであり壁高は約33cmである。

【炉】 複式炉をもち、住居跡中央部から南壁にかける。全長2.3m、土器埋設部幅0.65m、落ち込み部最大幅1.2mあり、主軸方向はN-8°-Wである。前庭部で18cm・燃焼部では更に7cmを床面から掘り込み、両壁は長径20~40cmの自然石により構築し、土器埋設部にも石囲いをもち、土器は縦位に埋設され周囲に焼土が認められた。

【柱穴】  $P_1 \sim P_{17}$ までのピットは、いずれも柱穴と考えられる。 $P_1 \cdot P_2$ は壁外に出るが、 $P_{16} \cdot P_{17}$ と $P_3 \cdot P_4$ との関連が考えられ、本住居跡に伴うものであり、これらと対称して $P_{10} \cdot P_{11} \cdot P_9 \cdot P_8$ と $P_{12} \cdot P_{13}$ があり、 $P_5 \cdot P_6$ と $P_{14} \cdot P_{15}$ も対称に配置されている。

ピット計測値 cm

	$P_1$	$P_2$	$P_3$	$P_4$	$P_5$	$P_6$	$P_7$	$P_8$	$P_9$	$P_{10}$	$P_{11}$	$P_{12}$	$P_{13}$	$P_{14}$	$P_{15}$	$P_{16}$	$P_{17}$
長径	49.5	68	40	40	64	26・36	83	30	36	48	30	38	35	40	38	40	35
深さ	14	28	21	23	33	18・30	41	20	58	19	31	14	53	21	52	17	13



第4図 I-2号 (Ah56) 住居跡

— 大明神遺跡 —

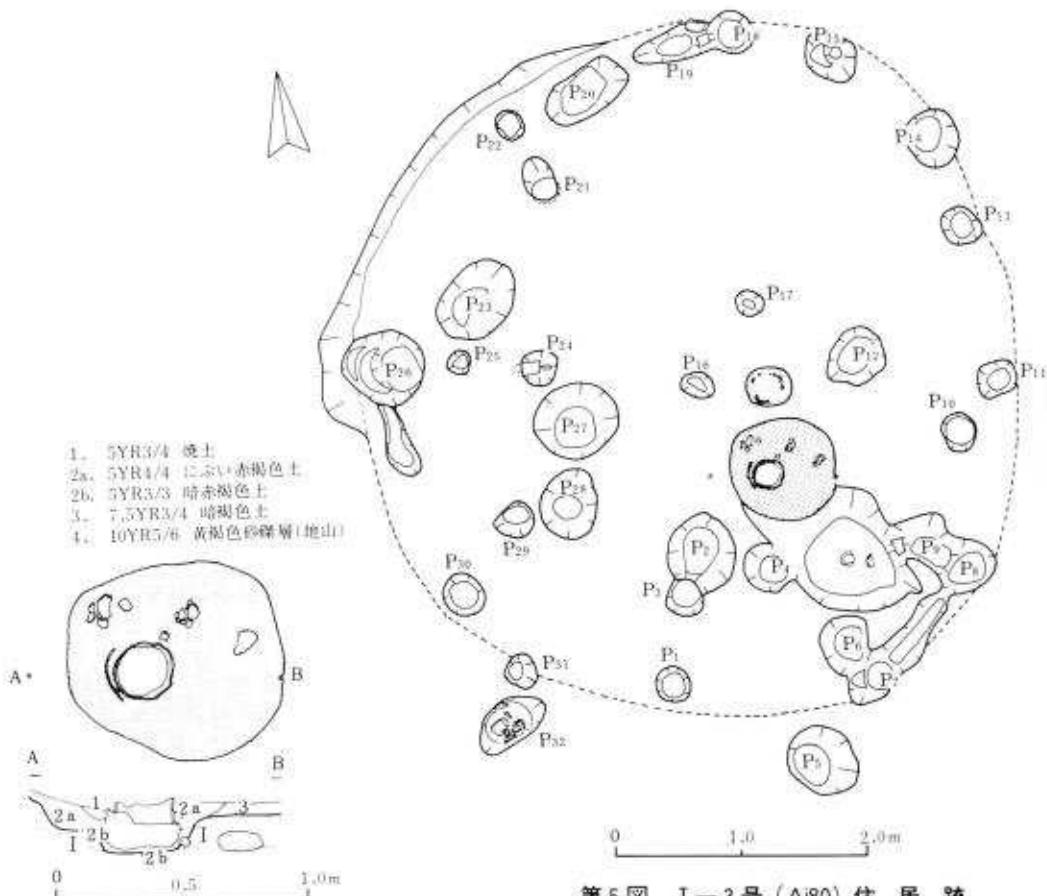
出土遺物 (第22図 図版19)

埋設の複節斜行縄文の深鉢 (V-4)、深鉢土器片 (II-3-b<sub>2</sub>) が出土し、石器には磨石、凹石、石匙がある。

I-3号 (Ai80) 住居跡 (第5図 図版3)

〔規模・平面形〕 推定径5.5mの円形平面形とみられる。

〔埋土〕 当初住居跡ではなく、埋設土器と誤認したため記録がなく不明である。



〔床・壁〕 床面は細い砂質土であるが、ほぼ平坦でしまりが良い。北西側壁を遺存するが、直に立ち18cmの壁高を計る。

〔炉〕 複式炉で、住居跡中央部から南東壁にかかる。全長2.3m、土器埋設部幅は焼土部分で0.85m、落ち込み部最大幅は0.85mある。主軸方向はN-32°-Wである。前庭部は床面との高差

差はなく、併列する  $P_5$ ・ $P_6$  と対称に  $P_7$ ・ $P_8$  が配置され、 $P_7$  と  $P_8$  を連結するように細い溝がある。燃焼部で床面から約 25~35cm を掘り込む、炉壁を構築する石組は認められない。土器埋設部の土器は 2 個体一組とし二重の構造をもつ縦位埋設で、外側に口・底部欠く土器（第22図・図版19）、内側に完形土器（第22図・図版19）をセットしたものである。

〔柱穴〕  $P_1$ ~ $P_{32}$  まで、総数 32 のビットを確認したが、床面中央から南半に不規則に存在するビットの性格は明らかでない。

壁沿い配置するビットは柱穴とみられる。これらと前記のビットの相互の関連も考えられるが課題としたい。なお  $P_5$ ・ $P_{32}$  は壁外に出る様相であるが、I-2 号住居跡にみられるように本住居跡との関連でみたい。

ビット計測値(cm)

	$P_1$	$P_2$	$P_3$	$P_4$	$P_5$	$P_6$	$P_7$	$P_8$	$P_9$	$P_{10}$	$P_{11}$	$P_{12}$	$P_{13}$	$P_{14}$	$P_{15}$	$P_{16}$
長径	29	55	28	41	61	50	40	55	47	32	35	47	32	47	41	25
深さ	48	13	66	40	26	54	37	26	42	38	45	26	17	30	38	12
	$P_{17}$	$P_{18}$	$P_{19}$	$P_{20}$	$P_{21}$	$P_{22}$	$P_{23}$	$P_{24}$	$P_{25}$	$P_{26}$	$P_{27}$	$P_{28}$	$P_{29}$	$P_{30}$	$P_{31}$	$P_{32}$
長径	21	36	52	63	27	25	72	30	20	66	69	58	32	34	27	60
深さ	17	60	21	32	60	58	28	39	22	68	28	29	39	63	21	23

## 出土遺物（第22・31図 図版19・31）

炉埋設土器の深鉢 2 個体（II-3-b<sub>2</sub>・V-4）と鉢形土器片（II-3-b<sub>2</sub>），石器は不定形石器 2 点と磨石が出土した。

## I-4号（Aj74）住居跡（第6図 図版4）

〔規模・平面形〕 径 6m ほどの楕円もしくは円形と推察されるが削平のため明確でない。

〔埋土〕 大別して 3 層よりなるが、1・2 層は黒褐色土で色調が若干異なり、1 層が粘性がやや強く、小豆大からこぶし大の礫は 2 層により多く含有する。いずれにしても礫の含有量が多い。3 層のにぶい褐色土は、黒色土と砂の混合土で礫を含んでいるが、遺存する壁沿いに認められる。

〔床・壁〕 床面は全体に砂質であり、北西の遺存する壁近くは比較的しまりがよく平坦である。炉近辺から東南には粗砂と礫が多く凹凸があり削平の可能性が強い。壁は北西に遺存するのみで、他は把握不可能の状況であった。遺存部分での壁高は 24cm を計り比較的直に立つ。壁沿いに幅 15cm、深さ 6~10cm の周溝状の溝が 1.8m の長さで認められた。

〔炉〕 複式炉で、住居跡中央にあって全長 1.5m、土器埋設部は幅 0.7m、落ちこみ部最大幅は 0.85m ある。主軸方向は N-46°-W である。燃焼部の掘り込みは床面から 15cm あり、土器埋設部、燃焼部とも自然石によって囲いを組んで構築していて、埋設土器は縦位である。

—大明神遺跡—

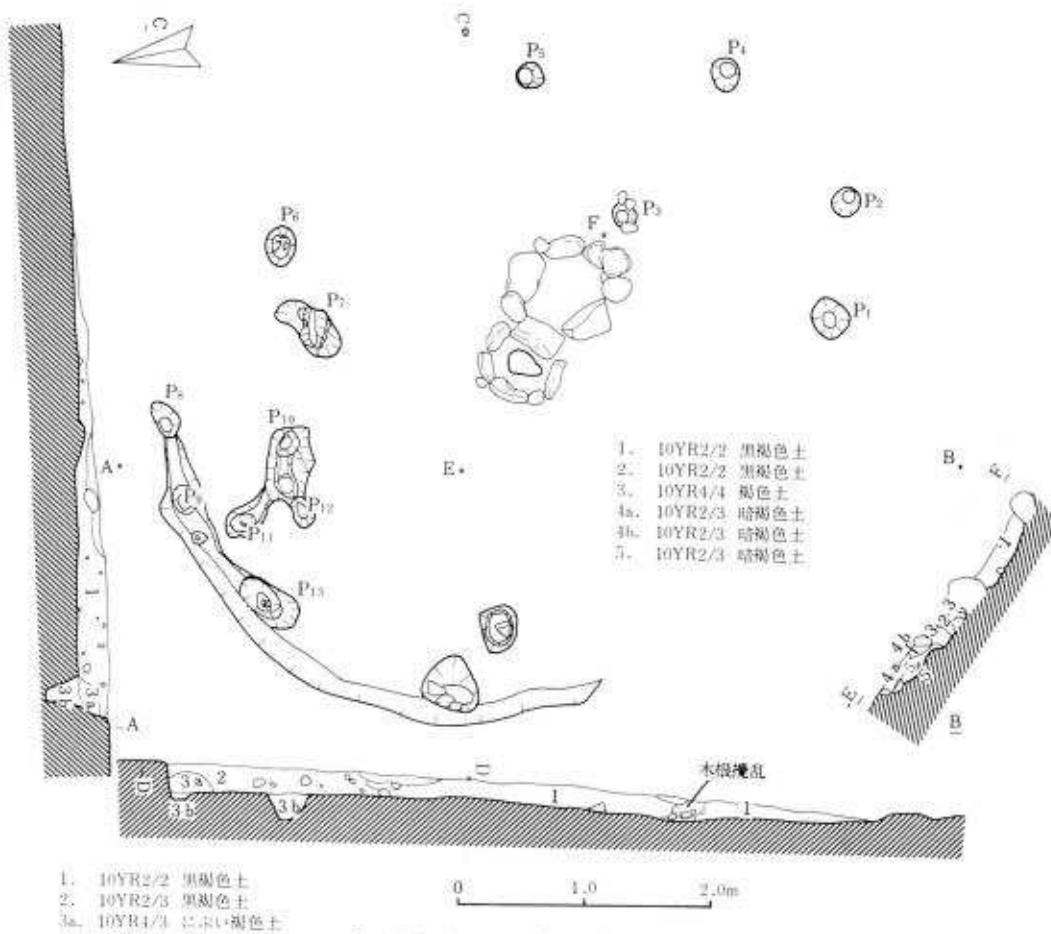
〔柱穴〕 P<sub>1</sub>～P<sub>15</sub>まであるが、P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>13</sub>・P<sub>15</sub>等は柱穴と考えられる。

ピット計測値(cm)

	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>	P <sub>13</sub>	P <sub>14</sub>	P <sub>15</sub>
長径	35	23	21	25	25	32	57	33	21	56	35	16	52	46	35
深さ	16	22	15	14	21	42	34	34	14	32	15	37	26	30	35

出土遺物（第22・31 図版19・31）

炉埋設深鉢（V-4）、鉢もしくは深鉢の口縁2片（V-1・1 V-2-b）、体部3片（VI-6・II-3-b<sub>2</sub>・II-3-b<sub>2</sub>）が出土し、石器の出土はない。



第6図 I-4号 (Aj74) 住居跡

I-5号 (Ba06) 住居跡（第7図 図版5）

〔規模・平面形〕 径5m×5.5mの円形に近いプランと考えられる。

〔埋土〕 I・II層はI区包含層のA地点に連続するもので、I層は黒褐色の耕作土、II層はA地点のIIa層に比定される黒色土の遺物包含層である。したがって住居跡の直接の埋土はIa・Ib層である。Ia層は黒褐色土に炭化物を極少含み、Ib層は黒褐色土に黄褐色土が粒状に混入しており、この層が埋土の主体である。

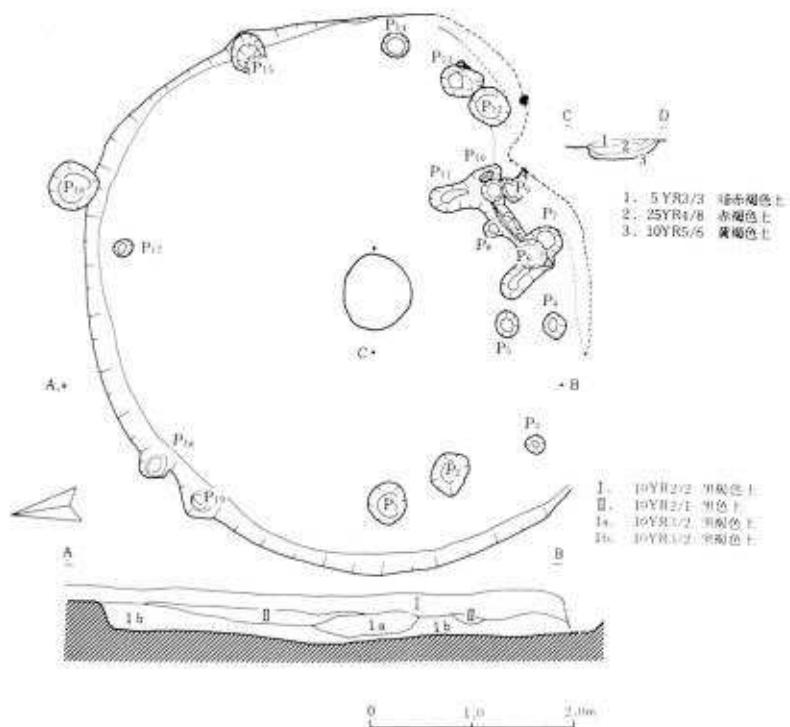
〔床・壁〕 床面は黄褐色の細い砂質土であるが、堅くしまり凹凸はあまりない。壁は南側で削平されているが比較的遺存状況は良く、壁高は24cmを計る。

〔炉〕 床面中央に径68cm×75cmの地床炉がある。断面観察によれば、上から暗赤褐色の黒色土混りの焼土、赤褐色焼土でボロボロし最も火熱をうけた層があり、若干焼けた黄褐色土が最下層の3層となるが、3層上面が火床であって、床面から約14cm皿状に掘り込んだ炉である。

〔柱穴〕 P<sub>1</sub>からP<sub>19</sub>まで認めるが、ほぼ壁沿いに柱穴が配置される。

ピット計測値(cm)

	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>	P <sub>13</sub>	P <sub>14</sub>	P <sub>15</sub>	P <sub>16</sub>	P <sub>17</sub>	P <sub>18</sub>	P <sub>19</sub>
長径	42	44	19	27	26	31	34	19	23	24	38	41	30	27	40	48	20	24	21
深さ	15	19	12	21	17	11	23	14	27	26	20	26	20	9	25	25	7	25	11



第7図 I-5号(Ba06)住居跡

## — 大明神遺跡 —

〔その他の施設〕 炉の南、推定南壁に沿うように、併列するP<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>と対称にP<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>があり、これを結ぶ0.7mの細い溝が走る。更にP<sub>6</sub>・P<sub>10</sub>から北に0.5mほどの溝が出て、全体がH字状を呈する施設があり、卯遠坂遺跡（東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書—I—）の縄文後期住居跡にみられるような入口かとも推察される。

出土遺物（第22・31図 図版19・31）

孟形の小形土器（Ⅲ-4-a）、鉢形土器口縁部（Ⅲ-2-c）、胸部（Ⅲ-3）破片、石簇、石窓状石器が各1点出土した。

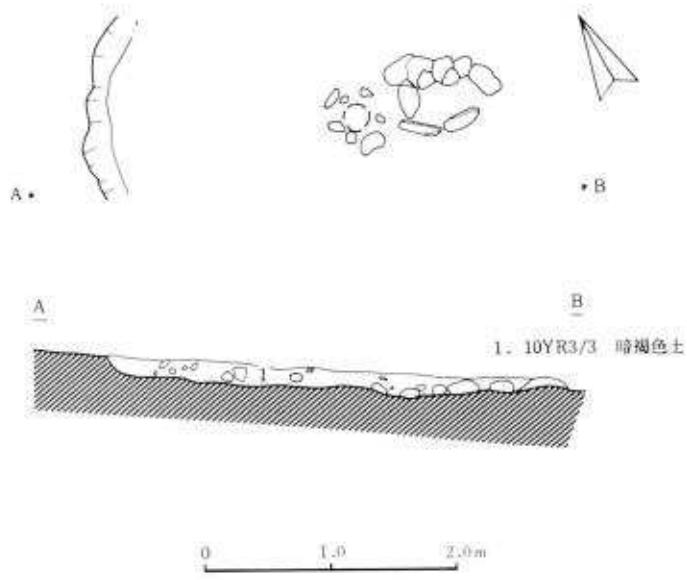
### I-6号（Bb74）住居跡（第8図 図版5）

〔規模・平面形〕 わずかに遺存する壁と炉跡から住居跡と判明したが、規模と平面形は不明。

〔埋土〕 ほぼ1層からなり、黒色土と砂混りの暗褐色土に小礫から径20cm大の礫を含み非常に堅く遺物と極少の炭化物を含む。

〔床・壁〕 埋土下は径20cm以上の礫が集積し、炉跡も埋没した状況にあった。礫下はザラザラした砂地で本来の床面としての確証はない。わずかに遺存する壁は15cmの高さを計る。

〔炉〕 複式炉で、住居での位置は確定できない。全長1.5m、土器埋設部幅は0.5m、燃焼部最大幅は0.6mあり、主軸方向はN-60°-Wである。燃焼部の掘り込みは、現状の床とされる面



第8図 I-6号（Bb74）住居跡

から7cmほどである。土器埋設部、燃焼部とも自然石によって囲いを組んだものであるが、現状は不規則な並びであり、炉の土器は縦位の埋設である。

〔柱穴〕 検出できない。

出土遺物（第22・31図 図版19・31）

炉埋設深鉢（II-3-b<sub>2</sub>）、鉢の体部破片（II-3-b<sub>2</sub>）が出土した。

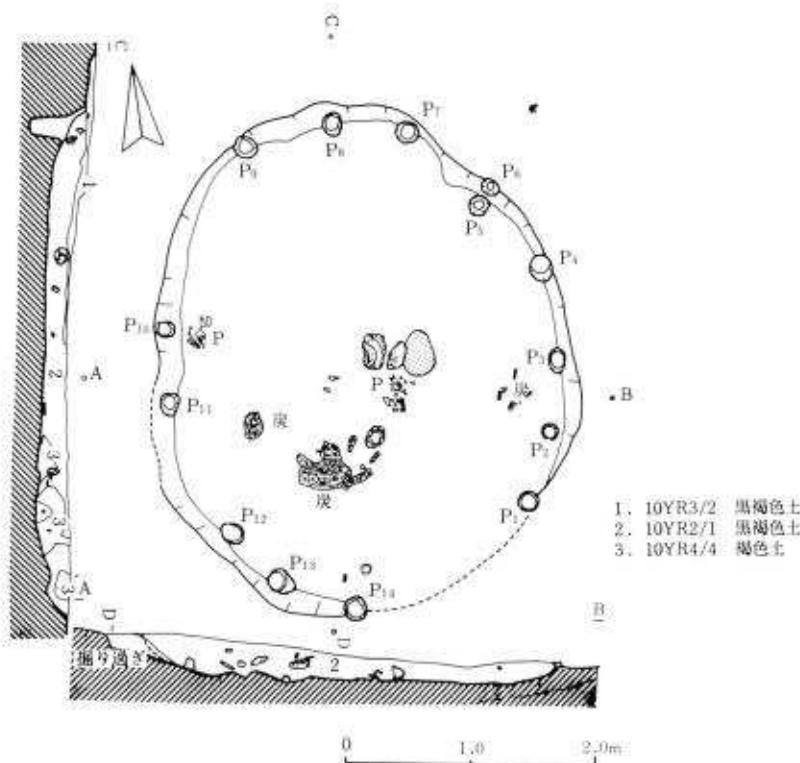
I-7号（Bc80）住居跡（第9図 図版6）

〔規模・平面形〕 径3.3m×4.1mの楕円形である。

〔埋土〕 1層の黒褐色土は小豆大の礫を含み薄い広がりをもち、2層はこぶし大の礫と炭化物を含む黒褐色土で全面に広がり床面まで達する埋土の主体である。3層は黄褐色土で木根等の搅乱によるものである。

〔床・壁〕 床面は砂礫で堅く、ほぼ平坦である。壁はゆるい傾斜をもち、26cmの壁高を計る。

〔炉〕 床面の中央よりやや東寄りに径24cm×36cmの火焼部分があり、焼土の堆積は少ないが地床炉と考えられ、近くには炭が認められた。



第9図 I-7号（Bc80）住居跡

— 大明神遺跡 —

【柱穴】  $P_1 \sim P_{14}$  が壁沿いに規則的に検出された。 $P_1 \cdot P_{14}, P_{11} \cdot P_{12}, P_9 \cdot P_{10}$  を除き、柱穴間は 60~70cm である。柱穴埋土は暗褐色土の単一層でサクサクし、しまりに乏しい。

ピット計測値(cm)

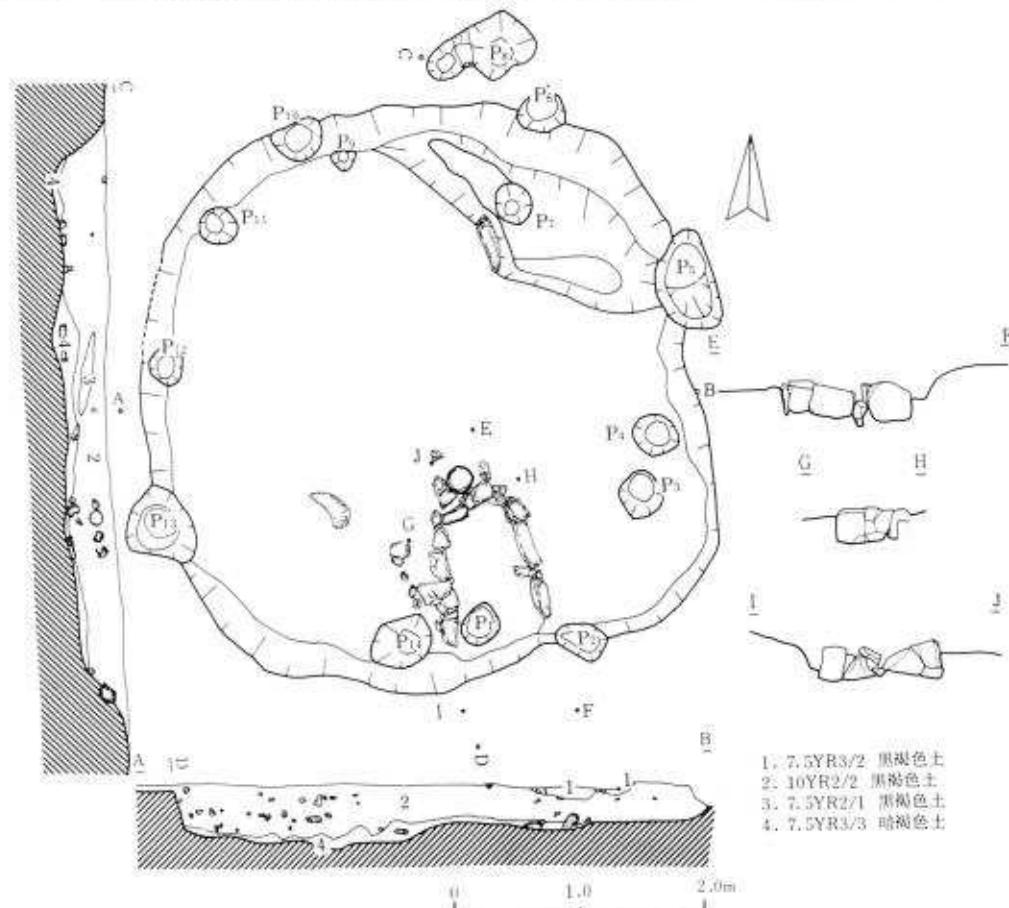
	$P_1$	$P_2$	$P_3$	$P_4$	$P_5$	$P_6$	$P_7$	$P_8$	$P_9$	$P_{10}$	$P_{11}$	$P_{12}$	$P_{13}$	$P_{14}$
長径	17	13	20	20	18	14	20	19	19	13	17	20	23	19
深さ	20	11	15	23	9	15	44	32	33	26	22	17	38	29

出土遺物 (第23・31図 図版19・31)

キャリバー形の鉢 (II-2)、鉢の口縁破片 5 点 (II-2)、銅破片 1 点 (II-2)、不定形石器 2 点、石匙 1 点が出土した。

I-8号 (Bd74) 住居跡 (第10図 図版7)

〔重複〕 本住居跡の埋没後、北東付近の埋土上に 9号埋設土器 1~3 が埋設してある。



第10図 I-8号 (Bd74) 住居跡

〔規模・平面形〕 4.5m×4.7mの隅丸方形に近い形状である。

〔埋土〕 1層の黒褐色土は部分的なもので、2層は大豆大の礫を全般に、径5~10cm大の礫を多く含む黒褐色土で埋土の大半である。最下層の4層は黑色土と黄褐色土の混土で径3cm前後の礫を含む。

〔床・壁〕 床は砂礫面で堅いが、や・凹凸がある。北東壁寄りに床面より10cmほどの落ちこみをもつが性格は不明である。壁は東側で攪乱された部分もあるが、遺存は比較的良くや・外傾する立ち上がりで、壁高は35cmある。

〔炉〕 複式炉で住居跡中央や、南から南東壁にかかる。全長1.5m、土器埋設部幅は0.5mで、落ちこみ燃焼部と前庭部の最大幅は0.8mある。主軸方向はN-19°-Wである。前庭・燃焼部の掘り込みは床面より25cmほどで、壁に向って若干ひくくなる。炉壁は長径15~30cmの自然石で構築し、土器埋設部も石囲いが認められるが、北側が欠損している。土器は縦位の埋設である。

〔柱穴〕 P<sub>1</sub>~P<sub>14</sub>まで壁沿いに比較的整った配置で検出されたが、P<sub>8</sub>については本住居跡との関連は明確ではない。

ピット計測値(cm)

	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>	P <sub>13</sub>	P <sub>14</sub>
長 程	35	40	38	38	47	37	30	53	20	47	30	35	54	46
深 さ	13	29	31	25	58	42	32	68	13	46	30	43	67	44

#### 出土遺物 (第23・31図 図版19・31)

炉埋設の鉢形土器(II-3-b<sub>2</sub>)、鉢形土器胴部破片3点(II-3-c・II-3-b<sub>2</sub>・II-3-b<sub>2</sub>)の出土がある。

#### I-9号(Bd86)住居跡 (第11図 図版8)

〔重複〕 I-10号、I-11号、I-12号1~2の各埋設土器、I-3号炉跡は本住居跡の埋土上面に施設されており、ここに1期もしくはそれ以上の生活面が推定される。

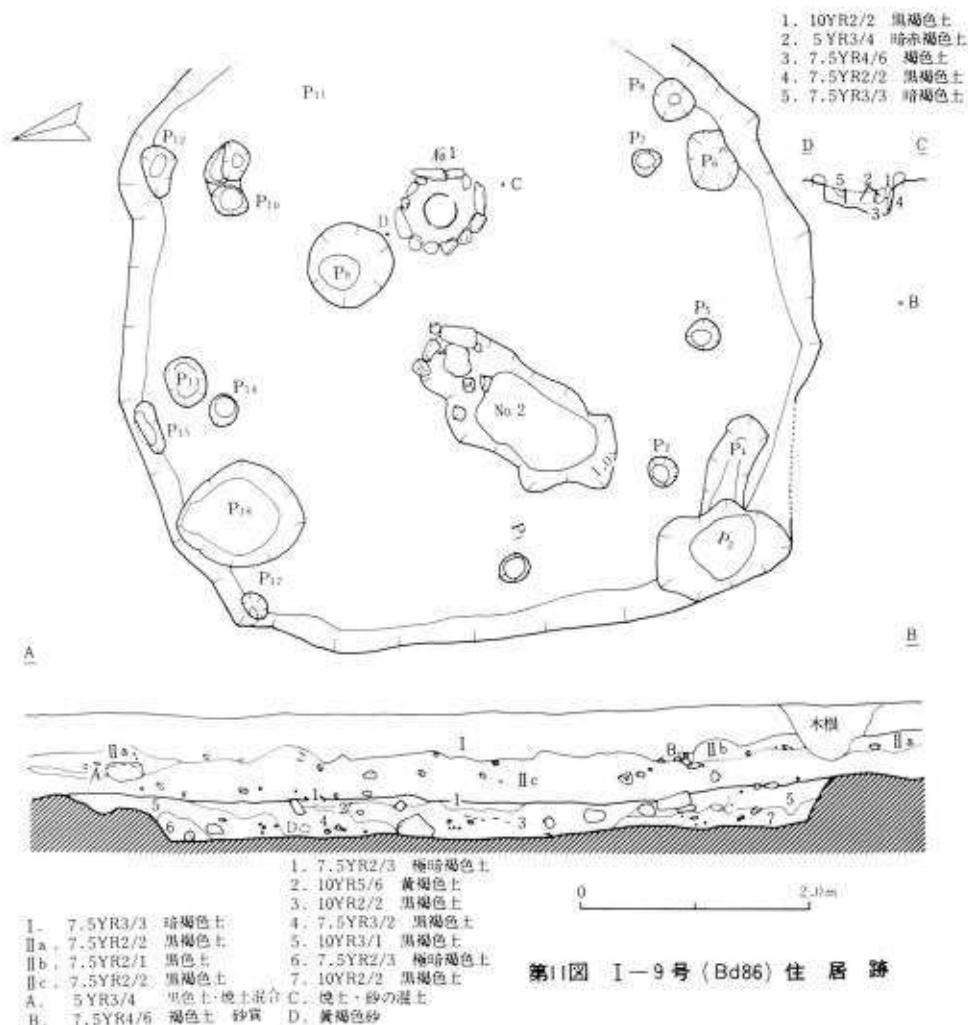
〔規模・平面形〕 東側一部分が調査区外になるが、径5.3m?×6.2mの隅丸方形に近い形状とみて、ほぼ誤りないものである。

〔埋土〕 I・II層は本住居跡の直接的埋土ではない。I層は0.1~5cm大の礫と遺物を若干含んだ暗褐色の表土、II層は再堆積で砂混りの黒褐色土で、全般に小豆大から頭大の礫を含むa、b・cと細分し、aは遺物、焼土、炭を認めない。bもaと同じであるが含む礫が小さいcは遺物、焼土、炭を若干含むとしたが基本的には差違がない。なおAのように焼土と黒色土の混土、Bの褐色の砂が層中に入る。

II層下が本住居跡の直接の埋土で、上面に前述の埋設土器および炉が施設されていて堅い。

— 大明神遺跡 —

1層の極暗褐色土は焼土と黒色土が攪乱状に混り炭を多量に含み、埋土上の生活面に関連するもので、2層の黄褐色土も同様とみられる。3層は埋土中央に摺鉢状に入り床面まで達する黒褐色土で、粒状の黄褐色土を全般に含み、最も遺物を包含し、しかも深鉢形の完形もしくは復元実測可能土器が多いことは、土器の廃棄と相俟って短期間に埋没した層と思われ、後述する炉の廃棄状況との関連も考えられる。4層は黒色土に焼土が多量に混る黒褐色土、5層の黒褐色土中には若干の炭と粒状の黄褐色土を含み、6層は黒色土に黄褐色土が混合する極暗褐色土で、焼土塊を含む、7層は砂混りの黒褐色土で炭を若干含む。各層に共通することは礫を多く



含み、混入する黄褐色土は砂質であることである。

〔床・壁〕 床面は砂礫で堅く比較的平坦である。壁は、南西側に一部木根攪乱と北側一部に崩落を認めるが、遺存状況は良くや、外傾して立ち、壁高は50cmを計る。

第II図 I-9号 (Bd86) 住居跡

〔炉〕 No.1とした石囲い炉と、No.2とした複式炉かと推察したものがある。石囲い炉は径0.75mの円形で、床面を20cm程度掘り下げ中央に土器を埋設し、炉縁を長径15~25cmの自然石で囲み構築する。検出当初は石囲い内に埋設土器を覆うように深鉢（第23図-19）が横体に潰れていた。自然なのか人為的か判断できないが、人為的なものとすれば住居跡発見との関連を考えられる。複式炉かと推察したものは、全長2m、最大幅0.95mあり、掘り込みは床面から17~24cmあり埋土は黒褐色土にブロック状の焼土と若干の炭を含む、底は特に火熱をうけた痕跡はみられない。北東端に自然石が集積し薄い焼土と炭が観察されたが埋設土器はない。なお石囲い炉と同様に、集積部分は深鉢（第23図-16）の破片で覆われていた。形状と埋土および集積部分の石囲い的様相と、わずかながら焼土と炭の遺存から複式炉かと推察したが疑問を残す。

〔柱穴〕 P<sub>1</sub>~P<sub>17</sub>とあるが、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は木根擾乱である。P<sub>9</sub>は黒褐色土に焼土ブロックを全般に含む埋土をもち比較的浅く柱穴以外の用途をもつもので、P<sub>16</sub>も同様にみられる。

P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>10</sub>・P<sub>14</sub>が深さと配置から主柱穴で、他は支柱穴と考えられ、P<sub>15</sub>・P<sub>17</sub>は斜めに入っている。

ピット計測値(cm)

	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>	P <sub>13</sub>	P <sub>14</sub>	P <sub>15</sub>	P <sub>16</sub>	P <sub>17</sub>
長径	29	26	—	—	28	57	24	36	76	27	38	44	44	27	48	100	26
深さ	59	43	—	—	78	69	78	13	15	76	49	54	17	69	50	19	46

## 出土遺物（第23図 図版20）

深鉢3個体（V-2-a）と小形鉢（V-3）1個体が出土した。深鉢は埋土中の3層を中心に出土した深鉢と形態・技法上類似するものもある。凹石、石皿2点、不定形石器2点、石錐1点、磨石1点が床面から出土した。なお埋土中から不定形石器5点、円盤状石器1点、磨石3点、石錐1点がある。

## II-1号1(Ae21)・I号2住居跡（第12図 図版9）

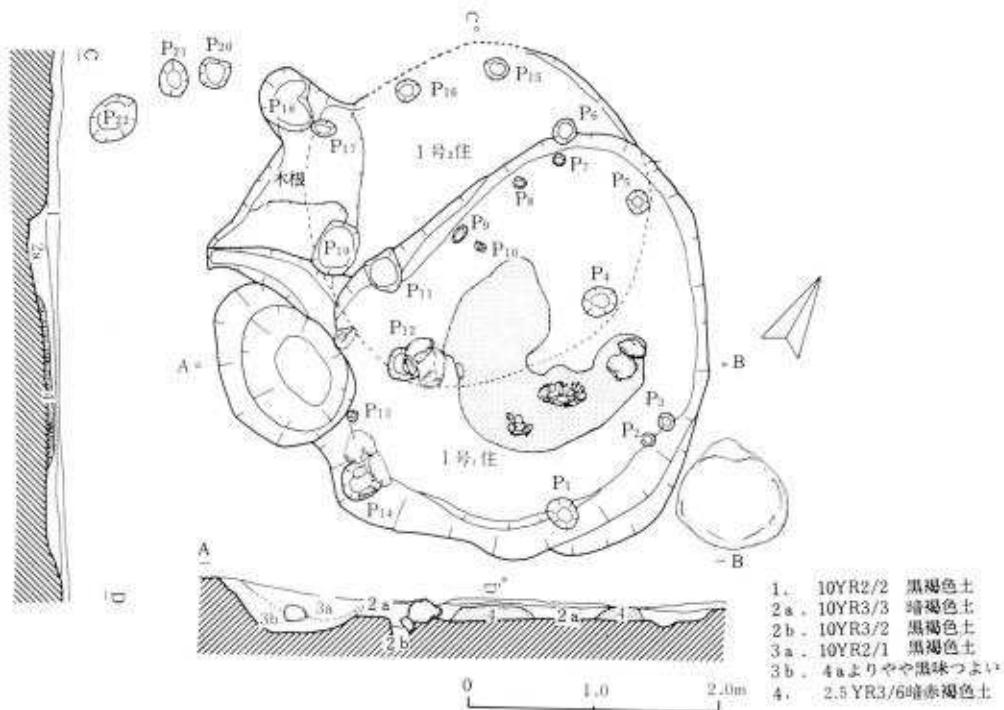
〔重複〕 柱穴の配列と西側の段差からII-1号1住と1号2住の重複を推察した。両住居跡の新旧関係は明確でない。

〔規模・平面形〕 1号1住、3.0m×3.5mの梢円形と推察する、1号2住、2.8m×2.8mの円形と推察する。両住居跡とも西側を木根による擾乱を大きくうけている。

〔埋土〕 1層は黒褐色土で遺構検出面上に広がる腐植土であり、両住居跡を覆っていて1号2住はこの層のみである。1号1住は2a・2bの暗褐色・黒褐色の遺物を包含する層をもつ。4a・b層は木根擾乱に腐植土の堆積した黒褐色土である。

〔床・壁〕 両住居跡とも床面は礫を含む黄褐色粘質土で比較的平坦で1号1住が15cmほど低

— 大明神遺跡 —



第12図 II-1号(Ae21)・1号2住居跡

い。1号1住で壁が遺存するが削平などで状況は良くない。西側遺存部で15cmの壁高を計る。1号2住ではほとんど遺存しない。

(炉) 1号1住の中央に弧状の広い焼土堆積があり、一部現地火熱が認められることから炉跡と考える。1号2住には認められない。

(柱穴) 両住居跨合せてP<sub>1</sub>～P<sub>22</sub>となるが、P<sub>20</sub>～P<sub>22</sub>は位置的に関連は考えられず、P<sub>18</sub>は木根である。1号1住に関連しP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>・P<sub>7</sub>～P<sub>11</sub>・P<sub>13</sub>・P<sub>14</sub>がみられるが、非常に小さいものが多く疑問が残る。1号2住はP<sub>4</sub>～P<sub>6</sub>・P<sub>15</sub>～P<sub>19</sub>・P<sub>12</sub>を柱穴とみると、P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>12</sub>の検出面が埋土2層面上か下かの観察がなく、新旧関係を知り得ない。

ピット計測値(cm)

	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>	P <sub>13</sub>	P <sub>14</sub>	P <sub>15</sub>	P <sub>16</sub>	P <sub>17</sub>	P <sub>18</sub>	P <sub>19</sub>
長径	27	12	14	27	19	21	10	11	8	16	34	27	9	26	20	18	20	43	
深さ	20	12	6	17	17	18	7	6	11	4	43	17	9	42	14	11	10	28	

出土遺物 (第24・31図 図版20・32)

1号1住のみからの出土で、口縁部を欠く深鉢(Ⅰ-4)、鉢形土器口縁片1点(Ⅵ-1)、胸部片3点(Ⅵ-1)、不定形石器、磨石各1点がある。

## II-2号 (Af18) 住居跡 (第13図)

〔規模・平面形〕 径3.5m×4.0m規模の楕円状が推察される。

〔埋土〕 1層、黒褐色土で、前項の住居跡を覆うた腐植土と同じであり、2層は暗褐色の粘質土である。

〔床・壁〕 床面は礫を含む黄褐色粘質土でほぼ平坦であり、壁はほとんど遺存しない。

〔炉〕 住居跡東寄りに現地火焼の焼土があり46cm×47cmの広がりをもち、炉跡と考えられる2個の自然石と炉跡との関連は明確でない。

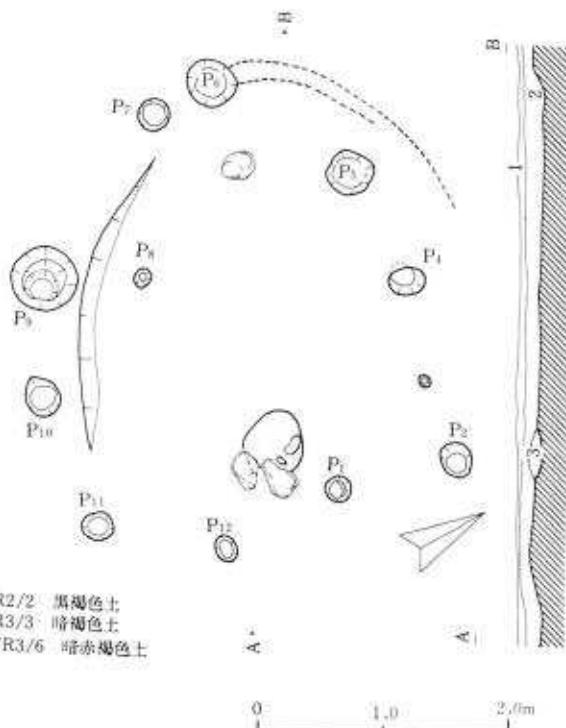
〔柱穴〕 P<sub>1</sub>～P<sub>22</sub>を検出した。配置と深さからP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>8</sub>～P<sub>22</sub>の柱穴がみられる。

ピット計測値(cm)

	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>
長径	22	29	11	29	39	39	26	16	53	34	25	22
深さ	48	20	15	21	36	58	9	31	66	42	28	22

## 出土遺物 (第31図 図版32)

鉢形土器胴部破片3点(VI-3・I-3-b・I-4)、石錐、不定形石器各1点が出土した。



第13図 II-2号 (Af18) 住居跡

— 大明神遺跡 —

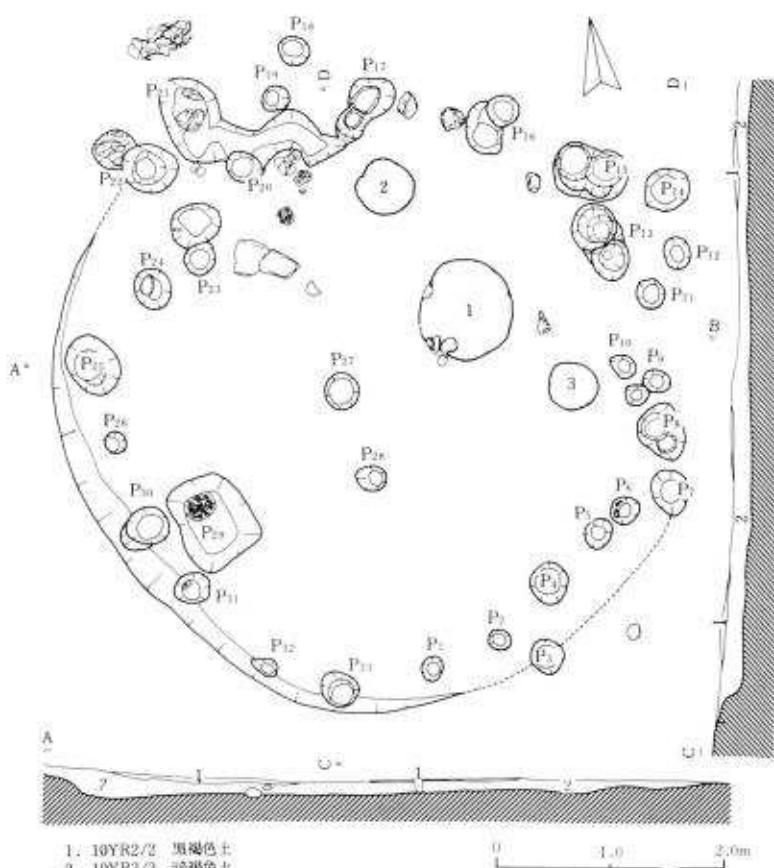
II-3号(Af24)住居跡(第14図 図版9)

〔規模・平面形〕 径5.5m×5.5m規模の円形と推察される。

〔埋土〕 1層は黒褐色の腐植土で、前項の住居跡の1層と同じである。2層の暗褐色土は遺物と炭化物を含む。

〔床・壁〕 床面は礫を含む黄褐色粘質土でほぼ平坦である。壁の遺存は南西部のみで状況は良くない。遺存部分の壁高は14cmである。

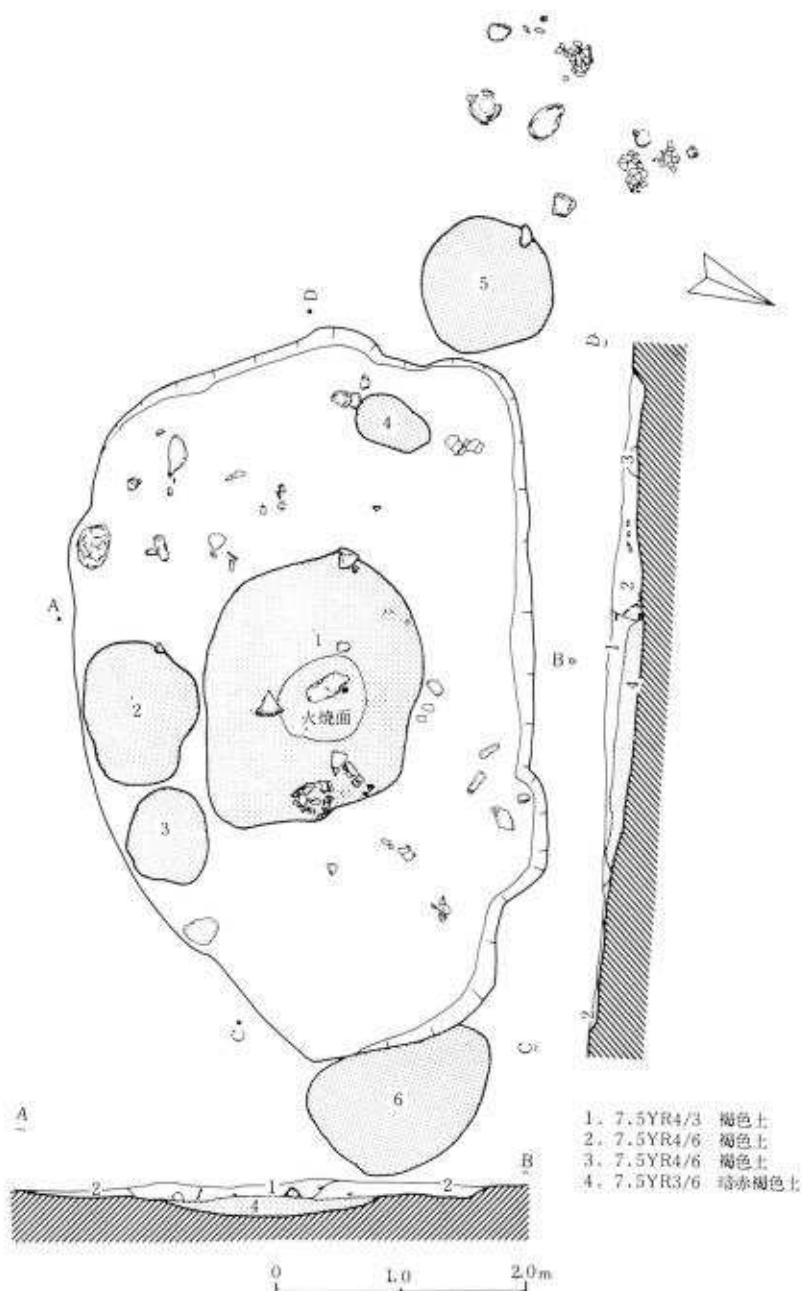
〔炉〕 現地火焼の焼土が3個所確認された。いずれも床面北東寄りで、1は径82cm×88cm、2



第14図 II-3号(Af24)住居跡

は50cm×51cm、3は43cm×43cmの円形で焼土堆積はほとんどない。いずれも地床炉とみられるが、使用の前後関係は不明である。

〔柱穴〕 P<sub>1</sub>～P<sub>33</sub>の多数のビットが確認された。配置と深さから選択するとP<sub>4</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>14</sub>・P<sub>17</sub>・P<sub>22</sub>・P<sub>25</sub>・P<sub>31</sub>・P<sub>33</sub>がほぼ等間になり、その間に他の柱穴が配される様相である。



第15図 II-4号 (Cg56) 住居跡

— 大明神遺跡 —

ピット計測値(cm)

	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>	P <sub>13</sub>	P <sub>14</sub>	P <sub>15</sub>	P <sub>16</sub>	P <sub>17</sub>
長 案	23	20	31	34	27	23	40	40	20	18	27	28	39	39	46	36	40
深 さ	20	14	17	50	17	18	10	29	13	12	5	7	54	64	45	28	24
	P <sub>18</sub>	P <sub>19</sub>	P <sub>20</sub>	P <sub>21</sub>	P <sub>22</sub>	P <sub>23</sub>	P <sub>24</sub>	P <sub>25</sub>	P <sub>26</sub>	P <sub>27</sub>	P <sub>28</sub>	P <sub>29</sub>	P <sub>30</sub>	P <sub>31</sub>	P <sub>32</sub>	P <sub>33</sub>	
長 案	26	24	33	60	48	25	38	53	19	33	27	79	36	31	25	35	
深 さ	16	21	24	25	38	17	24	73	17	51	22	31	25	49	5	42	

\*二双数のピットは深い方のみを記載した。

〔その他の施設〕 P<sub>29</sub>は縦66cm、横79cm深さ31cmといわゆる柱穴状ピットとは異なる。底に粉炭を認める。性格は不明である。

出土遺物（第24・32図 図版21・32）

深鉢2個体（I-2-a<sub>2</sub>・V-2-a）、口縁破片3点（I-2-b・I-3-a・I-3-b）

石匙1点、石籠状石器1点、不定形石器4点、石鎌1点、磨石4点が出土した。

II-4号（Cg56）住居跡（第15図 図版10）

柱穴が検出されず住居跡としての条件を備えない面もあるが、中央に現地火焼があり炉跡としての側面をもつことと、掘り込んでいることから住居跡としたが、他の性格も考えられ吟味する要のあることを付す。

〔規模・平面形〕 4m×5.7mの不整形であるが方形に近い形状も推察できる。

〔埋土〕 1層、黒色土に黄褐色土が混る褐色土で炭化物と土器の細片を含む、2層は1層よりも黄褐色土の混りが多く、3層では焼土のブロックを含む、4層は焼土の堆積層で遺物を含んでいる。

〔床・壁〕 床面は黄褐色粘質土で非常に堅く凹凸が少ない。壁は南側がほとんど削平されているが、北と西側は遺存し高い部分で壁高18cmである。

〔炉〕 内部に1~4の焼土を認めたが、1は床面を皿状に15cmほど掘り凹めた部分に堆積する焼土で径1.7m×2mの広がりと15cmの厚さをもつ。土器の混入があり上で黑色土との攪乱がある。下はバサバサした焼土になり掘り込みの底に径70cmほどの現地火熱部分があり炉跡とみた。2は0.95m×1.15m、3は0.65m×0.78m、4は0.4m×0.6mの広がりをもち、いずれも厚さはほとんどなく現地火熱も認められない。外にある5は1.08m×1.1m、6は1.0m×1.5mで薄い堆積であり現地火熱はなく、6は住居跡に切られている。以上から2~6は炉跡とはならない。

〔柱穴〕 確認できない。

出土遺物（第24・32図 図版21・32）

深鉢1個体（I-3-b）と鉢形土器胴部破片（VI-3）、口縁部破片（I-3-b）等の土

器片、不定形石器1点、石皿1点が出土した。

### (2) 爐 跡

#### I-1号 (Ag65) 爐跡 (第16図 図版1)

径0.8mの円形が推察される石囲い炉であり、燃焼部分を若干掘り込み周囲に10~20cm前後の自然石を並べたもので、東半の石は欠損している。断面観察では焼土と黒色土が攪乱し径2~3cmの礫を含み、底も強い火焼痕が認められない。周囲からピット9個が検出されたが住居跡としては確認されなかった。

#### I-2号 (Ah59) 爐跡 (第16図)

I-2号住の北東に隣接して検出された。0.65×0.7mの範囲に不整形に広がる厚さ20cmの焼土に黒褐色土、黄褐色土などが入り混った状況が、10~15cmの掘り込みの中にみられる。掘り込みの底に現地火熱が認められることから炉跡とした。西側に長径15~35cmの偏平に近い礫群を認めるが炉跡との関連は不明である。

#### I-3号 (Bd89) 爐跡 (第16図 図版10)

I-9号住埋土上面に施設された石囲い炉である。南東のが縁石は欠損しているが、径0.65mほどの円形と推察される。20cmほどの掘り込みに焼土と黒色土が豆大の礫を含んで混在する。北西に隣接して、径15cmほどの数個の礫を認めるが関連は不明である。

#### II-1号 (Cf59) 爐跡 (第16図 図版11)

II-4住北近くで検出された石囲い炉である。径0.7m内外の円形と推察され、5cmほどの深さに皿状の掘り込みに暗褐色の焼土が認められる。炉縁石は径15~30cmの自然石を用いているが間隙の多い並びであり南側は欠損する。

### (3) 埋設土器

埋設土器はI区に22個体分の検出をみた。一部割愛するが以下概要を述べる。

#### I-1号 (Aa68) 埋設土器 (第16・25図 図版21)

縦位に埋設した粗製深鉢 (V-2-b) で、潰れて細片状で検出された、土器は周囲に散乱

## — 大明神遺跡 —

した一括片も接合することから、表土除去時に上面を削平された可能性が強い。木葉圧痕をもつ底部を残す。周辺は砂礫で掘り込み状況はよく確認できず焼土等はない。

### I-2号 (Ab68) 埋設土器 (第16・25図 図版21)

縦位に埋設した粗製深鉢 (V-2-b) で底部を残す。状況は1号と同様である。

### I-3号 (Ac68) 埋設土器 (第16図 図版13)

縦位に埋設した粗製深鉢で (V-2-b)、胴以下を意図的に接断したとみられ底部と口縁部を欠く現高は11cm、径25cmを計る。径80cm、深さ25cmの掘り込みがあり、黄褐色土と焼土に炭が若干混入する黒褐色土が認められた。

### I-4号 (Ae53) 埋設土器 (第17・25 図版14・21)

I-1号住居跡の東に隣接する位置で検出され、縦位に埋設された深鉢 (III-1-a<sub>2</sub>) で、他の粗製土器に比べ細い単節L-R斜行繩文に上から人字状の磨消し帯をもち、交点に刺突のあるボタン状貼付をもつ文様帶が横位に四連続する構成で、底部に木葉圧痕をもつ、現況で径50cm、深さ35cmの摺鉢状の掘り込みに焼土を若干含む暗褐色土が認められる。

### I-5号1 (Ae74) 埋設土器 (第17・26図 図版13・22)

Ae74グリットに2・3と近接して検出された。縦位に埋設された粗製深鉢 (V-2-b) で底に箒ノ葉状の圧痕をもつ。径60cm、深さ30cmの掘りこみに黒褐色土の埋土をもつが、焼土等は含有しない。

### I-5号2 (Ae74) 埋設土器 (第17・26図 図版22)

潰れて詳細は不明であるが、底部の位置からみて、口縁を西にした横位で検出されたが、削平もあって不明、周間に薄い焼土が認められる。口縁は無文でつゝ状の隆起線の施文があり、頸部にも隆起線をめぐらし口縁文様の切れ目下相当に刺突をもつ。体部は単節R-Lの斜行繩文の深鉢 (II-3-b<sub>1</sub>) である。

### I-5号3 (Ae74) 埋設土器 (第17・26図 図版22)

2と同様に潰れて詳細不明である。深鉢 (V-1) 土器である。

I-6号 (Ai65) 埋設土器 (第17・25図 図版22)

縦位に埋設された鉢 (II-3-b<sub>2</sub>) で、複節斜行繩文R-L<の地文に磨消しによる変形波形文を胴上半に横帯に施文したもので、口縁と底部を意図的に削り取ったものと推察できる。周囲に焼土が観察され、鉢内には粉炭混りの黒色土が詰っていた。

I-7号 (Bc74) 埋設土器 (第16・25図 図版22)

I-4号土壙の北縁に接し、検出時の現状は横位であって周辺と土器下に現地火熱の焼土が確認できた。深鉢 (V-2-b) である。

I-8号4 (Bc83) 埋設土器 (第16・26図 図版14・22)

8号5と南北に連結する様相で縦位に埋設されている、周囲には1.3m×1.6mほどの範囲に焼土が薄く広がるが、現地火熱は観察できなかった。土器は深鉢 (III-1-b) で、無節斜行繩文に胴部より上に蛇行状の沈線を認めるが、欠損のため全体の文様は不明である。

I-8号5 (Bc83) 埋設土器 (第16・26図 図版14・22)

8号4の南に連結する様相で縦位に埋設された深鉢 (V-2-a) で、状況は8号5と同様であるが、焼土の広がりが共通しセットで施設し用いたものと推察する。

I-9号1 (Bd77) 埋設土器 (第19・27図 図版14・23)

9号2・3とともにI-8号住居跡が埋没後に埋土上面に施設されたものである。

検出時の状況は横位で、0.8m×1.2mの範囲で焼土が広がり現地火熱が土器下まで認められた土器は深鉢 (V-1) で底に箇ノ葉状の圧痕をもつ。

I-9号2 (Bd77) 埋設土器 (第19・27図 図版14・23)

9号1と併列し、検出時の状況は9号1と同じである。深鉢 (V-2-a) で底面に箇ノ葉状の圧痕をもつ。

I-9号3 (Bd77) 埋設土器 (第19・27 図版14・23)

第19図に示した②土器である。縦位の埋設で、現在面から40cm下に80cmの長い自然石を基底に用い、その上に土器をセットしている。更に側縁にぎっしり自然石をめぐらせ土器を固定し外に①を据えており、断面観察による焼土のあり方からみても①は②の外周的な施設と推察される。②土器は深鉢 (V-1-a) で底面に箇ノ葉状圧痕をもつ、①は単節L-R斜行繩文の

## — 大明神遺跡 —

深鉢胸部である。

### I-10号 (Bd89) 埋設土器 (第19・27図 図版17・38)

I-9号住居跡埋没後の埋土上面に縦位に埋設された深鉢 (V-2-a) で、掘り込みの埋土は黒褐色土に豆大の礫を含むもので、焼土等は認められない。

### I-11号 (Bd86) 埋設土器 (第18・27図 図版15・16・23)

I-12号1・2とともにI-9号住居跡埋没後の埋土上面に横位に施設されている。土器全体が現地火焼性の焼土に覆われ、焼土の広がりは1.3m~2.4mにおよび山状に堆積し周辺にも散在する。土器を囲む部分はカリカリに焼けていて堅い。口縁前面はゆるく落ちこみその底が強い火焼をうけている。埋設する土器は深鉢 (V-2-a) で、火焼のため全体に赤味をおびる。底面に箆ノ葉状圧痕をもつ。近接して同面上にI-3号炉跡とI-10号埋設土器がある。

### I-12号1 (Be86) 埋設土器 (第18・28図 図版16・17・23)

11号と埋設状況は類似するが、焼土の堆積と広がりはほとんどないが、土器は焼土に覆われており器面は赤味をおびている。深鉢 (V-2-a) で底面に箆ノ葉状圧痕をもつ11号と全く同型の土器である。

### I-12号2 (第18・28図 図版16・23)

11号・12号1と同様に横位に施設されるが、周辺の焼土は11号からのものを被る程度である。埋設のための掘り込みは、12号1と共に通することも考えられる。第18図の断面図によれば12号2の口縁南から斜めに掘り込んでいることが読めるからである。土器は深鉢 (V-2-a) で底面に箆ノ葉状の圧痕をもつ。

## (4) 土 壤

### I-1号 (Af74) 土壌 (第20図 図版11)

フ拉斯コ状を呈し橈円状の平面形をもつ、開口部東側に崩落をみると1.0m×1.4mで、開口部から15cm下がり最狭部となり0.9m×1.05m、底部は1.1m×1.15mでほぼ平坦である。検出面からの深さ50cmを計る。埋土は黒色土の単層で、豆大からこぶし大の礫を多く含み、炭化物も若干みられる。底に60cm×90cmの橈円状で厚さ17cmの偏平な自然石があり、上から落ちこんだものか現地性のものか判然としない。仮りに落ちこみとすれば、埋土状況からみて土壤埋没以前

が考えられる。また開口部東側の崩落との関連も考慮できる。断面にみるように石の下面まで掘り下げ、しかも奥への抉り込みのあることは、落ちこみの可能性が強くなる。無節斜行縄文の深鉢片2個体分と磨石、円盤状石器が埋土中から出土した。

#### I-2号 (Aj80) 土壙 (第20図)

不整な円形で、開口部径1.35m、底部は径1.15mで平坦であり、深さ10cmを計る。埋土は黒褐色土であり遺物は供伴しない。

#### I-3号 (Ba68) 土壙 (第20図)

不整円形で、開口部径1.15m×1.4m、底部は径1.0mで北に傾斜し、深さ30cmを計る。埋土は豆大からこぶし大の礫と砂を含んだ黒褐色土の1層を主体とし、その中に粒状の焼土を全般に含む2層がまだら状にある。磨製石斧1点が埋土中から出土した。

#### I-4号 (Bd71) 土壙 (第20図 図版11・12)

卵状の平面で、開口部径2.0m×2.6m、底部は径1.65m×2.15mで底面は東側で10cm落ちこむ、深さ50~55cmを計る。以上の規模の土壙内に、粉炭と自然石が次のような状況でみられた。粉炭は黒色土と混るが主体は炭であってメットリし柔らかく、厚さ10~15cmで底面全体に広がる。粉炭を除去した底面西半の一部に50cm×70cmの範囲で、ほとんど厚さをもたない現地火焼の焼土を認めた。なお粉炭についてC-14年代測定の結果、6990±100 years B·Pと出ている。

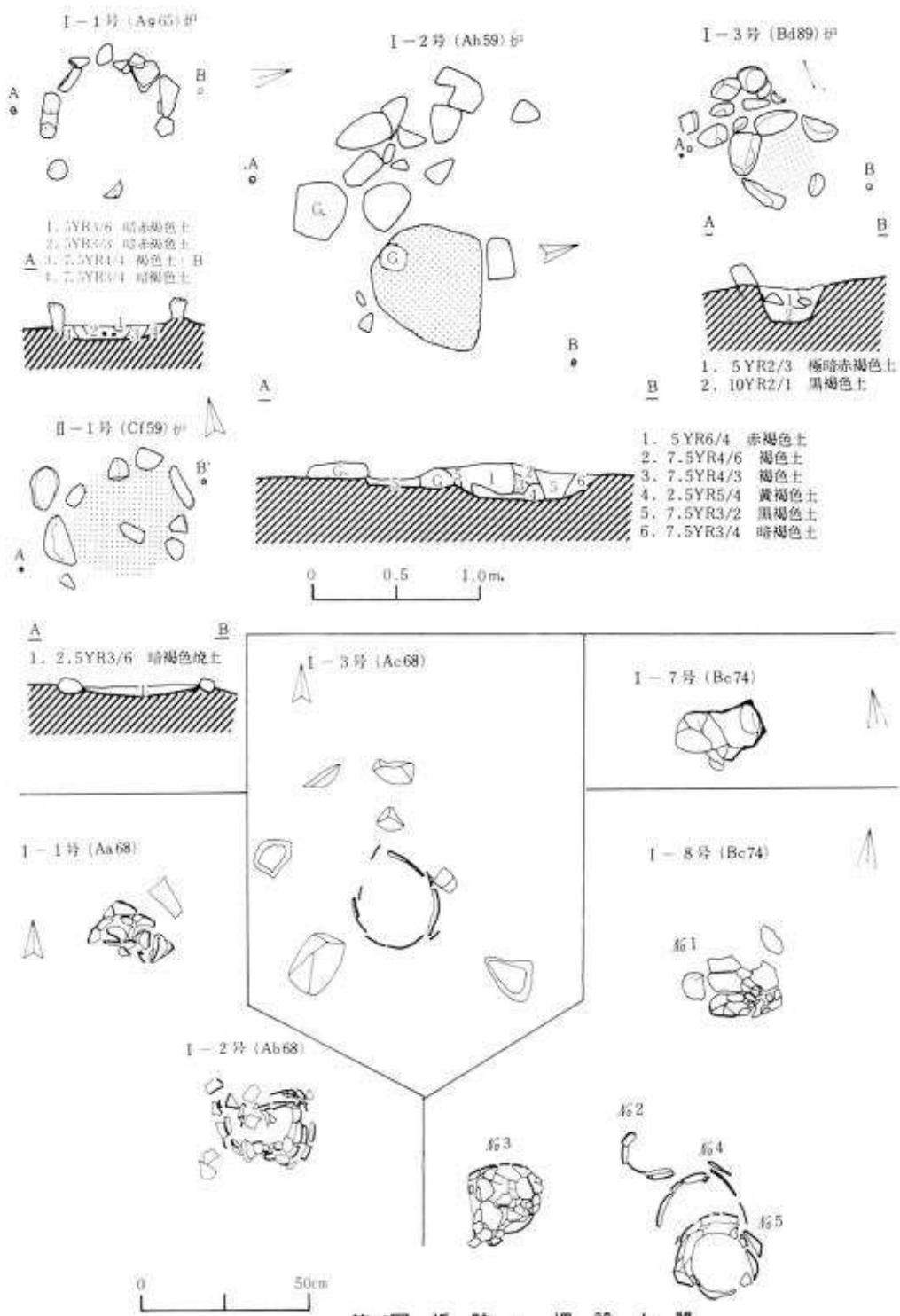
粉炭上に自然石が認められ、石は長径20~40cm大を主体に形状は多様であるが川原石を用い、多少の重なりはあるものの、長径を横にはほぼ1段をなしてて、規則的な面があることから意図的に配したものと推察する。石には火焼などによって特に変化した状況はなかった。

石上、20~25cmで現状の開口部となるが、埋土の1・2層は黒褐色土に豆大の礫を多く含み粘性に欠け、3層の暗褐色土は黒色土と黄褐色の砂が混りザラザラしている。4層は黄褐色砂質土に黒色土が混るものであり、いずれの層も自然埋土の状況をもつてて、石面以下が何らかの用を果していた時点では開口した土壙であったと推察する。遺物は供伴しなかった。

#### I-5号 (Bd86) 土壙 (第20図)

不整円形もしく方形に近い形状で、開口部径1.15m×1.35m、底部径は0.8m×1.0mで底面は、ほぼ平坦であり、深さは検出面から45cmを計る。壁が若干外に向くが円筒形に近い断面をもち、埋土1層は黄褐色土を粒状に比較的多く含む黒褐色土、2層の黒褐色土は、こぶし大以下の礫を多く含み埋土の主体をなす。3層は砂に黒色土が混入したものである。埋土中から石剣1点が出土した。

— 大明神遺跡 —



第16図 炉跡・埋設土器

— 大明神遺跡 —



I-4号 (Ae53)

A  
φ



B  
φ



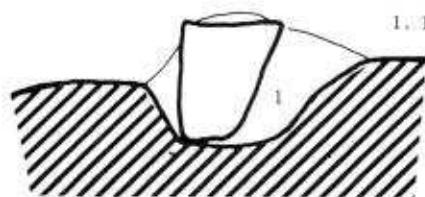
I-6号 (Ae65)



A

B

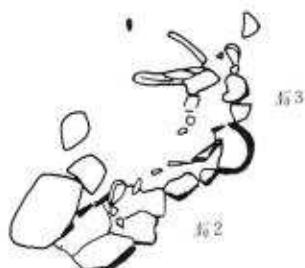
I. 10YR3/3 暗褐色土



I-5号 (Ae74)



A  
φ



B  
φ

A

B

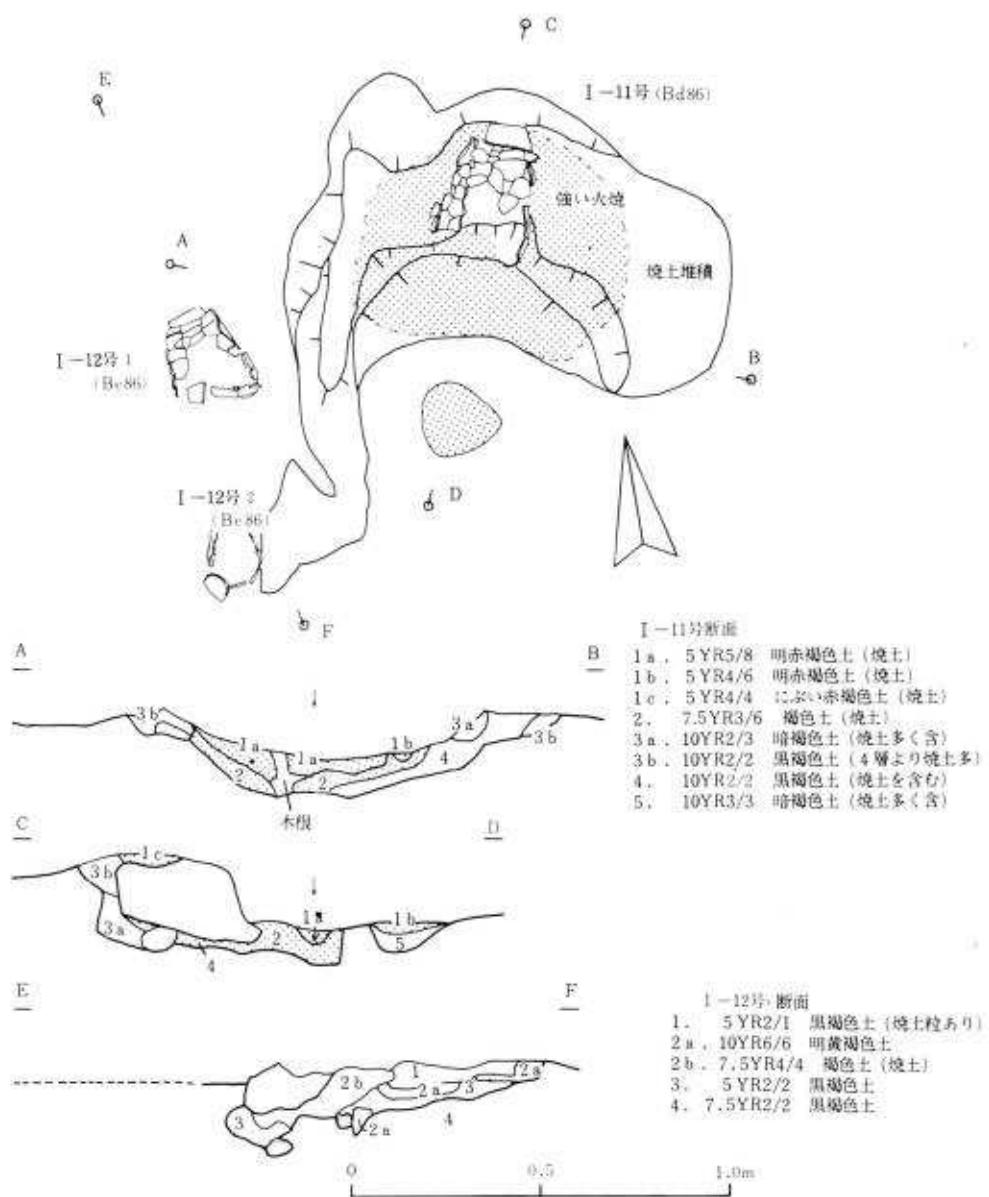
掘り土

1

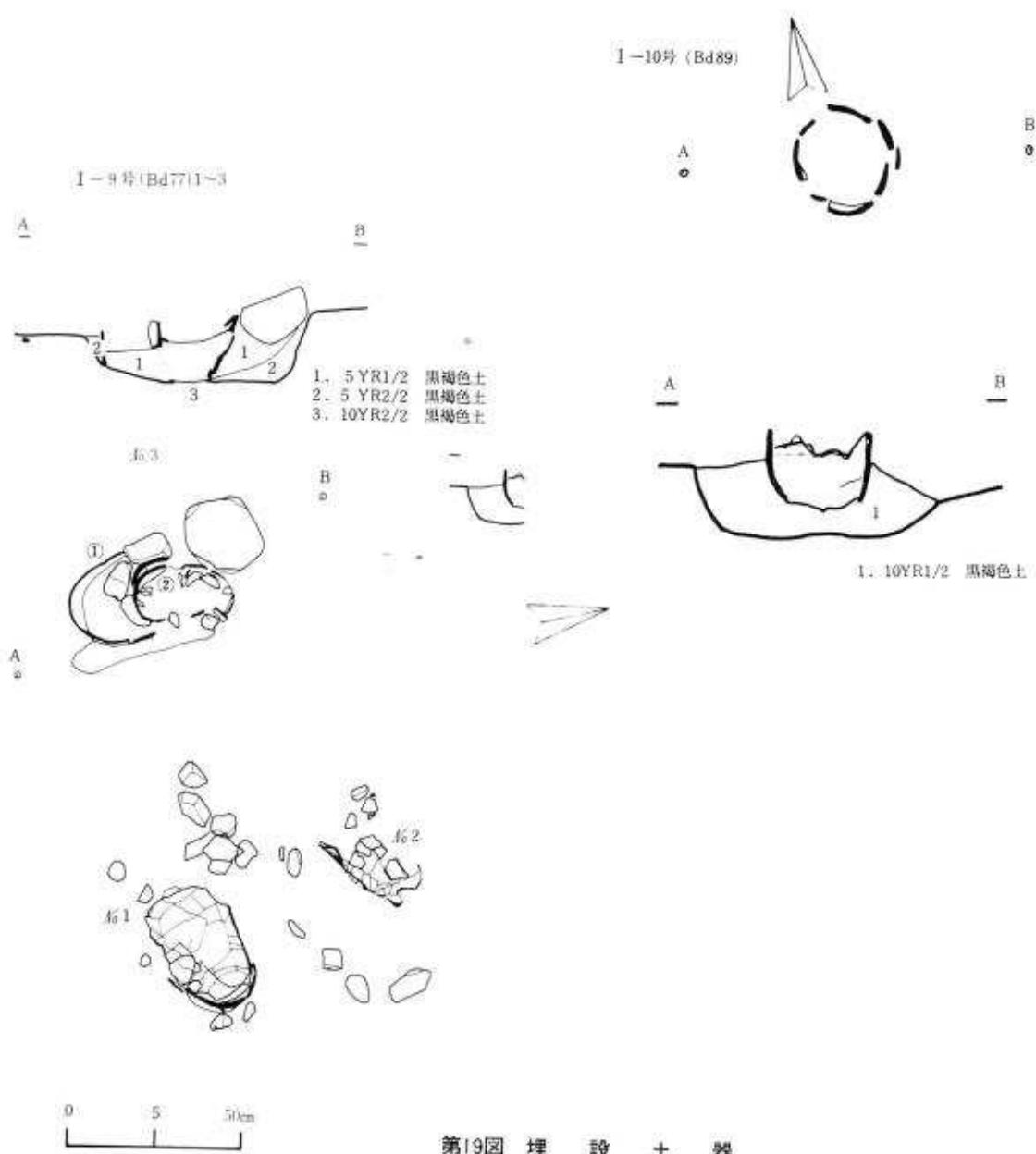
I. 10YR2/3 墓褐色土

0 5cm

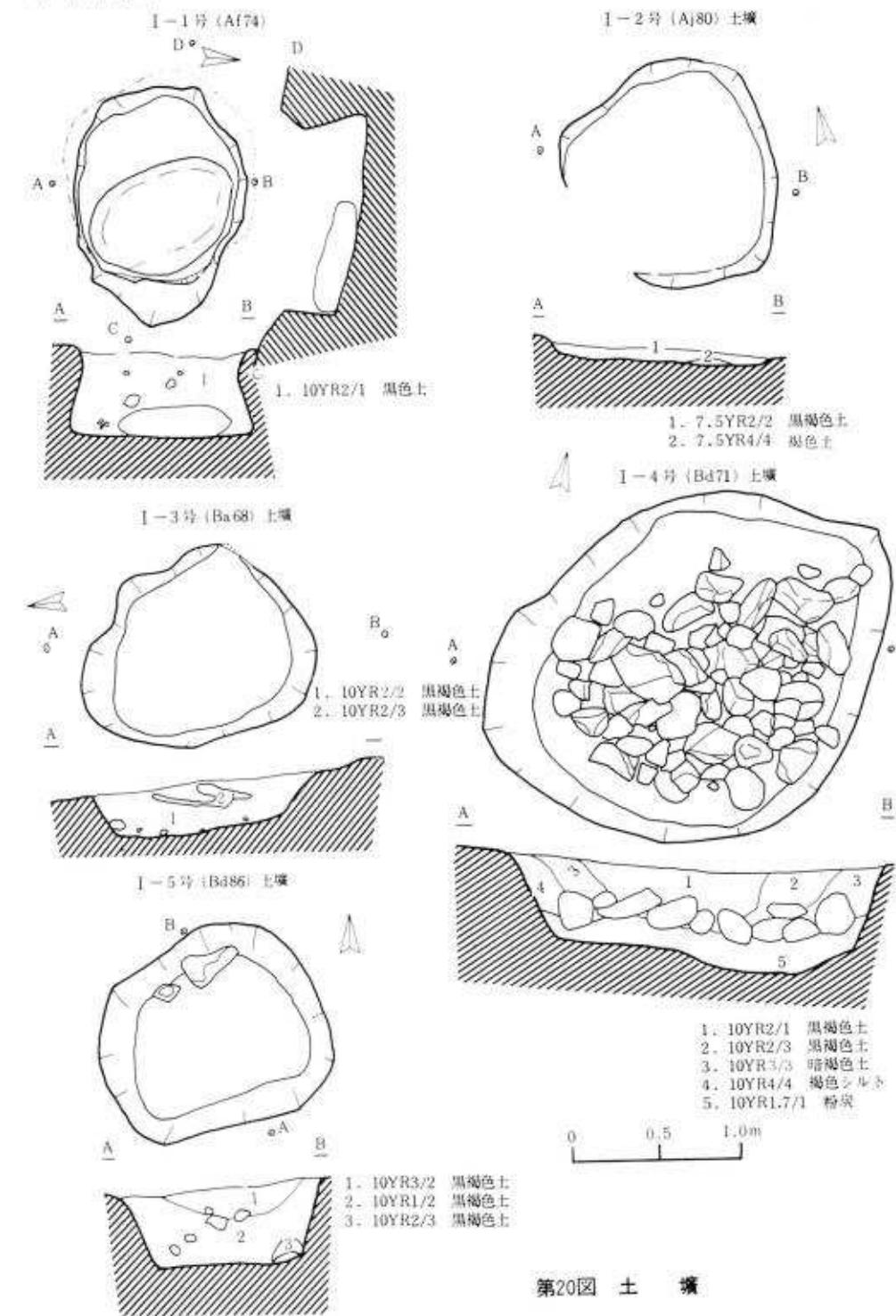
第17図 埋 設 土 器



第18図 埋設土器

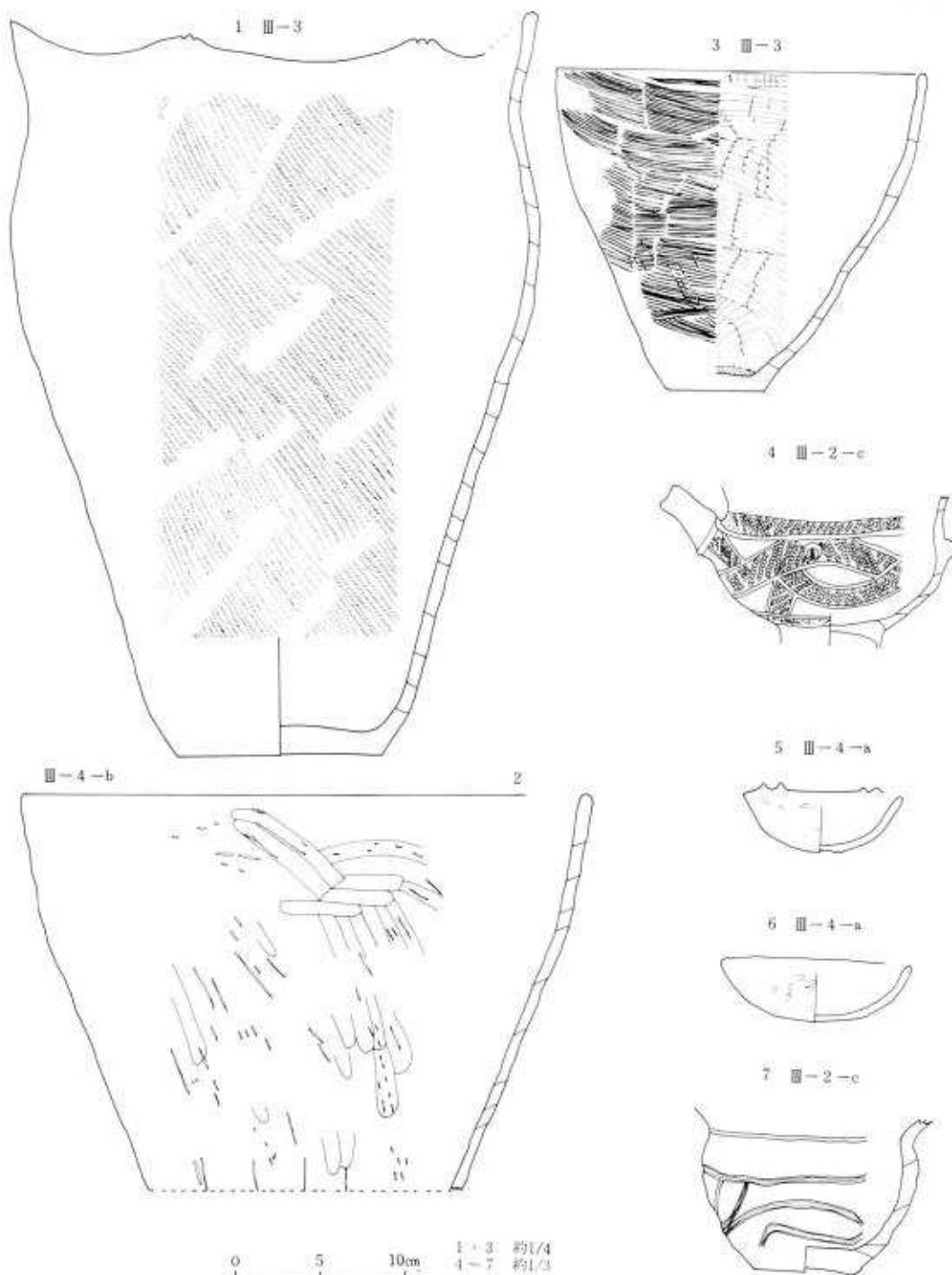


— 大明神遺跡 —



第20図 土 壙

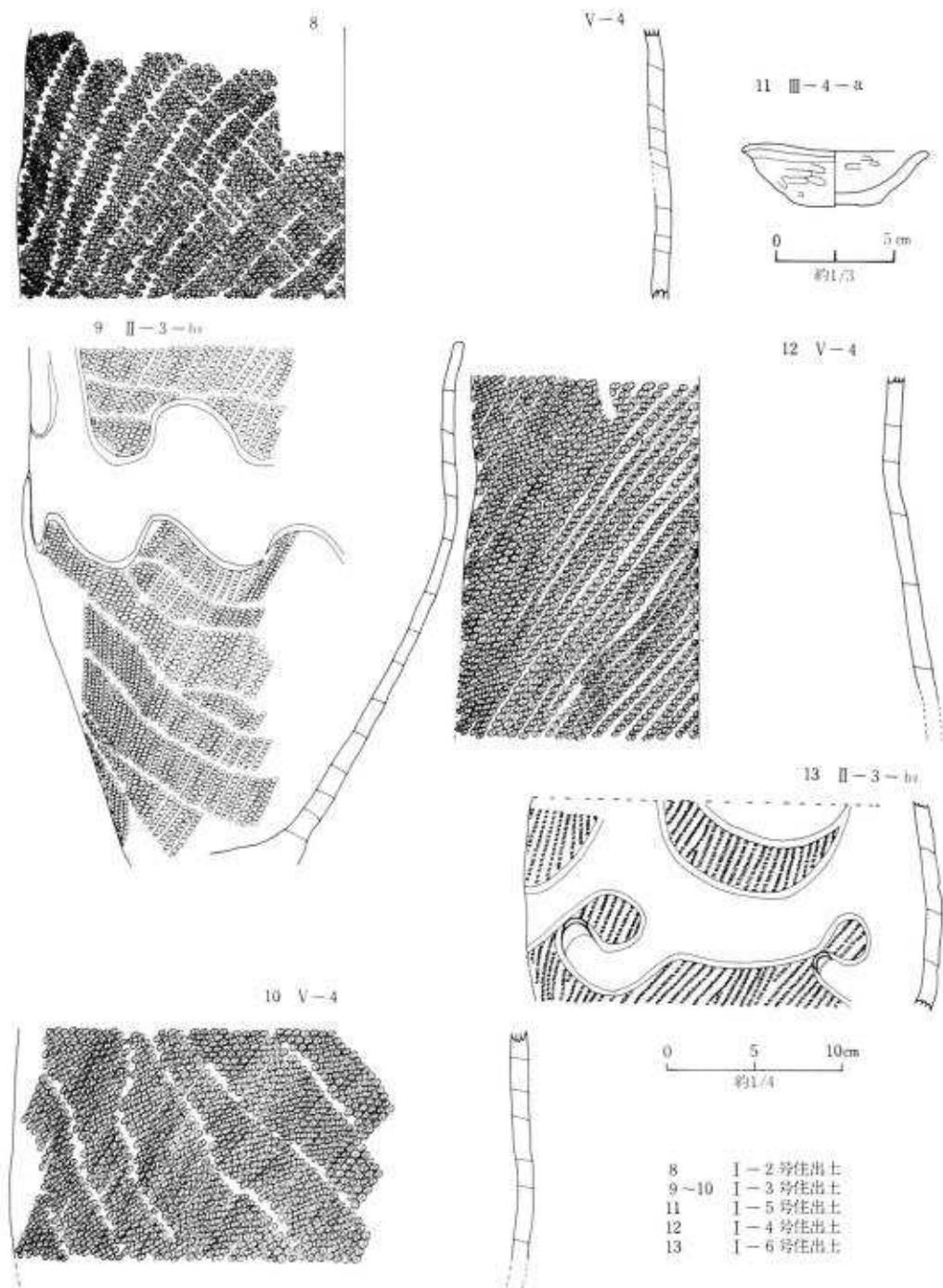
— 大明神遺跡 —



第21図 土器実測図

1-7 I-1号坑出土

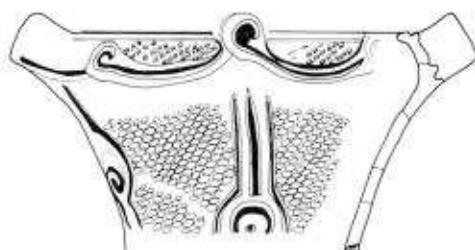
— 大明神遺跡 —



第22図 土器実測図

— 大明神遺跡 —

14 II-2



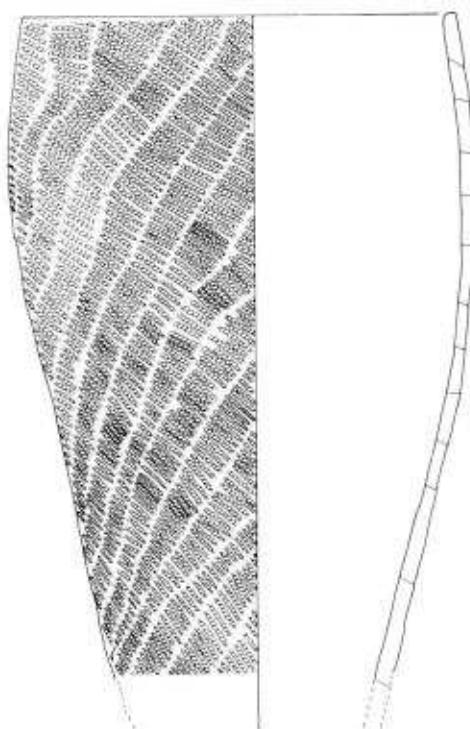
18 V-3



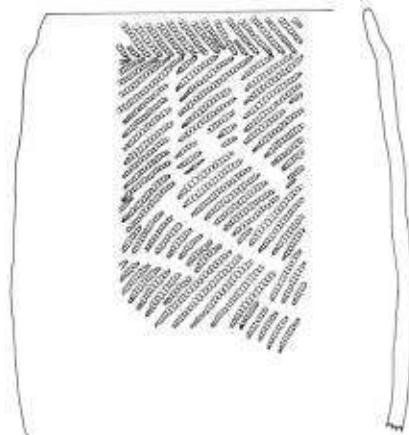
15 II-3-hz



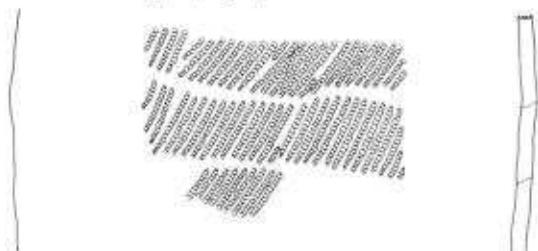
19 V-2-a



16 V-2-



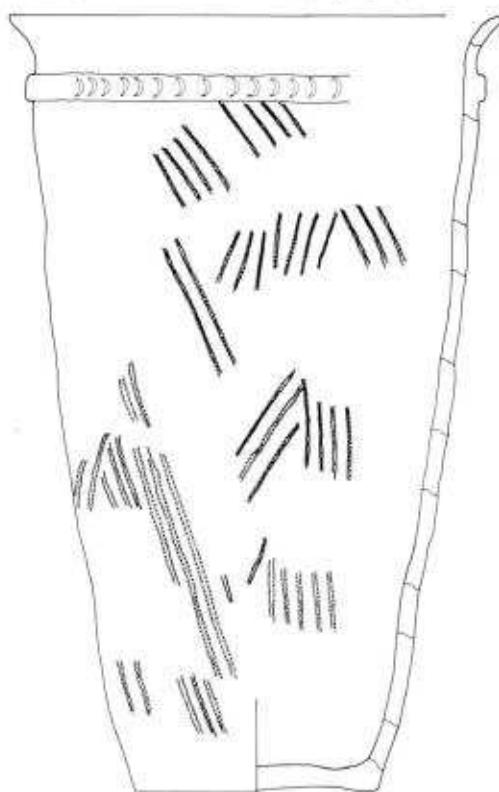
17 V-2-a



0 5 10cm  
E1/4

14 I-7号住出土  
15 I-8号住出土  
16-19 I-9号住出土

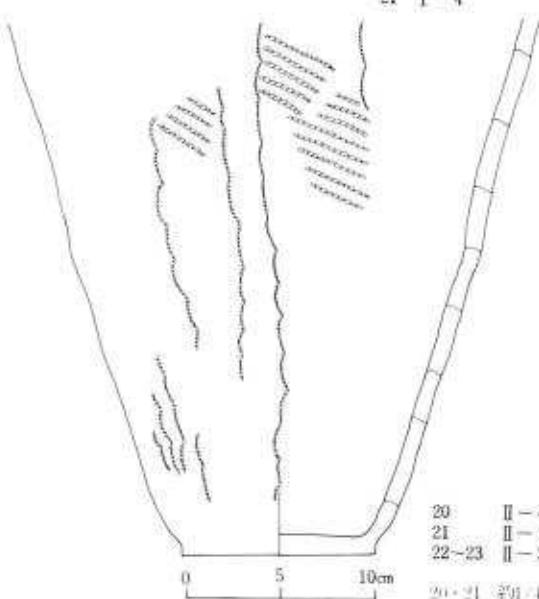
第23図 土器実測図



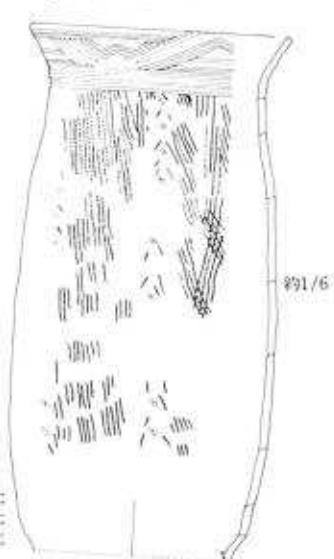
22 I-2-a



21 I-4



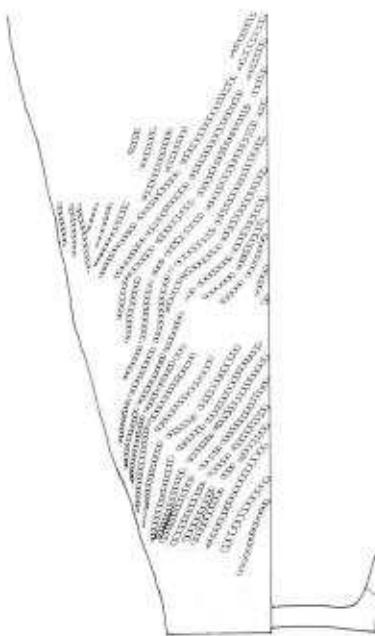
23 I-2-a



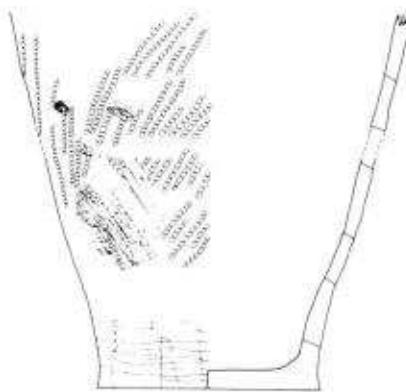
第24図 土器実測図

25 V-2-b

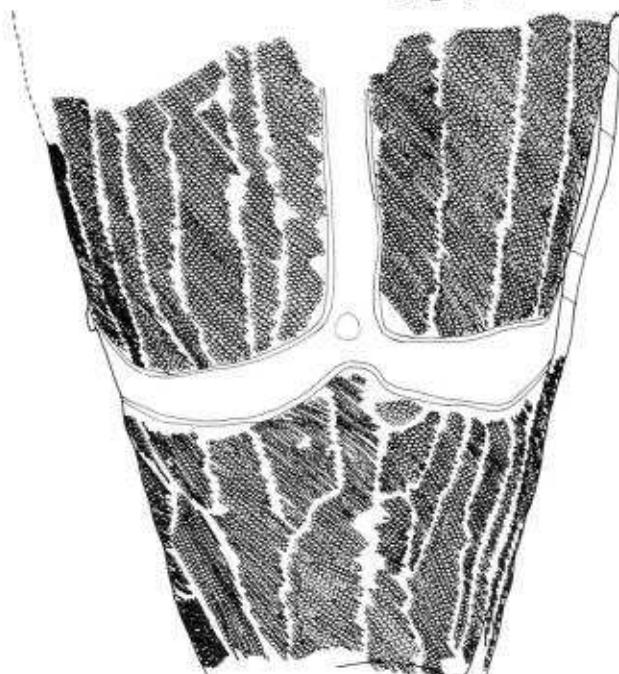
— 大明神遺跡 —



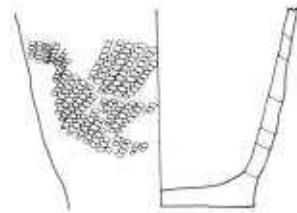
27 V-2-b



26 III-1-3



28 V-2-b



29 III-3-b<sub>2</sub>



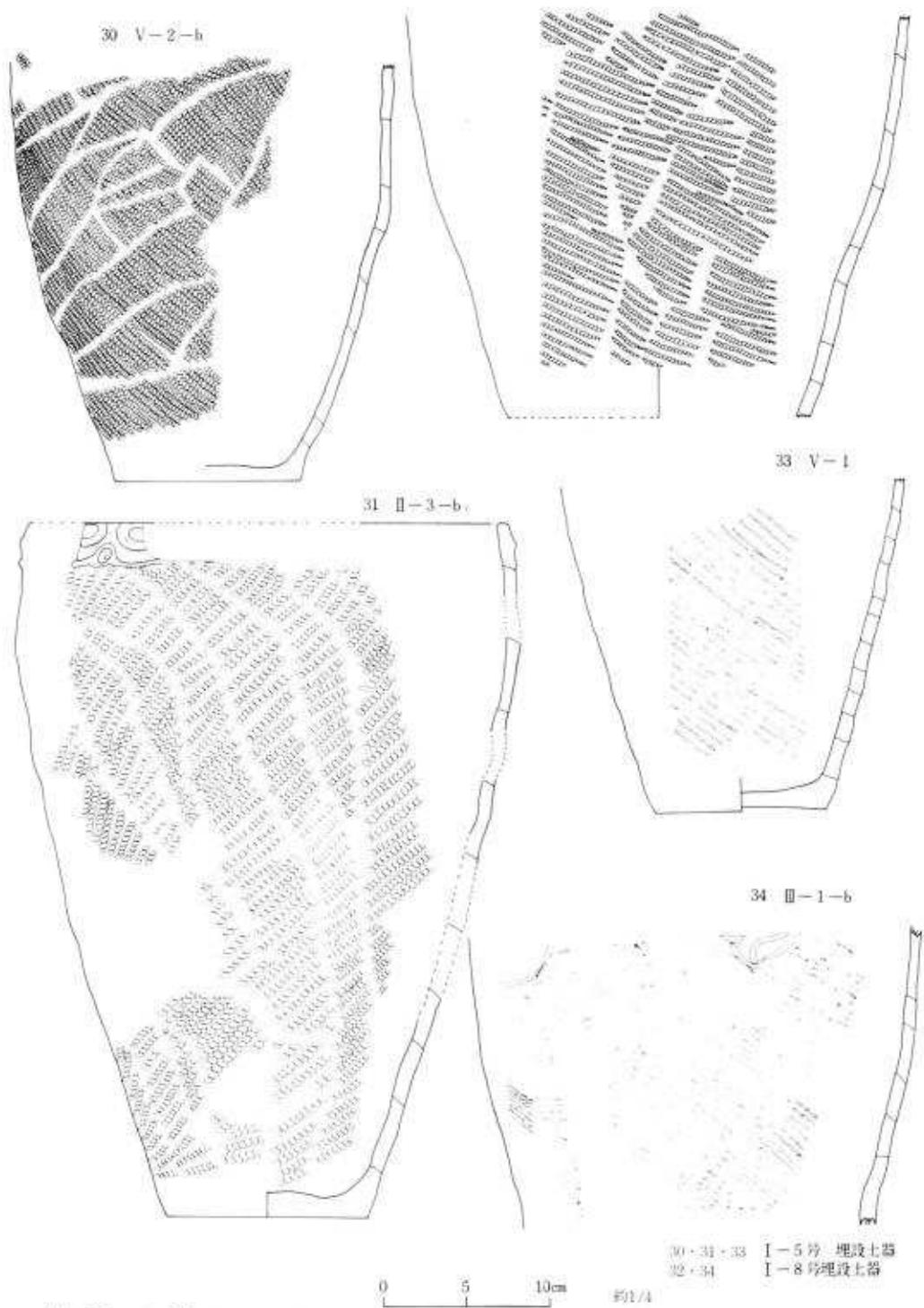
- 25 I-1号 埋設土器  
26 I-4号 埋設土器  
27 I-7号 埋設土器  
28 I-2号 埋設土器  
29 I-6号 埋設土器

0 5 10cm 約1/4

第25図 土器実測図

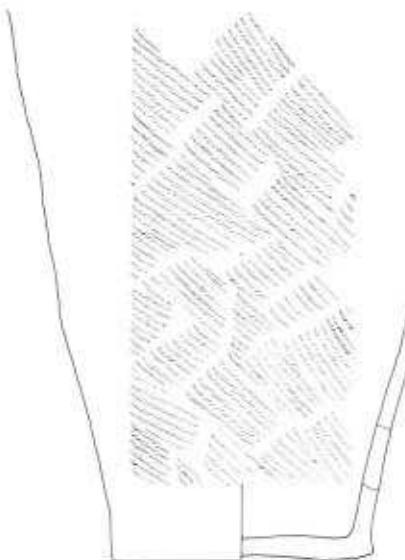
— 大明神遺跡 —

32 V-2-a

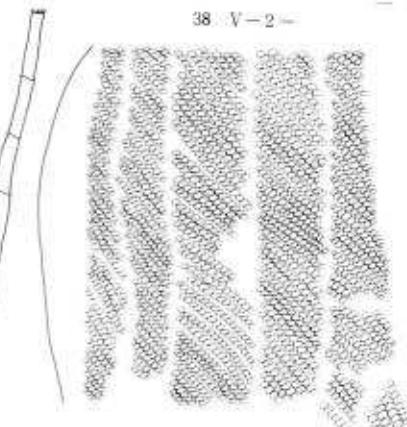


第26図 土器実測図

35 V-1

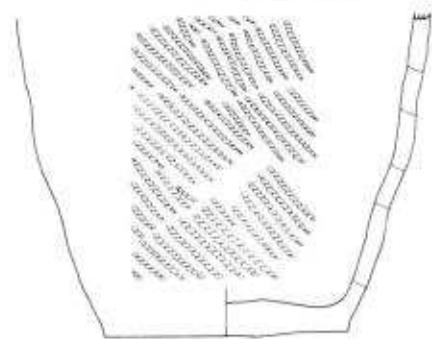


38 V-2-1

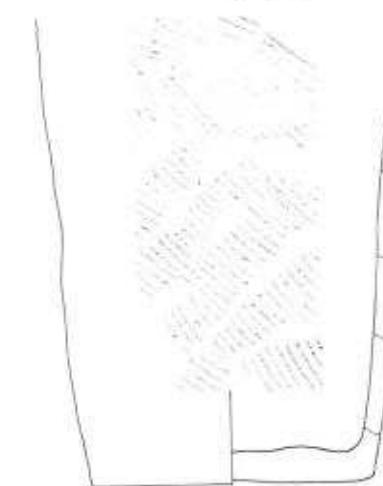


— 大明神遺跡 —

36 V-2-a



37 V-1



39 V-2-a

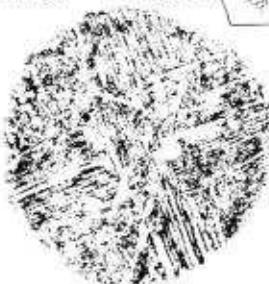


35~37 I-9号 埋設土器  
38 I-10号 埋設土器  
39 I-11号 埋設土器

37の底面 蔵ノ葉状圧痕

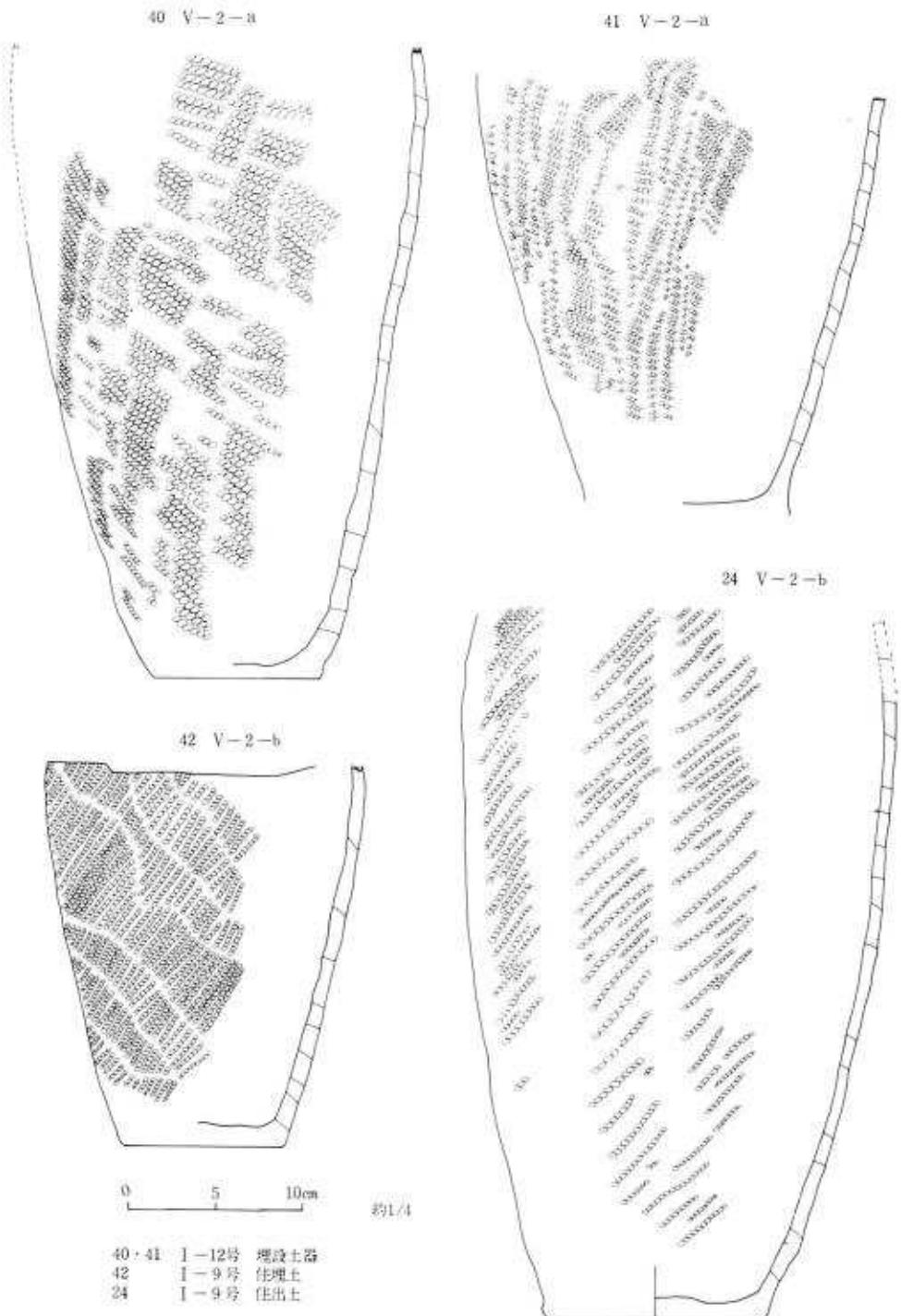
39の底面 蔵ノ葉状圧痕

0  
5  
10cm  
四分之一



第27図 土器実測図

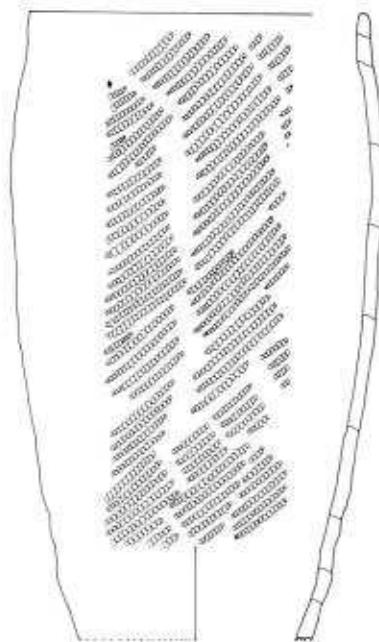
— 大明神遺跡 —



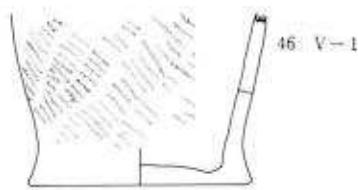
第28図 土器実測図

— 大明神遺跡 —

43 V-2-a



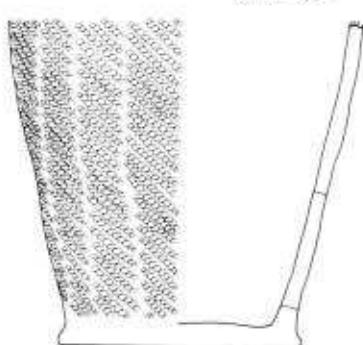
46 V-1



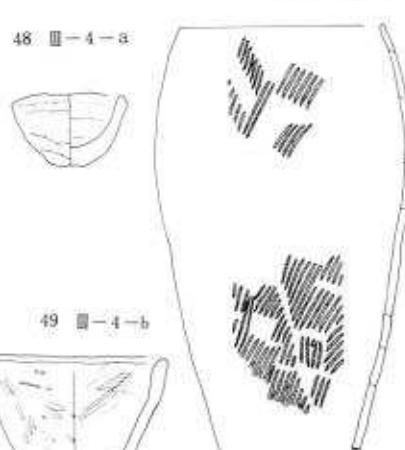
47 V-1



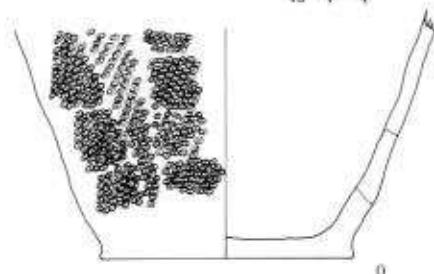
44 V-2-



50 V-2-a



45 V-4

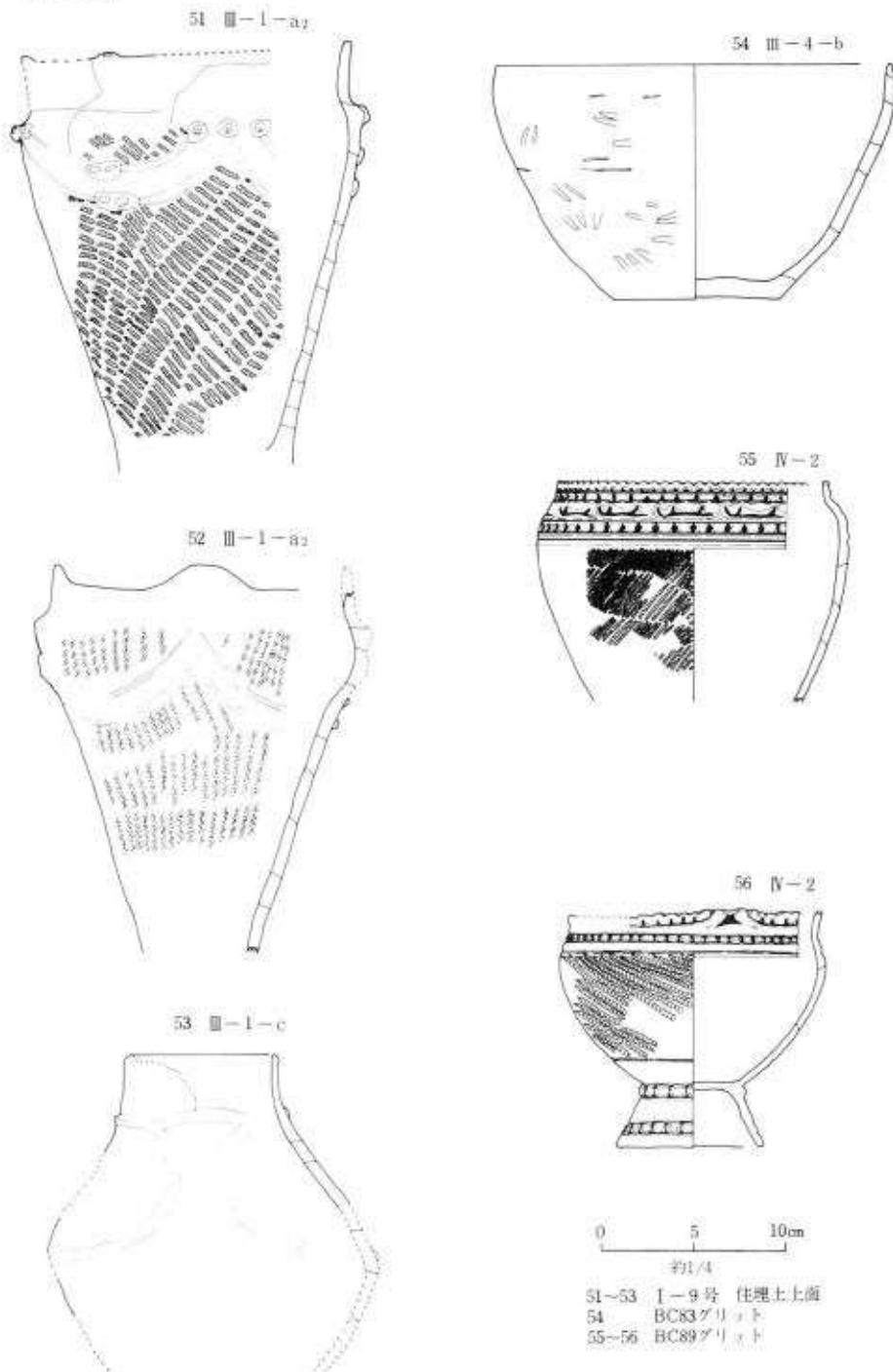


0 5 10cm

43~47・50 I-9号住居土  
48 1区包含層  
49 Ae09グリット(包含層)  
43~47 約1/4  
48・49 約1/3 50 約1/6

第29図 土 器 実 測 図

— 大明神道跡 —

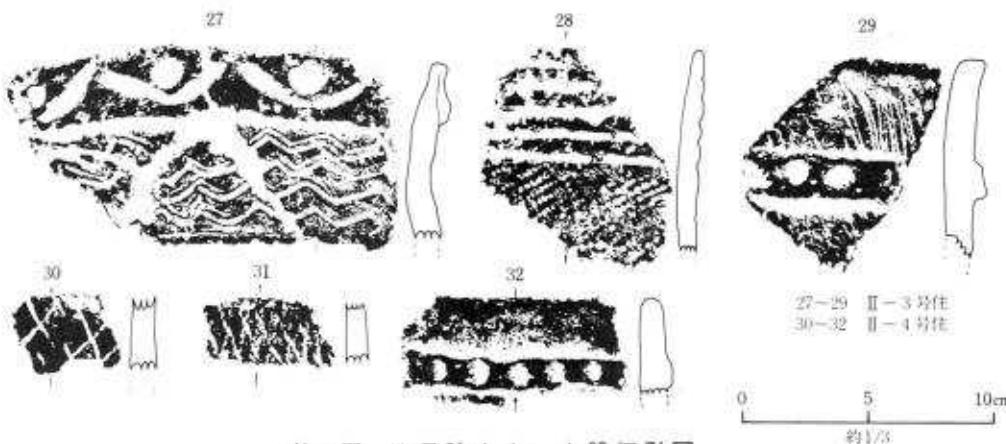


第30図 土器実測図

一大明神遺跡一



第31図 住居跡出土、土器拓影図



第32図 住居跡出土、土器拓影図

## IV 出土遺物

出土遺物は遺構出土のものと、包含層出土のものと大別できるが、ここでは一括して調査区における遺物全般について述べる。

### (1) 土器について

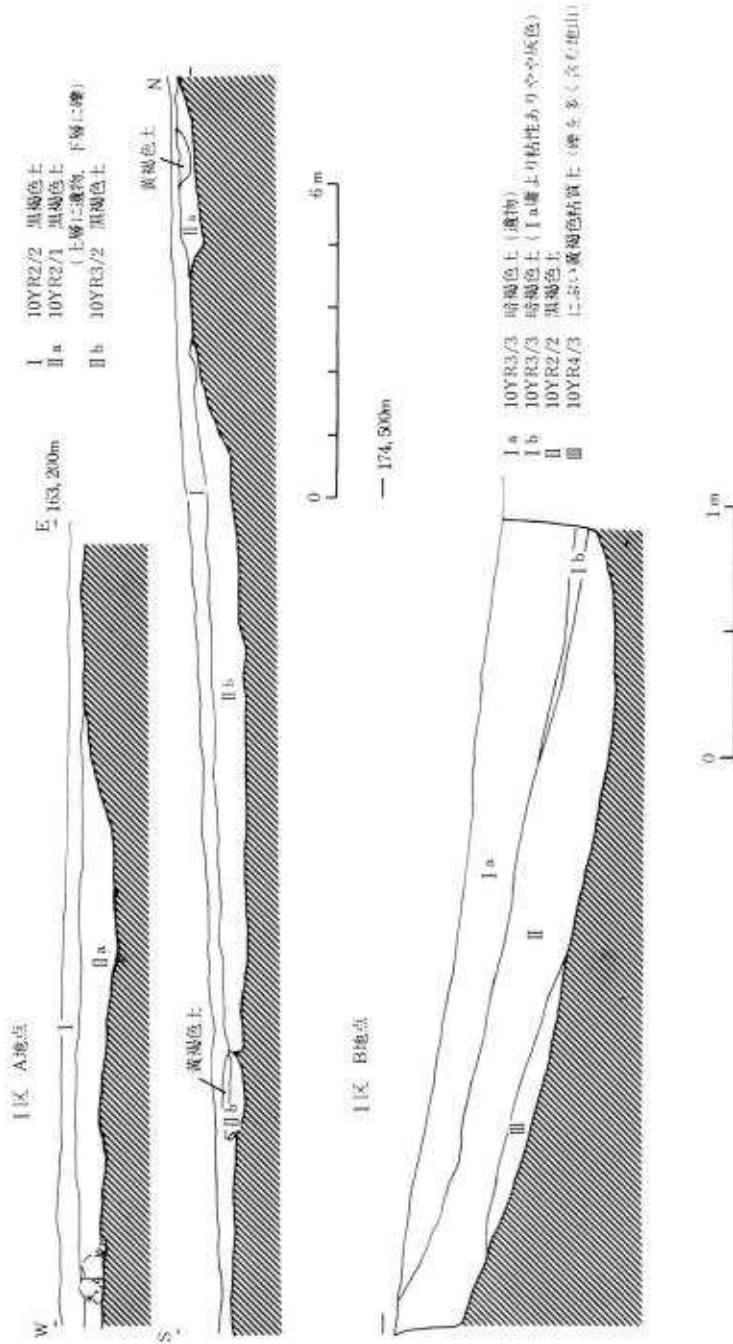
出土した土器は、復元実測可能な資料56点で、I区52点、II区4点となり圧倒的にI区が多く大半は粗製深鉢である。一方破片資料は住居跡埋土および包含層を一括しての概数は下表のようになる。

土器出土は調査区全域におよび、その意味では全域を包含層と見ななければならないが、特にI区におけるAd50-Ad09とAj50-Aj09を方形に結ぶ範囲とII区のAa50-Ae65を斜めに結ぶ北側に二次堆積の包含層を認めた。

I区包含層は第33図に示した如く、Ⅰ層の耕作土下のⅡ層黒褐色土である。この層は前述した範囲が西側を流れる沢によって抉られたように窪んだ部分に、厚いところで50cmの堆積をみる。遺物は層の上半に多く、下半は径10-50cmの川原石が群をなし(図版17)、その間隙にも若干の遺物がある。川原石群下が黄褐色の砂礫層となっている。

II区の包含層は第33図に示した如く、耕作土下のⅠa層で暗褐色土で再堆積の比較的粘質な土性もち、下にⅡ層の黒褐色土、Ⅲ層に多い黄褐色の礫含みの地山となる。以上が頗著な包含層上層状況である。

土器片概数			
	I区	II区	計
口縁	650	650	1,300
胴部	10,400	9,330	1,300
底部	520	550	1,070
計	11,570	10,530	22,100



第33図 包含層土層断面図

### 土器の分類

資料は破片が中心になるので、文様の表現技法と文様に重点をおき分類をした。文中の資料指示は、実測土器については(図1)、住居跡出土拓影図については(住1)、他の拓影図は(1)、とそれぞれの通し番号を用いた。合せて第1~3表を参照されたい。

#### I 群 繩文前期とみられる土器群を一括した。

1類(第34図1~4 図版26-1~4) 全体の形態を知り得る資料に欠けるが深鉢形の土器と考えられる。いずれも纖維を含むもので、単節斜行縄文(1)、結束羽状縄文(2・3)、羽状縄文が施され、(2)は口縁部にループ状が認められる。縄文前期大木1~2に比定されるものであろう。

2類 縄文前中期に比定される土器群で、鉢形、深鉢形が推定される。頸部と胴部の区画をもつものが大半で、口縁は山形突起をもつ波状のもの、平口縁のものがあり外反と直口するものに大別される。施文は半截竹管工具による沈線、隆帯をめぐらすもの、刺突、ボタン状貼付など多様な方法を組合せ文様構成をする。

a<sub>1</sub>(第34図5~9 図版26-5~9) 半截竹管工具の背面を用いる沈線施文を主体とするもので、山形の波状の口縁をもち、山形突起部分にボタン状貼付が施されその中央部に凹みをもつ、貼付文を中心に弧状の沈線文が左右に施され、頸部に数条の平行沈線をめぐらすもの(5)、指頭圧痕もしくはボタン状貼付文の左右に鋸歯状もしくは山形状の平行沈線を施し、頸部に複節押捺をめぐらすもの(6・7)と平行沈線をめぐらすもの(8)、また口縁沿いに3条の沈線をもち、波状の低部分に縦位の区画線があり、頸部に数条の波状沈線をめぐらすもの(9)がある。いずれも山形突起と貼付文を中心沈線による文様が左右対称に配置される。

a<sub>2</sub>(第24図22 34図10~15 図版21-2・26-10~15) 平口縁に沈線による連弧文(10)、山形文(11~12・図22)、複合口縁の折り返し部分に波状もしくは山形文(13・14)、平行沈線の間に爪形の列点文(15)などがある。(図22)は外反する口縁に山形沈線文を施し、頸・胴部の区画を数条の沈線でなす。胴張りの深鉢で胴部文様は木目状撲糸文である。

b (第34図16~18 第35図19~33 図版26-16~33) 半截竹管用工具による2条一組の沈線を用いる施文を主体とするもので、沈線は纖細で文様は鋸歯状、波状、半円状、X字状など直線、曲線、屈曲線などが用いられ爪形の列点文が加わるものがある。平口縁と波状口縁があり複合口縁で折り返し部分の端が頸部となって区画沈線をめぐらし、口縁に指頭圧痕をもちその左右に斜行する沈線をもつもの(21)、波状口縁で突起部分と鋸歯状施文に対称し指頭圧痕をもつ(21)、複合波状口縁で突起部分と鋸歯状施文に対称し指頭圧痕をもち、a<sub>1</sub>の文様構成と共通する(17)、(18)は二叉状の突起をもち、その部位に指頭圧痕をもつ波状口縁で、口辺と頸部に爪形の列点文を施す隆帯をもち、間に波状の沈線を施す。(16)は口縁にX字状もしくは格子

目状の沈線を施し、頸部に擬縄紐の隆帯をめぐらす。また平口縁で口辺と頸部に沈線をめぐらし、その間に下に弧状になる半円状の沈線と爪形の列点文を施すもの(20)、頸部と胴部の区画が沈線と爪形列点文の組合せによってなされ、胴部文様の沈線の交差点にボタン状貼付をもつもの(19)がある。

**3類** 口縁は平口縁で外反もしくは直口するものが多く、鉢・深鉢形と推察される。地文は口縁部と胴部における差違はなく、口縁と頸部を主体に撚糸圧痕や連続指頭圧痕をもつ隆帯を施すもので、円筒系土器の施文様式の影響をもつと考えられる。

a (第35図34~38 図版27-34~38) 平口縁で外反するものと直口するものがある。無地文の口縁から頸部に数条の撚糸圧痕が平行にめぐる。(34)では羽状の胴部文様が認められる。

b (第24図20 第35図39~45 図版21-3 図版27-39~45) 平口縁で外反するものが多い、指頭圧痕を施した隆帯を頸部にめぐらし、口縁部まで施文するものと無文のものがある。前者には網目状撚糸文(39·40)、多軸縄文(41)、綾絡文(42)、木目状撚糸文(図20)、斜行縄文(43)などあり、後者には(44)がある。これらの土器は(図20)の復元土器に類するもので、円筒形の平底で口縁がやや外反もしくは直口する深鉢と推察される。

**4類** (第24図21 第36図46~54 図版20-6 図版27-46~54) 縄文地文もしくは無文に縦位の綾絡文のみ施文するもので、平口縁でわずかに外反するもの(48)、波状口縁のもの(46·47)などがある。(図21)などから推察するに円筒状の深鉢と考えられ、器厚があり胎土は粗い。前期的に思われるが確定できない。

## II 群 縄文中期とみられる土器群を一括した。

**1類** (第36図55~60 図版27-55~60) 撥糸圧痕が、主に口縁部に施される土器が主体で(57·59)は複合口縁に撚糸圧痕をめぐらせ、(58)は山形に施す。(60)は刻目のある隆帯を口縁に内外に波状になるよう貼りつけ、口縁に刺突列点をもつ、中期初頭に比定されるものとみられる。

**2類** (第23図14 第31図11~16 第36図61~65 図版31-11~16 図版19-8 図版27-61~65) 縄文中期前半に比定するとみられるもので、平口縁と波状口縁がみられる。(61~63)は沈線による直線、曲線の文様構成がみられ、(64~66·住11~16·図14)は隆沈帯を主体とする施文で、(住11·住15)は平口縁に沿う隆起線から下へ懸垂状の隆起線が走る。(64~66·住12·住14)は口縁に渦巻文をもち、下へ2本の隆沈帯が走って胴部にも渦巻文を施しているが、(図14)でみられるように前後者が組合う文様構成もある。(図14)は内湾口縁に把手状の渦巻文をもつキャリバー形の鉢とみられる。

**3類** 縄文中期後半の大木9~10にみられるもので、2類の渦巻文は退化し、隆起線および沈線を用いる加飾と摩消手法がとり入れられ、文様は縦位を主体とする横円状、横位のS字状や波状文などがみられる。

a<sub>1</sub> (第36図66 第37図67~72 図版27~66~72) 隆沈帶による区画がされた橢円もしくは長橢円状の内帶に縄文地文を残す縦位を主体とする文様である。(68・69・71)はゆるい波状口縁をもち、その突起部に渦巻文の名残りをとどめ、(67)は平口縁で強い隆起をもつものである。

a<sub>2</sub> (第37図73~81 図版27~73~81) 沈線による区画と磨消手法を用いるもので、地文帯と無文帯による文様構成をする。a<sub>1</sub>同様に縦位の文様が中心をなす。口縁は平口縁でや・外反(75)、内湾(74)、直口(76)、ゆるい波状でや・外反(73)などがあり鉢形の土器であろう。

b<sub>1</sub> (第37図82~87 第38図88 図版28~82~88) 鉢、もしくは深鉢と推察されるが、三角の断面をもつ隆起線を直、曲に用いた区画施文が主体になり、平行する隆起線間を磨消し無文帯とする。無文帯の幅はa<sub>2</sub>に比べ広くなる。(83)は無地文、平口縁に浅く八字状に刻目のある隆起線を施し、(87)はゆるい波状口縁であるが施文状況が(83)に似る。(84・85)は口縁に二又状の小突起をもち、隆起線に区画される狭い無文帯が口辺に沿い突起部から下に走る。

(86)はゆるい波状口縁の突起部分から下方に隆起線が走り頸部をめぐる隆起線と合し、口縁が磨消無文であるが、文様構成は(84・85)と類似する。

b<sub>2</sub> (第22図9・13 第23図15 第25図29 第38図89~94 図版19~3・7・9 図版22~4 図版28~89~94) 曲線による沈線区画内を磨消したまでは地文を残すもので、文様が横S字状(図13・図15)、波状(図9)、変形波状(図29)などがあり胴部上半に展開される。(図13)では磨消しの端部を軽く隆起させ、更に(89)では斜めからの刺突をもち、むしろCに入るものとも思われる。これらの土器は(図9)のように胴張りで頸部が若干くびれ、口縁が直口もしくは若干外反する深鉢、鉢形と考えられる。(94)は頸部に隆起線をめぐらし、上部に2個の不貫通の小孔をもつ橋状把手をもち、そこから沈線で区画される鈎状の縄文帯を残し、逆「く」字状に張り出る胴部に隆沈帶をめぐらす。器面に朱色顔料を塗布した痕跡がある。前述の土器とは文様、形態とも異なる点をみると、沈曲線の区画施文をみてこの項に含めた。

c (第38図95~100 第39図101~107 図版28~95~107) 沈線および隆起線に加えて刺突を口・頸部沿いに施文する平口縁、波状口縁の鉢形土器とみられる。(95~97・99・101・102)は隆起線沿いに刺突列点文を施し、(98・100・103・105・107)は沈線と刺突列点もしくは刺突文による文様構成をする。(106)は刺突列点のみを頸部にめぐらす。刺突は斜めからが大半で、竹の斜め切り口の形を呈する。(96)のように口辺から頸部におりる施文はIII-1-a<sub>1</sub>に似る様相である。(100)は大きな波状口縁をもち、突起部内側に「ノ」字状のつまみ出しがあり、沈線による曲線区画に地文と磨消帯を配し口縁沿いに刺突文をもつ。

4類 (第39図108~117 図版28~108~117) (110・116)を除き平口縁である。口縁部無文帯、胴部は地文のみの鉢形土器である。頸部に沈線区画をめぐらすものとないものがある。前者には(108)の不整撚糸文、(109)斜行撚糸文、(115・116)斜行縄文を胴部に施すもの、口縁は内湾

するものと、や、外反するものがある。なお(116)は口縁まで地文が認められる。後者には縦位の燃糸文をもつもの(111~113)で、(111)は弧状沈線が付加される、(117)斜行繩文、(114)網目状燃糸文等がある。この項に一括した土器は中期末~後期初頭かとみるが確定できない。

### III 群 繩文後期とみられる土器群を一括した。

1類 初頭に位置づけられると考えられるもので、鉢、浅鉢形が推察される。連鎖状隆線文、沈線区画文、ボタン状貼付文に刺突を付加するものが施文の主体となる。

a<sub>1</sub> (第39図118~130 図版28~118~130) 無文帶の口縁に縦位の連鎖状隆線文、沈線、刺突列点等を施すとともに、頸部に連鎖状隆線文、沈線等をめぐらすものが多い。胴部は斜行繩文、燃糸文による地文のみを施すものである。(119~121・128)はゆるい波状、波状口縁をもち、(121)を除き突起が二又状を呈する。なお(120)では一部交差するヒレ状である。これらの突起部分から頸部に向けて連鎖状隆線あるいは沈線による区画文をもつ、(122)は平口縁であるが文様構成が同様であり、(123~125)は、それぞれ頸部に列点刺突のある隆帶、口縁に刺突のある二又状突起、頸部に沈線をもち縦位の二点刺突をもつ、いずれも口縁が無文帶で体部は地文のみである。(119・120~122・128)のように頸部が逆「く」字状に張り出すのも特徴である。

a<sub>2</sub> (第30図51・52 第40図131~144 図版24~5・6 図版28~131 図版29~132~144)

口縁部の文様構成はa<sub>1</sub>と類似するが胴部にも文様が加わる。文様の基点には単数もしくは数個のボタン状貼付がなされ、刺突をもち貫通孔となるものもあり、複数の場合は横か縦位に貼付される。この基点から沈線、隆沈帶、連鎖状隆起線などによる八字状の弧状文様帶が胴部上半で横に展開するものが主体である。(図51・52)は全体の形を知り得る資料で、いずれも波状口縁で、(図51)では突起部に刺突がみられる。どちらも文様構成の基本は同じであり、頸部が外に強く張り出しいわゆる肩をもった鉢である。また(142・143)のように紡錘状の文様と推察されるものがある。

b (第40図145~150 第41図152~153 図版29~145~153) 沈線区画施文が主体で磨消手法を用いるものもある。(145)はS字の入組状の構成をし、(146・147・150・152・153)は地文を曲線で区画磨消し施文する。(150・151)のように地文に沈線方形区画をし、内帯を磨消、地文を残すなどの施文をなすものがある。

c (第30図53 図版24~4) 壺形の土器で摩滅のため判然としないが無地文とみられる。隆起線を頸部にめぐらせ、胴部に元字状の隆起線をもつ、この群に含めたが繩文中期に比定される可能性もある。

2類 平口縁および波状口縁をもつ浅鉢、鉢、注口土器などの器種が含まれる繩文後期中葉以後にみられる土器群である。細い斜行もしくは羽状繩文に沈線による区画をなし、ていねいな磨消手法を用いることが特徴である。

## — 大明神遺跡 —

a (第41図154~159 図版29~154~159) 横位に沈線をめぐらし磨消繩文を旋し、地文は細い羽状繩文が主体となる。(154)のように口縁に小突起をもつものがある。

b (第41図160~167 図版29~160~167) 斜行もしくは羽状繩文を地文とし、沈線で区画し磨消手法を用いるが刻目文帯を合せもつ、刻目文帯は口縁と頸部近くにもつようである。

c (第21図4・7 第31図1・9 第41図168~179 図版18~3・2 図版31~1・9 図版29~168~179) 比較的頂点の尖る波状口縁と平口縁のものがあり、細い斜行繩文もしくは羽状繩文、無文に曲線による沈線区画を施すものなどがある。磨消手法を用いたもので、文様帶交点に刻目のある張瘤をもつもの(図4・図9・176)があり、(住1・住9・169~171)は口縁突起をはさむ両側に刻目のある小突起が付加される。(176~178・図7)無地文に曲線施文をもつ、(図4)は注口土器である。

3類 Ⅲ群に伴うと考えられる櫛目状、斜行繩文の地文の鉢、深鉢と推察されるものを一括した。(180)は縦、(181~183)斜め、(185~188・図21)横、(189・190)は流線状の櫛目文があり、口縁資料でみる限り、すべて口縁から施文している。(図1)は三叉状の突起を6個所もつとみられる波状口縁で、口縁無文帯で胴部全面に無節斜行繩文を施す。口縁や、外反し、頸部でくびれ、上半で胴張りする深鉢である。

4類 Ⅲ群に伴う無文土器と、時期を確定し得ない無文土器を一括した。

a (第21図5・6 第22図11 第29図48 図版18~6・7 図版19~6 図版25~2) 盆形の小形土器である。(図48)は手づくね成形、(図5・図6・図11)は内外面ともていねいな磨きを施す、(図6)は丸底、(図5・図11)は丸底に小円状の窪みをつけ底部を示す、口縁は(図5)で二又状突起を4個所もち、(図11)は外反する。(図48)は包含層からの出土で他は住居跡床面出土である。

b (第21図2 第29図49 第30図54 第42図191 図版18~1 図版25~1・3 図版30~191) 鉢形の土器で、(図49・図2)は大小の別はあるが、胴部が直に外傾する桶鉢状を呈し、いずれも横ないし斜方行の撫状工具による調整痕を内外に認める。(図54)は胴部に丸味をもち口縁は直口する、内外ともよく磨かれ、底面に木葉压痕を残す。(191)は丸味のある外張りの肩をもち口縁が短かく外反する、内外とも磨きによる滑らかな器面で朱色顔料の塗布痕がある。

三様の形態をもつ土器であるが、(図2)は後期に比定できる住居跡出土であり、類似する(図59)とともに後間に比定できよう。他は確定できないが、中期末から後期のものと考えられる。

IV群 繩文晩期の土器群で、鉢、台付鉢などがみられる。平口縁で口唇が小波状を呈するもの、更に二又状の小突起を配置するものがあり、内湾ぎみのもの、直口するもの、肩をもち上が直口するものなどがある。また文様帶が口縁のみで胴部に斜行繩文をもつものが大半であ

る。

1類 (第42図19・193 図版30-192・193) 三叉文を施す。(192)は三叉文の一方がのびて円形をつくり、(193)は三叉文がくずれて分枝する。いずれも沈線による施文である。

2類 (第30図55・56 第42図194-198 第43図199-205 図版25-4・5 図版30-194-199-205)

羊歯状文を施す土器で、鉢形が多い。羊歯状文の下に2条の沈線をめぐらし胸部と区画するものが多い、(194)のように胸部下半にも沈線をめぐらし、以下を磨消するものもある。(図56)台付鉢は胴下端で浅い沈線をめぐらし、以下台部まで磨消する、台部には刻目のある2条の隆帯をもつ。(205)は磨かれた無文に曲線的浮彫が認められる胸部破片であり、雲形文、X字文などの一部かとみられるもので朱色顔料の塗布痕が認められる。

3類 (第43図200-204 図版30-200-204) 羊歯状文が簡略化され列点文や刻目文をもつもので、(200)は口辺に羊歯状痕をもちながら、平行沈線間の刻目文化が出て羊歯状文が簡略化し列点文の様相になり、(201-203)では更に退化し平行沈線間の刻目文様に移る。

4類 (第43図206-210 図版30-206-210) 鉢形の粗製土器とみられる一群で、口縁部に数本の平行沈線をめぐらし、口唇は小波状を呈する。(207)は口縁内側に1条の沈線をめぐらす。

V群 斜行繩文地文のみの深鉢と小形鉢を一括した。形態的には上半で胴がやや張り口縁が内湾するものと、胴が直に外傾するものがある。底は直にねけるもの、外に張り出るものがあり、内面に縦または斜方向と一部横方向への磨きを施すものがほとんどである。

1類 (第26図33 第27図35・37 第29図46・47 図版22-3 図版23-1・3) 無節斜行繩文I-rを施す。復元資料はすべて口縁を欠損する。(図37)は胴部が直に立ち円筒状を呈し他と異なる形をもつ、(図46)は底部が外に張り出し底面に籠ノ葉状の圧痕をもつ、同様の圧痕は、(図35・図37・図47)にも認められる。

2類 単節斜行繩文を施す土器群である。

a (第23図16・17・19 第24図23 第26図32 第27図36・38・39 第28図40-42 第29図43-44 第29図50 図版20-1・3・5 図版21-1 図版22-6 図版23-2・4・5 図版24-1 図版21-1) 単節斜行繩文L-RのもでV群の中で最も個体数が多い。

(図16・図19・図23・図43・図50)は底部を欠損し、(図16・図43・図50)は頸部に弱い屈曲をもち口縁が直に立つ、内傾など若干の変化をもつ、中で(図16)は部分的に繩ころがしの方向が異なり、口縁の一部に羽状を呈する部分がある。

(図17・図38・図50)は胴部のみ、(図36・図40・図41・図44)は口縁を欠き、(図39)は完形である。(図44)で底部が外に張り出す様相をもつ。底部を残す土器は、すべて底面に籠ノ葉状の圧痕を認める。

b (第25図25・27 第26図30 第28図24・42 図版21-4 図版22-5 図版22-1 図版

## — 大明神遺跡 —

20-2) 単節斜行縄文R-Lのもので、(図27)は一部に無節部分が認められる。(図24・図25・図30・図42)は底面に筈ノ葉状の圧痕が認められる。

3類(第23図18・図版20-4) 単節斜行縄文L-Rの小形鉢で、胴部上半が張り出し頸部から口縁が直口か若干外反ぎみの様相をもつ。

4類(第22図8・10・12・図版19-2・4・5) 複節斜行縄文R-L<sup>↑</sup>を施すもので、(図8・図10・図12)は胴部のみを残し、いずれも住居跡複式炉に埋設された土器である。(図45)は底部がや・外に張り出し底面に筈ノ葉状の圧痕をもつ。

VI群 斜行縄文以外の地文のみの破片を一括したもので、時期差のあるものが含まれることを付す。また各類の施文は、更に細分できるが省略する。

1類(第43図211~219・図版30-211~219) 木目状撚糸文

2類(第43図220~224・図版30-220~224) 羽状縄文

3類(第43図225・第44図226~231・図版30-225~231) 網目状撚糸文

4類(第44図232~239・図版30-232~239) 撚糸文

5類(第44図240~243・図版30-240~243) 不整撚糸文

6類(第31図3・図版31-3) 異条斜行縄文

土偶(第44図244・図版25-6) いわゆる遮光器土偶の目部分の破片で、朱色顔料を塗布した痕跡を残す、1点のみの出土である。

### 土器の編年上の位置

以上の分類を他遺跡の類例と比較し、編年上に位置づけると次のようになる。

I群1類 前期大木1式~2a式 大館町遺跡(1978) II群1類、崎山弁天遺跡(昭49) II群1類、牧田貝塚(昭46)1群などに類例がある。

2類a 前期大木6式 天神が丘(昭49)1群、大館町遺跡II群8類、崎山弁天遺跡II群2類、牧田貝塚6群などに類例がある。

2類a<sub>2</sub> 前期大木6式 天神が丘1群、大館町遺跡II群9類、崎山弁天遺跡II群2類、牧田貝塚6群などに類例がある。

2類b 前期大木6式 大館町遺跡III群7・9類、崎山弁天遺跡II群2類、牧田貝塚6群などに類例がある。

3類a 前期円筒下層系(前期末葉) 大館町遺跡II群11類などに類例がある。

3類b 前期円筒下層系(前期末葉) 天神が丘6群、大館町遺跡II群10類などに類例がある。

II群1類 中期大木7式 大館町遺跡III群9類、IIIb群、天神が丘3・4群、崎山弁天遺跡

III群1・2類などの類例がある。

2類 中期大木8a～8b式 貝鳥貝塚(1971)I群1・2類、大館町遺跡III群、崎山弁天遺跡III群3・4類などの類例がある。

3類a<sub>1</sub> 中期大木9式 貝鳥貝塚I群3類、八天遺跡(昭53)II群1類、崎山弁天遺跡III群5類Aなどの類例がある。

3類a<sub>2</sub> 中期大木9式 貝鳥貝塚、八天遺跡の前出の群類、崎山弁天遺跡III群5類Bなどの類例がある。

3類b<sub>1</sub> 中期大木10式 貝鳥貝塚I群4類、八天遺跡II群2・5類、崎山弁天遺跡III群6類A、五十瀬神社前遺跡(昭54)II群1類などの類例がある。

3類b<sub>2</sub> 中期大木10式 貝鳥貝塚、五十瀬神社前遺跡の前出群類、八天遺跡3類、崎山弁天遺跡III群6類Bなどの類例がある。

3類c 中期大木10式 八天遺跡II群3・4類、五十瀬神社前遺跡II群2類などの類例がある。

III群1類a<sub>1</sub> 後期初頭 貝鳥貝塚II群1類、八天遺跡II群7・8類、崎山弁天遺跡IV群1類などの類例がある。

1類a<sub>2</sub> 後期初頭 貝鳥貝塚II群1類、八天遺跡II群9類、崎山弁天遺跡IV群1・2類などの類例がある。

1類b 後期初頭 貝鳥貝塚II群2～4類、八天遺跡III群1～7類、崎山弁天遺跡IV群2・3類などの類例がある。

2類a 後期中葉 貝鳥貝塚III群1類、八天遺跡IV群1類、崎山弁天遺跡IV群4類、南小梨蛇王遺跡(1977)I群1・2類などの類例がある。

2類b 後期中葉 貝鳥貝塚III群5類、八天遺跡IV群7類、崎山弁天遺跡V群6類などの類例がある。

2類c 後期中葉 貝鳥貝塚III群1・5類、八天遺跡IV群2～6類、崎山弁天遺跡V群1類、南小梨蛇王遺跡I群1・2類などの類例がある。

3類 後期中葉 貝鳥貝塚III群5類

2・3類の土器の中には先の鋭く尖る口縁突起や張瘤も出現し後期末葉に近い様相の土器もある。

4類a 後期中葉 I-1号住居跡、I-5号住居跡で、III群2類cなどと共に伴したもののみが比定できる。

4類b 後期中葉 4類aと同様である。

## — 大明神遺跡 —

IV群1類 晩期大洞B式

2類 晩期大洞BC式

3類 晩期大洞BC式～C式

この類には羊歯状文が簡略され平行沈線に刻目へと移行する流れの中にあるものも含まれる。

4類 晩期

V群 中期末葉？ 大半がI区での出土で、I区には中期末葉に比定される住居跡が多く、更にそれらの住居跡の埋土上面に埋設されていた土器もあったことから、中期末葉前後の粗製土器かと推察できるものが多い。

### I・II区の出土傾向

I区 各分類型式に属する土器の出土をみると、I群の土器は縦体的に少なく、I-1号住近辺の包含層で多く検出されており、II区からの流れ込みも考えられる。圧判的に多く、出土土器の主体となるのは、II群3類とIII群およびV群土器である。

すなわち、中期の特に後半の土器と後期初頭から中葉にかける土器である。このことは、検出された住居跡が、すべて中期後半から後期後半に比定されることと結びつく。またIV群の晩期の土器は数的には少量であったが、Be83～Be89グリット、特に後者に集中して出土した。直接関係する遺構は検出できなかったが、調査区外に近接した場所であり付近に関連遺構の存在の可能性もある。

包含層出土の遺物は各型式に及んでおり、特に層位的な状況を把握できるものではなく、混在するものであった。

なお、V群土器の底部に笹ノ葉状の圧痕をもつものが多く、観察可能な底部破片を点検した結果、木葉圧痕62、笹ノ葉状圧痕152とでた。笹ノ葉状圧痕をもつものはII区では1点も認められなかった。

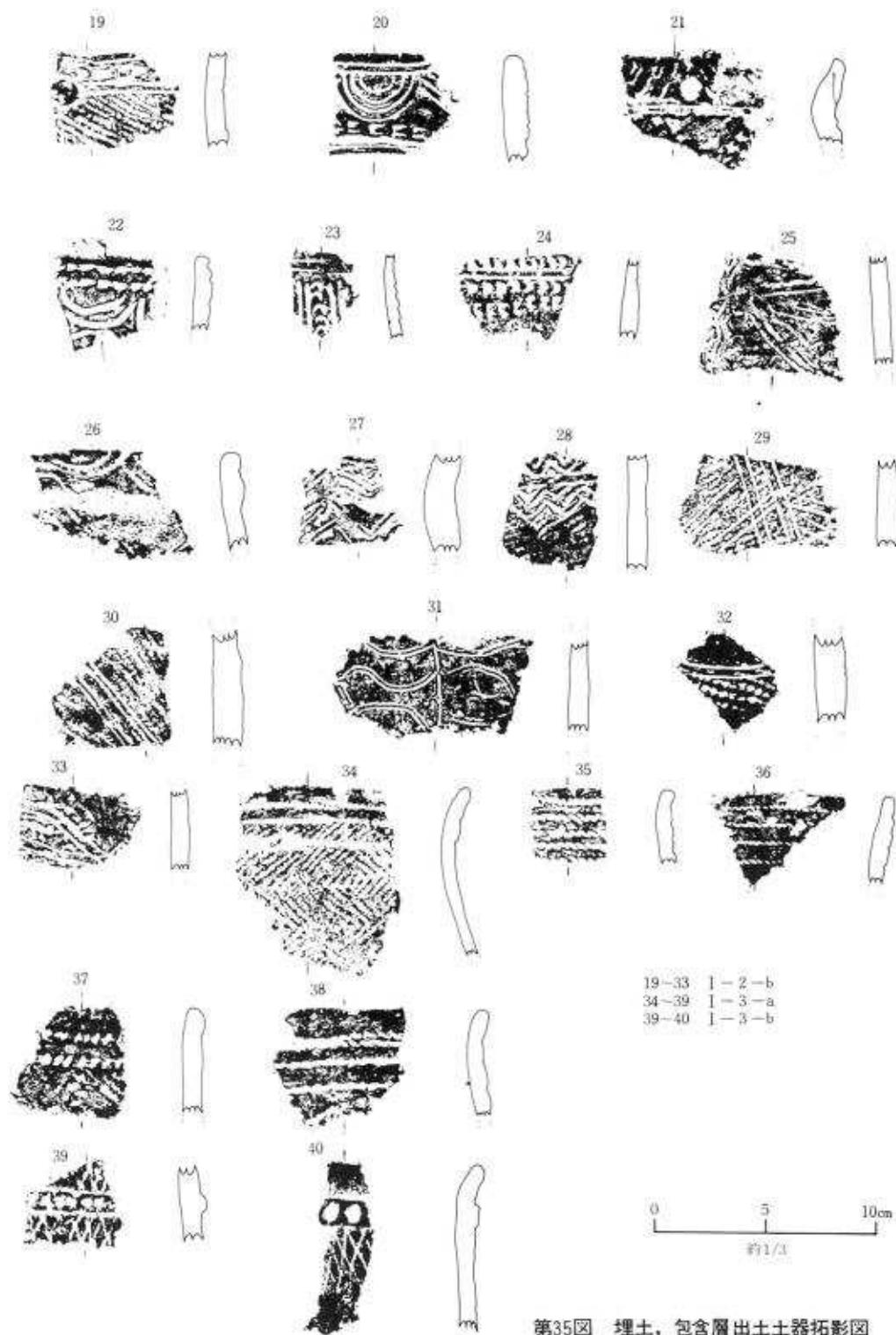
II区 I群土器の前期末が多く出土しており、II群に属する中期初頭のものが少数出土している。VI群とし時期比定をしなかった土器群の中で、II区出土の土器は、前期末から中期初頭にかかるものとみて大きな誤りはないと考える。

土器出土は、包含層で最も多かった。更にA区住居跡検出周辺とII-4号住居跡周辺に集中している。

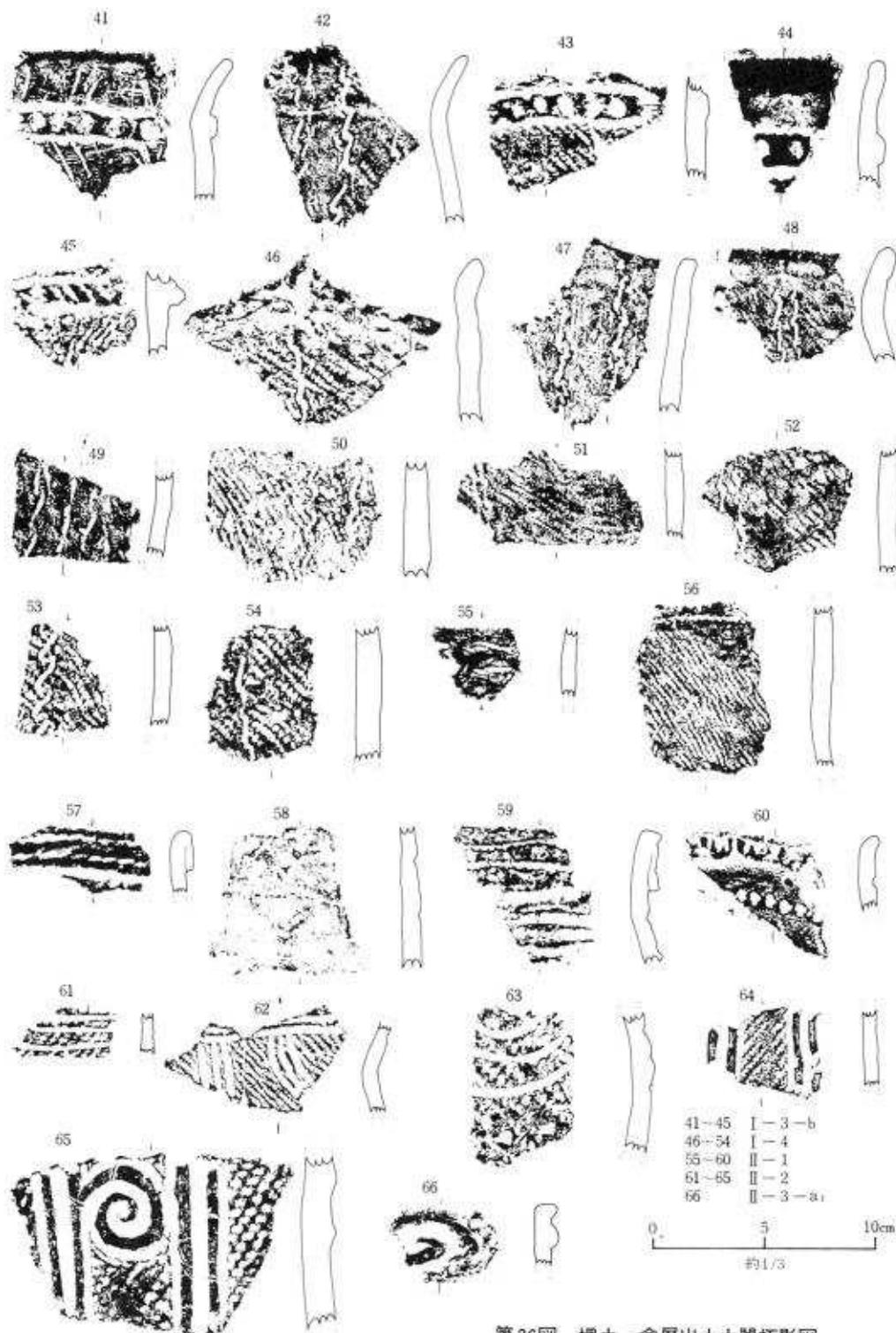
— 天明神道跡 —



第34図 埋土、包含層出土土器拓影図



第35図 埋土、包含層出土土器拓影図



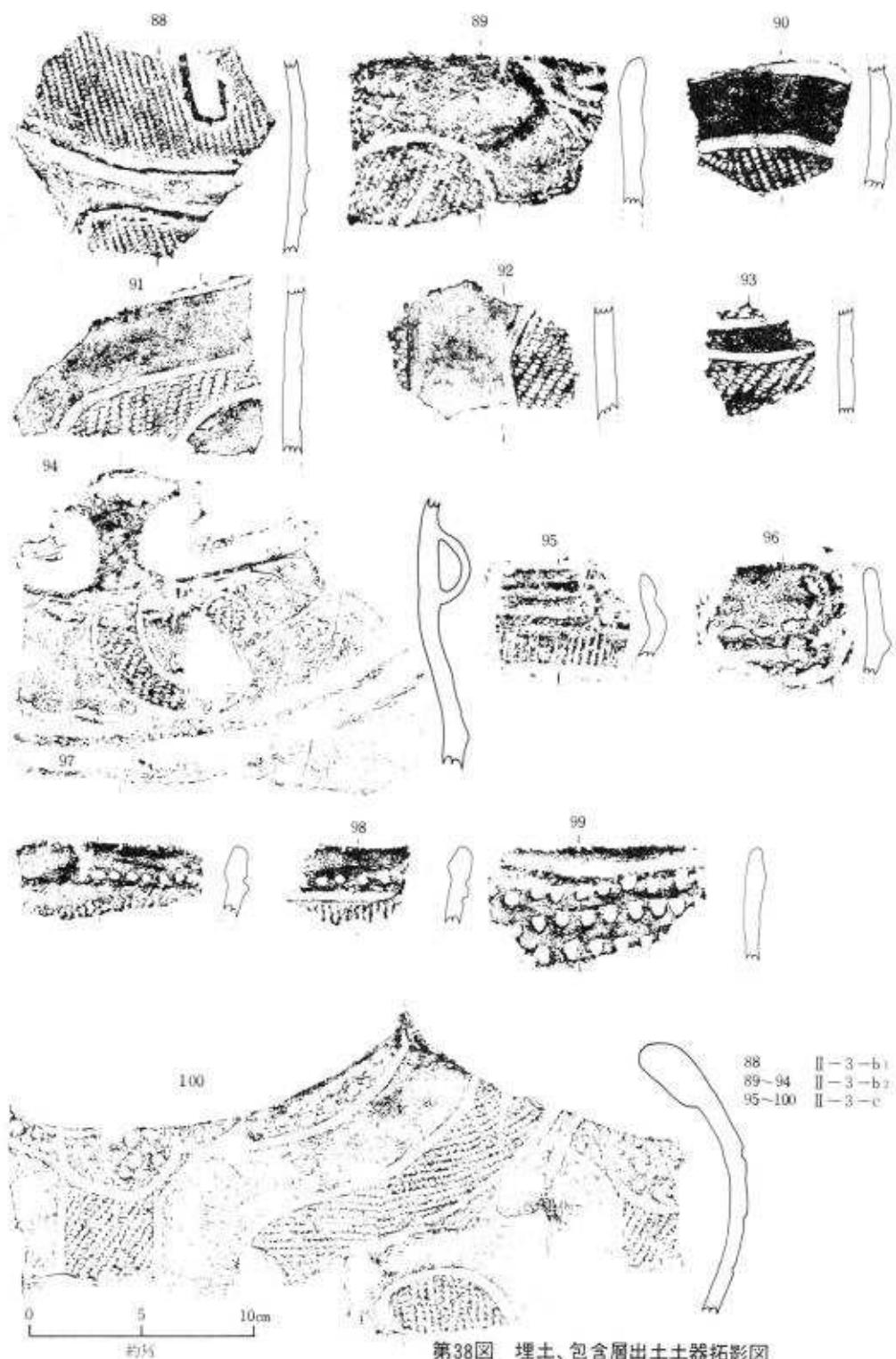
第36図 埋土、含層出土土器拓影図

— 大明神道跡 —



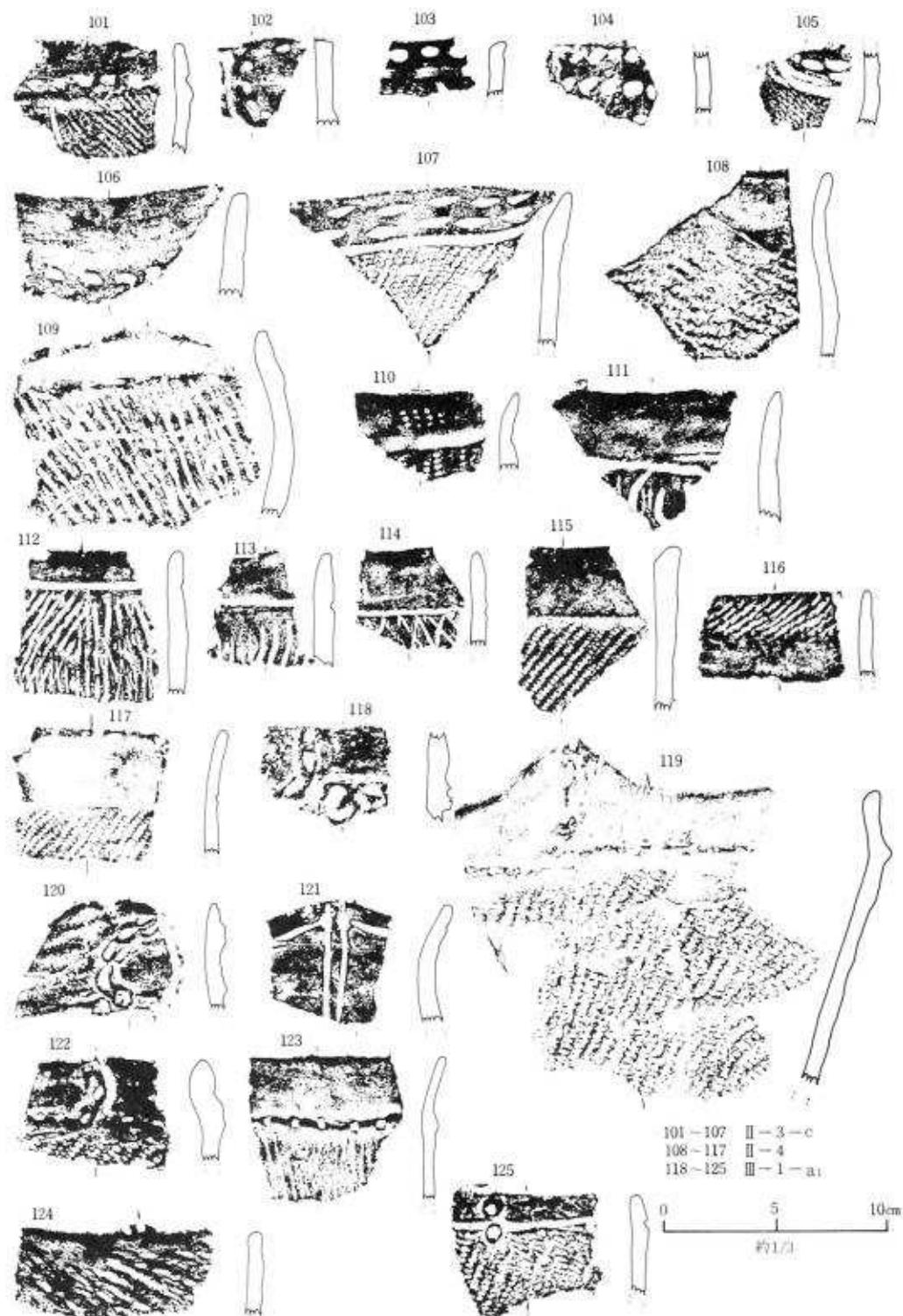
第37図 埋土、包含層出土土器拓影図

— 大明神遺跡 —

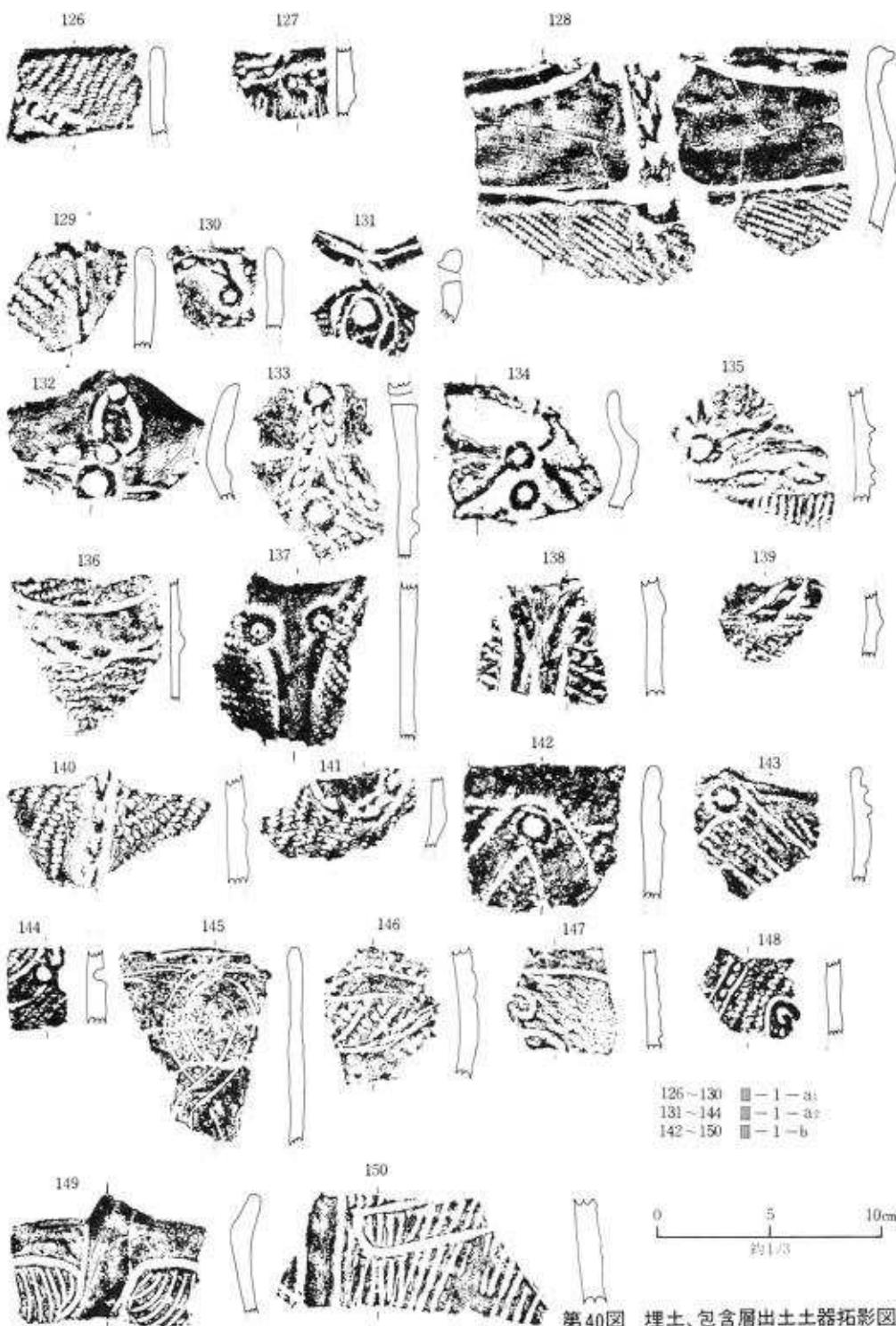


第38図 埋土、包含層出土土器拓影図

— 大明神遺跡 —

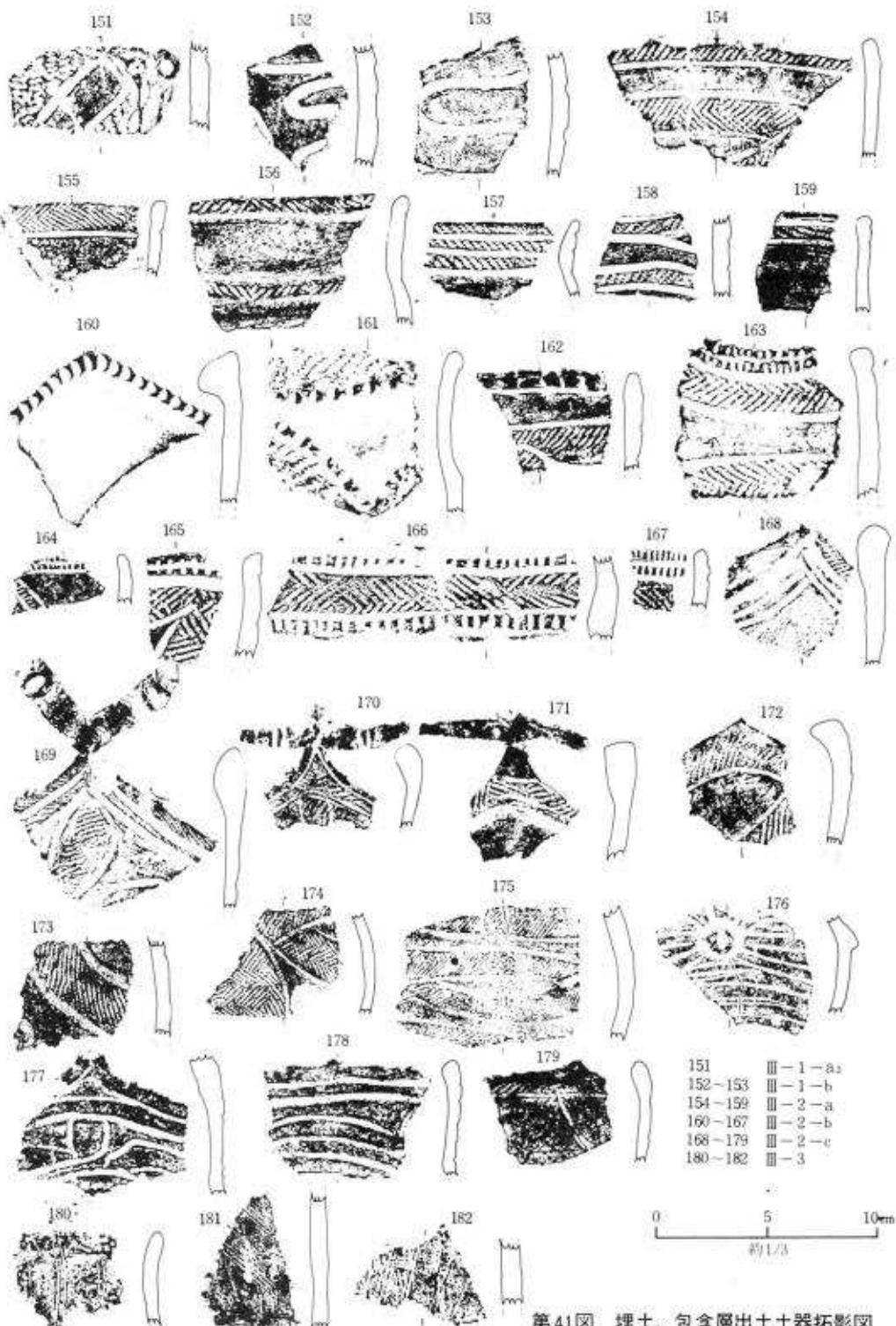


第39図 埋土、包含層出土土器拓影図

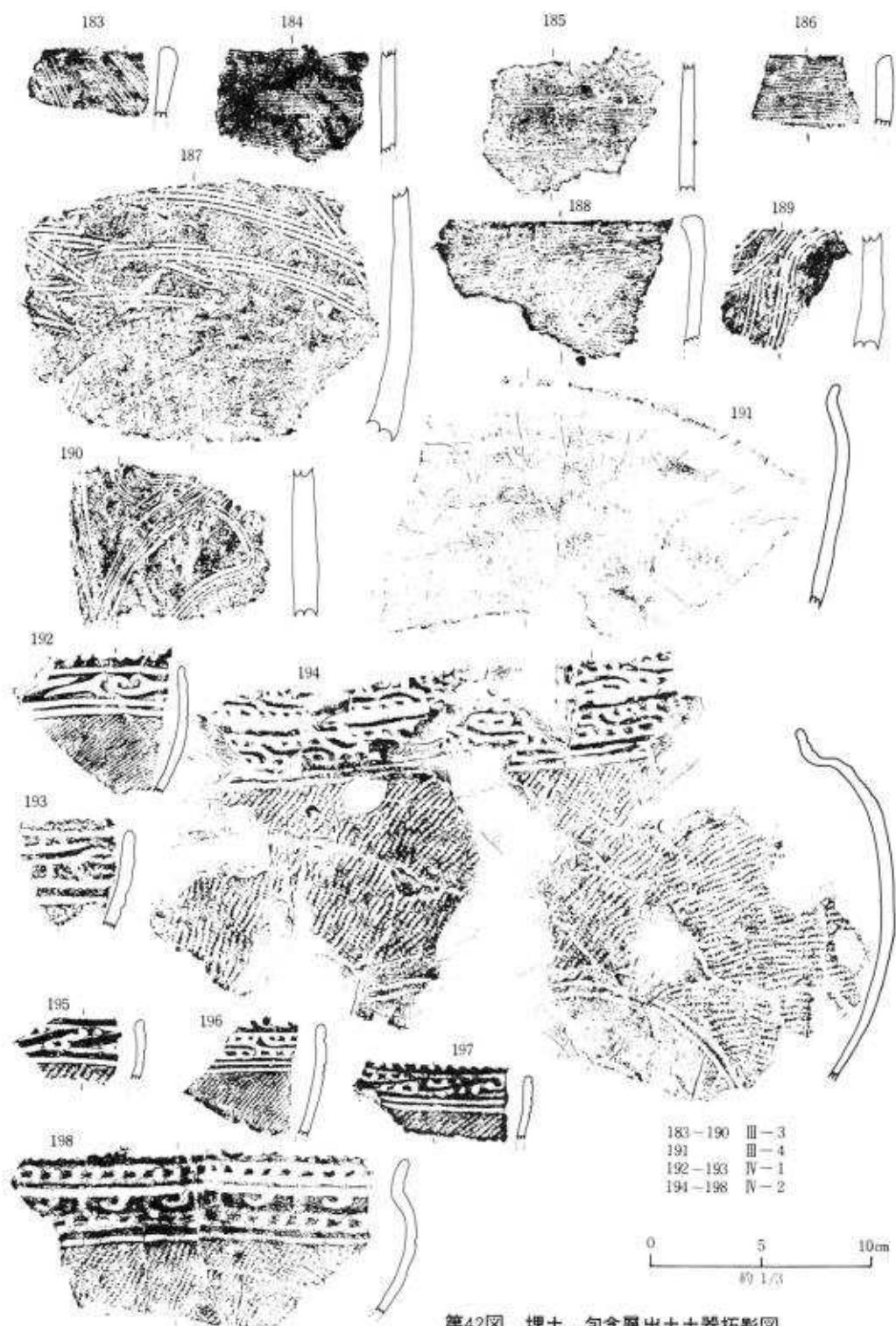


第40図 埋土、包含層出土土器拓影図

— 大明神道跡 —

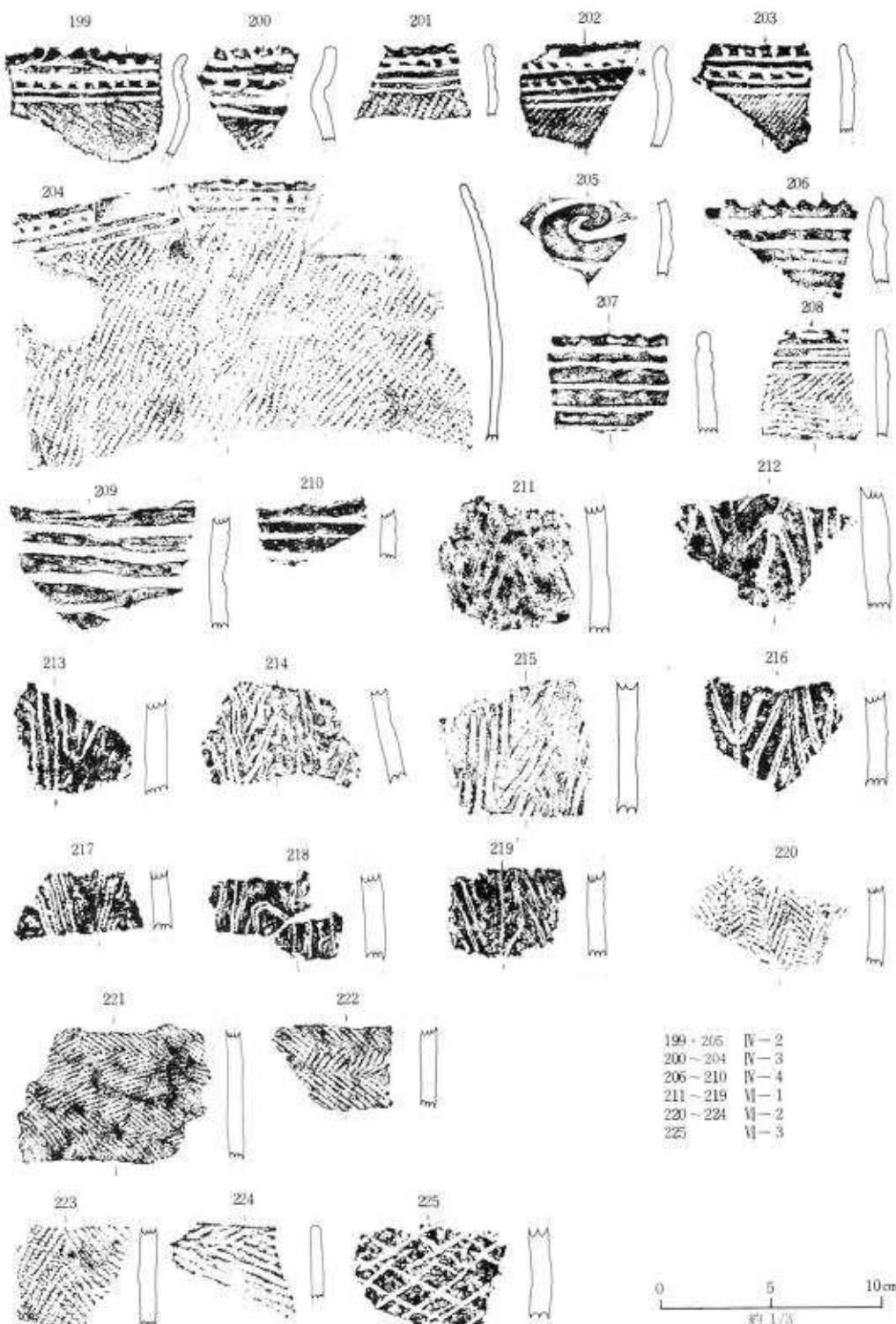


第41図 埋土、包含層出土土器拓影図

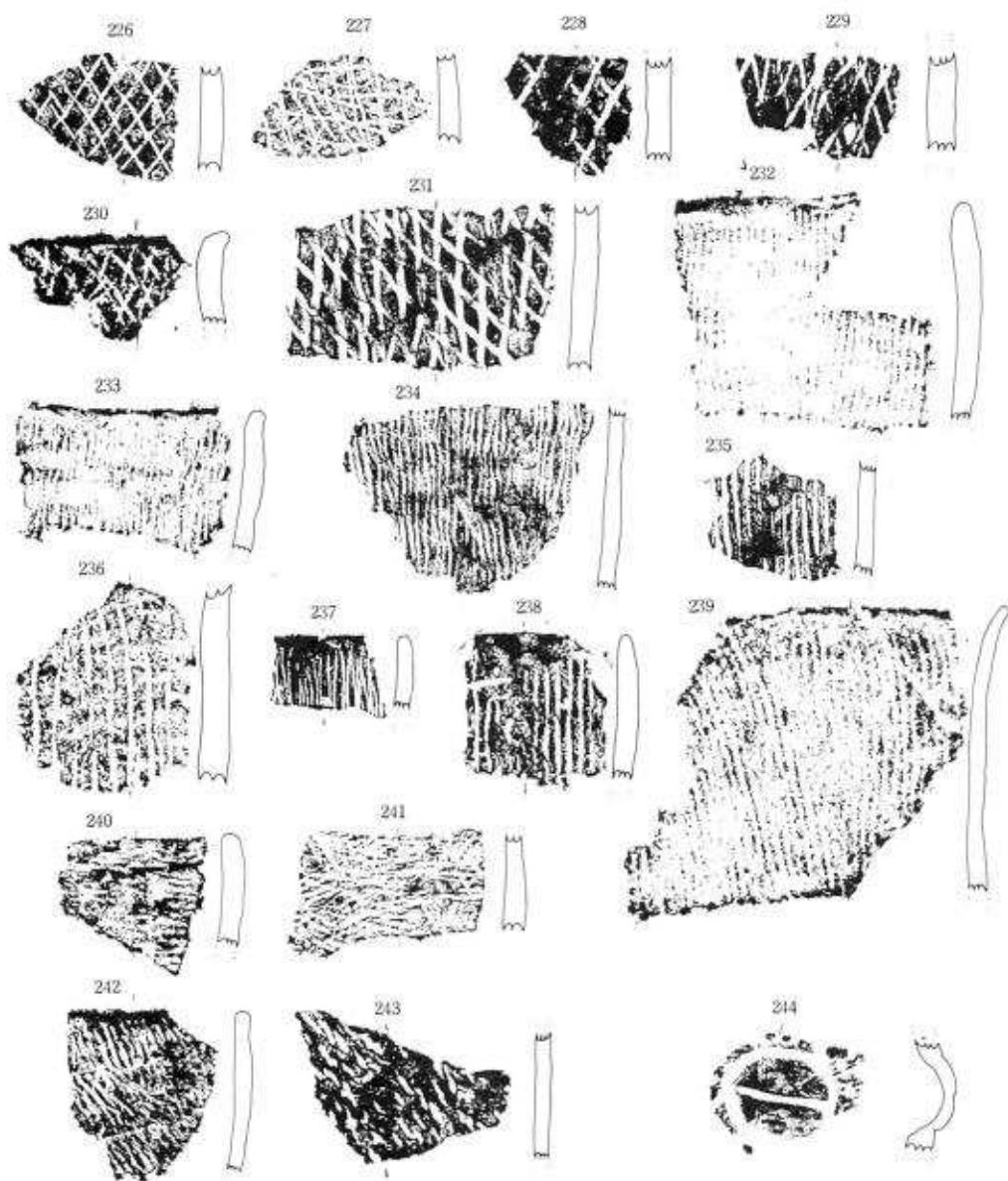


第42図 埋土、包含層出土土器拓影図

— 大明神遺跡 —



第43図 埋土、包含層出土土器拓影図



226~231 VI-3  
232~239 VI-4  
240~243 VI-5  
244 土偶

第44図 埋土、包含層出土土器拓影図

0 5 10cm  
約1/3

表覽一測器土壤實驗

第1表 (つづき)

実測 番 号	國 版	出 土 地 點	出土層位	分 類	器 種	器 高 (cm)	口 徑 (cm)	底 径 (cm)	最大 幅 (cm)	外 形 値		備 考
										測 定 値	施 用 度	
25	22-4	1-6号 (Ae65)埋設	-	II-3-b <sub>4</sub>	鉢	(14.6)	-	(10.3)	16.8	に-5.1	7.5YR	R-L < <sup>r</sup> (複) 墓頂変形度形状
26	30	22-1 1-5号 (Ae68-1)埋設	-	V-2-b	深 鉢	(25.8)	-	11.0	(22.8)	赤	10Y	R-L (單) 底面は赤く葉状の丘陵
26	31	22-2 1-5号 (Ae68-2)埋設	-	II-3-b <sub>5</sub>	深 鉢	41.3	28.2	12.0	30.0	明 黄 紅	7.5YR	R-L (單) 口縁に即のせい隙起線と 刻字 (1) 距離
26	32	22-6 1-8号 (Be83-5)埋設	-	V-2-a	深 鉢	(23.8)	-	-	(30.0)	棕	7.5YR	L-R (單)
26	33	22-3 1-5号 (Ae68-3)埋設	-	V-1	深 鉢	(19.4)	-	10.0	(28.4)	赤	10Y	無筋斜行繩文 <sup>r</sup> -r 無筋斜行繩文
26	34	22-7 1-8号 (Be83-4)埋設	-	III-1-b	深 鉢	(17.8)	-	-	(26.9)	明 漆 紅	10YR	無筋斜行繩文 <sup>r</sup> -r 無筋斜行繩文
27	35	23-1 1-9号 (Bd77-1)埋設	-	V-1	深 鉢	(29.3)	-	14.0	(25.0)	棕	7.5YR	無筋斜行繩文 <sup>r</sup> -r 無筋斜行繩文
27	36	23-2 1-9号 (Bd77-2)埋設	-	V-2-a	深 鉢	(17.0)	-	13.0	(22.0)	に-5.1	7.5YR	L-R (單) 底面は赤く葉状の丘陵
27	37	23-3 1-9号 (Bd77-3)埋設	-	V-1	深 鉢	(25.0)	-	15.0	(20.0)	棕	7.5YR	無筋斜行繩文 <sup>r</sup> -r 無筋斜行繩文
27	38	23-4 1-10号 (Ba89)埋設	-	V-2-a	深 鉢	(22.5)	-	-	24.2	棕	7.5YR	L-R (單)
27	39	23-5 1-11号 (Ba86)埋設	-	V-2-a	深 鉢	37.5	24.2	10.2	24.8	赤	10Y	L-R (單) 底面は赤く葉状の丘陵
28	40	23-6 1-12号 (Be86)埋設	-	V-2-a	深 鉢	(36.5)	-	9.5	24.1	赤	10Y	L-R (單) 底面は赤く葉状の丘陵
28	41	23-7 1-12号 (Be86)埋設	-	V-2-a	深 鉢	(25.2)	-	11.8	(23.6)	棕	7.5YR	L-R (單) 底面は赤く葉状の丘陵
28	42	- 1-9号 住 球 土	埋 土	V-2-b	深 鉢	(22.1)	-	9.3	(23.5)	浅 黄 棕	7.5YR	無筋斜行繩文 <sup>r</sup> -r
29	43	24-1 1-9号 住 球 土	埋 土	V-2-a	深 鉢	(33.5)	18.2	(12.4)	20.0	灰 白	7.5YR	L-R (單) 底面は白く葉状の丘陵
29	44	- 1-9号 住 球 土	埋 土	V-2-a	深 鉢	(17.4)	-	12.7	(18.9)	に-5.1	7.5YR	L-R (單) 底面は白く葉状の丘陵
29	45	- 1-9号 住 球 土	埋 土	V-4	深 鉢	(12.3)	-	13.4	(22.4)	浅 黄 棕	7.5YR	R-L < <sup>r</sup> (複) 底面は白く葉状の丘陵
29	46	- 1-9号 住 球 土	埋 土	V-1	鉢	(9.2)	-	12.0	(13.6)	に-5.1	7.5YR	無筋斜行繩文 <sup>r</sup> -r
29	47	- 1-9号 住 球 土	埋 土	V-1	深 鉢	(16.3)	-	12.2	(20.6)	に-5.1	7.5YR	無筋斜行繩文 <sup>r</sup> -r 無筋斜行繩文
29	48	25-2 1K	包含層	III-4-a	孟 形 鉢	3.7	6.2	1.4	-	褐 土	7.5YR	無文、手づけ仕上げ
29	49	25-1 1 = Ae09	B	III-4-b	小形 鉢	7.0	10.0	3.4	-	に-5.1	7.5YR	土器内窓
29	50	21-1 1-9号 住 球 土	埋 土	V-2-a	深 鉢	(45.6)	21.6	(15.0)	22.6	に-5.1	7.5YR	L-R (單)
30	51	24-6 1-9号 住 球 土	埋 土上部	III-1-a <sub>2</sub>	鉢	22.0	12.8	8.4	19.5	褐	7.5YR	底付4.6cm、竪部に脚突、L-R (單)
30	52	24-5 1-9号 住 球 土	埋 土上部	III-1-a <sub>2</sub>	鉢	21.0	-	(6.2)	18.4	浅 黄 棕	7.5YR	底付4.6cm、竪部付付L-R < <sup>r</sup> (複)
30	53	24-4 1-9号 住 球 土	埋 土上部	III-1-c	鉢	(17.4)	7.8	11.6	17.7	に-5.1	2.5YR	陶器文
30	54	25-3 1-Be83	-	III-4-b	深 鉢	(12.8)	21.6	9.0	22.0	灰 紫 紫	7.5YR	無文、タヌリ痕、木葉痕
30	55	25-5 1-Be89	-	IV-2	深 鉢	(12.0)	14.8	-	17.0	12.3v	7.5YR	L-R (單) 底面に半葉状文
30	56	25-4 1-Be89	-	W-2	台付鉢	12.6	13.8	8.0	14.5	12.3v	7.5YR	口縁に泡6コ、R-L (單) 底面に半葉状文

第2表 住 居 跡 出 土 器 片 一 覧 表

拓影図	番号	図版	出土遺跡	出土層位	分類	部位	色	調査	施	面文		備考
										外	内	
31	1	31-1	I-1号柱	床面	II-2-c	口縁	に赤い褐	7.5YR	突起、沈没文			
—	—	—	I-2号柱	床面	II-3-b <sub>2</sub>	口縁	に赤い褐	7.5YR	区画模様文、隆起文、磨耗波形文			
31	2	31-2	I-3号柱	床面	II-3-b <sub>2</sub>	脚部	に赤い褐	7.5YR	隆起文、燃耗文			
31	3	31-3	I-4号柱	床面	V-6	脚部	に赤い褐	7.5YR	黒糸糸行織文			
31	4	31-4	I-4号柱	床面	V-1	口縁	に赤い褐	5YR	無筋行織文			
31	5	31-5	I-4号柱	床面	V-2-b	口縁	に赤い褐	7.5YR	L-R(单)			
31	6	31-6	I-4号柱	床面	II-3-b <sub>2</sub>	脚部	に赤い褐	7.5YR	区画模様文、R-L(单)			
31	7	31-7	I-4号柱	床面	II-3-b <sub>2</sub>	脚部	に赤い褐	7.5YR	区画模様文、R-L<7(单)			
31	8	31-8	I-5号柱	床面	II-3	脚部	に赤い褐	7.5YR	なし			
31	9	31-9	I-5号柱	床面	II-2-c	口縁	に赤い褐	5YR	燃耗文、點絞文、隆起文、彩状織文			
31	10	31-10	I-6号柱	床面	II-3-b <sub>2</sub>	脚部	に赤	2.5YR	隆起文、区画模様文			
31	11	31-11	I-7号柱	床面	II-2	口縁	浅黄褐色	7.5YR	貼付文、隆起文、R-L(单)			
31	12	31-12	I-7号柱	床面	II-2	口縁	浅黄褐色	7.5YR	隆起文、うさぎ文、R-L(单)			
31	13	31-13	I-7号柱	床面	II-2	脚部	浅黄褐色	7.5YR	うさぎ模様文、隆起文			
31	14	31-14	I-7号柱	床面	II-2	口縁	灰白	10YR	うさぎ模様文、R-L(单)			
31	15	31-15	I-7号柱	床面	II-2	口縁	に赤い褐	7.5YR	貼付文、隆起文、L-R(单)			
31	16	31-16	I-7号柱	床面	II-2	口縁	灰黄褐色	10YR	隆起文、R-L(单)			
31	17	31-17	I-8号柱	床面	II-3-c	脚部	に赤い褐	7.5YR	刺突列点文			
31	18	31-18	I-8号柱	床面	II-3-b <sub>2</sub>	脚部	に赤い褐	7.5YR	沈締文、L-R(单)			
31	19	31-19	I-8号柱	床面	II-3-b <sub>2</sub>	脚部	明赤褐色	5YR	沈締文、L-R(单)			
31	20	32-20	II-1号柱	床面	VI-1	脚部	浅黄褐色	7.5YR	燃耗文			
31	21	32-21	II-1号柱	床面	VI-1	脚部	灰	10YR	燃耗文			
31	22	32-22	II-2号柱	床面	VI-1	口縁	に赤い褐	7.5YR	本日燃耗文			
31	23	32-23	II-3号柱	床面	VI-1	脚部	に赤い褐	5YR	燃耗文			
31	24	32-24	II-2号柱	床面	VI-3	脚部	浅黄褐色	7.5YR	燃耗文			
31	25	32-25	II-2号柱	床面	VI-3-b	脚部	に赤い褐	7.5YR	多輪経糸体の回転、貼付文			
31	26	32-26	II-2号柱	床面	I-4	脚部	赤	10YR	綴緒文、R-L(单)			
32	27	32-27	II-3号柱	床面	I-2-b	口縁	に赤い褐	5YR	貼付文、指頭压痕文、半纏竹管山形文			
32	28	32-28	II-3号柱	床面	I-3-a	口縁	に赤い褐	5YR	沈締文、L-R(单)			
32	29	32-29	II-3号柱	床面	I-3-b	口縁	赤	10YR	貼付文、指頭压痕文、燃耗文			
32	30	32-30	II-4号柱	床面	VI-3	脚部	に赤い褐	5YR	燃耗文			
32	31	32-31	II-4号柱	床面	VI-3	脚部	に赤い褐	5YR	燃耗文			
32	32	32-32	II-4号柱	床面	I-3-b	口縁	赤	5YR	貼付文、指頭压痕文			

第3表(その1) 包含層・住居跡埋土等の土器片一覧表

指紋	番号	図版	出土地点	出土層位	分類	部位	外 色 調		施 文	備 考
							7.5YR	7.5YR		
34	1	26-1	I-Ae f 06	-	I-1	頭部	橙	7.5YR	単筋斜行織文 L-R	機械土器
34	2	26-2	I-Ae f 06	-	I-1	口縁	12.5YR	7.5YR	結束斜行織文、有孔	機械土器
34	3	26-3	I区	-	I-1	脣部	12.5YR	7.5YR	結束斜行織文	機械土器
34	4	26-4	I-2区E	埋	I-1	脣部	橙	5YR	羽状織文	機械土器
34	5	26-5	II-A区	I	I-2-a <sub>1</sub>	口縁	頭部	7.5YR	山形突起、ゼタ状點付文、山形沈織文	
34	6	26-6	I-1区E	埋	I-2-a <sub>1</sub>	口縁	12.5YR	5YR	指頭丘織文、隆沈織文、複節柳格文	
34	7	26-7	II-A区	I	I-2-a <sub>1</sub>	口縁	12.5YR	5YR	山形突起、指頭丘織文、複節柳格文	
34	8	26-8	I-1区E	埋	I-2-a <sub>1</sub>	口縁	12.5YR	5YR	貼付文、指頭丘織文、沈織文	
34	9	26-9	II-A区	I	I-2-a <sub>1</sub>	口縁	12.5YR	5YR	貼付文、弱付文、波折文、斜行織文 R-L < P	
34	10	26-10	II-A区	I	I-2-a <sub>2</sub>	口縁	12.5YR	5YR	鶴嘴の沈織文、刺突列点文	
34	11	26-11	I-1区E	埋	I-2-a <sub>2</sub>	脣部	橙	7.5YR	沈織文、山形沈織文	
34	12	26-12	I-1区E	埋	I-2-a <sub>2</sub>	口縁	12.5YR	5YR	刺突文、山形沈織文	
34	13	26-13	I-1区E	埋	I-2-a <sub>2</sub>	口縁	頭部	5YR	複合口縫	
34	14	26-14	II-A区	I	I-2-a <sub>2</sub>	口縁	12.5YR	5YR	複合口縫	
34	15	26-15	II-A区	I	I-2-a <sub>2</sub>	口縁	12.5YR	5YR	内外面黒変態?	
34	16	26-16	I-1区E	埋	I-2-b	口縁	頭部	5YR	複合口縫、沈織	
34	17	26-17	II-A区	I	I-2-b	口縁	頭部	5YR	複合口縫、指頭丘織文	
34	18	26-18	II-A区	I	I-2-b	口縁	12.5YR	5YR	複合口縫文、斜行織文	
35	19	26-19	II-A区	I	I-2-b	口縁	頭部	5YR	複合口縫文、指頭丘織文、露帶	
35	20	26-20	II-A区	I	I-2-b	口縁	頭部	5YR	複合口縫文、指頭丘織文	
35	21	26-21	I-1区E	埋	I-2-b	口縁	12.5YR	5YR	平行流線文、刺突列点文	
35	22	26-22	II-A区	I	I-2-b	口縁	12.5YR	5YR	平行流線文、刺突列点文	
35	23	26-23	II-A区	I	I-2-b	脣部	橙	2.5YR	平行流線文、刺突列点文	
35	24	26-24	II-A区	I	I-2-b	脣部	頭部	5YR	刺突列点文、沈織文	
35	25	26-25	I-1区E	埋	I-2-b	脣部	頭部	5YR	沈織文	
35	26	26-26	II-A区	I	I-2-b	脣部	頭部	2.5YR	t <sub>0</sub> 2.5YR	
35	27	26-27	I-1区E	埋	I-2-b	脣部	頭部	2.5YR	山形沈織文	
35	28	26-28	II-A区	I	I-2-b	脣部	頭部	5YR	平行流線文、後抜文、單面斜行織文 L-R	
35	29	26-29	II-A区	I	I-2-b	脣部	頭部	7.5YR	平行流線文、單面斜行織文 L-R	
35	30	26-30	I-1区E	埋	I-2-b	脣部	頭部	2.5YR	沈織文	
35	31	26-31	I-3区E	埋	I-2-b	脣部	頭部	2.5YR	沈織文	

第3表(その2)

拓数	番号	固有	出土地点	出土物位	分類	部位	色	調	外 面 性 質		備 考
									外 面 性 質	底 部 性 質	
35	32	26-32	I-1号住	理	I	I-2-b	頭部	橙	2.5YR	擦糞文、沈縫文	
35	33	26-33	I-1号住	理	I	I-2-b	頭部	II-2-1橙	5YR	沈縫文	
35	34	27-34	II-A区	I	I	I-3-a	口縁	明赤	2.5YR	擦糞文、粘糞糊灰縫文	外前の一部は赤變成している
35	35	27-35	II区	-	I	I-3-a	口縁	II-2-1橙	7.5YR	擦糞紅縫文、粘糞糊灰縫文	内面、黒變あり
35	36	27-36	II-A区	I	I	I-3-a	口縁	橙	5YR	擦糞紅縫文、單頭斜行縫文R-L	内外面に黒変箇所P-7
35	37	27-37	I-1号住	-	I	I-3-a	口縁	浅黃	10YR	擦糞紅縫文	
35	38	27-38	I-1号住	-	I	I-3-a	口縁	II-2-1橙	5YR	擦糞紅縫文	
35	39	27-39	I-Ae区	II	I	I-3-b	頭部	II-2-1橙	7.5YR	指頭紅縫帶、擦糞文L-R(単)	
35	40	27-40	I-Ag区	II	I	I-3-b	頭部	II-2-1橙	7.5YR	擦糞、擦糞糸文、指頭紅縫文	
36	41	27-41	I-Ad区	II	I	I-3-b	頭部	橙	2.5YR	擦糞文、降帶、指頭紅縫文	
36	42	27-42	II-A区	I	I	I-3-b	口縁	II-2-1橙	7.5YR	殘糞文L-R(単)、斜行縫文R-L(単)	
36	43	27-43	II-3号住	理	I	I-3-b	頭部	浅黃	7.5YR	降帶、指頭紅縫文、R-L(単)	
36	44	27-44	I-1号住	理	I	I-3-b	口縁	II-2-1橙	5YR	降帶、指頭紅縫文	
36	45	27-45	II-A区	I	I	I-3-b	頭部	II-2-1橙	7.5YR	擦糞帶、斜行縫文R-L(単)	赤變部分
36	46	27-46	II-A区	I	I	I-4	口縁	明赤	2.5YR	綴糞文、山形突起、斜行縫文L-R(単)	堅城
36	47	27-47	II-A区	I	I	I-4	口縁	湖	7.5YR	綴糞文、山形突起	内前堅城
36	48	27-48	II区	-	I	I-4	口縁	橙	5YR	綴糞文L-R、斜行縫文R-L(単)	
36	49	27-49	II-3号住	理	I	I-4	頭部	II-2-1橙	7.5YR	綴糞文	
36	50	27-50	II-A区	I	I	I-4	頭部	II-2-1橙	5YR	綴糞文L-R(単)、斜行縫文L-R(単)	内面に黒変あり
36	51	27-51	I-1号住	理	I	I-4	頭部	浅黃	5YR	R-L(単)、綴糞文	
36	52	27-52	I-1号住	理	I	I-4	頭部	灰	5YR	R-L(単)、綴糞文	
36	53	27-53	I-1号住	埋	I	I-4	頭部	II-2-1赤	2.5YR	L-R(単)、綴糞文	
36	54	27-54	I-5号住	理	I	I-4	頭部	II-2-1橙	5YR	L-R(単)、綴糞文	
36	55	27-55	II-3号住	埋	I	II-1	頭部	II-2-1橙	7.5YR	擦糞紅縫文	
36	56	27-56	II-3号住	埋	I	II-1	頭部	II-2-1橙	7.5YR	L-R(単)、擦糞紅縫文	
36	57	27-57	I-1号住	埋	I	II-1	口縁	灰	5YR	擦糞紅縫文	複合口縫
36	58	27-58	II-A区	I	I	II-1	頭部	灰	7.5YR	擦糞、山形文	
36	59	27-59	II-A区	I	I	II-1	口縁	灰	5YR	擦糞紅縫文	複合山形
36	60	27-60	I-A区	II	II	II-1	口縁	灰	7.5YR	貼付文、沈縫文	
36	61	27-61	I-8号住	埋	I	II-2	頭部	II-2-1赤	5YR	沈縫文	
36	62	27-62	I-8号住	埋	I	II-2	頭部	灰	7.5YR	沈縫文、R-L(単)	

第3表(その3)

相場	番号	國、版	出上地點	出土部位	分類	部位	外		備考
							色	調	
36	63	27-63	1-8号住	理	上	II-2	脣部 [2-3] 極	7.5YR	淡綠文、L-R(單)
36	64	27-64	1-9号住	埋	上	II-2	脣部 脣	5YR	淡綠文、L-R(單)
36	65	27-65	1-9号住	埋	上	II-2	脣部 脣	白	10YR R-L< $\frac{f}{2}$ (極)。淡綠文、ヲテキ文
36	66	27-66	1-5号住	1	F	II-3-a <sub>1</sub>	口輪 浅黃	62	10YR 隆起文、ヲテキ文
37	67	27-67	1-A139	II		II-3-a <sub>1</sub>	口輪 浅黃	62	10YR 隆起文、ヲテキ文
37	68	27-68	1-Agb06	II		II-3-a <sub>1</sub>	口輪 浅黃	10YR	隆起文、指頭印痕文、L-L(單)
37	69	27-69	1-Aii56-59	II		II-3-a <sub>1</sub>	口輪 浅黃	10YR	ヲテキ文
37	70	27-70	1-9号住	埋	E	II-3-a <sub>1</sub>	口輪 [2-3] 黄綠	10YR	R-L(單)。淡綠文
37	71	27-71	1-Agh06	II		II-3-a <sub>1</sub>	口輪 明褐色	7.5YR	淡綠文区画文、ヲテキ文、L-R(單)
37	72	27-72	1-Ag65	-		II-3-a <sub>1</sub>	脣部 脣	白	7.5YR 淡綠文、R-L< $\frac{f}{2}$ (極)
37	73	27-73	1-A153	II		II-3-a <sub>2</sub>	口輪 褐	5YR	區画淡綠文、R-L< $\frac{f}{2}$ (極)
37	74	27-74	1-Ag56	II		II-3-a <sub>2</sub>	口輪 褐	5YR	區画淡綠文、R-L(單)
37	75	27-75	1-2号住	理	E	II-3-a <sub>2</sub>	口輪 [2-3] 極	7.5YR	区画淡綠文、R-L< $\frac{f}{2}$ (極)
37	76	27-76	1-2号住	埋	E	II-3-a <sub>2</sub>	口輪 褐	7.5YR	淡綠文、R-L< $\frac{f}{2}$ (極)
37	77	27-76	1-5号住	埋	E	II-3-a <sub>2</sub>	脣部 [2-3] 極	7.5YR	区画淡綠文、R-L< $\frac{f}{2}$ (極)
37	78	27-78	1-Aef06	II		II-3-a <sub>2</sub>	脣部 [2-3] 極	10YR	区画淡綠文、R-L< $\frac{f}{2}$ (極)
37	79	27-79	1-Aii09	-		II-3-a <sub>2</sub>	脣部 浅黃	7.5YR	区画淡綠文、指頭印痕文、L-R(單)
37	80	27-80	1K	-		II-3-a <sub>2</sub>	脣部 [2-3] 極	10YR	区画淡綠文、R-L< $\frac{f}{2}$ (極)
37	81	27-81	1-1号住	埋	E	II-3-a <sub>2</sub>	脣部 [2-3] 極	5YR	淡綠文、R-L< $\frac{f}{2}$ (極)
37	82	28-82	1-Afg09	II		II-3-b <sub>1</sub>	口輪 脣	7.5YR	隆起文、L-R(單)
37	83	28-83	1-9号住	埋	E	II-3-b <sub>1</sub>	口輪 [2-3] 極	7.5YR	L-R(單)。隆起文、刻目文
37	84	28-84	1-Aef06	II		II-3-b <sub>1</sub>	口輪 褐	7.5YR	突起、隆起文、L-R(單)
37	85	28-85	1-Aeg06	II		II-3-b <sub>1</sub>	口輪 浅黃	7.5YR	突起、隆起文、L-R(單)
37	86	28-86	1-Af65	II		II-3-b <sub>1</sub>	口輪 褐	7.5YR	隆起文
37	87	28-87	1-Agh06	II		II-3-b <sub>1</sub>	口輪 褐	7.5YR	隆起文
38	88	28-88	1K	-		II-3-b <sub>1</sub>	脣部 [2-3] 極	7.5YR	隆起文、脣滑器、R-L(單)
38	89	28-89	1-9号住	埋	E	II-3-b <sub>2</sub>	口輪 浅黃	7.5YR	R-L(單)。脣滑器
38	90	28-90	1-2号住	埋	E	II-3-b <sub>2</sub>	脣部 褐	5YR	淡綠文、L-R(單)
38	91	28-91	1-9号住	埋	E	II-3-b <sub>2</sub>	脣部 [2-3] 極	7.5YR	淡綠文、L-R(單)
38	92	28-92	1-Beg83	-		II-3-b <sub>2</sub>	脣部 [2-3] 極	7.5YR	淡綠文、L-R(單)
38	93	28-93	1-5号住	埋	E	II-3-b <sub>2</sub>	脣部 [2-3] 極	7.5YR	淡綠文、R-L(單)

第3表(その4)

拓印番号	書版	出土地位	出土年	性別	部位	色	歴		備	記
							調	施		
38 94	28-94	1-9号住	理	土	II-3-6 <sub>1</sub>	脚部	淡黄褐色	7.5YR	[X]断続縫文、L-B(单)、隕落管X	颈部に複数把丁、朱色の墨布
38 95	28-95	1-Be71-74	II	II-3-e	口縁	淡黄色	7.5YR	隕落管文、燃糸文		
38 96	28-96	1K	II	II-3-e	口縁	明赤褐色	2.5YR	軋突文		
38 97	28-97	1K	II	II-3-e	口縁	1.5赤褐色	7.5YR	點付文、刻美文、R-L(单)		
38 98	28-98	1K	II	II-3-e	口縁	1.5赤褐色	7.5YR	刻美列点文、沈縫文、R-L(单)		
38 99	28-99	1-Af96	II	II-3-e	口縁	淡黄色	7.5YR	隕落管文、刺突列文		
38 100	28-100	1-9号住	理	土	II-3-e	口縁	1.5赤褐色	7.5YR	山形突起、[X]断続縫文、R-L-C(单)	複数
39 101	28-101	1-A区	II	II-3-e	口縁	1.5赤褐色	7.5YR	刻美列点文、沈縫文、L-R(单)		
39 102	28-102	1-19号住	理	土	II-3-e	脚部	明赤褐色	2.5YR	隕落管文、刻美列点文	
39 103	28-103	1-8号住	理	土	II-3-e	口縁	1.5赤褐色	10YR	刻美文、沈縫文、L-R(单)	
39 104	28-104	1-8号住	理	土	II-3-e	脚部	灰	5YR	刻美列点文	
39 105	28-105	1-9号住	理	土	II-3-e	脚部	1.5赤褐色	7.5YR	沈縫文、刻美文	
39 106	28-106	1-9号住	理	土	II-3-e	口縁	1.5赤褐色	7.5YR	刻美列点文	
39 107	28-107	1-9号住	理	土	II-3-e	口縁	1.5赤褐色	7.5YR	刻美列点文、沈縫文、R-L-C(单)	
39 108	28-108	1-2号住	理	土	II-4	口縁	1.5赤褐色	7.5YR	不整燃糸文、F=F	
39 109	28-109	1-9号住	理	土	II-4	口縁	1.5赤褐色	5YR	燃糸文	
39 110	28-110	1-Agb03	II	II	II-4	口縁	1.5赤褐色	7.5YR	沈縫文、L-R(单)	
39 111	28-111	1区	-	II-4	口縁	1.5赤褐色	5YR	沈縫文、燃糸文		
39 112	28-112	1-Agb06	-	II-4	口縁	1.5赤褐色	5YR	沈縫文、燃糸文		
39 113	28-113	1-Aef06	II	II	II-4	口縁	1.5赤褐色	5YR	沈縫文、燃糸文	
39 114	28-114	1-Agb09	II	II	II-4	口縁	灰	7.5YR	沈縫文、L-R(单)	
39 115	28-115	1-Agb06	II	II	II-4	口縁	灰	5YR	R-L(单)	
39 116	28-116	1-B-e83	-	II-4	口縁	1.5赤褐色	7.5YR	無筋斜行縫文		
39 117	28-117	1-9号住	理	土	II-4	口縁	1.5赤褐色	5YR	沈縫文、R-L(单)、無文	
39 118	28-118	1-A-53	II	II	II-1-a <sub>1</sub>	口縁	淡黄色	7.5YR	地鉄球文	
39 119	28-119	1-6号住	理	土	II-1-a <sub>1</sub>	口縁	1.5赤褐色	7.5YR	隕落管文、刻美文、L-R(单)	
39 120	28-120	1-Af65	II	II-1-a <sub>1</sub>	口縁	1.5赤褐色	5YR	連鎖球文		
39 121	28-121	1-B-e71-74	II	II-1-a <sub>1</sub>	口縁	灰	5YR	沈縫文、刻美文		
39 122	28-122	1-8号住	理	土	II-1-a <sub>1</sub>	口縁	灰	7.5YR	隕落管文、刻美文、L-R(单)	
39 123	28-123	1-8号住	理	土	II-1-a <sub>1</sub>	口縁	1.5赤褐色	5YR	隕落管付文、燃糸文、刻美文	
39 124	28-124	1K	-	II-1-a <sub>1</sub>	口縁	1.5赤褐色	5YR	珠起線文、黒筋斜行縫文		

第3表(その5)

拓號	番号	國版	出土地點	出土層位	分類	部位	外		備考	
							面	裏		
39	125	28-125	1-8号住	埋	土	III-1-a <sub>1</sub>	11縫	12-31) 橋	7.5YR	貼付文、刺突文、沈綸文、R-L(単)
40	126	28-126	1-A 180	-		III-1-a <sub>1</sub>	11縫	12-31) 橋	7.5YR	隆起文。半圓行管山形沈綸文、R-L(単)
40	127	28-127	1-8号住	埋	土	III-1-a <sub>1</sub>	脣部	12-31) 橋	7.5YR	貼付文、刺突文、沈綸文
40	128	28-128	1-B e 83	-		III-1-a <sub>1</sub>	11縫	12-31) 橋	7.5YR	隆起文、刺突文、R-L(単)
40	129	28-129	1-9号住	埋	土	III-1-a <sub>1</sub>	11縫	12-31) 橋	7.5YR	半圓行管山形沈綸文、R-L(単)
40	130	28-130	1-9号住	埋	土	III-1-a <sub>1</sub>	11縫	12-31) 橋	7.5YR	貼付文、刺突文、隆起文、R-L(単)
40	131	28-131	1-A 159	II		III-1-a <sub>1</sub>	11縫	12-31) 橋	7.5YR	貼付文、刺突文、隆起文、R-L(単)
40	132	29-132	1-B c 71-74	II		III-1-a <sub>2</sub>	11縫	12-31) 橋	7.5YR	有孔、沈綸文。
40	133	29-133	1-9号住	埋	土	III-1-a <sub>2</sub>	脣部	12-31) 橋	7.5YR	隆起文、刺突文、沈綸文、貼付文
40	134	29-134	1-9号住	埋	土	III-1-a <sub>2</sub>	11縫	12-31) 橋	7.5YR	貼付文、刺突文、沈綸文、有孔
40	135	29-135	1-A g 65	-		III-1-a <sub>2</sub>	脣部	12-31) 橋	7.5YR	無文。半圓行管山形沈綸文、R-L(単)
40	136	29-136	1-A g h 06	II		III-1-a <sub>2</sub>	脣部	12-31) 橋	7.5YR	隆起文、半圓行管山形沈綸文、R-L(単)
40	137	29-137	1-2号住	埋	土	III-1-a <sub>2</sub>	脣部	12-31) 橋	7.5YR	隆起文、R-L(単)、貼付文、刺突文
40	138	29-138	1-B e 71-74	II		III-1-a <sub>2</sub>	脣部	12-31) 橋	7.5YR	隆起文、R-L(単)、貼付文、刺突文
40	139	29-139	1-8号住	埋	土	III-1-a <sub>2</sub>	脣部	12-31) 橋	7.5YR	隆起文、R-L(単)、貼付文、刺突文
40	140	29-140	1-9号住	埋	土	III-1-a <sub>2</sub>	脣部	12-31) 橋	7.5YR	隆起文、R-L(単)、貼付文、刺突文
40	141	29-141	1-9号住	埋	土	III-1-a <sub>2</sub>	脣部	12-31) 橋	7.5YR	隆起文、R-L(単)、貼付文、刺突文
40	142	29-142	1-B e 83	-		III-1-a <sub>2</sub>	11縫	12-31) 橋	7.5YR	隆起文、R-L(単)、貼付文、刺突文
40	143	29-143	1-A e f 06	-		III-1-a <sub>2</sub>	11縫	12-31) 橋	7.5YR	隆起文、R-L(単)、貼付文、刺突文
40	144	29-144	1-2号住	埋	土	III-1-a <sub>2</sub>	脣部	12-31) 橋	7.5YR	隆起文、R-L(単)、貼付文、刺突文
40	145	29-145	1-5号住	埋	土	III-1-b	11縫	12-31) 橋	7.5YR	隆起文、R-L(単)、貼付文、刺突文
40	146	29-146	1-A g h 06	II		III-1-b	脣部	12-31) 橋	7.5YR	隆起文、R-L(単)、貼付文、刺突文
40	147	29-147	1-B a b 36	I		III-1-b	脣部	12-31) 橋	7.5YR	隆起文、R-L(単)、貼付文、刺突文
40	148	29-148	1-5号住	埋	土	III-1-b	脣部	12-31) 橋	7.5YR	隆起文、R-L(単)、貼付文、刺突文
40	149	29-149	1-6号住	埋	土	III-1-b	11縫	12-31) 橋	7.5YR	隆起文、R-L(単)、貼付文、刺突文
40	150	29-150	1-A e 09	II		III-1-b	脣部	12-31) 橋	7.5YR	隆起文、R-L(単)、貼付文、刺突文
41	151	29-151	1-9号住	埋	土	III-1-b	脣部	12-31) 橋	7.5YR	隆起文、R-L(単)、貼付文、刺突文
41	152	29-152	1-9号住	埋	土	III-1-b	脣部	12-31) 橋	7.5YR	沈綸文
41	153	29-153	1-A f 09	II		III-1-b	脣部	12-31) 橋	7.5YR	半圓行管山形沈綸文、R-L(単)
41	154	29-154	1-5号住	埋	土	III-2-a	11縫	明希綴	2.5YR	刺繡文
41	155	29-155	1-A e f 09	II		III-2-a	11縫	12-31) 橋	5YR	刺繡文、沈綸文

## 第3表 (その6)

部類	番号	固 版	出 土	地 点	出土層位	分 類	部位	94		95		備 考
								色	調	色	調	
41	156	28-156	I-A-i	50-53	-	III-2-a	II縫	に赤い縫	5YR	赤縫文。羽状縫文。		
41	157	29-157	I-A-d	65	II	III-2-a	II縫	に赤い縫	5YR	R-L(単)。沈縫文。		
41	158	29-158	I-9-51住	理	上	III-2-a	脛部	に赤い縫	7.5YR	赤縫文。R-L(単)		
41	159	29-159	I-Ag-h	96	II	III-2-a	II縫	に赤い縫	7.5YR	赤縫文。R-L(単)		
41	160	29-160	I-9-51住	理	t	III-2-b	II縫	に赤い縫	5YR	無文。口縫に剣目		
41	161	29-161	I-9-51住	理	t	III-2-b	II縫	黒	7.5YR	R-L(単)。隆起縫文。剣目		
41	162	29-162	I-B-e	89	I	III-2-b	II縫	黒	7.5YR	隆起縫文。沈縫文、L-R(単)		
41	163	29-163	I-B-e	83	II	III-2-b	II縫	に赤い縫	5YR	羽状縫文。沈縫文。剣目文		
41	164	29-164	I-5-51住	理	t	III-2-b	II縫	黒	7.5YR	隆起縫文。剣目文		
41	165	29-165	I-B-c	71-74	II	III-2-b	II縫	黒	2.5YR	赤縫文。羽状縫文。		
41	166	29-166	I-9-51住	理	t	III-2-b	脚部	赤	2.5YR	羽状縫文。沈縫文。剣目		
41	167	29-167	I-A-i	30	II	III-2-b	II縫	に赤い縫	7.5YR	平行沈縫文。R-L(単)。剣目		
41	168	29-168	I-9-51住	理	t	III-2-c	II縫	黒	7.5YR	R-L(単)。沈縫文		
41	169	29-169	I-Ae-f	06	II	III-2-c	II縫	黒	5YR	山形沈縫文。L-R(単)。點付文		
41	170	29-170	I-Ae-f	03	II	III-2-c	II縫	に赤い縫	5YR	剣目文。L-R(単)。點付文		
41	171	29-171	I-Ae-f	06	II	III-2-c	II縫	に赤い縫	5YR	剣目。L-R(単)		
41	172	29-172	I-Ae-f	09	-	III-2-c	II縫	黒	5YR	区画沈縫文。R-L(単)		
41	173	28-173	I-9-51住	理	t	III-2-c	脚部	に赤い縫	2.5YR	赤縫文。L-R(単)		
41	174	28-174	I-Ae-f	09	II	III-2-c	脚部	黒	5YR	区画沈縫文。粘節羽状縫文		
41	175	28-175	I-Ae-f	09	II	III-2-c	脚部	に赤い縫	7.5YR	区画沈縫文。L-R(単)		
41	176	28-176	I-Ag	63	II	III-2-c	脚部	黒	7.5YR	赤縫文。きざみの入った點付文		
41	177	28-177	I-Ae-f	20	II	III-2-c	II縫	に赤い縫	7.5YR	区画沈縫文。つる状突起		
41	178	28-178	I-8-51住	理	t	III-2-c	II縫	に赤い縫	7.5YR	平行沈縫文。11縫部にごぶ状突起		
41	179	28-179	I-Ae-f	06	II	III-2-c	II縫	に赤い縫	7.5YR	L-R(単)。沈縫文		
41	180	29-180	I	-	II	III-3	II縫	に赤い縫	7.5YR	くじH		
41	181	29-181	I-5-51住	理	t	III-3	脚部	に赤い縫	5YR	くじH		
41	182	29-182	I-8-51住	理	t	III-3	脚部	に赤い縫	10YR	くじH		
42	183	30-183	I-Ai-i	03	II	III-3	II縫	に赤い縫	5YR	ハケ目		
42	184	30-184	I-5-51住	1	f	III-3	脚部	黒	5YR	くじH		
42	185	30-185	I-Ag-b	03	II	III-3	脚部	に赤い縫	5YR	くじH		
42	186	30-186	I-Ai-i	50-53	-	III-3	II縫	に赤い縫	5YR	ハケ目		

第3表(その7)

拓殖番	番号	図版	出土地點	出土層位	分類	部位	色	調	94		備	R <sub>g</sub>
									面	X		
内外面に黒変あり												
42	187	30-187	I-A e 09	II	下	III-3	銅器	浅黄 橙	7.5YR	<上目		
42	188	30-188	I-5号住	I	下	III-3	口縁	明赤 橘	2.5YR	<上目		
42	189	30-189	I-A区	II		III-3	銅器	に赤い緑	7.5YR	<上目		
42	190	30-190	I-A i 59	II		III-3	銅器	に赤い緑	7.5YR	<上目		
42	191	30-191	I-9号住	埋土上面	III-4-b	口縁	浅黄 橙	7.5YR	<上目			
42	192	30-192	I-A f 65	II	W-I	IIIR	に赤い赤褐色	5YR	三叉文、沈線文、L-R(單)			
42	193	30-193	I-B d 86	—	W-I	IIIR	に赤い赤褐色	7.5YR	三叉文、沈線文			
42	194	30-194	I-B c 89	—	W-2	IIIR	浅黃 橙	7.5YR	半圓狀文、L-R(单)			
42	195	30-195	I-B c 86	II	W-2	IIIR	淺灰	5YR	沈線文、半圓狀文、L-R(单)			
42	196	30-196	I-B c 88	—	W-2	IIIR	に赤い褐	7.5YR	半圓狀文、沈線文、R-L(单)			
42	197	30-197	I-B c 89	—	W-2	IIIR	に赤い褐	7.5YR	半圓狀文、沈線文、R-L(单)			
42	198	30-198	I-B c 89	—	W-2	IIIR	灰	5YR	沈線文、列点文、R-L(单)			
43	199	30-199	I-B c 86	—	W-2	IIIR	褐色	7.5YR	沈線文、刻目文、L-R(单)			
43	200	30-200	I-B c 83	—	W-3	IIIR	灰	7.5YR	沈線文、刻目文、R-L(单)			
43	201	30-201	I-B c 89	—	W-3	IIIR	灰	7.5YR	刻目文、沈線文、L-R(单)			
43	202	30-202	I-B c 86	—	W-3	IIIR	に赤い褐	7.5YR	沈線文、刻目文、L-R(单)			
43	203	30-203	I-B c 89	I	W-3	IIIR	明褐色	7.5YR	刻目文、沈線文、L-R(单)			
43	204	30-204	I-B c d 86	II	W-3	IIIR	灰	7.5YR	曲線的洋影、變形文? ) 勾き			
43	205	30-205	I-B c 71-74	—	W-2	銅部	灰	7.5YR	曲線的洋影、變形文? ) 勾き			
43	206	30-206	I-B c 89	—	N-4	IIIR	に赤い褐	7.5YR	平行沈線文			
43	207	30-207	I-B c 89	—	N-4	IIIR	灰	7.5YR	平行沈線文			
43	208	30-208	I-B a 57	—	N-4	IIIR	に赤い褐	7.5YR	平行沈線文、膨大細文			
43	209	30-209	I-B d 83	—	N-4	銅部	に赤い褐	7.5YR	沈線文 4本			
43	210	30-210	I-B c 86	—	N-4	銅部	に赤い褐	5YR	沈線文			
43	211	30-211	I-1号住	埋	L	W-1	銅部	浅黃 橙	10YR	木目状擦糸文		
43	212	30-212	I-1号住	埋	L	W-1	銅部	灰	5YR	木目状擦糸文		
43	213	30-213	I-1号住	埋	L	W-1	銅部	に赤い褐	7.5YR	木目状擦糸文		
43	214	30-214	I-A区	II	V-1	銅部	浅黄 橙	7.5YR	木目状擦糸文 R-L(单)			
43	215	30-215	I-A区	II	V-1	銅部	に赤い褐	7.5YR	木目状擦糸文 R-L(单)			
43	216	30-216	I-3号住	埋	L	V-1	銅部	に赤い褐	7.5YR	木目状擦糸文		
43	217	30-217	I-3号住	埋	L	V-1	銅部	褐	2.5YR	木目状擦糸文		

第3表(その8)

組群	番号	測定場所	地盤	岩層位	分	86	85E	85	94		偏	E
									86	85		
43	248	30-238	I-133E	埋	I	V-1	弱S6	12.3E+48	5YR	木立林燃余文		
43	249	30-239	I-315E	埋	I	V-1	弱S6	12.3E+48	5YR	木立林燃余文		
43	220	30-220	I-5分往	埋	I	V-2	弱S6	12.3E+48	5YR	原林地文		
43	221	30-221	I-Ba 06	I	I	V-2	弱S6	黑 植	7.5YR	森林地文		
43	222	30-222	I-1分往	埋	I	V-2	弱S6	暗赤 土	2.5YR	森林地文		
43	223	30-223	I-8分往	埋	I	V-2	弱S6	12.3E+48	7.5YR	森林地文		
43	224	30-224	I-9分往	埋	I	V-2	1.0E	12.3E+48	7.5YR	指状地文		
43	225	30-225	I-A 18	I	V-3	弱S6	12.3E+48	7.5YR	植被文			
44	226	30-226	I-Aef 12	-	V-3	弱S6	12.3E+48	7.5YR	植被文			
44	227	30-227	I-Ba b 56	-	V-3	弱S6	12.3E+48	7.5YR	植被文			
44	228	30-228	I-1分往	埋	I	V-3	弱S6	12.3E+48	7.5YR	植被文		
44	229	30-229	I-3分往	埋	I	V-3	弱S6	12.3E+48	7.5YR	植被文		
44	230	30-230	I-3分往	埋	I	V-3	1.0E	12.3E+48	7.5YR	植被文		
44	231	30-231	I 8	-	V-3	弱S6	12.3E+48	7.5YR	植被文			
44	232	30-232	I-9分往	埋	I	V-4	1.0E	植 保	5YR	植被文		
44	233	30-233	I-9分往	埋	I	V-4	1.0E	12.3E+48	7.5YR	植被文		
44	234	30-234	I-9分往	埋	I	V-4	弱S6	12.3E+48	7.5YR	植被文		
44	235	30-235	I-9分往	埋	I	V-4	弱S6	12.3E+48	7.5YR	植被文		
44	236	30-236	I-A 18	I	V-5	1.0E	12.3E+48	7.5YR	植被文			
44	237	30-237	I-Aj 71	I	V-4	1.0E	12.3E+48	10YR	植被文			
44	238	30-238	I-Ab 56	-	V-4	1.0E	12.3E+48	7.5YR	植被文			
44	239	30-239	I-9分往	埋	I	V-4	1.0E	12.3E+48	7.5YR	植被文		
44	240	30-240	I-Bc B3	-	V-5	1.0E	12.3E+48	7.5YR	植被文			
44	241	30-241	I-Aj 50	I	V-5	弱S6	12.3E+48	7.5YR	小灌叢文			
44	242	30-242	I-Agh 06	I	V-5	1.0E	12.3E+48	7.5YR	小灌叢文			
44	243	30-243	I-2分往	埋	I	V-5	弱S6	12.3E+48	7.5YR	不整齊紋		

## (2) 石器について

石器については、通常使用されている器種名、技法名を用い。分類は想定される機能と形態を重点としたが、点数の少ないものについては分類はしない。なお、出土地点、計測値、材質については第4・5表に一括した。

**石 鎌** (第45図1・2 図版33-1・2) (1)は無茎で基部が直線的で、縦長の二等辺三角形であり一面に押圧剥離を施している。(2)は無茎で基部がや・丸味をもつ他は(1)に近い。

**石 槍** (第45図3 図版33-3) 基部が直線的で両面加工が施される。

**石 錐** (第45図4-7 図版33-4-7) (4)縦長の剥片を利用したもので、主に錐部片面に押圧剥離を施している。(5)柄部、錐部とも側辺は両面から押圧剥離を施す。(6)錐部欠損、柄部に調整打面を残す。

## 石 匙

1類 (第45図8-10 図版33-8-10) 横形で片面にのみ剥離調整が認められるもので、(10)は表皮があり剥離も完全ではなく未完成器とみられる。

### 2類 縦形のもの。

a (第45図11 図版33-11) 縦形で基部、体部に丸味をもつ、つまみ周辺を除き片面にのみ剥離調整がある。

b (第45図12・図版33-12) 体部は丸味をもち、つまみに対する辺が内湾するハート状を呈する、両面に剥離調整がある。

c (第46図13-15 図版33-13-15) つまみに対する辺が直線的で、一方の側辺が直線的、他側辺がや・丸味をもち、横断面は三角形を呈する。片面にのみ剥離調整をもつ。

d (第46図16-18 図版33-16-18) つまみに対する辺が丸味をもつ、他は○と類似する。(18)は二又のつまみをもつ。

e (第46図19・20 図版33-19・20) つまみに対する辺が尖る、一侧辺が丸味をもつが、全体的に左右対称に近い形態をなす。剥離調整は片面のみである。

## 不定形石器

剝搔、切削などに使用されたと思われる不定形の石器を一括した。剥片に刃部をつくりだしたもので形態は多様であるが、整理すると次のようになる。

1類 (第46図21・22 図版33-21・22) 縦長の長方形に近い形で、長辺の片側縁もしくは両側縁の片面から刃部をつくり出す。

2類 (第47図24-29 図版33-24-29) 縦長の楕円に近い形態をもち、長・短の二側縁に刃部をつくり出す。

3類 (第47図30-32 第48図33-35 図版33-30-35) 逆二等辺三角形に近い形態で、長辺

の二側縁に刃部をもつ。

4類 不定形で二側縁もしくは一侧縁に刃部をもつもの。

a (第48図36~42 第49図43~48 図版33~36~42 図版34~43~48) 縱長形の片面加工、長側縁の一方がカーブし、他方は直であり、この両側縁に刃部をもつものと、カーブする側縁にのみ刃部をもつものがある。

b (第49図49~50 図版34~49~50) aとは逆の縱長形で片面加工で、カーブした側縁に刃部をもつ。

c (第49図51~54 第50図55 図版34~51~55) いずれも片面加工で、一侧縁に刃部をもつ。

d (第50図56 図版34~56) 二側縁に刃部をもつ。

5類 横形の二等辺三角形に近い形態で、二次加工を施さないもの。

a (第50図57~59 図版34~57~59) 長側両縁に刃部をもつもの。

b (第50図60 図版34~60) 長側斜縁に刃部をもつ。

c (第50図62 図版34~61) 底側縁に刃部をもつ。

6類 横長の長方形、台形、楕円状のもの。

a (第50図62~64 図版34~62~64) 横長の長側縁の一方に刃部をもつ。

b (第50図65 第51図66~67 図版34~65~67) 横長楕円状で一次加撃打点を除く周縁に刃部をもつ。

7類 (第51図68~70 図版34~68~70) 台形状を呈し、やや内湾ぎみの基底部に刃部を施したもの。

#### 石鎧状石器

細長いや、厚手の剥片を利用した石器で、形態、剥離の状況によって以下のようになる。

1類 長楕円状の形態をもつもの。

a (第51図71~74 第52図75~76 図版34~71~76) 横断面が菱形もしくは三角形で、剥離は両面とも全面近く施されている。一方の端が折れて欠損するものが多い。

b (第52図77 図版34~77) aよりやや偏平で側縁にのみ二次加工をもつ。

2類 楕円状を呈するもの

a (第52図78~80 図版34~78~80) 剥離は両面とも全面近く施されるもの。

b (第52図81 図版35~81) 剥離は片面の側縁にのみある。

3類 (第52図82~83 第53図84 図版35~82~84) 逆釣鐘状の形態で、両面縁部に剥離をもつものと片面全面と他面の一部に剥離をもつものがある。

磨製石斧 (第53図85~87 図版35~85~87) (85)は比較的小さい石斧で上半を欠く、横断面は長

方形に近く、刃部は両刃で鋭い。(86)の横断面は楕円形、刃部は一部を残し欠損するが、両刃で鋭いものであり、(85・86)とも縱断面は楔形に近い、器面は良く研磨され滑らかである。(87)は上部を欠くが長方形に近いものと推察されるが、刃部に向けてややせばまる。両刃の刃部をもつ。

**石 鍬** (第53図88 図版35-88) いわゆる撲形をなすもので、片面のみ二次調整剥離を施すが表皮が残る。打製石斧とも呼ぶが「土掘具」としての用途が考えられるので石鍬とした。

**石劍様石器** (第54図89-92 図版35-89-92) (89・90)は表面がよく研磨されて平滑であり、上端部に向けて幅狭になって厚さも薄くなる。横断面は楕円状で、(89)の上端部には貫通孔がある。いずれも下端は欠損している。

(92)は両端を欠き全体的な形態は不明である。両面および両側縁に剥離痕が残り研磨が進んでいない。横断面は横長の長方形に近い。

(91)も両端部を欠き半割りになっているが、横断面は楕円状であったろうと推察される。表面はやや滑らかであるが片側縁に剥離痕がある。いわゆる石棒と呼ばれるものにも似る。

**円盤状石器** (第54図93-95 図版35-93-95) 偏平な素材を円盤状に整形したもので、いずれも径5cm内外、厚さ0.6~1cmほどで、材質は(93)で白色細粒凝灰岩、(94)は石質凝灰岩、(95)硬質泥岩である。

**石 錘** (第55図96・97 図版35-96・97) 楕円もしくは不整楕円の偏平な素材の二側縁に打ちかきの刻みを入れ、ひも懸けとしている。

**石 血** (第55図103 第56図104~106 図版35-103 図版36-104-106) すべて破片である。板状の石で両面とも平坦であり、材質は輝石安山岩に限定される。

**磨 石** (第56図107~112 第57図113~116 図版35-108-111・114 図版36-107・109・110・112・113・115・116 図版37-114) 表面が滑らかに磨かれた円球、または楕円球状と偏平な楕円形状のものを一括したが、次の三種類になる。

- ① 円球、楕円球状で大形のもの (107・108・110)
- ② 円球のものが大半で、①に比べて小さく、こぶし大以下である (111・113・114)
- ③ 偏平で楕円形のもの (115・116)

②と③は、いわゆる磨石の範ちゅうに入れるべきか問題が残る。

**凹 石** (第57図117~121 図版36-117~121) 自然の楕円球状の礫の片面または両面に人為的作用による凹みが認められるもので、凹みは数個連続するのがほとんどである。

#### 石製品

**ペンダント様石製品** (第55図102 図版35-102) 一部欠損するが丸味をもつ逆三角形状の形態と推察する。両面、測縁とも滑らかに研磨されていて、上部両端に小さな貫通孔をもつて

## — 大明神遺跡 —

いる。素材は流紋岩質細粒凝灰岩である。

块状耳飾（第55図98-101、図版35-98-101） 4点とも欠損部分が認められる。全長4~5cmで、いずれにも調整擦痕があり全面をていねいに調整し平滑な面をもっている。(99)には片面から、(100)では両面からの穿孔が認められる。素材は(98・100)が滑石、(99・101)はチャート質輝緑凝灰岩である。

### 石器の出土状況

I区 I-4・6・8号住居跡を除いた各住居跡から出土をみている。遺構以外の包含層等からの出土も特定の場所に集中する傾向はみられず、数的に多くない。II区に比較しても出土点数は少ない。

II区 土器の出土傾向と似る。すなわち包含層および各住居跡周辺からの出土が圧倒的に多い。特にA区と包含層に集中している。また各住居跡とも石器の供伴をみている。

### I・II区の器種傾向

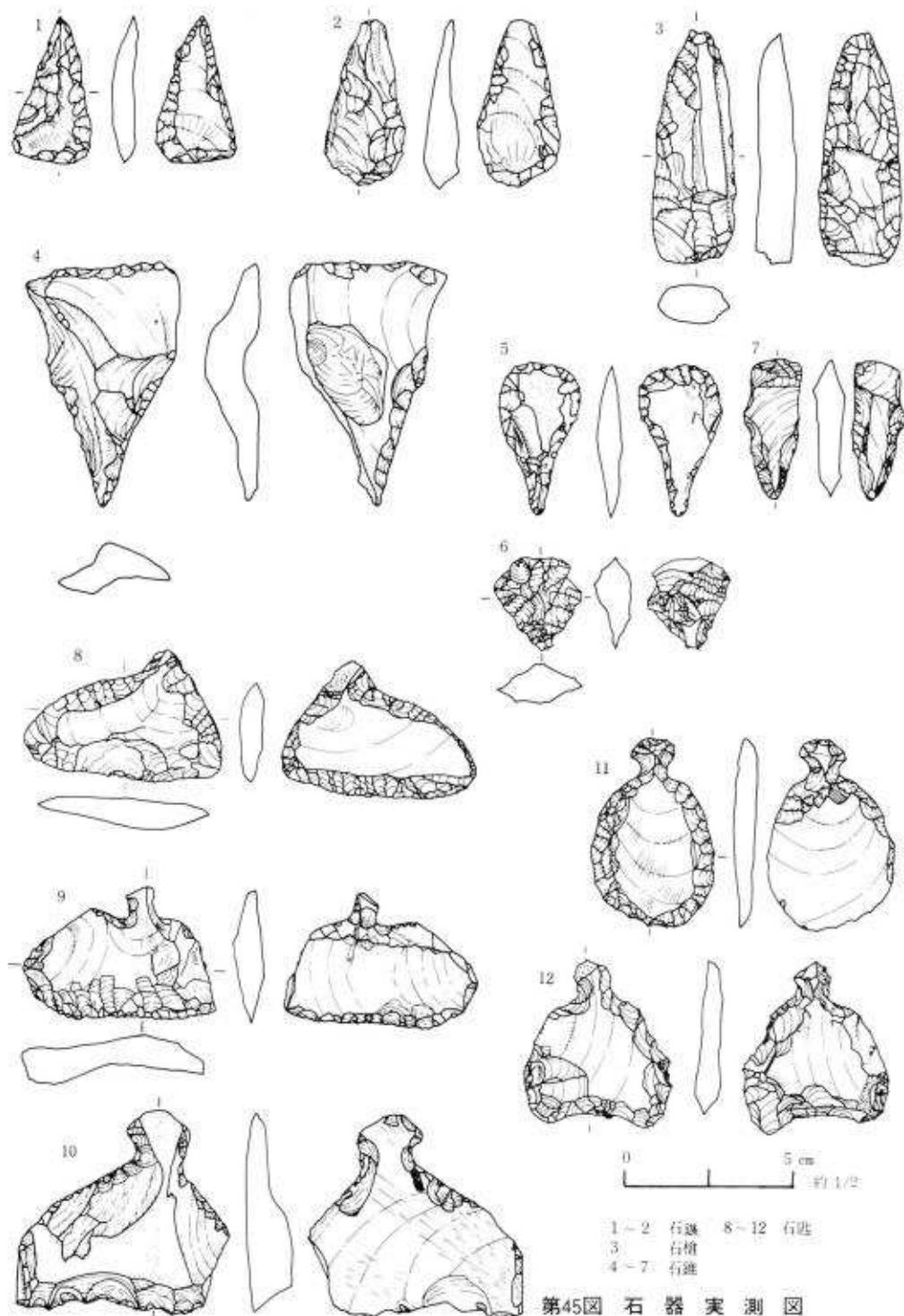
刺突器の機能をもつ石鎌、石槍等が3点のみで極端に少ない。

剝搔、切削などの機能をもつと考えられる石匙、不定形石器、石庵状石器が最も多い、特に剝片の一部分に刃部をつくり出すのみで、大きな加工をしない不定形石器が多く、I・II区とも同様傾向を示す。石庵状石器はII区で圧倒的に多いのに対し、I区ではI-5号住居跡出土の1点のみである。切削器としての石斧はその形の大小によって機能が異なると考えられるがI・II区とも磨製石斧を出しII区出土のものが大形である。

機能不明であるが、円盤状石器はいずれもI区で出土した3点のみで、石劍様石器は4点中3点はII区での出土である。磨石、凹石、石皿などはI・II区の差違はなく当然と言える。

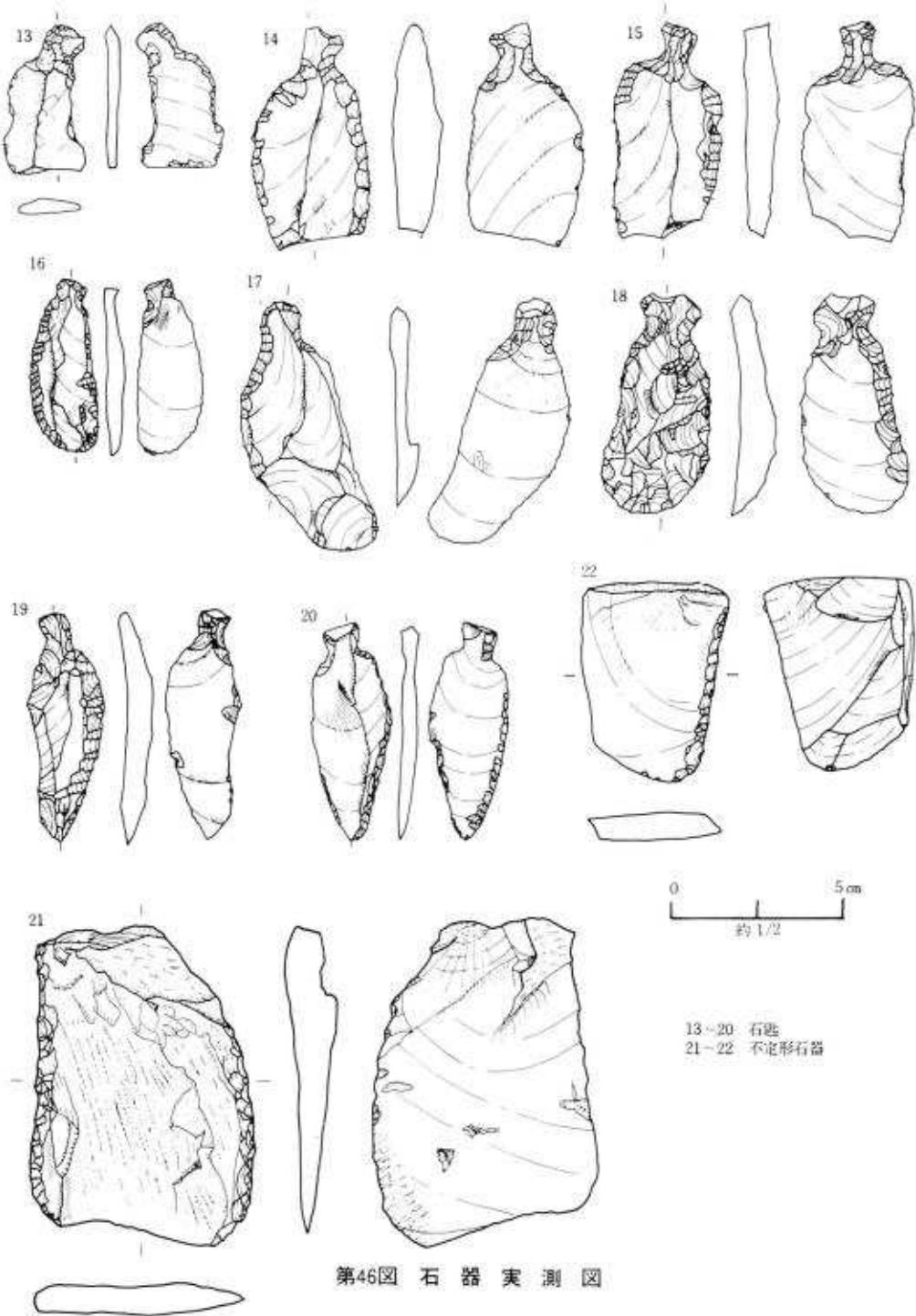
I区に対してII区は、精製された石器と石製品が目につく、磨製石斧、石劍様石器、ペンダント様石製品、块状耳飾などである。

I・II区で石器の組成に相違があるものか明確にはなし得なく今後の課題となるが、前述したように石庵状石器がI区では極端に少なく、II区では不定形石器に次ぐ出土点数をみたことなど、若干出土遺物に差違があるようにみられる。

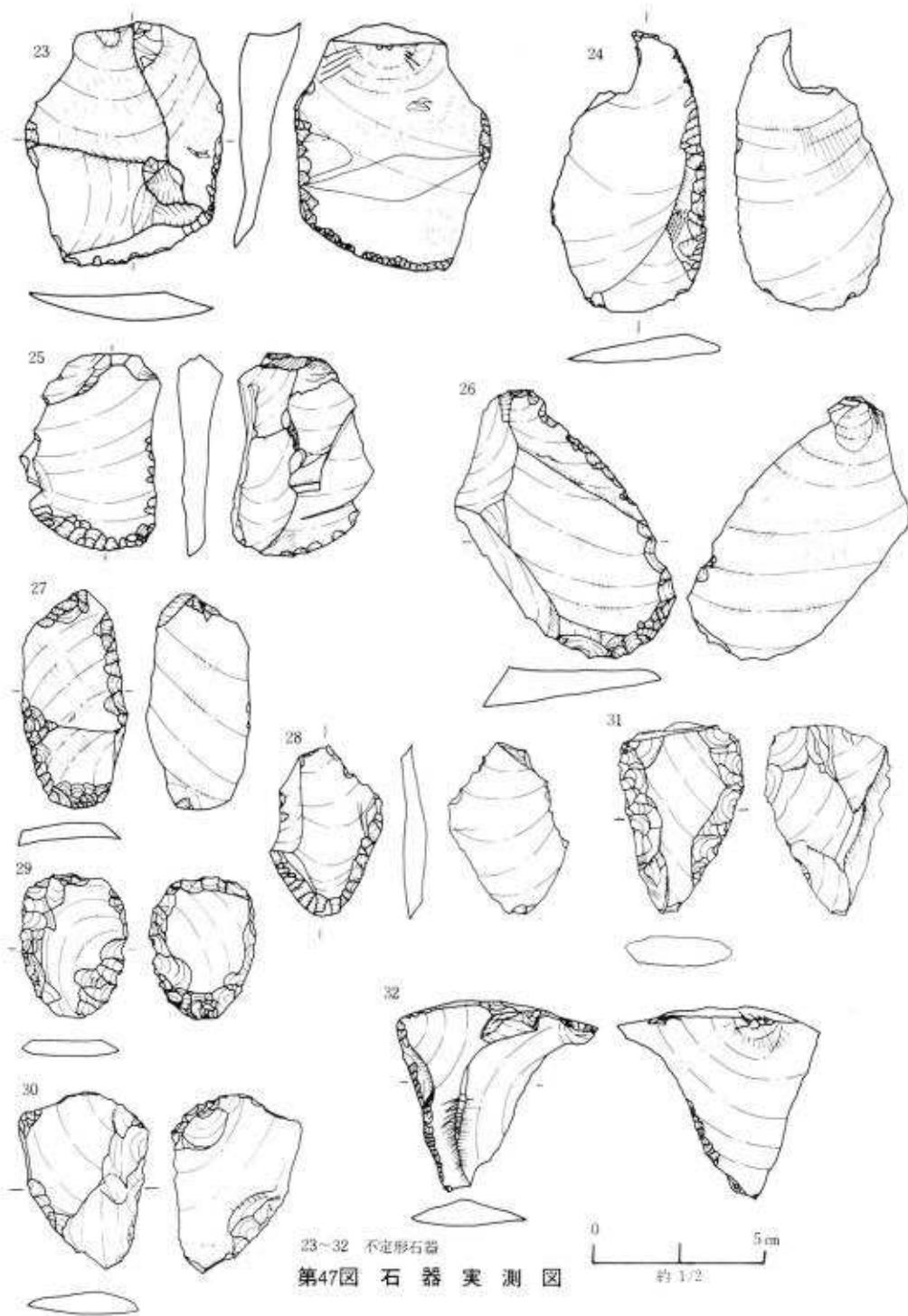


第45図 石器実測図

— 大明神遺跡 —

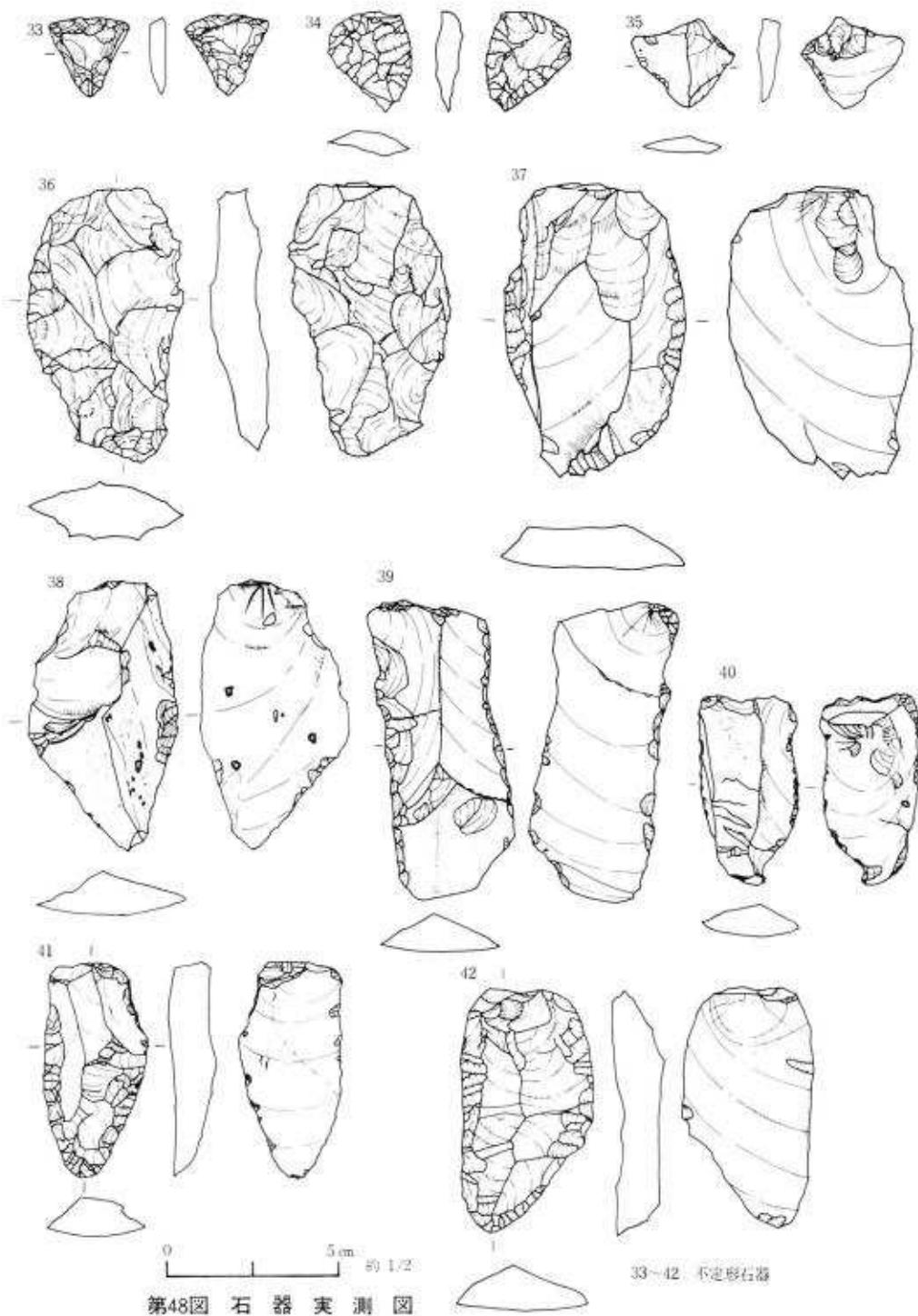


第46図 石器実測図

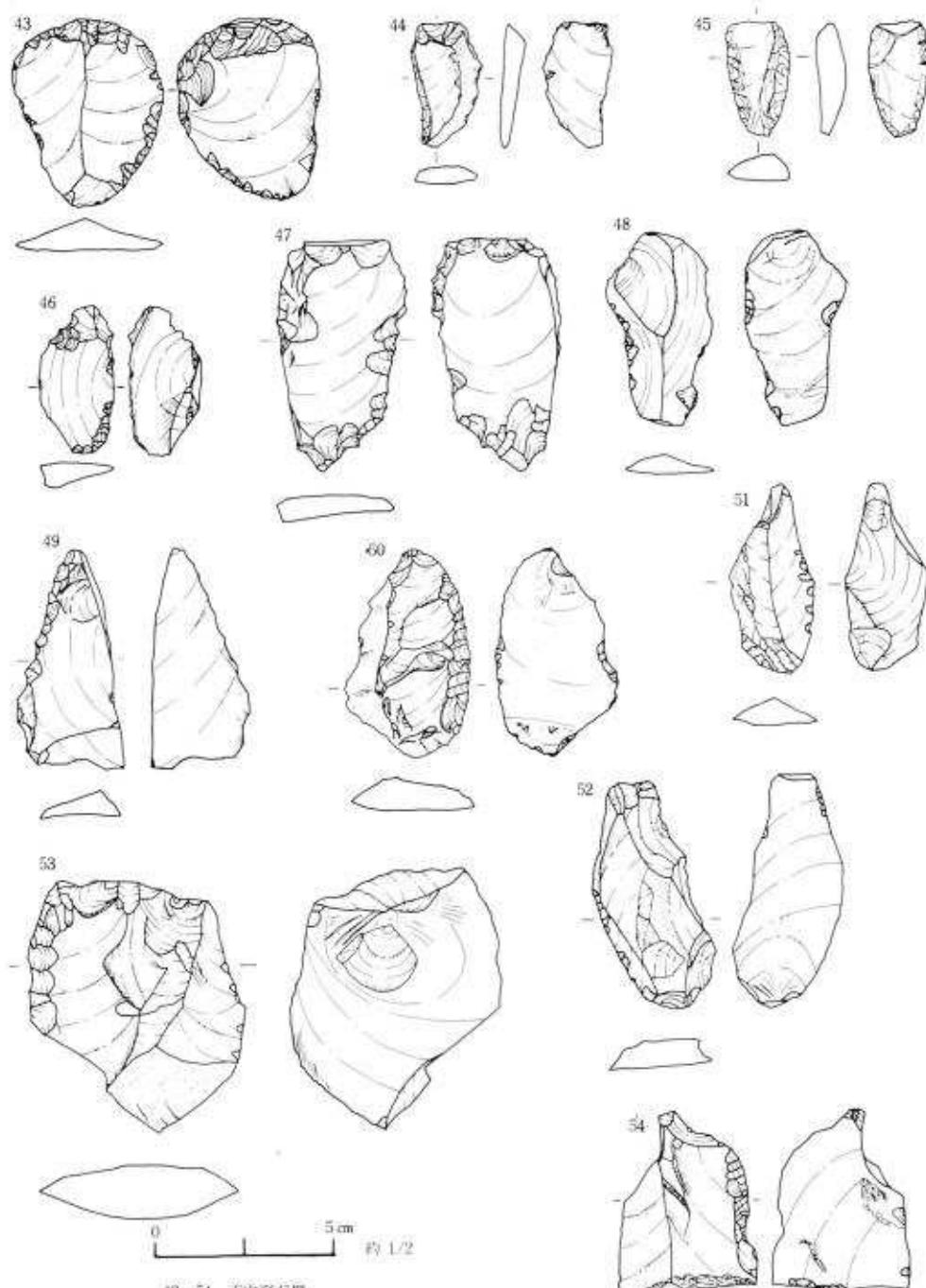


第47図 石器実測図

— 大明神遺跡 —



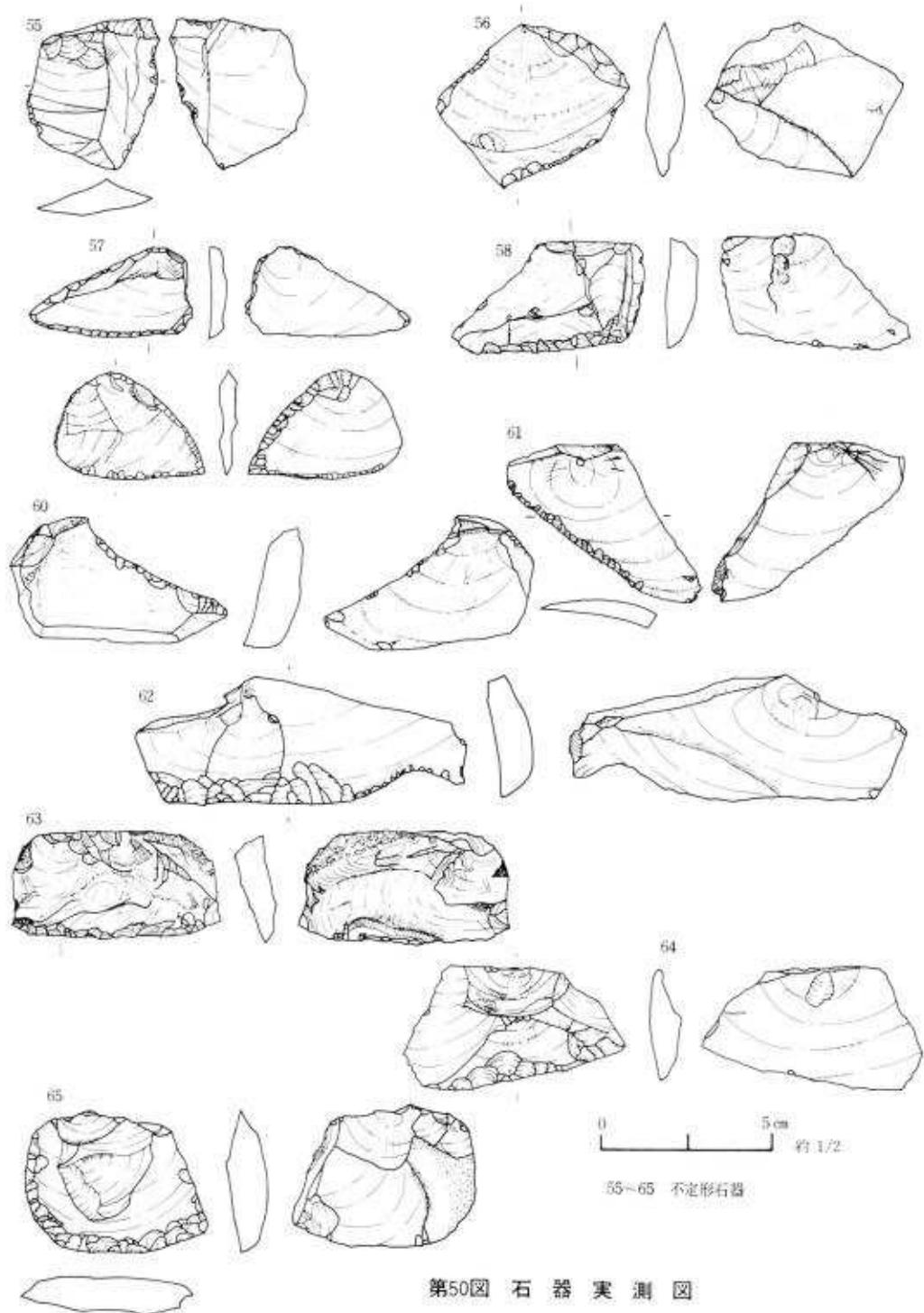
第48図 石 器 実 測 図



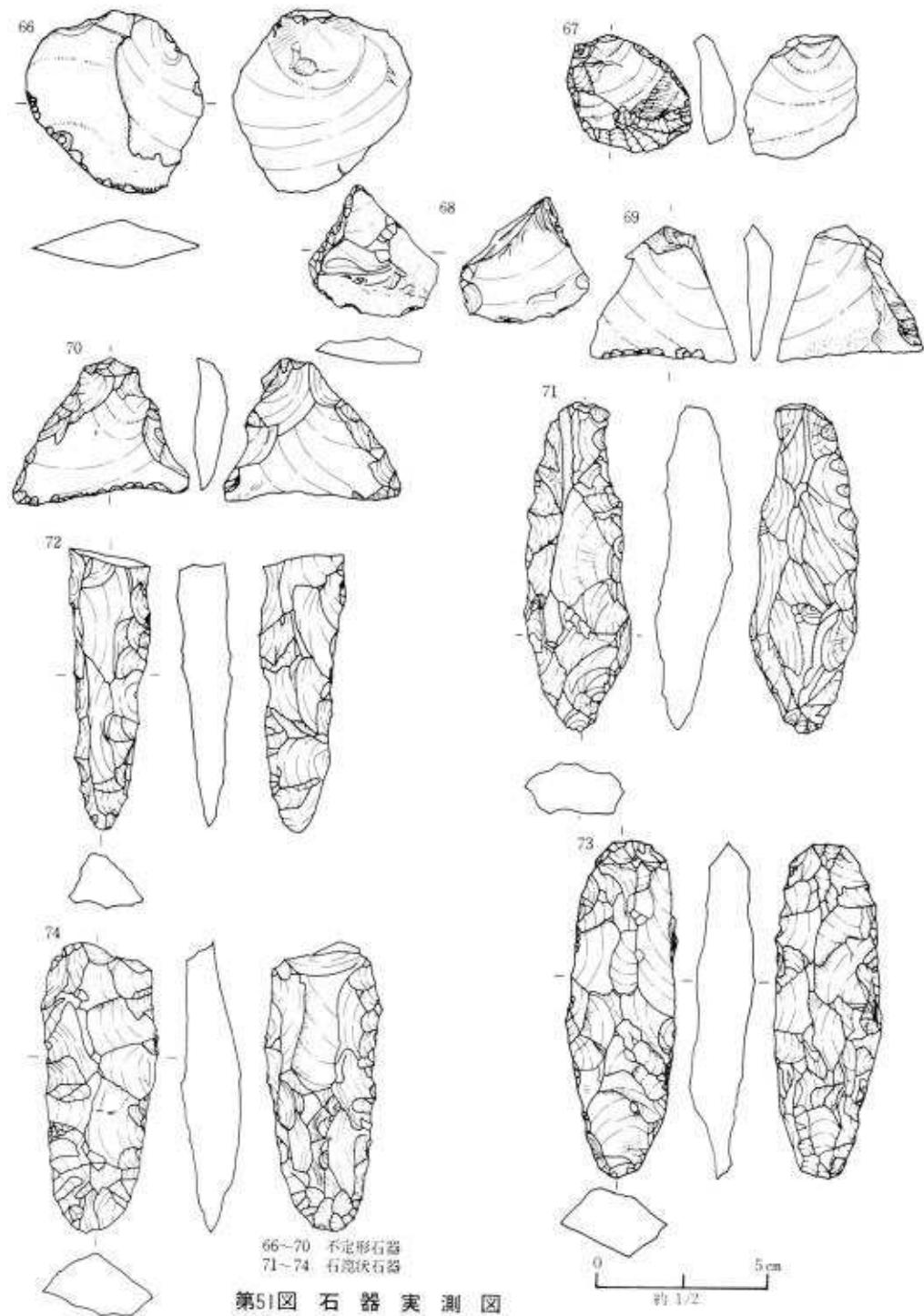
43~54 不定形石器

第49図 石器実測図

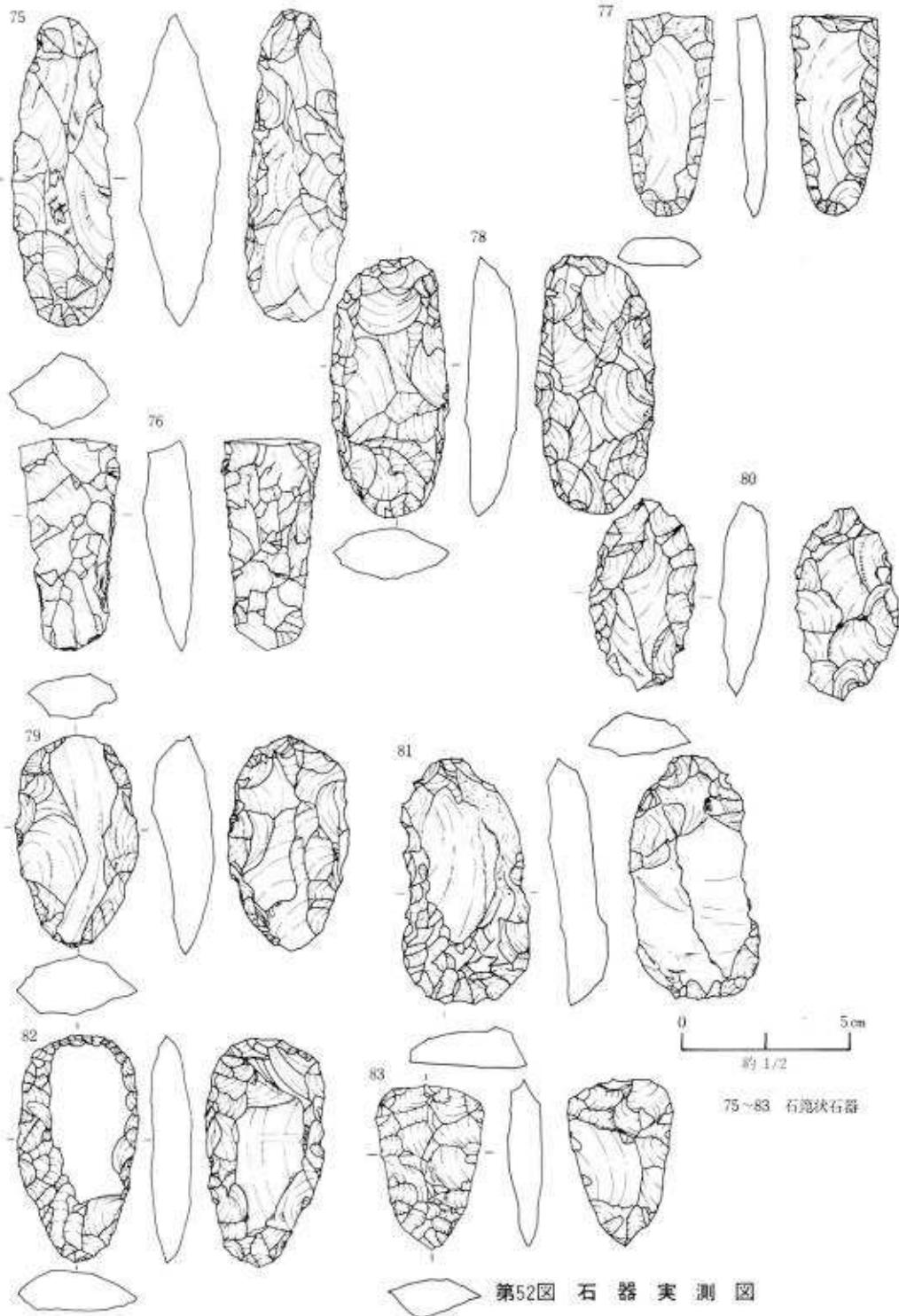
— 大明神遺跡 —

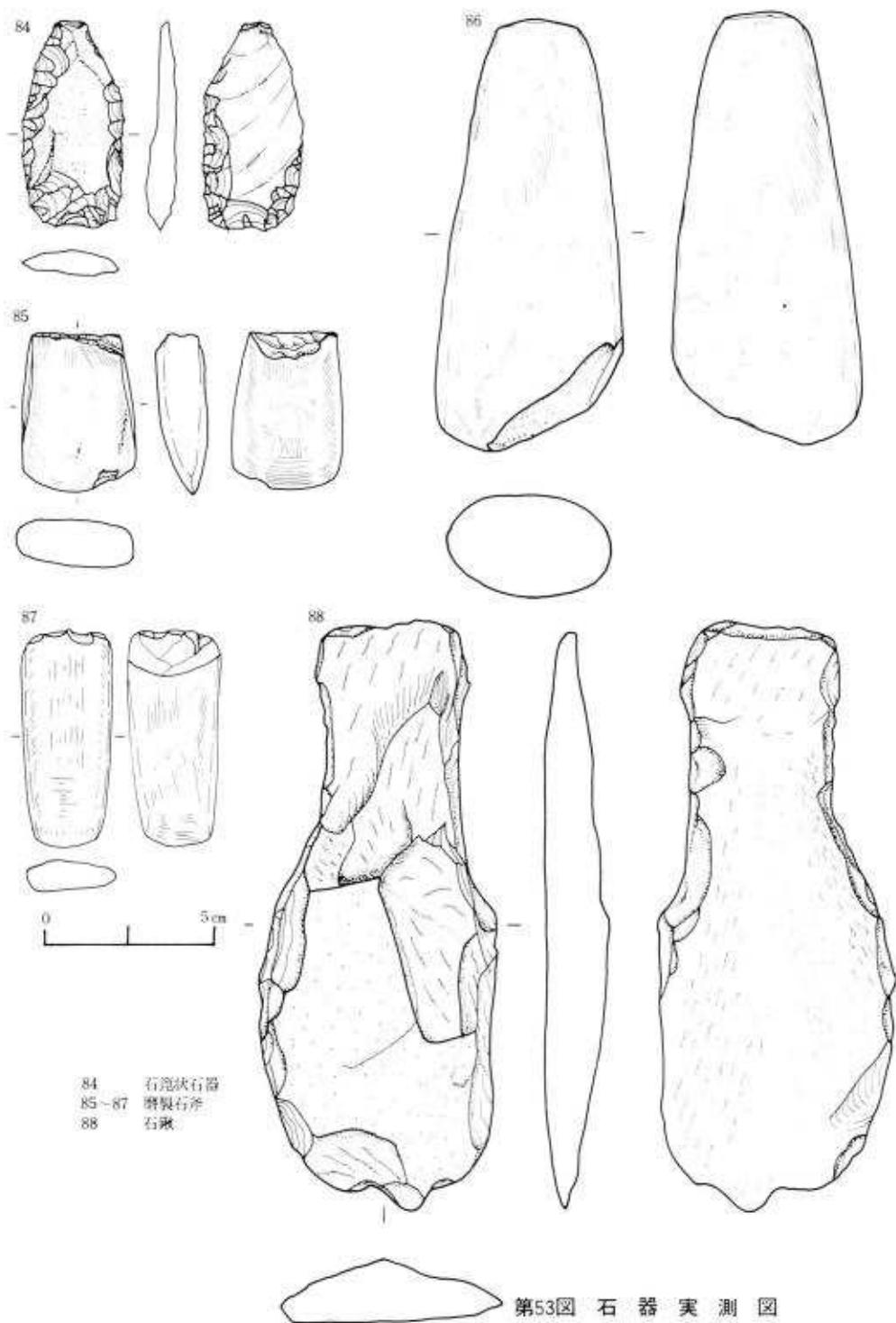


第50図 石器実測図

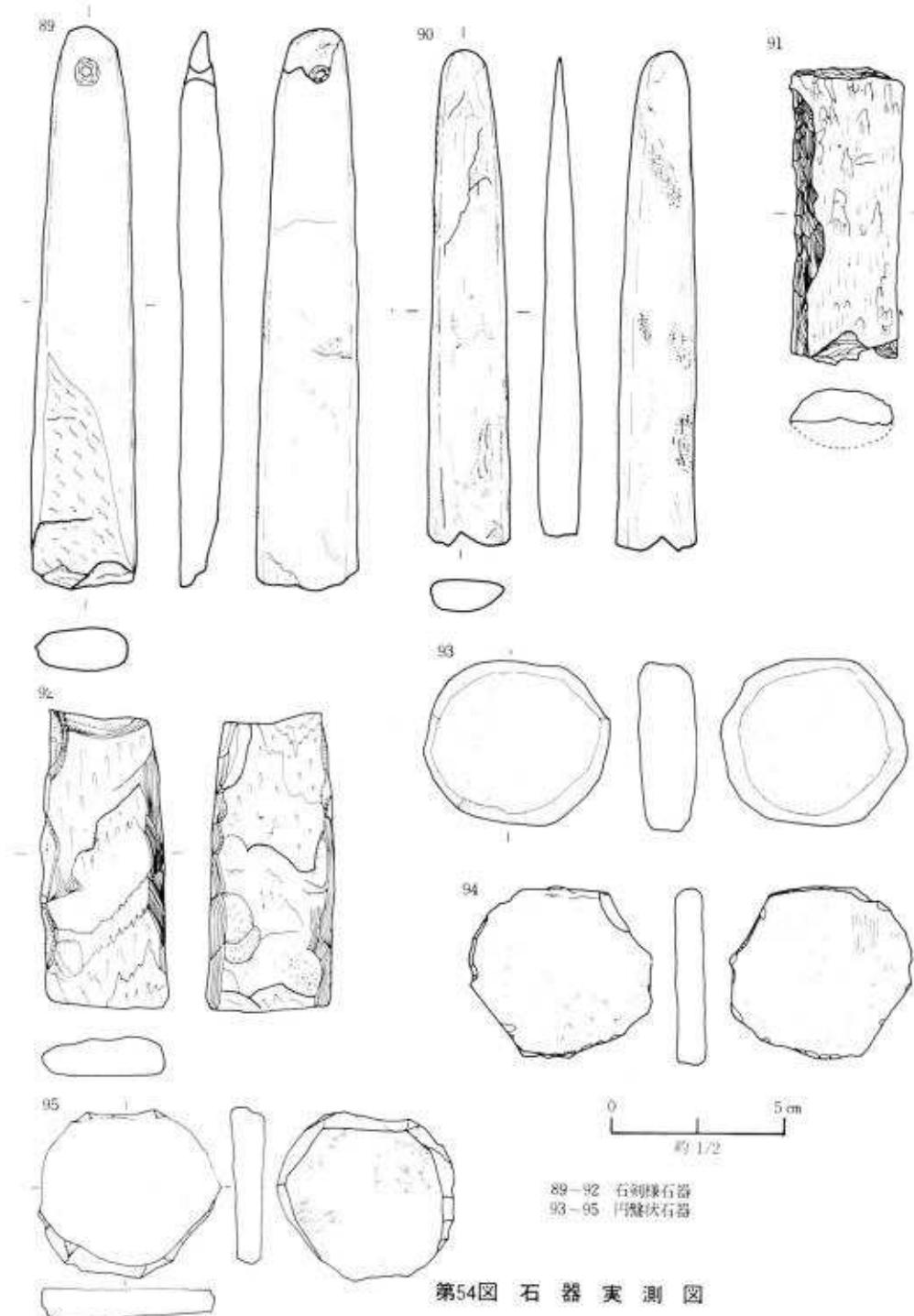


— 大明神道跡 —

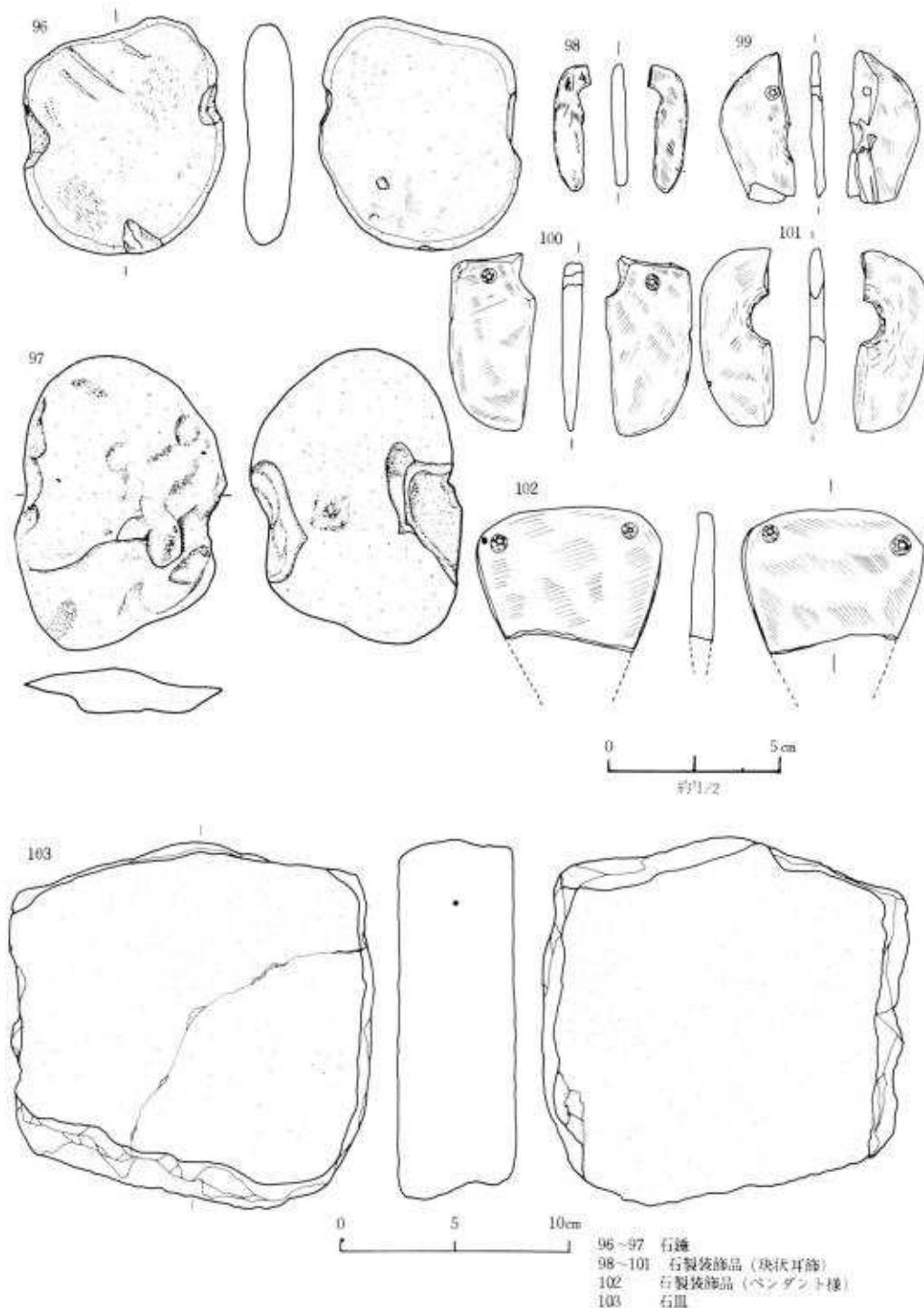




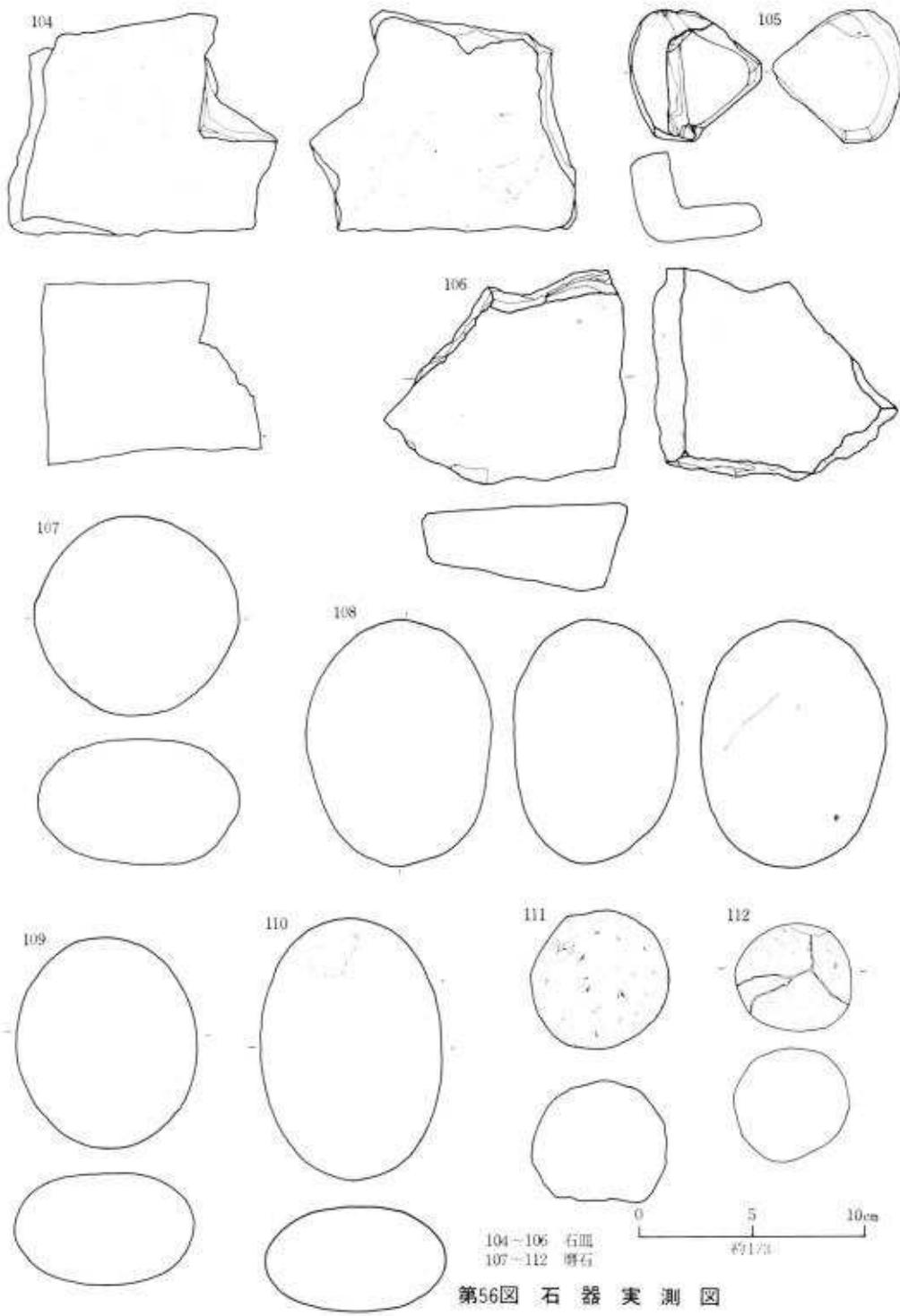
第53図 石器実測図



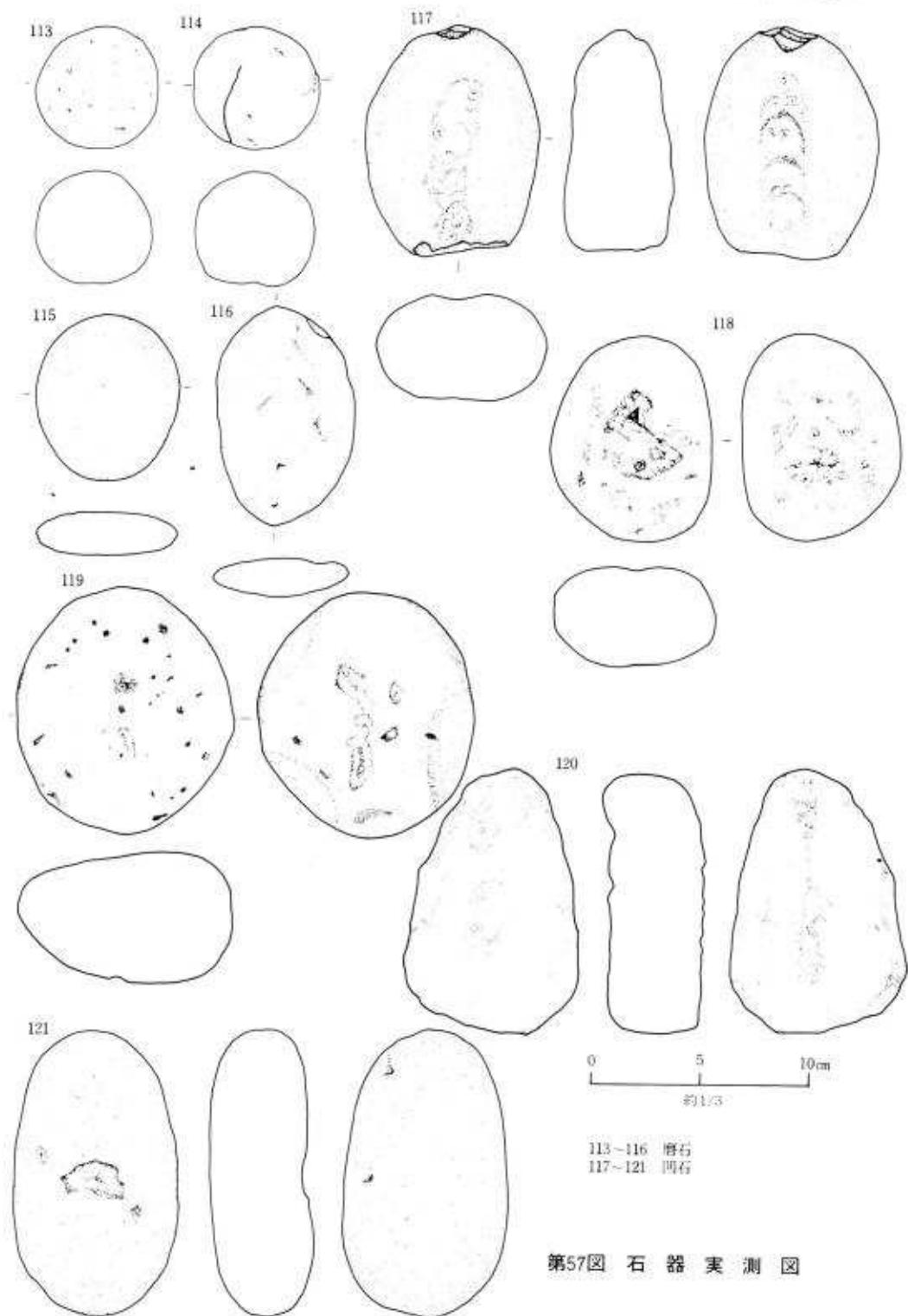
第54図 石 器 実 測 図



第55図 石器・石製品実測図



第56図 石器実測図



第57図 石器実測図

第4表 住居跡出土の石器

遺構	測面番号	測面番号	工具	骨器	石器種類	長さ(cm)	幅さ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	比率(%)	出土地	分類
1-1号(Ae03)住	45-8	33-8	10	石	鉈	3.90	5.80	0.80	18.3	0.67	床	珪質泥岩
	49-44	34-44	11	6定形石器	鉈	3.50	1.90	0.60	3.7	1.84	床	珪質泥岩
	45-3	33-3	12	石	鉈	6.70	2.50	1.10	21.9	2.68	床	砂質粘板岩
	55-96	35-96	13	石	鉈	6.50	5.90	1.40	78.9	1.10	床	鈣石安山岩
1-2号(Ah56)住	56-105	36-105	1	碧玉	石	9.00	8.80	5.50	504.0	1.02	床	鈣石安山岩
	57-117	36-115	2	四	石	10.00	7.80	4.50	540.0	1.28	床	鈣石安山岩
	45-10	33-10	34	石	鉈	5.80	6.10	1.40	42.8	0.95	床	珪質泥岩
1-3号(Ai80)住	48-49	33-49	3	不定形石器	鉈	5.50	2.90	0.90	16.3	1.89	床	珪質泥岩
	48-41	33-41	4	不定形石器	鉈	6.30	2.90	1.10	23.4	2.17	床	珪質泥岩
	-	-	30	磨	石	12.20	11.50	8.10	1,440.0	1.06	床	鈣石安山岩
1-5号(Ba06)住	45-1	33-1	14	石	鉈	4.40	2.30	0.60	4.5	1.91	床	珪質泥岩
	51-71	34-71	67	5定形石器	鉈	9.50	3.00	1.90	52.0	3.17	床	粘板岩
1-7号(Bd74)住	51-66	34-66	66	5定形石器	鉈	5.30	5.00	1.30	28.3	1.06	床	珪質泥岩
	45-9	33-9	59	石	鉈	3.90	5.70	1.10	18.8	0.68	床	珪質泥岩
	50-60	34-60	49	5定形石器	鉈	5.50	3.50	1.20	23.3	1.57	床	珪質泥岩
1-9号(Bd86)住	47-24	33-24	38	6定形石器	鉈	8.30	4.50	0.70	23.5	1.84	壁	珪質泥岩
	47-25	33-25	64	6定形石器	鉈	5.80	3.40	1.30	23.4	1.71	壁	珪質泥岩
	48-35	33-35	39	6定形石器	鉈	2.60	3.00	0.60	3.0	0.87	壁	珪質泥岩
	48-33	33-33	41	6定形石器	鉈	2.30	2.40	0.40	2.5	0.96	壁	铁質石英
	54-94	35-94	42	14種抜石器	鉈	5.20	5.10	0.80	34.2	1.02	壁	石質板岩
	56-112	36-112	43	解	石	5.10	4.80	5.10	138.0	1.06	壁	鈣石安山岩
	57-121	36-121	46	四	石	13.20	7.50	4.50	680.0	1.76	床	鈣石安山岩
	55-100	35-100	44	右	皿	(15.50)	(15.50)	(5.10)	(2,480.0)	(1.00)	床	鈣石安山岩
	56-104	36-104	45	右	皿	(9.60)	(11.20)	(7.70)	(1,420.0)	(0.85)	床	鈣石安山岩
	50-65	34-65	32	不定形石器	鉈	5.10	4.20	1.00	28.0	1.21	壁	珪質泥岩
	46-21	33-21	35	不定形石器	鉈	8.80	6.00	1.40	83.2	1.47	床	硅灰石質泥岩
	45-4	33-4	33	石	鉈	7.20	4.60	1.10	30.2	1.57	壁	珪質泥岩
	48-34	33-34	34	不定形石器	鉈	3.00	2.40	0.60	4.5	1.25	床	珪質泥岩

第4表 (つづき)

遺 構	圓 面 番 号	周 囲 長 度 mm	盤 面 幅 mm	盤 面 厚 度 mm	縫 隙 幅 mm	縫 隙 深 度 mm	縫 隙 横 幅 mm	縫 隙 長 度 mm	縫 隙 厚 度 mm	重 量 (g)	比 率 (%)( $\times 10^{-2}$ )	出 土 層 位 置	材 質	產 地	分 類
縫 隙 縦 幅 (mm)	縫 隙 縦 深 度 (mm)														
—	—	65	縫	6	12.20	9.50	4.90	930.0	1.28	埋上	縫石安山岩	6類			
45-6	33-6	37	縫	6	2.80	2.80	1.10	5.7	1.08	床面	鐵質石英	6類			
56-11	35-11	36	縫	6	6.00	5.20	( 5.20 )	138.0	1.15	床面	石英安山岩質凝灰岩	奥羽山地(櫛賀・雪谷)			
56-18	35-18	69	縫	6	10.90	8.20	7.20	896.0	1.33	埋上	縫石安山岩	奥羽山地(新第三紀)			
I-15(Af74)上端	57-14	35-14	5	縫	6	5.80	5.60	5.20	128.0	1.03	埋上	白色綠色凝灰岩	奥羽山地(新第三紀)		
I-37(Ba68)上端	54-93	35-93	6	円盤状打石器	5.30	4.80	1.70	30.7	1.10	埋上	白色綠色凝灰岩	奥羽山地(新第三紀)			
I-37(Bd86)上端	54-91	35-91	8	縫	6	劍 ( 8.50 )	3.10	1.40	( 34.2 )	( 1.39 )	埋上	綠色燧石岩	奥羽山地(新第三紀)		
II-15(Ae21)生	50-62	34-62	57	不定形石器	6	3.70	9.20	1.00	386.0	0.40	床面	燧灰質硬質泥岩	奥羽山地(中新生代リチャード)		
II-15(Af21)生	57-15	36-15	58	縫	6	7.50	6.50	1.90	102.0	1.15	床面	安山岩岩	第四紀火山(岩手?)		
II-15(Af21)生	57-19	36-19	68	凹	6						床面	縫石安山岩	奥羽山地(新第三紀)		
II-2号(Af18)生	45-5	33-5	55	縫	6	4.50	2.40	1.60	6.1	1.87	ビョウ	燧灰質硬質泥岩	奥羽山地(新第三紀)		
II-4号(Af18)生	49-48	34-48	56	不定形石器	5.30	2.80	0.80	6.5	1.89	床面	流紋岩質凝灰岩	奥羽山地(中新生代リチャード)			
II-3号(Af24)生	46-13	33-13	18	縫	6	( 4.20 )	2.40	0.40	( 4.8 )	( 1.75 )	床面	燧灰質硬質泥岩	奥羽山地(新第三紀)		
II-7号(Af24)生	51-73	34-73	17	不定形石器	9.80	3.10	1.70	50.2	3.16	床面	燧灰質硬質泥岩	奥羽山地(新第三紀)			
II-45号(Af24)生	49-45	34-45	16	不定形石器	3.20	1.80	0.70	2.8	1.78	床面	燧灰質硬質泥岩	奥羽山地(新第三紀)			
II-2号(Af24)生	45-2	33-2	20	縫	6	4.90	2.40	1.00	9.2	2.04	床面	燧灰質硬質泥岩	奥羽山地(新第三紀)		
II-30号(Af24)生	47-30	34-31	63	不定形石器	5.60	3.60	0.90	18.8	1.56	床面	燧灰質硬質泥岩	奥羽山地(新第三紀)			
II-30号(Af24)生	47-30	33-30	62	不定形石器	5.20	3.80	0.60	14.7	1.37	床面	流紋岩質凝灰岩	奥羽山地(中新生代リチャード)			
II-57号(Af24)生	50-57	34-57	22	不定形石器	2.60	4.80	0.50	7.5	0.54	埋上	燧灰質硬質泥岩	奥羽山地(新第三紀)			
II-29号(Af24)生	47-29	33-29	33	不定形石器	4.30	3.10	0.40	7.8	1.39	埋上	燧灰質硬質泥岩	奥羽山地(新第三紀)			
II-68号(Af24)生	51-68	34-68	25	不定形石器	3.70	3.70	0.70	9.3	1.00	床面	硬質泥岩	7類			
II-16号(Af24)生	57-16	36-16	15	縫	6	9.90	6.40	1.80	110.0	1.55	床面	安山岩岩	岩手(岩手?)		
—	—	28	縫	6	9.80	8.20	5.00	558.0	1.19	床面	縫石安山岩	5類			
—	—	29	縫	6	8.20	6.40	5.70	382.0	1.28	床面	縫石安山岩	2類			
II-4号(Cg56)生	46-22	33-22	48	不定形石器	5.80	3.80	0.80	30.0	1.53	床面	流紋岩質凝灰岩	奥羽山地(中新生代リチャード)			
II-16号(Cg56)生	56-16	36-16	50	縫	皿	10.90	8.20	7.20	896.0	1.33	床面	縫石安山岩	1類		

第5表(その1) I区 包含層等の石器

図面番号	図版	登録番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)	比 率 (%)	Ⅰ区		出土地点	出 土 位 置	分類
									材	質			
45-11	33-11	1	石 砕	5.60	3.60	0.50	14.70	1.56	透紋岩質石灰繊維灰岩	奥羽山地中新世上部クリンダナ	AI-65	II	2類a
46-19	33-19	2	*	6.70	2.20	0.80	10.30	3.05	アントラцит質燧灰岩	奥羽山地(中新世)	Agb-63	II	2類e
46-16	33-16	3	*	4.80	1.90	0.50	4.70	2.32	珪質泥岩	奥羽山地(中新世)	Ad-65	II	2類d
46-20	33-20	4	*	6.10	2.40	0.50	6.50	2.54	珪質泥岩	奥羽山地(中新世)	Agh-05	II	2類e
50-58	34-58	5	不定形石器	3.20	5.40	0.90	17.50	0.59	基板質燧灰岩	奥羽山地(中新世)	Bc-71-74	II	5類a
50-61	34-61	6	*	4.60	3.50	0.50	11.80	1.31	珪質泥岩	奥羽山地(中新世)	Ai-156	II	5類c
49-43	34-43	7	*	5.20	4.10	0.90	18.80	1.27	透紋岩質石灰繊維灰岩	奥羽山地中新世上部クリンダナ	Aef-68	II	4類a
50-63	34-63	8	*	3.20	6.00	0.90	23.80	0.53	玉子型	奥羽山地(中新世)	AI-65	II	6類a
49-46	34-46	9	*	5.10	2.10	0.70	4.80	2.43	珪質泥岩	奥羽山地(中新世)	Aef-06	II	4類a
47-32	33-32	10	*	6.90	5.60	0.80	20.40	1.23	燧灰質珪質岩	奥羽山地(中新世)	Bc-71-74	II	3類
49-50	34-50	11	*	5.80	3.40	1.00	15.80	1.71	珪質泥岩	奥羽山地(中新世)	Ai-159	II	4類b
51-70	34-70	12	*	4.30	5.10	1.00	15.80	0.84	砂質矽質岩	奥羽山地(中新世)	Ad-65	II	7類
47-26	33-26	13	*	6.60	5.50	1.50	40.30	1.20	硬質泥岩	奥羽山地(中新世)	Aef-09	II	
45-7	33-7	14	石 離	4.10	1.70	0.90	5.50	2.41	透灰質珪質岩	奥羽山地(中新世)	Ad-65	II	
48-38	33-38	15	不定形石器	7.50	4.40	1.20	32.00	1.80	硬質泥岩	奥羽山地(中新世)	Ai-159	II	4類a
—	16	石 皿	( 5.70 )	( 5.80 )	( 1.80 )	( 112.00 )	( 0.98 )	輝石安山岩	奥羽山地(中新世)	Bc-71-74	II		
56-16	36-16	18	*				68.00		輝石安山岩	奥羽山地(中新世)	Aii-09	II	
57-19	36-19	20	凹 石	11.40	9.80	5.50	822.00	1.16	輝石安山岩	奥羽山地(中新世)	Aii-59	II	
56-10	36-10	21	磨 石	11.60	8.00	4.50	638.00	1.45	花崗閃綠岩	豊平川支流海瀬(?)	Aef-150	II	
56-10	36-10	22	*	9.40	8.00	4.90	540.00	1.18	花崗閃綠岩	豊平川支流海瀬(?)	Aef-g	II	
53-87	35-87	23	石 斧	( 6.30 )	2.60	0.90	( 32.00 )	( 2.42 )	粘板岩	北上山地	Agh-03	II	
54-95	35-95	24	円盤状石器	4.80	5.10	0.90	31.00	0.94	矽質燧灰岩	奥羽山地(中新世)	Agh-03	II	
II区													
46-17	33-17	13	石 砕	7.10	3.00	0.60	13.60	2.37	泥質燧灰岩	奥羽山地中新地上部クリンダナ	Aix-(包)	I	2類d
46-14	33-14	14	*	6.40	3.40	1.50	22.00	1.88	硅灰質矽質燧灰岩	奥羽山地中新世	Aix-(包)	I	2類c
46-18	33-18	15	*	6.30	3.00	1.00	22.60	2.10	矽質矽質燧灰岩	奥羽山地(中新世)	Cef-553	-	2類d

第5表(その2) II区

図面番号	図 版 番 号	鉱 物 名	量 度	粒 度		重 量 (g)	比 率 (%)	質	地	出 土地 点 名	分類 位
				幅 (cm)	幅 (cm)						
45-42	33-12	16	石	4.90	4.30	0.80	21.60	1.14	鉄質石英	A区(包)	2級b
46-15	33-15	17	*	6.30	3.10	0.90	15.60	2.03	燧灰質硬質岩	A区(包)	2級c
49-47	34-47	19	不透明石器	6.40	3.60	0.60	19.60	1.78	硬質泥岩	A区(包)	-4級a
49-49	34-49	20	*	6.10	3.80	1.00	13.00	1.61	燧灰質硬質岩	A区(包)	4級b
47-27	33-27	21	*	6.30	3.00	0.80	13.00	2.10	泥質燧灰岩	奥羽山地(中新世上部ダリノタフ)	2級
50-55	34-35	22	*	5.30	3.30	1.10	16.80	1.64	泥質燧灰岩	奥羽山地(中新世上部ダリノタフ)	4級c
47-28	33-28	23	*	5.00	3.20	0.70	10.80	1.56	泥質燧灰岩	奥羽山地(中新世上部ダリノタフ)	2級
51-67	34-67	24	*	3.50	3.60	0.90	12.20	0.97	硬質泥岩	A区(包)	6級b
47-26	33-26	25	*	7.70	5.20	1.10	54.30	1.48	燧灰質硬質岩	A区(包)	-2級
50-56	34-56	26	*	4.80	5.70	1.20	25.20	0.84	硬質泥岩	奥羽山地(中新世)	4級d
50-59	34-59	27	*	3.10	4.40	0.50	6.50	0.70	硬質泥岩	A区(包)	-5級a
-	-	28	*	7.90	5.40	1.90	50.30	1.46	燧灰質硬質岩	奥羽山地(中新世)	4級b
48-39	33-39	30	*	8.70	3.50	1.20	41.00	2.49	硬質泥岩	奥羽山地(中新世)	4級c
49-51	34-51	31	*	5.20	2.30	0.80	8.00	2.26	燧灰質硬質岩	奥羽山地(中新世)	4級e
49-54	34-54	32	*	5.30	3.80	1.70	28.50	1.39	泥質細孔燧灰岩	奥羽山地(中新世)	A区
49-53	34-53	33	*	7.10	6.00	1.80	65.80	1.18	鉄質石英	A区	-4級e
51-69	34-69	34	*	3.80	4.30	0.70	16.50	0.88	泥質燧灰岩	奥羽山地(中新世上部ダリノタフ)	A区
50-64	34-64	35	*	3.70	6.50	0.90	17.30	0.57	燧灰質硬質岩	A区(包)	6級a
49-52	34-52	36	*	6.40	2.70	0.80	18.70	2.37	硬質泥岩	奥羽山地(中新世)	4級c
48-37	33-37	38	*	8.50	5.30	1.50	67.50	1.60	泥質燧灰岩	奥羽山地(中新世上部ダリノタフ)	-4級a
48-42	33-42	39	*	7.10	3.80	1.50	40.80	1.87	フリント質燧灰岩	C1-53	-4級a
52-78	34-78	1	石英灰岩	7.80	3.50	1.50	35.50	2.22	泥質燧灰岩	奥羽山地(中新世上部ダリノタフ)	2級a
52-63	35-63	2	*	4.90	2.90	1.10	13.00	1.69	泥質燧灰岩	奥羽山地(中新世上部ダリノタフ)	3級
52-82	35-82	3	*	6.70	3.50	1.20	32.50	1.91	燧灰質硬質岩	Bd-56	3級
52-79	34-79	4	*	6.30	3.60	2.30	32.50	1.75	泥質燧灰岩	Bc-53	2級a
52-81	35-81	5	*	7.30	3.70	1.20	43.50	1.97	泥質泥岩	Bb-66	2級b

第5表(その3) II区

測面番号	図版	登録番号	留置量	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	比率(%)	種類	質	層	出土地点	土質	分類
52-76	34-76	6	石塊状石器	6.20	2.90	1.30	24.50	2.14	泥質凝灰岩		奥羽山地(中新世上部グリシダフ)	Ab.09	1	1類a
52-77	34-77	7	*	6.00	2.50	0.80	18.50	2.40	泥質凝灰岩		奥羽山地(中新世上部グリシダフ)	A区(包)	1	1類b
48-36	33-36	8	不定形石器	7.90	4.60	1.70	59.80	1.72	硬質泥岩		奥羽山地(中新世)	d.12	1	4類a
51-74	34-74	9	石塊状石器	8.50	3.20	1.70	51.00	2.66	泥質凝灰岩		奥羽山地(中新世上部グリシダフ)	A区(包)	1	1類a
51-72	34-72	10	*	1.00	2.20	1.60	27.50	0.45	泥灰質硬質泥岩		奥羽山地(中新世)	A区(包)	1	1類a
52-80	34-80	11	*	5.80	3.00	1.30	24.80	1.93	泥質凝灰岩		奥羽山地(中新世上部グリシダフ)	A区(包)	1	2類a
52-75	34-75	12	*	9.30	3.00	2.30	59.40	3.10	泥質泥岩		奥羽山地(中新世)	A区(包)	1	1類a
53-84	35-84	18	*	6.10	2.90	0.90	18.00	2.10	硬質泥岩		奥羽山地(中新世)	A区(包)	1	3類
—	—	40	石 砂	( 8.50 )	( 4.60 )	( 2.90 )	( 220.00 )	( 1.85 )	流紋岩質細粒凝灰岩		奥羽山地(中新世)	A区(包)	1	—
53-10	36-10	41	磨 石	5.60	5.40	5.10	198.00	1.04	輝石安山岩		奥羽山地(中新世)	A区(包)	1	—
57-18	36-18	42	凹 石	9.50	7.30	4.30	428.00	1.30	輝石安山岩		奥羽山地(中新世)	d.g.62	—	—
—	—	43	磨 石	6.30	5.30	5.80	240.00	1.19	綠色角礫凝灰岩		奥羽山地(中新世)	B区71-74	—	—
—	—	44	*	6.60	5.70	2.90	124.00	1.16	粘板岩ホルンフェルス		北上山地	A区(包)	1	—
—	—	45	*	7.80	5.00	2.60	112.00	1.56	淡綠凝灰岩		奥羽山地(中新世)	A区(包)	1	—
56-97	35-97	46	石 離	8.60	5.70	1.30	92.00	1.54	粗粒砂質凝灰岩		奥羽山地	Ac.15	—	—
53-88	35-88	47	石 球	16.90	6.50	1.80	218.00	2.60	凝灰質粘板岩		北上山地	Be.71-74	—	—
54-89	35-89	48	石 钩	( 16.20 )	( 2.90 )	( 1.20 )	( 98.00 )	( 1.59 )	粘板岩ホルンフェルス		北上山地	A区(包)	1	—
54-90	35-90	49	*	( 13.80 )	( 2.20 )	( 0.90 )	( 50.00 )	( 6.27 )	千枚岩		北上山地	A区(包)	1	—
54-92	35-92	50	*	( 8.60 )	( 3.50 )	( 1.00 )	( 60.00 )	( 2.46 )	千板岩		北上山地	Bd.50	—	—
53-86	35-86	52	石 斧	12.80	5.30	3.00	282.00	2.42	凝灰質粘板岩		北上山地	A区(包)	1	—
—	—	53	*	( 8.20 )	5.30	1.40	( 92.00 )	( 1.55 )	硬質質凝灰岩		奥羽山地(中新世)	Bc.96	—	—
56-98	35-98	51	石 製品	( 4.20 )	( 5.30 )	0.60	( 18.00 )	( 0.79 )	流紋岩質物質凝灰岩		奥羽山地(中新世)	A区(包)	1	—
55-90	35-90	54	块状耳飾	5.20	2.00	0.40	10.00	2.50	チャート質鮮緑凝灰岩		北上山地	A区(包)	1	—
55-99	35-99	55	*	4.50	2.00	0.40	6.00	2.35	チャート質鮮緑凝灰岩		北上山地(宮守地区?)	A区(包)	1	—
55-100	35-100	56	*	5.10	2.40	0.60	12.30	2.00	滑 石		北上山地(宮守地区?)	A区(包)	1	—
55-98	35-98	57	*	3.60	1.00	0.40	2.70	2.92	滑 石		北上山地(宮守地区?)	A区(包)	1	—